
仮面ライダーディケイド・IF 仮面ライダークウガ～小野寺ユウスケの幻想録～

A G I T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド・IF 仮面ライダークウガ〜小野寺ユウスケの幻想録〜

【Nコード】

N9946X

【作者名】

AGIT

【あらすじ】

これは、もしも仮面ライダークウガである小野寺ユウスケが仮面ライダーディケイドである門矢士の旅にオールライダー対大ショッカー、もしくは完結編が終わり着いていかず自分の世界、クウガの世界に帰ってきて幻想入りしたらの物語。

前に連載していた東方超絶記のリメイク版と言っても過言ではない作品です、リメイク前を愛読していた方々、申し訳ございません、この場で謝罪の言葉を述べます。

第1話『クウガの世界・続』（前書き）

前書きでも書いたようにすみません、そのままがいい意見もありましたが自分じゃ納得できない部分もありましたので。
デイケイド要素を加えつつ進めていきたいです。

第1話『クウガの世界・続』

皆さん、小野寺ユウスケはご存知でしょうか？

はい、仮面ライダーディケイドに登場した仮面ライダークウガの変身者の名前でディケイド、世界の破壊者である門矢士かどやつかさの旅を手助けしてきた青年であります。

ですが、もしオールライダー対大ショッカー、もしくは仮面ライダーディケイド完結編で共に旅をせずにクウガの世界に帰ってきたら、そのクウガの世界から始まる新たな物語が始まるとしたら。

これはもしも小野寺ユウスケが完結編の後に旅をせずクウガの世界に戻ったらのお話。

仮面ライダーディケイド・IF

仮面ライダークウガ

〈小野寺ユウスケの幻想録〉

ここはクウガの世界、この物語の主人公の小野寺ユウスケはある墓の前にいた、墓石には「八代家」と書かれていた。

「あねさん、俺、戻ってきたよこの世界に」

その墓に眠るのはユウスケの戦いを支え、戦う理由を作り導き憧れであった、八代藍やしるあいが眠る。

「士達との旅で多くの事を学んで、色んな人達に出会った、色んな経験をした、楽しかった事もあったけど辛かった事もある、だけどそれも全部かけがえのない思い出になった」

手を合わせ目を瞑り目の前にいるはずだと思う八代に話し掛ける。

「だから安心して眠って、俺がこの世界を守るから」

それを言うとユウスケはその場から歩き去っていく。

墓地の出入口の前に停めておいた銀のボディに前部に金色の角のようなヘッドライトのカバーが上部に付けられ赤い模様とクワガタのようなマークがカバーの先と車体の左右両面に描かれたバイク・トライチェイサー2000にその鍵となるグリップのトライアクセラを差し込むとそれを押して歩き車道に出ると跨って走りだす。

(どうしよっかな……ん?)

何かに気付いてトライチェイサーを一旦止めると掲示板が建てられており警察のポスターが、そのポスターに三つに別れた銀色の角に赤い眼、青い仮面で銀色と青の装甲の仮面ライダーが写っていた。

「G3か……この世界にも」

それはG3と呼ばれる仮面ライダーだった。

(クウガをモデルにしてるからな、クウガの世界にあってもおかしくないか)

G3はクウガに模して作られた仮面ライダーのため外見がそっくりなのは無理もない、ユウスケはトライチェイサーを再び走らせる。走らせ続けるとトンネルの中に入った、長く暗くオレンジの光が点々と点いたその中を走るのだが出口が見えてこない。

(出口が見えない……まさか心霊スポットのトンネルう!?)

とバカな事を思いつつ走っているとトンネルとは別の空間に入った、その中は暗く回り沢山の目が浮かび上がる空間だった。

(まさか本当に!?)

その異様な光景を目の当たりにしてまだ心霊スポットだと思い込んでいるユウスケ、アクセルを思い切り回して早くここから出ようと加速すると光が見えてきた。

(出口だ!)

出口だと確信し更に加速させ光が近付いてくる、少し眩しく感じたがすぐ目の前まで光が見え潜り抜けたが……ユウスケは異変を感じトライチエイサーをゆっくり停車させた。

「ここは……………」

トンネルから出たと思った、だがそこに広がるのは車道ではなく緑豊かな草原の丘だった。

「海東さんの世界みたいだなんてかここどこだよ……………」

空は青く空気は澄んでおり都会の重苦しく不味い空気とは大違いだった。

「向日葵……………」

下の方に向日葵が生えている場所が見えそこへ向け走りだした、ユウスケには自然に生えているようには見えなかったからだ、誰かが手を加え手入れをしているようだったからだ。

（どこの田舎だ？）

ビルの一つもないため田舎だと判断した。

「着いた着いた」

丘下りると目の前には辺りに生えた何本もの向日葵が広がっていた。

「スゲー……………」

その光景に見惚れていた、この膨大な数の向日葵に。

「人いないかな？」

キョロキョロしていると遠くから人が二、三人並んで通れるぐらいの細い道を歩いてくるものが見えた。

ユウスケはトライチェイサーから降りヘルメットを右のグリップに掛けそれを押して歩きだす。

（人がいて良かった）

そう思っているとすぐに話せる距離まで近付く。

「こんにちは」

「こんにちは」

ユウスケが挨拶すると緑色の短い髪の毛で赤い瞳、赤と白を基準にした服に日傘を差した女性は快く挨拶を返した。

これで第一印象はいい人だと判断したのだ。

「あの、道を聞いていいですか？」

「いいわよ？」

「東京ってどこですか？」

正直に聞いた、率直に、だが彼女は何か納得したように頷いた。

「貴方……外の世界の人間ね」

「外の世界？」

「まずはそこからなのね……………」

彼女の話によるとここは幻想郷という所で回りからは見えないように結界で被われており一種の異世界である。

幻想郷には妖怪と人間等が暮らしていると聞いた。

「ここ異世界だったのか……………」

簡単に言つとクウガの世界の中にある異世界、日本の中にある忘れられ誰も知らない地域だと。

「物分かりがいいわね、普通なら否定したりするのに」

「いえ、まあ……………」

異世界を旅をした事があるユウスケにとってはそんなの日常茶飯であつたため理解は早かつた。

「外の世界に戻りたい？」

「はい、戻りたいです」

それが普通である。

「いいわ、今日は機嫌がいいから特別に案内してあげるわ」

彼女は微笑みながら言うとうウスケは少し怯えた、この人何か裏がある。

「俺、小野寺ユウスケです」

「私は風見幽香よ、よろしくね」

「こちらこそ」

二人は歩きだした、幽香によると遠いが神社がありその巫女に頼めば外の世界に帰らせてくれるようだ。

「少し時間掛かりそうだな……………」

「時間はまだあるのよ、ゆっくりしましょう」

「幽香さんはなんで機嫌が良かったんですか？」

素朴な疑問、機嫌が悪かったら教えてはくれないのはわかるがもしかしたらどちらでもなくても教えてはくれないのだろうか？

「花が綺麗に咲いたのよ」

「花が？」

「自分が丹念に育てた花が綺麗に咲くのは嬉しい事じゃなくて？」

あの向日葵も彼女が育てたのかなと思いつつ歩いていると森の中に入る。

「少しなんか……………息苦しい森ですね」

「ここは魔法の森と言って魔力やらが漂ってるから人間は普段は入らないけど神社に行くには通らないといけないの、」

その魔力に浸っていると人間じゃ少し危ないわね」

その説明を受けるとトライチエイサーのサドルを上げその収納場所の中からヘルメットをもう一個出す。

「なら早く走り抜けよう、これ被って」

幽香は言われるがままヘルメットを被るとユウスケもグリップに掛けていたのを被りトライチエイサーに跨る。

「幽香さんも乗って」

「え、ええ」

少し戸惑いつつ後部に座るが跨らず椅子に座る感覚で乗り日傘は閉じてと言われ閉じて。

「俺にしっかり掴まっててください」

言われた通りに掴まるとトライチエイサーは大きな音を上げ走り始めた。

「これ、走るのね」

「バイクって言うんですよ」

トライチエイサーは一直線に森を駆け、森を抜けると目の前に一昔前の木の板等でできた村が見えた。

「ここが人間が多く住む人里よ」

「このまま走ったら危ないな、迂回して反対側に出ます」

トライチエイサーを右方向へ向け走りだす、規模はそんなに広い訳でもないためすぐに反対側の森に到着し魔法の森とは別の森の中に入る。

「このまま進めば階段が見えるはずよ、そこを上がれば博麗神社よ」

幽香は親切だった、怖いほど親切だった、その親切さが逆に恐ろしかった。

すると言われた通り石で作られた階段が見えその前に停まるとトライチエイサーから降り右のグリップを抜き取る。

「ここを上がれば博麗神社よ」

「ありがとうございます」

幽香も少し用があつたため一緒に着いていく事にしたのだが何か騒がしかった。

「騒がしいですね」

「いつものことよ」

そう会話をしながら階段を上がりきり鳥居を潜り境内に入る、そこで目にしたのは。

「コイツは………!!」

境内は荒れており石の道は剥がれ、凹んでおり、辺りに蜘蛛の糸らしきものが散らばりそれに巻かれた金髪の黒いとんがり帽子を被った少女が倒れていた。

「よつ幽香」

「魔理沙、この惨状は何かしら？」

少女の名前は霧雨魔理沙きりさめ まりさだった。

「変な妖怪が急に現れて暴れたんだ」

「それで貴方は返り討ちにあつて霊夢れいむが戦ってるのね」

その人物と妖怪は今どこに、そう思い上を見上げると神社の屋根の上は蜘蛛の糸だらけになっておりその上で戦っていると判断。

「気を付ける、そいつスペルカードル無視して全力で殺しにかかるぞ」

「……………そう、わかったわ」

幽香は屋根の上に行こうとしたが先にユウスケが動き出し神社を支える柱を器用に手や足を掛け上る。

「お前危ないぞ！」

「大丈夫！心配しないで！」

幽香はその場から浮かぶとゆっくり屋根の上に。

二人は同時に屋根に上がるとそこは蜘蛛の巣のように張り巡らされた糸が張られておりその片隅には赤いリボンを付け黒い髪の毛の少女が糸に巻かれ拘束されていた。

「幽香！」

「あら霊夢、貴方も」

「気を付けて、あいつこの上だと素早い！」

少女の名前は博麗霊夢はくれい れいむ、この神社の巫女。

霊夢が向く方向には人型だが異形な姿の怪物が、頭が蜘蛛の足みた
いな左右四本ずつの突起物が並んでおり眼も口も蜘蛛のよう
で腰に赤銅色の怪物の顔のようなバツクルが付いたグロンギ怪人ズ・グム
ン・バが立っていた。

「奴は………！」

ユウスケは見覚えがあった、外の世界で自分が戦った怪人だと。

「アレ、本当に妖怪？」

グムンは獲物がまんまと引っ掛かった、そう感じ口から長く束にな
った蜘蛛の糸を発射に捉えようとしたが避けられる。

「貴方、下に降りた方がいいわよ、殺されるわよ？」

「幽香さんこそ」

「私は妖怪だから平気よ」

ユウスケは妖怪だと初めて知った、幽香が妖怪であることを。

幽香は日傘を閉じたまま持ち戦闘体勢に。

「ここにいないならいなさい、死んでもいいならね！」

グムンは突貫してきたが幽香は日傘を振るい殴り飛ばす。

「スゲー！」

「当然よ」

グムンは怒り糸を弾丸のように丸めて口から連射するが幽香はすべ
て避けながら接近、そして日傘を振り上げて思いつきり体重を掛け

振り下ろしグムンを叩きのめす。

その間にユウスケは霊夢を拘束する蜘蛛の糸を引き契り解放する。

「ありがとう、だけど命知らずね」

「まあね」

グムンは立ち上がり襲い掛かろうとするが日傘でかつ飛ばされ横に吹き飛ばす。

「それにしても幽香さん、スゴいな……」

「幻想郷の中でも相当な実力者だからね」

幽香が優勢に立っていた、このままならユウスケが戦わずにグムンを倒せる、そう思っていた矢先だった。

「グゴオ!?!」

突然グムンに銀色のメダルが一枚体内に入る、それを皮切りに空から大量の銀色のメダルが注ぎ込まれるとグムンの筋肉はむくむくと膨れ上がり肉体が強化されたようだった。

「グオオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

大きく叫ぶ、強化に喜ぶように、幽香は警戒しつつ構えているとグムンは口から糸を丸めた弾丸をマシンガンのように連射していく。

「っ!」

幽香は反射的に避けるのだが足に弾丸が霞め膝を付き掛けるがそれはプライドが許さないため何とか立つ。

「急に強化した……」

グムンは飛び掛かる、それを避けようとするが足が痛み動けなかった、このままで殺られる、そう思った瞬間だった。

「オリヤアアアッ！！！！！」

ユウスケはグムンに飛び掛かりタツクルすると一緒に倒れる。

「貴方……！！！」

なんて無茶な事を、そう思うがグムンは体勢を直し殴り掛かるがユウスケはそれをギリギリの所を避けていく。

「くっ！」

屋根の瓦は剥がれていき隅のから下に落ち割れていく。

「ハアッ！」

グムンは束ねた糸を吐き出す。

「うわぁっ!?!」

腹に当たりそのままユウスケを押し出し下に落とす。

「おい大丈夫か!?!」

魔理沙は心配し声を掛けるがユウスケは痛みで悶えていた、そこに

グムンが降りてきた。

だがユウスケは痛みに耐えながら立ち上がり腰の前に手を何か包むように添えると銀色のバツクルの中心が黒くなっているベルト・アークルを出す。

「POSEPADSDON、クウガ！」

グムンはアークルを見て驚く、ユウスケは右腕を左斜め上に向け伸ばしゆっくり右へ動かす。

屋根から幽香と霊夢が降りてくると。

「変身！」

両手でアークルの左側のスイッチを押すと中心に埋め込まれたアマダムという石が赤く輝きユウスケは姿を変えた。

金の三つに別れた角に二つの赤い眼、赤く燃え上がるような鎧を纏った姿に。

「なんだよありゃ……」

突然の事に驚く事しかできなかった。

ユウスケは現代に甦りし古代の戦士、仮面ライダークウガ・マイティフォームに変身を遂げたのだ。

「行くぜ！」

拳を構えると気合を入れるように声を上げ強化したグムンに立ち向かった。

「ハアッ！」

クウガは先制攻撃をし殴るが強化したグムンには余り聞いていない様子、そのため連続でパンチを繰り出しグムンの体に浴びせていく。

「効いてない……！」

拳を見て呟くとグムンに殴り飛ばされ鳥居にぶつかり柱が少し凹む。

「ボソギデジャス」

グムンはグロンギ語で「殺してやる」と発すると糸の弾丸を連射しギリギリの所を避ける。

「フン！」

糸のを放ちクウガの首を締め付ける。

「ぐうううっ！」

糸を掴み引き契ろうとするが束ねてあるため強度が高くなかなか切れなかった。

グムンはその糸を持ちそのままクウガを投げる地面に叩き付ける。

「がはっ!?!」

咳込むと頭を掴まれ立ち上がらせると腹を何発も殴られる。

ここでようやく呆然として立って見ていた幽香達が動き出した。

「手伝った方がいいわね」

「そうね」

突如灰色の綺麗とは言えないオーロラが現れ神社を抜けると賽銭箱の前の柱に背を付き腕を組む赤い二つの眼で緑色のバツタでメカニカルな姿をしたライダーと同じ柱に腕を付き似たような茶色っぽく白い眼をしたライダーが現れた。

「兄貴……………ここにもライダーがいるぜ」

「ああ……………」

二人のライダー、緑色のキックホッパーと茶色のパンチホッパーがクウガを見る。

「何なのよアイツら、あんたの知り合い？」

「あまり知り合いたくない……………」

霊夢の問いに答えるとキックホッパーは少し首を傾げクウガを見る。

「お前……………前に弟を笑った奴だな？」

「え……………あ！まさかあの時のキックホッパーとパンチホッパーか！」

「兄貴……………どうやらそうみたいだぜ」

ダブルホッパーは下を向きながらゆっくりと足をわざとらしく大きく上げながら歩く。

「殺っちまおうぜ、俺達を笑う奴を」

「そうだな……………」

視線をクウガに向けると戦う姿勢を見せる。

「やるつもりね」

「カブトライダース相手は骨が折れる……」

クウガも仕方ないと思い拳を構えるとダブルホッパーは飛び掛かったのだった。

第1話『クウガの世界・続』（後書き）

最後に出たダブルホッパー達はデイケイド本編にも出たあのライダー達です。

因みに退場はしません、ちよつと面白い展開を考えたので。

後、最初に出た怪人が蜘蛛怪人でしたよね？次回出る怪人が何かわかりますか？

次回予告

キックホッパー

「兄貴と呼ばしてください！」

クウガ

「えー……………」

霊夢

「怪人ね……………」

魔理沙

「アレもグロンギか？」

ユウスケ

「アレはオルフェノク！」

クウガ・ペガサスフォーム
「……………そこだ！」

次回【貫く疾風】

第2話『射抜く風』(前書き)

タイトル変わりました、あの白いコウモリも出ますよー。

第2話 『射抜く風』

前回のあらすじ……

幻想郷に迷い込んだ小野寺ユウスケは風見幽香と出会い元の世界に帰るため博麗神社に向かったのだがそこで外の世界で現れたグロンギ族である蜘蛛怪人ズ・グムン・バが博麗霊夢、霧雨魔理沙に襲い掛かるがそこでユウスケはもう一つの姿である仮面ライダークウガに変身しグムンを倒すが、

それもつかの間、灰色のオーロラから仮面ライダーキックホッパーとパンチホッパーが襲い掛かるのだった。

「オラア！………うわぁ！？」

パンチホッパーがクウガを殴るが拳を受け止め投げ飛ばされる。

「貴様ア！弟を投げ飛ばしたなあ！」

その事に逆上したキックホッパーはジャンプして飛び蹴りを食らわせようとしたが。

「ハアアアアアーツ!!!!!!」

足を高く上げハイキックで飛び蹴りを受け止めるり。

「何っ!?!……ウボア!?!」

キックホッパーは地面に着地すると突撃しキックを食らわそうとしたが腕で受け止められ殴り飛ばされる。

「兄貴………コイツ、強い」

「なら………」

二人は「クロックアップ」と叫びベルトの右側のスイッチを押し【Clock Up】と電子音が鳴り響きクロックアップという機能を使用、超高速の特殊移動方法を使い姿が見えなくなる。

「消えた……!」

霊夢はそう呟くがクウガは否定する。

「違う! アイツらは高速移動して………ぐはっ!?!」

だが説明する暇もなくクウガは何か弾き飛ばされた、クロックアップ中のパンチホッパーに攻撃されたのだ、それを皮切りにクウガは弾かれながら宙に舞っていく。

「高速移動ならその中を潜り抜けられない弾幕を張ればいい話だぜ」
「そっね」

霊夢と魔理沙は幻想郷での決闘のルールで使われるスペルカードと
いうものを出すと。

「霊符『夢想封印 散』!」

スペルカードはカード名を叫んで使うと宣言しなければならない。

「魔符『スターダストリヴァリエ』!」

次は魔理沙が宣言、霊夢を中心にしてお札や光弾が周囲に放たれ魔
理沙からは星屑が撒き散らされる。

「うおっ!?!」

クウガはギリギリ避けたがクロックアップ中のダブルホッパーに命
中しクロックアップが解除されてしまう。

「兄貴……コイツら強い……」

「ああ……あのライダー、この前戦った時よりもパワーアップし
ている……」

ふらふらしながら立ち上がると変身ベルトであるバツタを模したそ
れぞれのダブルホッパーの色をしたホッパーゼクターのレバーを上
げると「ライダージャンプ!」と叫び【Rider Jump】と
電子音が響き足にエネルギーが貯まりジャンプレバーを戻しキッ
クホッパーは「ライダーキック!」、パンチホッパーは「ライダー
パンチ!」と叫び必殺技を炸裂する。

「来る……超変身!」

「なんだ！？まだやるつもりか！」

戦う姿勢を見せると。

「兄貴と呼ばしてください！」

一瞬にして土下座、仮面ライダーが土下座とはシユールである。

「えー……………」

三人は変身を解く、キックホッパーの変身者は黒く長いジャンパーを着て踵に何かノコギリの刃みたいなのが付いたブーツを履いた男でパンチホッパーの変身者も似たような格好だった。

「俺、やぐろのま矢車そら総と申します」

「俺はかげやま影山しゅん舜と言います」

丁寧に自己紹介する二人、元々はそんなに悪い人間ではないのだから。

ユウスケ達も一応自己紹介し取り敢えず神社の中に入り居間で話す事に。

「それでさっきのは何なの？」

幽香に聞かれ正直に話した、仮面ライダーは色んな世界にいる怪人と戦う戦士でこの幻想郷があるのはクウガの世界、グロンギの事などを。

「俺達は数ある内のカブトの世界の人間で組織から追い出されて」

「あんなにやさぐれてたのかよ」

魔理沙は呆れたように言うが。

「自分も似たような境遇じゃないの」

「そうだった……………」

霊夢に突っ込まれ少ししよぼんとなる。

「てか総達はどうするの、元の世界帰れるかわからないよ？」

「帰れないなら兄貴に着いていきます」

「いって言うてないのに」と困りながら呟くが二人の眼差しに折れたのか許可した。

「ユウスケ、聞くわよ、まだあの妖怪…………いや、怪人が現れると思うっ？」

その質問に頷くしかなかった、グロンギはある世界で300体は確認されている、ユウスケも戦ったのは一体や二体だけではない、まだいると考えた方がいい、総達も来た事によりグロンギ以外の怪人もいると考えた方がいいだろう。

「俺、まだ帰らない」

いきなり何を言いだすかと思えば帰らないと言い出した。

「なんで？」

「だって怪人を倒し誰かを守るのが仮面ライダーの使命だから、俺はその使命を全うする！」

「さすが兄貴！」

「俺達も着いていきます!」

ユウスケの言葉に盛り上がる総と薙。

「それにいつでも帰れるんだろ?」

話を振られ頷く霊夢。

「それなら」

「だけとお前、家族は?」

普通に考え家族が居るはずだと思い聞いてみる魔理沙。

「俺の親父は戦場カメラマンで戦場で銃弾に倒れて、お袋は病気で死んじゃったから天涯孤独の身なんだ、俺を心配する人は“この世界”にはいないんだ」

それを聞いた総達二人は涙を流す。

「兄貴苦労したんすね……」

「俺達一生着いていきます」

泣きながら誓う二人、ユウスケは少し迷惑そうだがそれ以上に楽しそうだった、仲間ができるのは楽しい、それを知っているからだ。

「わりいこと聞いちゃったな」

「気にしないで、“この世界”にはいないだけだから」

だがユウスケを心配するものは結構いるのだ、旅を共にした仲間や旅した世界の仮面ライダー達が。

「で、住む場所どうするのかしら？」

幽香の言葉が深く突き刺さった、幻想郷に自分達の定住がないと。そして魔理沙の視線の先には霊夢が。

「わかったわよ、住む所探している間はここ使っていていいわよ」

住む事を許可した、その事に土下座をし礼を言うのだった。

「だけど取り敢えず蜘蛛の糸片付けてちょうだい、こんなんじゃ参拝客が来ないわよ」

居候生活最初の生活は神社に散らばった蜘蛛の糸の撤去だった。

「この神社参拝客来るっけ？」

「魔理沙うるさい」

「妖怪なら来るわよね」

「幽香もうるさい」

基本参拝客が来ない神社であった。

「じゃあ私寝るから後よろしくね」

「寝るのかよ!」、三人当時にツツコミが入ったが聞く耳持たず、
霊夢は神社の中に入っていった。

「アイツは寝るかお茶飲むか掃除するかしからないからな」

総と葬にまでそんなんで巫女って勤まるのかと思われたらしいが勤
まるから怖いのだ。

「それなのに賽銭箱の中身心配するんだぜ」

「図々しいな!」

葬のその一言が聞こえたのか、陰陽玉が落下し下敷きとなった。

「葬—————!」

総は嘆くように叫び救出しようと言おうと奮闘する、ユウスケは霊夢には逆
らわないようにしようと言おうと誓うのだった。
すると……

「キヤアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

と可愛らしい女の子の叫びが聞こえ全員キョロキョロしだすが見当
たらずどんどん声が大きくなり近付いてくると。

「イデッ!?!」

ユウスケの頭に何かぶつかり落ちた、その落ちたものを見る、それは赤い目をした白くて小さいコウモリみたいな生物だった。

「キバーラ！」

「ユウスケ〜！」

コウモリは飛ぶ、名前はキバーラ、ユウスケの旅仲間の一人でキバの世界の住人、仮面ライダーキバーラに変身するためのモンスターでもある。

「久しぶり〜」

「けどなんでキバーラが？」

「キバの世界に帰ったんじゃ？」

キバーラも自分の世界に帰ったはず、だがなぜと思い。

「私にもわからないのよ〜気付いたら落ちててここに〜」

ユウスケは自分が知っている範囲で簡単に幻想郷の事を説明。

「そうなのお〜……………わかった！キバの世界に帰れるまで一緒にいる！」

「またよろしくなキバーラ！」

キバーラも共に住むことに。

「あのキックホッパーとパンチホッパーだったなんてね〜」

キバーラは土と敵対する鳴滝の元にも居たためこの二人をクウガの世界に送り込んだ事を覚えていた、ユウスケがキバの世界に来たの

もキバーラに誘われたからだ。

「てかユウスケ、カブトライダーズ二人相手にして勝っちゃうなんてすごい！」

「俺だけじゃないよ」

確かに霊夢と魔理沙がいなかったら負けていたかもしれない。

「だけどトドメを刺したのはユウスケだけ」

「いやいや、グロンギだって幽香さんが最初食い止めてくれたから」

「そうね……貸しを作ったわね」

「ここまで案内してくれたから貸し借りなしでしょ」

だが幽香は首を横に、プライドが高いため助けられた事を許せないのだ。

「いや、案内したのは機嫌がよかったから、今度は私が助ける番よ」

「あ、それは……楽しみにしてます」

困りながら言うユウスケ、蜘蛛の糸も片付け終わっていた。

「てかこんだけの量、よくあんな細い身体で出せるな」

感心していた、そこである事を思い出した。

「なあキバーラ、銀色のメダルについて何か知らない？」

そう、グムンを強化したメダルについて聞いた。

「それは多分セルメダルね、仮面ライダーオーズの世界の怪人の体を構成してる欲望が詰まったメダルよ」

「仮面ライダーオーズ………まだ俺が知らない仮面ライダーいっぱいいるんだな」

興味が湧いていた、まだ知らない仮面ライダーいるんだなと。

「終わった〜ってなんかまた増えてない？」

霊夢が顔を覗かせキバーラが増えているのに気付き居候がもう一匹増えた。

「よろしく〜」

キバーラは円を描くように回ってウィンクする。

そして夜になろうとしていた、幽香はもうとっくに帰っており魔理沙も魔法の森にある自宅へ帰ろうと箒に跨って飛んでいた。

「ふう……………今日は酷い目にあつたぜ」

そう呟き愚痴を溢していると森の中から灰色の鋭い刃のブーメランが飛んできた。

「うわっ！？なんだ!？」

ブーメランを避ける、この武器の性質を知っているため戻るブーメランもちゃんと避け戻った先にレーザーを放つと灰色のコウモリに似た異形が羽根を広げ飛翔し姿を見せた。

「グロンギか!？」

「俺がそんな下等な殺す事しか脳がない連中と一緒にするな!」

「喋った!」と驚くとオルフェノクという種族の怪人でコウモリの性質を持ち両肩に先ほどの鋭利な鎌みたいなブーメランが付き銃を持ったバットオルフェノクが姿を見せたのだ。

「銃を使うのか」

銃口を向け引き金を引こうとした瞬間魔理沙は横へ飛ぶと同時にバットオルフェノクは引き金を引き鉄鋼弾を四発同時に放つが銃の弱点は弾道は一直線のため変な特殊能力があるとかかなり厄介だがないのがせめてもの救いだ。

「命中精度は高いな……………」

だがバットオルフェノクがかなりのやり手だと理解した、夜も近いため都会でもないため真つ暗に近い、だがその中を迷いなく引き金を引く、コウモリの性質を持っているだけの事はある。

「さて、覚悟しやがれ！」

「誰が！」

魔理沙は六角形のアイテム・ミニ八卦呂を出しそれをバットオルフエノクに向けると。

「恋符『マスタースパーク』！」

スペルカードを使うと宣言し巨大な砲撃が放たれた。

「今の光は！？」

境内からマスタースパークの光が見えており。

「魔理沙のマスタースパーク……………何かあったのかしら」

霊夢はその光を見て不安になるとユウスケは階段を駆け下り始めた。

「兄貴！」

「二人はそこにいて！」

下に停めていたトライチェイサーに跨るとヘルメットを被り走りだす、横にキバーラが並んで飛び着いてくる。

「この方向で合ってるよユウスケ！」

「ああ！」

変身すると決意し腰にアークルが現れ右腕を左斜め上に向け右へ動かし「変身！」と叫び右手だけでスイッチを押しアマダムは赤く輝きクウガ・マイティフォームに変身しトライチエイサーは森の中を駆ける。

「なんだよ今のバカでかい砲撃は……………危つく呑み込まれるところだった……………」

バットオルフェノクは背筋が凍っていた、あの砲撃に呑み込まれたら助かってなかったと。

「弾幕はパワーだぜ！」

するとまたスペルカードを宣言、恋符『ノンディレクションナルレーザー』という三本のレーザーを回転させながら放つ。

「危ねっ！」

バットオルフェノクはそれをすれすれで避け弾丸を放つが避けられない。

（まさかスペルカードがここまでのものとは……………首領も警戒するわけだ……………）

バットオルフェノクは自分が所属する組織の首領の事を思いつつ弾丸を放つが軌道を読まれ避けられるばかりだった。

「甘いぜ！」

「それはこっちの台詞だぜ！」

バットオルフェノクはブーメランを投げってきた、例の如くそれを避けるが。

「しまっ……！」

銃口が自分を向いていたため慌てて弾道から逸れるが。

「それが甘いつて言ってるんだぜ！」

気付いた頃は遅かった、後ろから迫るブーメランを、動いたため体に当たる事はなかったが筈が切り裂かれ地面へ落下してしまう。

「やばっ！」

恐怖で目を瞑る、かなりの高さで落ちたら死ぬかギリギリ生きるかだが生きたとしてもバットオルフェノクの的になるだけだ、絶体絶命だと思われたその時、落下がゆっくりになっていく、恐る恐る目を開くと服の襟を噛み付いて羽根をばたつかせるキバーラがいた。

「キバーラ！」

キバーラは魔理沙を地面に下ろすと前にクウガが乗ったトライチェイサーが停まる。

「大丈夫魔理沙!？」

「わたしは大丈夫だぜ」

「ユウスケ!」

キバーラは敵を見て呼び掛けるとクウガは上を見上げバットオルフエノクをギリギリのところで確認。

「オルフエノク……!」

オルフエノクは仮面ライダーファイズの世界の怪人であり死んだ人間が甦生してなってしまう怪人、だがほとんどは力に呑み込まれ使途再生という能力でオルフエノクを増やそうと人間を殺害してしまおうオルフエノクばっかだが中には人間との共存を望むものもいるがかなりの少数。

「空飛ぶのか……………」

何か武器になるようなものないか探していたが見付からずバットオルフエノクはブーメランを投げる、さっきと同じ戦法を取ったが。

「何!？」

ブーメランはクウガに受け止められ投げ返されてしまい避けるが腕を霞め銃を落としてしまう。

その銃をキャッチして持つと「超変身!」と叫びアマダムは緑色に輝き眼も緑色に左肩の防具と鎧は緑に、右肩は黒い防具がつき変化したペガサスフォームに変身、

それに合わせ銃も金と黒と緑色で金のブレードが上下に付いた銃ペガサスボウガンに変化。

「まあね、魔理沙は一人で帰れる？」

「ああ、箒は直してもらえるから」

魔理沙は大丈夫と言い箒の残骸を持ち歩き去った。

「俺達も帰るか」

「そうね」

二人も博麗神社への帰路に着くのだった。

第2話『射抜く風』（後書き）

地獄兄弟がユウスケの舎弟になりました！。
二人の活躍にもご期待ください。
たくさん感想お待ちしております。

次回予告

ユウスケ

「人里？」

幽香

「あらユウスケ」

慧音

「またか……！」

総

「情報によるとサソリが」

ユウスケ

「アンノウン！」

クウガT

「一度ダメだからって諦めたりはしないさ……それが、仮面ライダーだからね」

次回『不屈の鎧と剣』

第3話『不屈の鎧と剣』（前書き）

今日はキバーラの出番ナツシング。

キバーラ

「えー！」

次回はあるよ。

第3話『不屈の鎧と剣』

「今日もいい天気だな〜」

賽銭箱の前でユウスケは体操をしながら呟いていた、後ろには総と
葬も居り一緒に体操していた。

(まあ後ろに変なのが二人いるけど)

「気持ちいですね〜兄貴!」

朝から元気な総と葬、まあ元気が一番だと思いつつ体操を続けてい
ると霊夢の声が響いてきた、「ご飯できたよー」と。

「さて、朝ご飯食べよ」

「はい!」

居間に入ると朝食が並んでいた、「いただきます」と挨拶をし食事を
口に運んでいく。

「……………」

疑問に思う事はあったが、賽銭箱の中身が心配するほどないにもか
かわらずこつこつという風にちゃんと朝食を出せるって……………だがそれを

突っ込むと陰陽玉の餌食になると思い言わない三人。

「どうかした？」

「いえ、何も」と三人同時に答え、時間が経ち食事を終え「ごちそうさま」と挨拶し食器を片付けていく。

「そつだ、人里行ってきたら？」

人里、人間が多く住む村の事であるのはユウスケは知っていたが総達は疑問符浮かべていたため軽く説明。

「ほら、少しお金あげるから」

お金までもらったがここで一つ疑問が。

「霊夢？このお金どこから出てきたの？」

とうとう葬が聞いてしまった、二人は爆弾だと思ったが遅かった。

「一応家にも貯金というものはあるのよ、それを崩して食材買ったりにしてるの」

賽銭箱の中身はほとんどなくても貯金はそこそこある、なんだちゃんと巫女してるなと思ったら。

「まああんだ達がここで働き口見つけたら倍にして返してね」

やっぱり鬼だった、ヤクザかと思いつつ三人は博麗神社から出て階段を降りてく。

「そういえば兄貴はバイクちゃんとあるんですね」

総がいきなりバイクの話題を持ちかけた、理由は自分達にも専用のバイクがあるが幻想入りしてしまったため自分達の元にはないからだが。

「あれ、バイクじゃない？」

ユウスケが目にしたのは森の中に倒れてる銀色のバイクのマシン・ゼクトロンだった、カブトライダースのカブト、ガタック以外のライダー専用の共通バイクだった。

「しかもゼクトロン」

ご丁寧に二台倒れており起き上がらせると驚いた、自分達が使っていたバイクだと。

ユウスケはこう推測する、総と葬が幻想入りした時に一緒に来てしまったのでは、灰色のオーロラ、次元の壁の気紛れではないのかと。

「まあこれで移動手段ができたからいいじゃん」

「そうですね」

三人は自分のバイクに乗り走りだし人里へ出発した。

その頃、人里ではある事件が起きていた。

それは急激に体温が下がり凍死してしまうという事件が数件だった。

「またか……！」

白い髪の毛に青い服を着た人里にある寺子屋の女性教師の上白沢慧かみしろなわけ音がその被害者が倒れている現場に里を護るものとして訪れていた。

「慧音先生、これで6人目ですよ」

里の人間の一人が話し掛ける、しゃがんで手を目を瞑り合わせてから死体の瞼を閉じさせる。

「慧音ー」

そこに白く長い髪で白く赤い模様が入ったりボンに白と赤の服を着た藤原妹紅ふじわらひまこうがやってきた。

「妹紅か」

「またやられたんだって？」

「ああ、しかも血縁者ばかりだ……」

この事件の接点は死に方だけではなく最初の被害者が死んだ後その被害者の血縁者の兄と父親が死亡、その後は全く関係ないものが死亡した後はその血縁者の母親、そして今日の前に倒れている男が死亡している。

「この男の家族は？」

「嫁と娘がいる……娘は寺子屋の生徒だ」

二人は今度はその娘が凍死する可能性がある、嫁は血縁関係はない

ため外している。

「だけどうやって対処すれば……………」

「原因がわかってその歴史を隠しても死の運命まで変えられるかわからないからな……………」

慧音には歴史を食べる（隠す）程度能力があり名の通り隠す事ができるが原因もわからなければ死の運命まで変えられるかも微妙なラインだった。

因みに霊夢は空を飛ぶ程度、又は霊気を操る程度の能力、魔理沙は主に魔法を使う程度の能力、幽香は花を操る程度の能力、妹紅は老いる事も死ぬ事もない程度の能力がある。

「運命は紅魔館（こうまかん）の吸血鬼が専門だからな」

遺体を迷いの竹林という場所の中にある永遠亭（えいえんてい）という屋敷に運ぶことに、そこは外の世界で言う病院で死因の凍死もそこでわかったためその死因となった原因をそこで調べてもらっていた。

「原因さえわかれば対応ができるはずなのだがな……………」

慧音と妹紅は歩き出し現場から離れる。

「取り敢えずは被害者の近くで何か見なかった聞いてみるか……………」
「そうだな、まずはそうしてみるか」

二人は被害者が死亡する前に一緒にいた人間に話を聞くためそのものがある所に向かった。

里の外にはユウスケ達が到着しバイクを木に寄せて停め里の中に入る。

「結構人がいるんだな」

三人は珍しいものを見るかのようにキョロキョロして歩く、なんだかんだで三人は都会育ちなため田舎や村は珍しいのだ。

「豆腐あるかな……………」

総は豆腐屋を探し始めた。

「兄貴は麻婆豆腐が得意料理なんすよ」

「そうなんだ」

麻婆豆腐を作るための材料を探しているようだった。

「食べてみたいな」

そう思いながら里を散策する事にし三人は別れた。

「さて、どこ行こうかな……………」

ユウスケはただ歩いていると建物の片隅でしゃがんで泣いている女の子を見付け近くに寄る。

「どうかしたの？」

優しく声を掛けると小さく震える声で喋る。

「お父さんが死んじゃったの……………」

その言葉にユウスケは胸を打たれた。

「そうか……………辛いだろうな……………名前は？俺は小野寺ユウスケ」

「わたしはミカ……………」

「ミカか…いい名前だね」

ユウスケは笑顔で振る舞うがミカはやはり父親が死んだショックで曇った表情で目が泣いていたため赤かった。

「……………」

だが黙ってしまったため頭を掻いて困った素振りを見せていると視線を下に向けていたためミカに近付く赤くサソリのような長い尻尾が目に入り。

「ミカちゃん！」

「キャッ！」

前へ押し出すと尻尾が伸び先の針がユウスケの腰に突き刺さる。

「ぐっ……………」

刺された個所を手で押さえ苦痛の表情を浮かべ尻尾を見る、戻った先にはサソリのような赤紫っぽい体色で胸に羽みたいなのバッチが付き盾と斧を持った。

「アンノウン……………！」

アンノウンと呼ばれる種族のスコーピオンロードのレイウルス・アクティアが立っていた。

アクティアは狙っていたものとは違つと知ると長居は無用とその場からゆつくり立ち去る。

「待て！」

ユウスケは追い掛けようとしたがミカの怯えた表情を見て追い掛けるのをやめた。

「大丈夫？」

問うが震えて応答できなかった、アクティアがいた場所を見るがもうそこには居らず代わりに。

「大丈夫か！」

慧音と妹紅が駆け付ける。

「何があつた？」

「アン……………妖怪がさつき……………！」

アンノウンと言い掛けたがこの世界ではその名は知られていないため幻想郷での言い方に。

「妖怪だと……………どっちに行った？」

ユウスケが指を差すとその方向に妹紅は走りだした。

「……………外来人か？」

慧音はすぐに服装等を見て外来人とわかり聞くとユウスケは頷き返

す。

「怪我しているのか？」

「大丈夫……刺されたただけだから」

「ちよつと着いてこい」

慧音に腕を引つ張られどこかへ向かった、ミカはその後を着いていく。

ここは迷いの竹林の中にある永遠亭、先ほど説明した場所でもあるため省略。

「診察の結果は……」

永遠亭の一室の中、いかにも診察室の中にユウスケは慧音といた、前には白くて後ろの方で髪を三つ編みで赤と青と縦半分やこころに別れたまるでどこかのヒートトリガーのような服を着た八意永琳えいりんが診察の結果を話す。

「小野寺に刺された傷が今までの凍死の死亡者見られた傷とほぼ一

致した、
解剖しその被害者の体内金属の物体があり今まで起きた凍死した遺体の中に入っていた」

その言葉に慧音は反応した、ここでユウスケはこの村で起きている事件の事を知る。

「その傷を負わせた針から金属を注入しその金属が体温を奪い凍死に至らしめるんだ」

「という事は……………小野寺が見た妖怪がそれを」

名前の方はもう紹介済みであった。

「取り出す事はできない？」

「無理だな、例えその歴史を隠したとしても24時間後には死ぬのだがある考えができていた、それならアクティアを倒せば金属は消滅するのでは、大抵はそういう事が多いためゼロとは言い切れない。

(だけど奴を誘きだすには誰かが囷にならないと…………… だけど奴が狙っていたのはミカちゃん、あの子を囷にするのか……………)

それはプライドが許さなかった、誰かを囷にして誘きだすなんてことは。

ミカには妹紅が着いているためそんなすぐに金属を注入される事はないはず。

ユウスケと慧音は永遠亭から出る。

「すまないな、何もしてやれなくて」

「いって、気にしてないよ」

その後慧音とは別れ一人で里を歩いていると。

「あらユウスケ」

「幽香さん」

幽香と出会う、買い物をしに訪れたようだった。

「そういう事があったのね」

先ほどの事を幽香に話していた、明日には自分は死ぬかもしれないと。

「死んだら向日葵の肥料として埋めてあげるわよ」

「ヒドッ!」

「フフ」

黒い笑みを浮かべる、ユウスケはわかった、この人はサディストなんだ、親切だけど。

「Sだな……」

「Sはサディストで親切で素質なSなのよ」

「ご丁寧にどうも」

苦笑しながら返すと。

「兄貴!」

葬がやってきた、慌てているのはさしずめ先ほどの事を聞いたからだろう。

「大丈夫だつて、倒せばいいんだから」

「ですが……………」

「諦めなければ何とかなる、何かするのが仮面ライダーなんだから」

そう言い聞かせていると悲鳴が聞こえ三人はその悲鳴の元へ走りだす。

「コイツ、本当に妖怪かよ」

アクティアはミカをまた狙っており妹紅と交戦していた、妹紅はスperlカードを発動させ攻撃するがアクティアの盾に全て弾かれてしまふ。

「大丈夫だミカ、お前のお父さんの仇は私が！」

凍死の原因を先ほど永遠亭から出て別れた後の慧音から聞いていたのだ、妹紅はもうこれ以上犠牲者を増やさないためにアクティアを倒そうとする。

「妹紅！」

別れたのはつい先ほどのため慧音がすぐに駆け付けた。

「アイツだ、犯人は」

それを伝えると慧音はアクティアを見て。

「なぜ人間を殺す!?!」

誰もが気になる事を問う。

「人は人のままでいい……………人ならざるものは我々以外必要ない」

人は人のままの意味はわからぬが人ならざるものは妖怪の事を意味していると理解する。

「そんなわけのわからないことのために人間を……………」

殺す事に怒りを露にし戦う姿勢を見せる、アクティアも一気に三人殺そうと斧と盾を構える。

「慧音、アイツの盾はなんでも弾くから気を付けろ」

「ああ」

そう会話すると後ろからマスタースパークが放たれアクティアに直撃し爆発。

「誰だ!?!」

爆炎の中から盾を前に向けた無傷のアクティアが現れる。

「本当になんでも弾くのね」

「風見幽香……………!」

そこに閉じた日傘を持った幽香が現れる、マスタースパークは幽香

が放ったものだった。

「いたぜ兄貴！」

「ああ！」

後からユウスケと薙がやってくる。

「小野寺！」

「お兄ちゃん！」

「奴を倒せば俺の体内にある金属は消えると思う」

確信があるその推測を伝えると更に倒そうと言う姿勢を見せるがユウスケもその姿勢を見せる。

「戦えるのかお前？」

「ああ……ミカちゃん、お父さんの仇、俺が取るから」

「お兄ちゃん？」

ユウスケは腰にアークルを出すと変身ポーズを構え。

「変身！」

アマダムは紫色に輝きユウスケは紫の眼で銀で紫のラインが流れた分厚い甲冑を纏った攻撃と防御に優れた姿、クウガ・タイタンフォームに変身した。

「その姿は……」

「仮面ライダー……クウガ」

優しい声で教えるところからトライアクセラーを持ち握ると紫で

角を模した鍔が付いた剣のタイタンソードに変化する。

「俺も行くぜ！」

ホッパーゼクターがバッタのように跳ねながらやってきて薙はそれを掴み腰のライダーベルトのバックルを開く。

「変身！」

ホッパーゼクターを茶色の面を前に向けバックルに装着すると【Henshin】と響き薙の姿はパンチホッパーに変わり【Changer Punch Hopper】と鳴り響き変身が完了しアクテイアに挑む。

「風見幽香、アレはなんだ」

慧音は聞いてみた、すると。

「仮面ライダー……ああいう妖怪から命あるものを護る戦士よ」

思った事を率直に言葉にしクウガとパンチホッパーの戦いを見る。

パンチホッパーはパンチを繰り返すが盾で弾かれクウガはタイタンソードを振り下ろすがやはり弾かれ斧による攻撃を食らうが。

「っ！」

胸の鎧タイタンブロッカーには通用しなかった、タイタンブロッカーはダイナマイト級の爆撃を受けても全くダメージを受けない鎧なのだ。

「効かねーよ……………お前が殺した人々の痛みと比べたら……………痛くないぜ！」

タイタンソードを何度も振るうが盾で防がれ金属がぶつかり合うような鈍い音が響き渡る。

「あの盾、どれだけ頑丈なんだ……………あんな強力な鎧があったとしても攻撃を食らわせないと」

妹紅が不安そうに言うのに対しクウガは。

「一度ダメだからって諦めたりしないさ、それが、仮面ライダーだから！」

クウガは諦めず何度もタイタンソードを振るっていく、アクティアも受け流しながら斧で攻撃していく、その内盾に「ピキッ」という音が微かに響く。

「ハアッ！」

パンチホッパーは殴り掛かるが盾で防がれる。

「今だ……………ライダージャンプ！」

ライダージャンプをしライダーパンチを繰り出すがアクティアは盾で防ぐ、すると。

「罅が入ったぞ！」

盾は中心から大きな罅が入り。

「ハアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

タイタンソードを両手で握り後ろへ引き思いっきり突き出し貫く必殺技カラミティータイトンを炸裂、やはりアクティアは盾で防ごうとし前に出すが。

「ウギヤアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

だが罅が入った盾で防げるわけなく盾ごとタイタンソードで腹部を貫かれカラミティータイトンが決まる。

アクティアの頭上に光の輪が現れ苦しんだ後、アクティアは断末魔を上げ爆発を起こしクウガを巻き込むが。

「……………」

炎が収まるとクウガは無傷のように見えていたがタイタンブロッカーに罅が少し入っていた、アクティアの斧による攻撃で入ったのだろっ、

タイタンソードを下に向け腕を降ろし変身を解くとパンチホッパーも解く。

体内の金属はアクティアが倒されたため消滅したのだった。

「やったね兄貴」

「うん」

だが少し複雑だった、倒しても殺された人が戻ってくるわけもない、倒すのは犠牲者を増やさないための策でしかない事が、だが。

「お兄ちゃん、ありがとう」

ミカに礼を言われた、これだけでも救いなのだ。

「事件の犯人を倒してくれてありがとう小野寺、影山」
「いいよ」

それからミカは母親がいる自宅へ帰り買い物を終えた総と合流。

「また里に来てくれ、歓迎するぞ」
「近い内にまた」

三人は博麗神社へバイクで帰って行くのだった。

その日の夜。

「よし、これで明日の準備はバッチリだ」

慧音は寺子屋の職員室の中で明日の授業の準備をし終えた所だった。

「ふわぁ〜……眠い……もう寝るとするか」

寺子屋の中に自分の自室がある、空いている部屋は何個もあるのだが、自室に戻ろうとしたら外から音が響いてきたため外に出る事に。

「誰かいるのか？」

外に居たのは銀色のボディで赤い模様、先端はとんがり赤いラインが流れヘッドライトは黄色く輝き『SMART BRAIN MNTORS』と書かれたバイクに乗った青年がいた。

「誰だ？」

「あー、悪いんだけど道を教えてくれない？迷っちゃったんだ」

青年は道を尋ねるのだった。

第3話『不屈の鎧と剣』（後書き）

本当はレントゲンにしようとしたのですがしたらすぐにクウガだとバレるのでませんでした。

次回予告

鳴滝

「君に頼みたい事があるのだ」

パチユリ

「魔理沙〜！」

ユウスケ

「なんで貴方は俺の正体を隠すような事を？」

キバ

「貴方がディケイドと共に世界を破壊しようとしていると聞いたんです！」

カイザ

「邪魔なんだよ……………あの方の思い通りにならないものはすべて」

次回『クウガ対キバ！仕組まれた対決！』

第4話『クウガ対キバ！ 組まれた対決！』（前書き）

今回もディケイドのオマージュ、ユウスケも苦労する。
なんかサブタイが昭和臭プンプン。

第4話 『クウガ対キバ！ 組まれた対決！』

とある仮面ライダーキバの世界。

「君に頼みたい事があるのだ」

赤い布が敷かれた王室のような部屋にメガネを掛けた中年の男が若い青年に話し掛けていた。

「とあるクウガの世界にディケイドと共に世界を破壊しようとする仮面ライダークウガがいる、そのものを倒してくれないか？」

中年の男の名は鳴滝、幾度なくディケイドに立ち塞がった男だ。

「本当に……………その人達は世界を破壊するのですか？」

青年は信用していなかった、理由は突然自分の目の前に現れたからだ。

「私が嘘を言っているとしても？」

「あ、いえ……………」

青年は気弱いのか、鳴滝に押されていた。

「……………わかりました、その世界に行きます」

戸惑ったが了承してしまった。

「ではこのキャッスルドランごとその世界に送ろう」

鳴滝は笑みを浮かべると背後に現れた次元の壁の中に入っていった。

「おいおい奏歌そうた、本当に信じるのかよあのオッサンの事」

そこに黒と金で赤い眼をしたコウモリのモンスターのキバットバット三世が飛んできた。

「いや……………その……………」

「はあ……………まあお前が決めた事だからいいけどさ」

キバットはため息を吐き肩に座るとキャツスルドランというドラゴンが雄叫びを上げる、ここはキャツスルドランの体内の中の部屋なのだ、名前がキャツスルとあるように体は亀みたいに城の中に入っている。

奏歌と呼ばれた青年は小さな声で謝る。

キャツスルドランの目の前に次元の壁が現れその中に入っていくのだった。

その様子を外から見ていた鳴滝。

「……………キバだけでは不安だな、ファイズの世界に行くか」

鳴滝はまた次元の壁の中に入っていきキバの世界から出ていった。

そしてクウガの世界の幻想郷。

「よっ！」

博麗神社に魔理沙が訪れてきた。

「魔理沙こんにちは」

「こんにちはだぜユウスケ」

外を掃き掃除していたユウスケがいた。

「霊夢に扱き使われてるな」

「居候の身だから文句言えないよ……………ん？その本は？」

魔理沙が風呂敷に包んだ大量の本を見て指を差す。

「ああこれは借りてきたんだぜ、死ぬまでな」

借りてきただけならわからなかったが死ぬまでを付けたため盗んだと判断。

「パクったんだな」

「いやいや、死ぬまで借りてきたんだぜ」

何言っても無駄だなと思ひ諦めようとしたら。

「魔理沙〜！」

突然銀髪のメイドの少女と紫の長い髪の毛でパジャマのような服装の少女が現れた。

「なんでここにいてるってバレた!？」

「それは貴方の行動パターンはお見通しだからよ魔理沙」

メイドはそう言つと。

「まさかパチュリーが自分から来るなんてな」

「今日という今日こそは全部返してもらわよ!」

パジャマの少女は小さい声をできる限り出せる大きな声を上げ早口で言つが。

「死んだら返すから待つてろよ〜」

だが魔理沙はそう言い残し箒に跨り飛び去つた。

「逃げられた……」

「今度会つたら返してもらいましょ?」

メイドはパジャマの少女を宥めるように声を掛けていく。

「あら、自分から来るなんて珍しいわね」

中から霊夢が出てきた。

「今日こそはと思ったのに」

しよぼんとなりながら喋っていく。

「ところでその……………」

メイドはユウスケが気になったらしくユウスケは名前を言うと。

「私は十六夜咲夜いそよと申します」

メイドの名前は十六夜咲夜、時間を操る程度の能力を持っている。

「私はパチュリー・ノーレッジよ」

パジャマの少女はパチュリー・ノーレッジ、火水木金土日月を操る程度の能力を持っている。

「貴方が噂の仮面ライダー、文々。ぶんぶん新聞しんぶんに載のっていたわね」

文々。新聞とは幻想郷である妖怪が発行している新聞である。

「ええまあ」

「それにしても魔理沙には困ったわね……………一体何冊借りてるのよ」
「そうね……………もう100は軽く越えてるわ」

そんなに!?!と驚愕するユウスケ。

「せっかく外に出てきたのに……コホッ、コホッ」

パチュリィは喋っている途中咳き込む。

「大丈夫？」

「ええ……大丈夫よ……コホッ」

だが咳が続いていた。

「上がってく？お茶飲んで休んでから帰りなさいよ」

二人は言葉に甘えて神社に上がり居間に入ってしまった。

「喘息持ちなの？」

「そうよ、回りからは引きこもりだのニートだの言われてるけどそれの所為でもあるのよ」

お茶を飲みながら会話をする、総と葬は里に出掛けている。

「それに私より一番のニートはいるのに」

「認めるのかよ」

ニートは否定しないよう、外出たくないのは髪の毛等が痛むからとか。

「永遠亭の月の姫よ」

永遠亭ならユウスケもこの前のアンノウン騒ぎで訪れていた。

「まあその永遠亭に診察に寄るけどね」

パチュリーも来たのはそのためでもあった。

「大変だね……………」

「慣れたわ……………そろそろ行くわよ」

「はい」

俺も着いていくよとユウスケも永遠亭には少しばかり用があったため着いていくことにした。

三人が立つと霊夢が咲夜に話し掛けた。

「……………咲夜、あの人は見付かった？」

「……………まだよ」

「そう」と返し三人を見送った。

「あれ？ユウスケどこに行くの？」

外に出るとキバーラが飛んできた、永遠亭に行くと言うと一緒に行く事に、二人は空を飛んで向かうと言ったためユウスケはトライチェイサーで向かう事にした。

魔法の森の中、巨大な次元の壁が現れキャツスルドランが出てきて森の深い部分に降り隠れると中からキバットと先ほどの青年の奏月かなつき奏歌そうたが出てきた。

「ここみたいだな奏歌」

「うん……………」

「おいおい、もう決めちまった事だぜ？今さらなあ……………」

呆れたように言つが仕方ないと思つている、それが奏歌の性格だからである。

「ごめんキバット……………でもどういう人か見てからにするよ、そのクウガが本当に世界を破壊するかどうかは」

奏歌とキバットは里に向かって歩き出したが知らなかった、鳴滝は絶対戦わせるようにするための策をもつこの世界に送っていたのを。

そして永遠亭に到着するユウスケ達。

先にパチユリーが診察する事になった、そしてすぐ終わり次はユウスケが。

「それで今回は何があつた？」

永琳は何気なく聞いてみるが。

「なぜ……………なんで俺の正体を隠すような事を？」

いきなりだったが聞かれると思ひ笑みを浮かべていた。

「レントゲンを撮影しましたよね？」

あの時、レントゲン写真を撮ったのだが慧音と一緒にいた時その写真を出さなかったのだ。

「上白沢は小野寺を普通の人間だと思っていたからな」

「なら、もう慧音は俺がクウガだって知ってますよ」

「そうか」と永琳は答えるとレントゲン写真を出し見せる。

「これを見たら少しな」

ユウスケだけでなくキバーラも驚いた、レントゲン写真に写ったユウスケの体は普通の人間のものではなかったのだ。
キバーラは思い当たる節があった。

「アルティメットクウガの影響ね」

アルティメットクウガ、それはクウガの二番目に強い最強フォームであり凄まじき戦士や究極の闇とも言われているがその姿となると人間から掛け離れた存在になってしまう。

「小野寺、まだ人間の体だがその内ゆっくりだがだんだん掛け離れたものになっていく、医者としては……………」

医者としての考えをぶつけようとしたがユウスケは止めた。

「言わないでいいです、言われても俺の決意は変わりませんから」

医者としての考えは戦う事をやめるようにするものだった、変身し

その事に恐怖し大声を上げると後ろに透明な牙が現れ。

「危ない！」

ユウスケは飛び込み狙われていたものと一緒に倒れ込むと牙は地面に突き刺さる。

「何が起きてるの……………」

「ユウスケあれ！」

キバーラの羽根の先を向けられた方向にはステンドグラスのような皮膚にライオンのような姿をした怪人だった。

「ファンガイア……………」

それはファンガイアと呼ばれる種族のライオンファンガイアだった。

「しかもチエックメイトフォーの一体のライオンファンガイアよ！」

チエックメイトフォーとは四体の相当な高い実力を持つファンガイアで構成されたチームでライオンファンガイアはその中でかなりのパワーと激しい闘争心を持つ凶悪なファンガイアなのだ。

「逃げて！」

ユウスケは助けた人や回りを歩いてきた人々に言っていると立ち上がり人々が逃げるまで生身でライオンファンガイアに立ち向かっていく、なぜ変身しないかは変身して正体がバレるのを防ぐのもあるが人が多い中で戦闘をするのは怪我人が出るかもしれないという配慮があ

ったからだ。

ライオンファンガイアに掴み掛かるユウスケはそのまま押していくがビクともせず。

「フーン！」

ライオンファンガイアはユウスケを投げ飛ばす、するとユウスケは建物の木の板の壁を突き破り突っ込む。

「いった〜！」

全身を強く打ったが大怪我ではなかった、体が変わっているからか、無事だったのだ。

「ありがたいけど悲しいな……………」

そう思いつつほとんど人が逃げたのを確認すると建物の中、腰に手を添えアークルを出すと右腕を左斜め上に伸ばし右へ動かし両手で左側のスイッチを押すとアマダムは赤く輝きユウスケはクウガ・マイトイフォームに変身すると中から出てライオンファンガイアを睨む。

「アレが仮面ライダー」

「そうよ、アレがユウスケが変身するクウガよ」

パチュリーとキバーラはクウガの戦いを遠くから見ていたが咲夜は

……………

(似てる……………あの子のあの姿に……………)

暎夜の脳裏には金の二つに別れた角に赤い眼した黄金の戦士が浮かび上がっていた。

クウガはライオンファンガイアの胸部を殴るがビクともせず、なんともなかったのようにライオンファンガイアはクウガを凄まじい力で殴っていき防戦一方になる。

「ぐっ………うっ………!!」

腕でガードしつつ反撃のチャンスを伺う、ライオンファンガイアがパンチを力を付け貯めて放とうとしたらそこで隙ができクウガは腹部を蹴り飛ばし距離を取る。

「ウオオオオオオオオオッ!!!!!!」

ライオンファンガイアは怒り狂ったような叫びを上げると突進してくるとクウガも変身ポーズを構え一歩引いてから走りジャンプ、マイティキックを食らわしライオンファンガイアは後退り胸部に封印のマークが現れるのだが。

「何………!!」

ライオンファンガイアは気合いを入れ胸部に力を入れると封印のマークは消えてしまう。

「ならまだだ!」

再び走り出しライオンファンガイアにマイティキックを炸裂!

今度は右肩に当たりそこに封印のマークが現れるがまた消えてしまいいライオンファンガイアは突進しクウガを跳ね飛ばす。

「さすがユウスケ〜！」

キバーラは飛び回って勝利に喜んでいたがその勝利を見ていたものがいた。

「キバット！」

「ああ、あのオッサンが言っていた事は本当みたいだな！」

奏歌とキバットがそれを見ており走りだす、クウガ達は気付いてないみたいだ。

「ギャブツ！」

キバットは奏歌と手に噛み付くと奏歌の腰に赤いベルトのキバットベルトが現れ。

「変身！」

キバットがバツクルに逆さまになって止まると奏歌は鎖に包まれそれが弾け飛ぶとジャック・オ・ランタンのような仮面で黄色い眼で赤い模様が入り鎧も鎖が巻かれている部分もあり胸部と腹部に掛け赤い鎧で回りは銀色に、右足には何かを封印するように巻かれた鎖が付いた仮面ライダーキバ・キバフォームに変身した。

「ハツ！」

キバはクウガを後ろから殴り掛かるがギリギリの所を避ける。

「キバ……………！」

キバは素早くパンチを繰り出し攻撃してくる。

「アレも仮面ライダーなのキバーラ？」

「そうよ、仮面ライダーキバ、けどなんでユウスケを襲うのかしら？」

キバーラはなぜクウガを襲うかがわからなかった。

「待ってくれ！なんで俺を攻撃するんだ！」

「聞いていた通りだ！」

キバはパンチを繰り出しながら喋っていく。

「貴方がディケイドと共に世界を破壊しようとしていると聞いたんです！」

クウガは耳を疑った、なぜ自分がディケイドと関係あると知っているかを。

「世界を破壊！？一体何を言っているんだ！」

「うるさい！」

キバはベルトから青い笛ガルフエッスルを持ちキバットの口に入れて吹かせる。

「ガールル……！セイバー！」

そう叫ぶとどこからか青く狼の顔を模した置物が飛んできてそれを左手で持つと左腕は青く狼の足のような毛の刺が生えた防具に包まれ鎧も青く、眼も青くなり置物も変形しガールルセイバーという剣と

なりキバはガルルフォームにフォームチェンジする。

「ワオオオオオオオオーン!!!!!!!!!!!!!!」

狼のような雄叫びを上げると走りだしガルルセイバーで横に一閃しクウガは避けるが鎧に横に薄く傷が入る。

「超変身！」

また斬り掛かられるがそれをドラゴンフォームにチェンジしてジャンプして避け地面に着地すると前へ転がり木の棒を拾い上げドラゴンロッドに変化すると後ろから斬り掛かられるがドラゴンロッドで受け止め上へ払うと何回かキバを突き吹き飛ばす。

「バツシャー！」

今度は緑のバツシャーフェッスルをキバットに吹かせる。

「バツシャー！マグナム！」

今度は緑の魚人のような顔を模した置物が飛んできて右手で取るとガルルセイバーは消えガルルフォームは解除され今度は右腕が緑の魚の鱗のような防具を纏い鎧と眼が緑に変わり置物は銃のバツシャーマグナムに変形しバツシャーフォームにチェンジ。

「ハッ！」

バツシャーマグナムの引き金を引き水の弾丸を高速で連射するがクウガはドラゴンロッドで受け流したり走って避けていくが再び弾丸が放たれ避けようとしたが後ろには。

「っ！」

パチュリー達が居り避けたら不味いと考えタイタンフォームにチェンジしタイタンブロッカーには弾丸は通用しなかった。

トライアクセラーを持ちタイタンソードに変えゆつくりとキバに接近し。

「ハアアアアアーツ！！！！オリヤアアアアーツ！！！！！」

「ぐっ！ぐはっ！？」

最初に振り上げるとバツシャーマグナムを弾かれ次に振り下ろし体を切り裂きキバは吹き飛びバツシャーフォームが解除されキバフォームに戻るが。

「力には力だ奏歌！」

「うん！」

紫のドツガフェッスルをキバットに吹かせる。

「ドツガハンマー！」

次は紫のフランケンシュタインみたいな顔を模した置物が飛んできて両手で持つと両腕は紫の分厚い防具が纏い鎧にも分厚い紫の甲冑に、眼は紫となり置物も拳のような巨大なドツガハンマーに変形しドツガフォームにチェンジしドツガハンマーを振り下ろす。

クウガは受け止めようとしぶつかると少し後退るがタイタンブロッカーは凹んでいた。

「くっ……………！」

受け止めるのは危険と感じドッグハンマーをタイタンソードで受け止めつばぜり合いに。

「俺は破壊者じゃない！」

「嘘だ！さつきファンガイアを殺したじゃないか！」

ファンガイアは人間と共存できるのに！」

ここでクウガは自分を破壊者だと決められたきつかけがわかった、キバの世界にはファンガイアと人間が共存する世界もある、かつて自分が訪れた世界もそうだったからだ。

「けどあのファンガイアはライフエナジーを吸収してた！」

人間の生命エネルギーのライフエナジーを主食とするファンガイア、だが人間と共存するファンガイアはそれは禁忌で処刑ものだ。

「嘘だ！」

だがそれも嘘と一点張り、だが。

「本当よ」

パチュリーが声を上げた、小さいが意識がはつきりとし強い声を。

「彼はあのファンガイアという怪人に襲われそうになった人間を助けたのよ」

「パチュリー様の言う通りです」

咲夜も弁護に入りキバはドッグハンマーを下げる。

「じゃあ……………今の話も……………」

「本当だ、信じてくれ」

クウガもタイタンソードを下ろし話し掛けると。

「何をしているのだ!」

声が聞こえた、その方向には。

「鳴滝!?!」

鳴滝がいた。

「鳴滝さん、またアンタはライダーに嘘を吹き込んで襲わせたのか!」

「嘘ではない! デイクイドは世界を破壊する、その破壊するものの仲間も破壊者だ!」

クウガとキバーラは呆れていた、デイクイドが何か知らないパチュリーと咲夜も。

鳴滝に躍らされていたとわかるキバは視線を下に向け申し訳ないという気持ちを露にしていた。

「だが! 代わりにライダーはいくらでもいる!」

背後に次元の壁が現れ中からXを模したような仮面に紫の眼、鎧にもXの黄色く輝くラインが流れ黒いライダー、ファイズライダーズの仮面ライダーカイザが出てくる。

「カイザだと!？」

「カイザよ!クウガとキバを始末しろ!」

鳴滝の指示を聞くとカイザは走りだしカイザブレイガン・ブレードモードという剣を持ち走りだしクウガとキバに襲い掛かる。

鳴滝は次元の壁の中に消え壁も消滅する。

「くっ!」

カイザブレイガンの刃をタイタンソードで受け止めつばぜり合いとなる、キバは騙されていた事により脱力していた、カイザは首を捻りながら。

「邪魔なんだよ……俺達の組織の思い通りにならないものは全部

……!」

「組織だと……一体……ん!？」

腹部に何か突き付けられた感触が下を向くとカイザへの変身するための黒い携帯カイザフォンが銃モードのフォンブラスターと変形しており引き金を引かれ光弾が放たれ。

「うわあっ!？」

至近距離と先ほどから連戦のため疲れているからかダメージが通じ後退るとカイザブレイガンをガンモードにしフォンブラスターと両手に銃を持ち引き金を引いていき光弾の雨をクウガに浴びせていく。

「くっ……!」

クウガは膝を地面に付くとカイザはデジタルカメラ型のグローブの

第4話 『クウガ対キバ！ 組まれた対決！』 (後書き)

カイザ、因みにこのカイザは小説版ファイズの草加を。
感想お待ちしています。

次回予告

カイザ

「その声はまさか……………」!

ファイズ

「……………草風か……………」

奏歌

「ごめんなさい！」

青年

「また増えた……………アイツも……………」

次回 『疾走する本能！ S登場!』

第5話『疾走する本能！』

S登場！』（前書き）

タイトルがやっぱり昭和臭がプンプンするようなタイトルになってしまっな、いい意味で。

仮面ライダー以外からも出ますので悪しからず。

では、ドライブイグニッション！

ちげー！WWW

第5話 『疾走する本能！』

S登場！

前回のあらすじ

ユウスケがパチュリーと咲夜と出会い、キバラーも加え共に永遠亭に行き永琳に変身し続けると人間の体ではなくなると警告されるが戦う決意は変わらなかった。

里に入るとライオンファンガイアが人々に襲い掛かったがユウスケがクウガに変身！ライオンファンガイアを倒すが。

そこを奏月奏歌が見ておりファンガイアをただ殺したただけと勘違い、仮面ライダーキバに変身しクウガと戦うが、パチュリー達の弁護があり誤解が解けたがそこに鳴滝が現れキバもろともクウガを倒すため仮面ライダーカイザを呼び寄せ消える。

カイザは「組織」という言葉を使いクウガは疑問に思うが連戦だったため疲労が溜っておりグランインパクトで倒され変身が解けてしまいカイザの魔の手が迫っていた。

「さあて、消えてもらおうか」

カイザは左手をブラブラさせながらカイザブレイガン・ブレードモードを右手に持ち振り上げユウスケに迫っていた。

キバは戦意喪失、パチュリー達はスペルカードを使用しようとしていたが間に合いそうにない、万事休すかと思われたその時！

「何！？」

カイザブレイガンを弾き飛ばす閃光が現れた、武器が飛ぶと次はカイザ自身が弾かれたように吹き飛ばされる。

「グワアツ!？」

突然の事で何が何だかわかっていなかったが【3...2...1...
・Time Out Reformation】とカウントをする
電子音声が響きユウスケやキバ達の前に現れたのは。

「ファイズ……!」

を模した仮面に赤く輝く眼、プロテクターが半分を開き両肩にスライドし銀色のフォトンストリームが流れ左腕に腕時計型のアイテムのファイズアクセルが付いた仮面ライダーファイズ・アクセルフォームだった。

ファイズはプロテクターが胸部にスライドし銀色に輝くフォトンブラッドは赤く輝き眼は黄色く輝く通常フォームに戻る。

「ファイズだと……!」

カイザは自分の世界の主役ライダーが現れた事に驚愕していた。

「……………草風くしかぜか……………」

「っ!その声はまさか……………!」

ファイズとカイザは互いの事を知っているようだった。

「小野寺!」

そこに慧音がやってきてユウスケの元に駆け寄る。

「慧音……！」

回りを見て咲夜とパチュリー、キバールとキバがいるのを確認しカイザと対峙するファイズを見る。

「まさかここで会えるなんてな………」

「草風………てめえだけは許さねえ、絶対にな」

ファイズは怒りを露にしカイザに殴り掛かる。

「いいな、ここで決着をつけてやろう！」

カイザも殴り掛かるが二人の間に次元の壁が出現する。

「チツ………無理みたいだ、今度また戦ってやるさ」

カイザは次元の壁の中に消えていき壁も消滅した。

「くそ………」

ファイズは静かに呟くと変身ベルトのファイズドライバーに装填されていた銀色の携帯ファイズフォンを抜いて開き電源のスイッチを押し変身は解除され無愛想な青年が姿を現した。

「君が………ファイズなのか」

ユウスケは立ち上がる、キバもキバットがベルトから離れ変身が解除され奏歌の姿に戻る。

「……………」

青年はその場から何も言わずその場から去ろうとする。

「おい待て！」

慧音は呼び掛けるが無視されるが青年を追い掛ける事に。

奏歌はそわそわしていた、嘘を吐かれて襲ってしまいどうなるか不安になっていた。

「ごめんなさい！」

とりあえず謝った、これが基本、許してもらえないと思っていたが。

「いいよ、嘘を吹き込んだ鳴滝さんが悪いんだから」

ユウスケは許して、何人ものライダーが鳴滝の言葉に騙されディケイドを攻撃してしまったからだ。

「ありがとうございます」

もじもじしながら礼を言くとキバーラとパチュリー達がやってくる。

「誤解は解けたようね」

「キバット族……………」

奏歌はキバーラを見て驚く、奏歌のキバの世界にはキバーラは居ないようだ。

「僕は奏月奏歌と言います」

奏歌が自己紹介するとユウスケ達も名前を教え場所を変えて話す事にした。
場所は変わり里の近くにある団子屋に。

「僕は自分の世界でファンガイアのキングをしています……………」

キングはすべてのファンガイアの頂点に立ち、キバはその証明となる。

「結構ご身分が高いんですね」

「いえ、ですが従わないものも多くて……………半分僕の父親に關係しているんです」

なぜかと思っていたがユウスケとキバーラはすぐに分かり。

「父親が人間だから？」

「はい」

ユウスケが先に言葉に出すと肯定する。

「紛い物と呼ばれていたためファンガイアと認めてもらえず反逆するファンガイアも後が断たなくて……………」

しよんぼりとしながら話していく。

「僕は混血のファンガイアでしたがキングになる前は普通の人間としてバイオリン職人として生活していたのですが突然キングを任せられる事に」

だから自信がなくそんなにもじもじしているのかと理解し。

「その時に鳴滝さんが現れクウガを倒せばすべてのファンガイアは僕に従うと言われたので……………」

「それで襲い掛かったのね」

パチュリーの言葉に頷く。

「それにしても用意がよかったわね鳴滝も、ファンガイア用意して倒すところを見せて怒らせて戦わせるなんて」

「そうだな……………用意周到だな……………これからまた他のライダーが襲ってくるのか？」

後の事を不安になるがそれでも戦うしかない。

「本当にごめんなさい！」

奏歌はもう一度謝る。

「もういいって……………だけどキバの世界には簡単に帰れないな」

鳴滝が送り込んだために自分に逆らう奏歌をキバの世界に帰すわけなく幻想郷での生活を余儀なくされた。

「そうですね……………」

これは罰だと思ひ諦め当分幻想郷に住む事に。

「本当はキングなんてやりたくなかったんです、好きなものに戯れて暮らしていきたくったんです」

好きなものに戯れる、それはパチユリーも同じだった、紅魔館の地下は図書館になっており大量の本がある、その好きなものに戯れていたいからの外に出ない理由、その気持ちがわかるのだ。

「まあその気持ちはわかるわね、私も本を読んでいたいから外に出たくない理由だし……………奏歌は何が好きなの？」

「バイオリンを演奏するのと作るのが」

演奏家は珍しくないが両方は珍しくパチユリーは興味が湧いた、バイオリン作りを本で読んだ事があるため。

「実際に見てみるのも悪くないわね……………」

「ですがそろそろ戻らないと、夕食の支度もありますし」

「そうね……………それじゃ私達は帰るわね」

そう言うで一瞬で姿を消した、咲夜が時間を止めて紅魔館に帰っていったのだ。

「奏歌はどこに住む？」

場所がなければ博麗神社に誘おうとしたが奏歌はキャッスルドラゴンと共に来たためそこで住む事に。

「待て、どこに行く？」

慧音はまだ青年を追い掛けていた、詳しく話を聞くために。

「しつこいな……………どこに行こうが俺の勝手だろ」

「行く所はあるのか？」

それを聞かれたら何も返せない、青年は外人だからだ、それもこのクウガの世界ではなくファイズの世界の住人であるのだから、ファイズに変身したのが証拠である。

「構わないでくれよ、鬱陶しい」

「そうはいかない、外人人で仮面ライダーとしても里の外にでも出たら妖怪に襲われる可能性があるんだぞ？」

「妖怪か……………ならなおさら心配する事はないな」

青年は早々と歩きながら腰のファイズドライバーを取りいつの間にか寺子屋に到着しており停まっていた専用バイク、オートバジンの後部に乗せていたアタッシュケースにファイズドライバーとファイズフォンを収納し蓋を閉じて鍵を掛ける。

「なんだかんだでここに戻って来たのか」

「うるせーな」

イライラしながら応答しオートバジンを押して歩き出した、ここに戻って来たのはオートバジンを取りに戻ったため、青年はそのまま

外へ向かう。

「だから外は」

そろそろ夜も近く妖怪に襲われる危険が高い、里を護るものとしては放っておく事はできず着いていく。

「まだ着いてくるのかよ……………いい加減なあ」

今にでもキレそうな口調で話し掛けるが依然として態度を変えない慧音、すると。

「おーい、慧音」

妹紅が加わり青年は頭を抱える、また余計なのが増えたという事で。

「また増えた……………」

だがまた歩き出す、さっさと行くために、どこに行くかわからない、だがそれでも歩く。

「わたしは藤原妹紅な、でお前は？」

妹紅が名を教えるのだが青年は答えない。

「私も名を教えたのだが教えてくれないんだ」

「もしかしたら名無しの権兵衛だったりしてな」

後ろで会話されてうざたがるがため息を吐くだけでもう何も言わなかった。

「……………アイツも口やかましかったっけな……………」

小さく呟きゆっくりと歩く。

「何か言ったか？」

「別に、まだ着いてくるのかよ」

「当然だ、無知な外来人を放っておくほど私は鬼じゃない」

ため息を吐く青年、歩いていると里の外に出ていた、すると何かが倒れる音が響いた。

「今の音は……………」

青年は面倒だなと思うがオートバジンをその場に停めて森の中に入っていく。

「おい！」

それはもうさすがに危険だと判断、二人も森の中に入り青年を追い掛ける。

深い森の中、博麗神社側の。

そこに大量の灰が散らばっていた。

「なかなかオルフェノクになる奴が出ねーな」

そこにはカマキリに似ており両手に鎌を持ち腰の30程の羽根のスカートが着いたマンティスオルフェノクと同じくカマキリに似ており大鎌を持った死神にも見えるマンティスファンガイアがいた。

「だが妖怪どものライフエナジーもなかなかだな」

マンティスファンガイアはその場にいた妖怪達のライフエナジーを吸収、殺害していた。

「人間のものよりも生命力が強く濃厚で美味だな」

「ファンガイアはいいな、妖怪じゃ使途再生は使えねーのか？」

マンティスオルフェノクは妖怪がオルフェノクとならないかを実験をしていたらしいが上手くいかないがマンティスファンガイアは妖怪のライフエナジーの味に満足していたところに。

「人間が来たか」

青年がやってきてこの惨状を見て表情は変えていないものも心境は違っていた、この二体に対する怒りが芽生えていたのだ。

「俺がやる、そろそろオルフェノク増やさないと首領のお怒りを受けそうだ」

マンティスオルフェノクは前に出て青年に襲い掛かろうと飛び付くが。

「貴人『サンジェルマンの忠告』！」

スペルカードが発動し赤一色の弾幕が放たれマンティスオルフェノクを吹き飛ばし、後ろにいたマンティスファンガイアにも浴びせる。

「お前ら……………」

後から慧音と妹紅が駆け付けた、今のスペルカードは妹紅によるもの。

「まさか怪人がいるとは」

「三人も、ちょうどいい、まとめてオルフェノクにしてやらあ！」

マンティスオルフェノクは鎌を構えて走りだす、慧音と妹紅は迎え撃つ姿勢を見せるが。

「お前！」

だが青年は相手が武器を持っているにも関わらず生身で迎え撃つ、マンティスオルフェノクはバカにしながら鎌を振り下ろそうとしたその時だった。

「……………!!」「……………」

慧音、妹紅問わず怪人側も顔色を変えた、青年の姿は灰色で狼の姿をしたウルフォルフェノクとなり鎌を受け止め殴り飛ばした。

なぜファイズに変身しなかった、いや、ファイズギアをなぜ持つてこなかったかわかった、青年はオルフェノクの姿を見せ二人に人間ではないことを教え離れさせようとしたのだ。

(俺の傍にいれば誰もが不幸になる、一匹狼のままの方がいいんだ)

過去に自分がオルフェノクと知ってもなお傍にいてくれた人間がいたらしいが不幸な目にあっただらしくそれ以来他人と深いかかわり合いを持つとはしていなかったのだ。

「行けよ……俺は見ての通りコイツらと同じなんだよ」

二人は黙って聞いていた、ウルフルフェノクの言葉を。

「行けよ！」

慧音だけはその場から走り去ってしまったが妹紅は残った。

「お前も行けよ」

「いや、わたしはコイツらを倒してから行く」
「……………」

ウルフルフェノクはそれ以上は言わずマンティスオルフェノクとマンティスファンガイアに妹紅と共に立ち向かう。

キャッスルドラムでは王室の棚に飾られていたバイオリン、ブラッ

デイローズが弾いていないのに鳴り響き。

「奏歌！」

「ファンガイア……………行くよキバット！」

「おう！」

奏歌とキバットはキャツスルドランから出て赤い血の色をしたバイク、マシンキバーに乗り走りだした。

そしてウルフオルフェノクと妹紅は二体の怪人と激戦を繰り広げていた。

だが妹紅はウルフオルフェノクの戦い方に違和感を覚えた。

（なんでコイツこんなにがむしゃらなんだ）

そう、ウルフオルフェノクの戦い方は変に先走っており空振りが多かったが攻撃が当たると確実にダメージは与えられていた。

「お前、なんでそんなに……………」

「……………うつせ……………」

妹紅は察した、その灰色の姿で戦うのを嫌っているのだと。

「そうまでして一人になりたいのか？」

「……………俺は一人でいなきゃいけない男なんだ……………俺が誰かと一緒になればそいつは不幸になっちゃう」

素っ気なく答えているが少し悲しみが見え隠れしていた。

「何話してんだ！」

マンティスオルフェノクが鎌を振るってくる、ウルフォルフェノクはギリギリかわと腹部を殴り飛ばす。

「このやるっ……！」

マンティスファンガイアは大鎌を大きく振り回すため近付けなくなつたが。

「っ！」

妹紅の左腕が切り落とされそれを見たウルフォルフェノクは動揺する。

「大丈夫か!？」

「気にするな!目の前の敵に集中しろ！」

傷は気にするなどは言うが左腕切り落とされて肩から血がドバツと流れている、それを気にしない事ができるわけない、だがそこにエンジンの音が響いてくる。

「アイツは………」

マシンキバーに乗った奏歌が変身するキバ・キバフォームが駆け付けるが後部には。

「慧音！」

慧音が乗っていた、アタツシユケースを抱えて。

「おい！」

アタツシユケースをウルフォルフェノクに投げ渡す。

「お前……………まさか逃げたんじゃなくて……………」

逃げたと思った、だがアタツシユケースを取りに戻っていただけだった。

「お前がどんな姿だろうとこの幻想郷なら受け入れてくれる、私も何となくその気持ちがわかる」

ウルフォルフェノクは青年の姿に戻る、キバはマシンキバーから降り怪人に立ち向かう。

「私も……………半分人間で半分妖怪だから」

それを聞くと軽く微笑み。

「妖怪がいりや腕を切り落とされて気にするなって言う奴もいやがる……………」

アタツシユケースを開きファイズドライバーを腰に巻くと。

「犬神タクミだ」

青年は始めて名を名乗った、辺りは普通の人間ではほとんど回りが見えないくらいに暗くなっていた。

「それがお前の名前か……………」

ファイズフォンを開き5を三回押しエンターキーを押す。

【Standingby】

ファイズフォンを閉じそれを持つ右腕を挙げ。

「変身！」

ファイズフォンをファイズドライバーに装填し横に押し倒す。

【Complete】

ファイズギアを中心にフォトンストリームが流れていきそれを体を包むとフォトンブラッドは赤く、強く輝き辺りを照らす。

「眩しい!?!」

「まさか……………アイツが！」

光が収まるとタクミは仮面ライダーファイズに変身を完了しておりフォトンストリームと眼の輝きが闇を照らしていた。

ファイズは右腕をスナップさせると走りだしマンティスオルフェノクに殴り掛かる。

「オラアアアッ!?!?!?!」

「グワアッ!?!」

オルフェノク時とは違いがむしゃらは変わらないが人間を捨てたよ
うな戦い方ではなくまるで喧嘩しているようだった。

「おいおい……………まるで喧嘩じゃないか」

「ああ、少し教育が必要だな」

慧音の目は問題児が来た嬉しそうに輝いていた。
一方キバは……………

「奏歌！こうなったらアイツの出番だ」

「うん」

少し圧されていたがこれを打開するための金のタツロットフェッス
ルをキバットに吹かせる。

「タツロット！」

すると金色の腕時計型で背中にスロットが付いた竜タツロットが飛
んでくる。

「ビューンビューン！さあテンションフォルテッシモ！変身！」

タツロットはキバの肩の防具の鎖を外すと左腕に装着しキバの鎧は
銀から金に、眼は赤くなり裏が赤、表は金のマントが背中に現れ黄
金の鎧を纏いしキバの最強フォーム、エンペラーフォームに変身す
る。

「ザンバット！」

タツロツトから黄金の剣でコウモリのモンスターのザンバットバットが鏢となったザンバットソードを抜き取り手に持つ。

「オオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

マンティスファンガイアは大鎌を振り回し迫ってくるがザンバットソードで受け止められ殴り飛ばされる。

「くっ!」

キバはゆっくりと歩きながら近付いていく、マンティスファンガイアはもう一度襲い掛かるが今度はザンバットソードに二、三度斬られ吹き飛ばす。

「……………」

ザンバットバットからザンバットフェッスルを外しキバットに吹かせる。

「ウェイクアップ!」

ザンバットバットを剣先まで上げていき剣が赤く輝き元の位置に下げられる。

マンティスファンガイアはやけくそになり走って接近してくるが居合いの構えを取り剣が届く範囲に入った瞬間ザンバットソードを横一文字に振るう。

「グワアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!?」

マンティスファンガイアは断末魔を上げファイナルザンバット斬の

前に碎け散った。

「オラアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

ファイズはマンティスオルフェノクを何回も殴り攻撃していく。

【Single Mode】

フォンブラスターに変形させて赤いビームを放ちマンティスオルフェノクの体を焼いていく。

「コイツ!」

ファイズはしゃがんで何かしようとしたがマンティスオルフェノクには挑発だと思われ逆上させてしまうが。

【Burst Mode】

次は光弾を三連射しマンティスオルフェノクを撃って近付けさせなくしファイズフォンをドライバーに戻しベルト付いている懐中電灯型のツールのファイズポインターを取りファイズフォンからミッシェンメモリを抜きファイズポインターに挿入すると【Ready】と鳴り柄の部分が伸び右足に装着するとエンターキーを押し【Exceed Charge】と足に流れるフォトンブラッドは強く輝く。

「……………ハアッ!」

ファイズは高くジャンプし右足を伸ばしファイズポインターから赤いビームを放ちマーキングするかのようドリル状の渦となりマン

タクミは嫌がるがそんな事知るかと慧音はがっちりと腕を掴む。

「逃がさないぞ」

「諦めな、こうなった慧音は聞かないから」

妹紅の言葉に諦めるタクミだった。

「己え……………またしても作戦は失敗か……………」

鳴滝は次元の道を歩いていた、次の作戦を考えながら、すると。

「今のは!」

その横を赤い光が通り過ぎていった。

そして夜中の人里。

「うわあああああっ！！！！！！！！！！？」

道端に黒いスーツにネクタイをしサングラスを掛けた二十代のおっさんが落ちてきた。

「痛たたた……いきなりなんだ……オーロラに呑み込まれたと思ったら……」

おっさんは歩き出したのだった。

第5話『疾走する本能！』

S登場！』（後書き）

ファイズの暗闇での描写が大好物です！

漆黒の闇の中で輝くファイズ、もう最高描写！

犬神タクミの名前の由来は乾の“いぬ”に尾上の“がみ”を合わせたりイマジとオリジナルがコラボった名前です。

カイザとの因縁はまた今度、このカイザはクズの中のクズですからすぐく、変身者変わるな、カイザ。

次回予告

おっさん

「大丈夫かい？」

ユウスケ

「俺も会ってみたいな、そのおっさんに」

おっさん

「魔物じゃないのか……………生兵法は怪我の元だぜ坊や」

????

【不動、もう一度共に】

おっさん

「ああ、行くぞゴウリュウガン！
不動銃志郎……もう一度龍となる！」

次回『復活の銃士！マグナリュウガンオー、ライジン！』

第6話『復活の銃士！マグナリユウガンオー、ライジン！』（前書き）

おっさん登場です！

おっさんのかっこよさは最高です！

第6話 『復活の銃士！マグナリユウガンオー、ライジン！』

「今日は鯖の味噌煮がいいな……………」

総が里に来ており夕飯の買い物をしていた。

なんだかんだで幻想郷に馴染み里の人達とも仲が良かった、特に主婦の方々と。

「お」

目の前に走って遊ぶ子供達が現れる。

「元気があるな」

それを見ていると大量の荷物を積んだ押し車の横を一人二人と通り過ぎ最後の一人が通り過ぎようとしたら。

「危ない！」

積み荷を止めていた縄が切れ荷物が崩れ子供を下敷きにしようとしていた、総は走るが間に合いそうにない距離だったが……………荷物は崩れ大怪我したかに思われたが。

「大丈夫かい？」

だが下敷きになり掛けた子供を黒いスーツでサングラスを掛けた男が助けだした、子供を下ろすと。

「無事だったか！」

慧音が駆け付け無事か確かめ男を見て。

「里の子を助けてくれた事を礼を言っ

「いいさ、じゃあこれで」

男は名も言わず去っていった。

「って事があつたんだよ」

博麗神社、夕食を食しながら里であつた出来事を話す総、最近では変な敬語ではなく普通に話せるように。

「スーツって事は外来人かな？」

「またなの……………もう、別世界から来て困ってるのに」

総と葬をジト目で見ると霊夢。

「まあまあ」

そこをユウスケが仲裁に入る。

「俺も会ってみたいな、そのおっさんに」

「いや、どっから見ても二十代ぐらいの男だったような……………」

「それにしてもこの鯖の味噌煮美味しいわね、今度作り方教えてよ」

霊夢のその言葉には裏があるのは、この場にはいない咲夜やパチュリー等の紅魔館のメンバーしか知らない。

(帰ってきた時に作ってあげたいわね……………)

そして食事を終えそれぞれ思い思いの時間を過ごしてから眠りに就くのだった。

「朝か……………」

里のすぐ側、スーツの男はそこで野宿していた、まだ寢床を確保していないからだ。

「“ゴウリュウガン”、今……………そうだったな、ゴウリュウガンは今……………」

男はサングラスで目が隠れていてわからなかったが悲しそうな目をしていたのは明らかだった。

「どうやって帰るか……」

男は博麗神社に行けば別の世界に帰れる事を知らなかったが無理である、彼もクウガの世界とは別の世界から来た人間なのだからだ。

「さて……動くか」

男は移動を始める、自分の世界に戻るため情報がないかを。

同じ頃、里では建物の裏で住人の男が目の前にいる下半身が宙に浮き上半身が地に付いている砂の怪物と話していた。

「お前の願いを言え、どんな願いでも叶えてやる」

「ど、どんな願いでもかい？なら！」

住人の男はその砂の怪物に願いを喋ってしまった。

そして数日後。

「ふわあゝ眠い………」

タクミは目を覚まし起き上がり慧音がいると思われる居間の方に行く。

「起きたか犬神」

「よ、タクミ」

居間には慧音と妹紅がいた。

「妹紅も居たのか……………」

「ちよつとな」

妹紅がいるという事は厄介事だろうと思っていた。

「最近、変な事件が立て続けに起きているんだ」

やっぱり厄介事だった、だが今の自分には聞かないとかそういう拒否権はないため聞いていた。

「それもほとんどの被害者が妖怪や妖精だ」

「妖怪が？」

人間ではなく妖怪や妖精、タクミは思い出したかのように口を開いた。

「そう言えば昨日も妖怪が里に駆け込んで来たな」

「そつだ、話じゃ突然別の妖怪に驚かされたみたいだ」

普通じゃあり得ない、だがそれをやってのけられるのは。

「怪人か」

「ああ、もしかしたら里の人間にも被害が及ぶかもしれん」

できれば見つけて倒せ、そう言いたいのだろう。

「当然だろ」

「はいはい、やってやらあ」

「やる気なさそうだな」

妹紅はジト目で言うが、前回左腕切り落とされたはずなのだが、元に戻っていた、それは妹紅が不死だからである。

「私は今日、授業あるから無理だからな」

授業と言っても歴史である、てか歴史しかできない、後は体育、他の教科は妹紅がやってくれるからいいのだ。

（歴史しかできないのにな）

（まあそう言ってやるなよ、歴史バカなんだよ）

こそこそ話しているため慧音には聞こえていない。

（慧音から歴史取ったら残るのは頭突きと口喧しさだけだよ）

「聞こえているぞ」

「ギヤーツ!?!」

最後のだけは聞こえていたため妹紅は頭突きを受け床に顔から突っ込み穴を空けタクミは背筋が凍った。

「犬神、お前も何か言いたそうだな」

「なんでもない……………です」

最後に敬語になるほど少し怯えていた。

「これで満足だろ？」
「いいや、まだまだ！」

数日前の怪物と話していた住人の男とその怪物が実体化しカメレオンのようなカメレオンイマジンが密会していた。

イマジンは電王の世界の未来から来た怪人である、実体化する前はエネルギー体で人間に取り付き契約をしなければ実体化できない。契約はその取り付いた人間の願いを叶える事だがやる事が単純過ぎるため大変な事になってしまふ。

住人の男の願いは妖怪や妖精を驚かす事だった、理由は……

「アイツらは俺に恥をかかせたんだ、妖怪達に驚かされて里のみんなに笑われたんだ！」

妖怪に驚かされたために里に駆け込んだまではよかったが更には転んで衣服が脱げてしまい笑い者になってしまったのだ。

「俺の恨みはまだ晴らしてないんだ！」

だが住人の男はまだ満足していないらしく契約が完遂できていない、契約が完遂するとその契約者の思い出深い過去に飛んでいき破壊の限りを尽くし歴史を改ざんしてしまうのだ。

「くそ！てめえどんだけ欲深いんだよ！」
「うわぁ！？」

カメレオンイマジンはなかなか契約を完遂させない住人の男に苛立てていた、そのため怒りを抑えなくなり契約者の体を痛み付ける。

「次妖怪を驚かせて契約完了しなかったら殺すからな」

カメレオンイマジンは呆れ面倒くさそうにしながらその場から透明になり消えた。

「……………」

消えると住人の男はにやける、理由はカメレオンイマジンを利用しているからだ、もっと妖怪を驚かせてこいと、カメレオンイマジンはいつ完了するかわからない契約をってしまったのだ。

「だけど殺されたらな……………」

だが殺されるのは嫌だなと思いつつどこかで隠れていようとか思い考えるのだった。

「さっきの魔物ではなかったな……………」

先ほどのカメレオンイマジンと住人の男の密会をサングラスの男が目撃していた、この男は刑事なため張り込みは得意なのだ。

「この世界にも悪がはびこるのか……………」

男はそれを放っておく事はできなかった、自分の中に宿る正義の炎が燃えていたからだ、だが自分には今、悪を倒す力はなかった、前はあった、だが今はなかった。

「……………」

スーツの男は住人の男をマークする事にした、またカメレオンイマジンが現れるかもしれないからだ。

その頃タクミと妹紅は事件を追い掛けている。

「あだだだ……………」

「大丈夫かよ？」

先ほどの頭突きの痛みが退いておらず頭を抑えている。

「大丈夫だ、いつものこと」

だが痛そうだった。

「あ？」

そこでタクミは住人の男の後を着けているスーツの男を発見、怪しいと感じた、普通に。

「どつする？」

「追い掛ける」

二人も後を着ける事に。

そしてカメレオンイマジンは魔法の森の中で妖怪と妖精達を驚かせまくっていた。

「このぐらい驚かせば契約完了するだろう」

だがここは魔法の森の中、人間が魔法の森にずっといれば害があるがもし怪人がいたらどうなるのだろうか？

「な、なんだこれは！？」

カメレオンイマジンの体に異変が、何かオーラが纏われパワーアップしていくような感覚に。

「力があああ！力がみなぎってくるぞ！」

更にはまたもやセルメダルがカメレオンイマジンに大量に注ぎ込まれていき肉体、特殊能力共に強化され。

「こうなれば過去に飛ばなくともこのままこの時代破壊すればいい！」

するとカメレオンイマジンは人里目指し走りだした、手始めに自分を利用した契約者の住人の男を殺すために。

「おいタクミ、アイツすごく尾行慣れしてないか？」

「だな、刑事か何かじゃねーか？まさか蟹ライダーに変身したりしてな」

なぜファイズの世界の住人が蟹ライダーなんて知っているかはともかく尾行を続けていると曲がり角を曲がり二人も曲がると。

「お前達、俺に何か用か？」

曲がった瞬間スーツの男が待ち構えていた、バレていたのだ。

「そんな尾行の仕方じゃ犯人にも逃げられちまうぜ」

タクミ達の尾行は失敗に終わるのだが。

「だけどアンタが追い掛けてた男は？」

「アーツ！」

振り向いたらそこに住人の男は居らずこっちの尾行も失敗に終わっていた。

「おっさん、何か知ってるなら教えな」

「お、おっさん！？俺はおっさんじゃない！まだ25歳だ！」

だがおっさんに見えてしまう。
すると先ほどの男の悲鳴が聞こえその元へ走りだし向かうとそこには住人の男が腰を抜かして倒れておりカメレオンイマジンが手に掛けようとしていた。

「待ちやがれ！」

タクミは飛び込みカメレオンイマジンを蹴るが。

「何かしたか？」

ビクともせず投げ飛ばされてしまう。

「タクミ！」

「生兵法は怪我の元だぜ坊や」

スーツの男がカメレオンイマジンに立ち向かう、タクミみたいに投げ飛ばされると思いきや。

「懐がから空きだ！」

拳銃を両手に持ちカメレオンイマジンの懐に飛び込み引き金を引きまくり銃弾を食らわしていく、これにはさすがに至近距離なためダメージを与えられカメレオンイマジンは後退る。

「コイツ……！」

再び襲い掛かるうとしたがまたもや銃弾を連続で浴び後退る、弾切れを起こすがすぐにカートリッジを変えて弾をリロード、連続で銃

撃を食らわしていく。

「おっさん、スゲー……………」

タクミはスーツの男の射撃センスに驚いていると。

「タクミ！受け取れ！」

妹紅がファイズドライバーを投げ渡す、ベルトは妹紅が持っている。ベルトを腰に巻きファイズフォンを取り出し開き変身コードを入力し。

【Standingby】

「変身！」

ファイズフォンをバツクルに装填し横に倒す。

【Complete】

タクミはファイズに変身しカメレオンイマジンに立ち向かう。

「魔弾戦士……………いや違う」

スーツの男は射撃を止め戦いの行く末を見届ける事に。

「ハッ！」

手首をスナップさせると走りだしカメレオンイマジンの顔をぶん殴る。

「生兵法じゃない……………まるで喧嘩だなこりゃ」

スーツの男はそう言っているとファイズは回し蹴りを食らわし吹き飛ばす。

「調子に乗るな！」

カメレオンイマジンは火炎弾を放ち攻撃、近付けなくなりファイズフォンを取り出し何かのコードを入力する、それからフォンブラスターに変形させ光弾を発射していく。

「ぐっ!?!」

光弾を体に食らい攻撃を止めると後ろからオートバジンが体当たりし弾き飛ばされる。

「来たか」

オートバジンのマークが描かれたボタンを押すと変形しビークルモードからバトルモードという人型ロボットとなる。

「変形した……………マグナウルフみたいだな」

スーツの男はそう感じていた、オートバジンは前輪のタイヤのバスターホイールの銃口をカメレオンイマジンに向けていた、ファイズは接近戦を仕掛け殴ったり蹴ったりしている。

「おいおいまさかな……………」

妹紅は察した、オートバジンは何かしでかそうとしているのではないかと。

「おらあっ!」

思い切りパンチを食らわすファイズ、そして銃声が連続で鳴り響き銃弾がカメレオンイマジンに命中し火花が散る。

「危ねっ!」

だがファイズも巻き添いを食らう羽目に。

「お前な!近くにいる時は打つなって何度言えばわかる!」

怒られて電子音を立ててしょぼんと落ち込む。

「いい射撃手だが状況判断がな……………そう思わないかごっすりゅ……………
…またやっちゃったか……………」

ファイズはカメレオンイマジンを羽交い締めにしオートバジンの射撃を食らわす実にチンピラがやりそうな行動に。

「タクミ……………」

「なんだよ、文句あるのかよ!」

「お前本当に仮面ライダーか!」

敵にも言われる始末、カメレオンイマジンは払い除けるとカメレオンの特性を活かし透明となる。

「消えた……………」

すると背中に火花が散り振り向くと同時にリアットするが空振り。

「チッ！」

辺りを警戒するが攻撃は食らう、翻弄されていると。

「タクミ伏せる！」

「あ？うおわ！？」

すると炎が襲い掛かりしゃがんだため当たらなかったが代わりに透明になっていたカメレオンイマジンの体を焼き尽くす。

「熱い！死ぬ！」

「お前俺を丸焼きにするつもりか！ってうわっ！？」

次はオートバジンの銃弾が当たり掛けたが後ろで熱さに悶えるカメレオンイマジンに命中。

「俺を殺す気か！」

「もっともな意見だな」

オートバジンを殴るとビークルモードに変形し左ハンドルグリップにミッションメモリを挿入し引き抜くと赤い光の剣ファイズエッジとなる。

「後で覚えてやがれよ……………おらあっ！」

「ギヤーツ！俺のせい……………ウワアツ！？」

ファイズは八つ当たりするようにカメレオンイマジンに斬撃を食ら

炎の中から二つ光が出てきて巨大化し羽根が付いた獣と四足歩行で肩から角が生えた獣となる、これはイメージが暴走し契約者のイメージとは異なる姿をしたイマジンの暴走した姿でイマジンより巨大な羽根のはギガンデスヘブンと四足のはギガンデスヘルとなつてしまった。

「デカくなるなんて聞いてねーぞ！」

ギガンデスヘルの巨大な姿に他の住人は混乱する。

ファイズエツジをオートバジンに戻すとフォンブラスターを持ち走りだしギガンデスヘブんとギガンデスヘルに攻撃し注意を自分に向け里から遠ざけようとする。

攻撃には妹紅も参加しギガンデスヘブんとギガンデスヘルは思惑通り里から離れ魔法の森の中へ、だが魔法の森の中では更に力を与えてしまう。

「……………俺に、力があれば」

かつてあった力をもう一度使いたい、戦わないでこのまま見ているのは嫌だ、戦いたい、そう願ったその時だった。

赤い一筋の光が天から舞い降りスーツの男を包み込んだ。

「これは一体……………」

光の空間の中にスーツの男はいた、目の前に赤い小さい光が近付い

てくる。

「まさか……………お前は……………！」

赤い光には見覚えはない、だが雰囲気は覚えていた。

【久しぶりだな】

「やっぱりお前か……………」

互いの事を知っていた、永遠の別れをしたはず、だが今はそんな事はどうでもよかった、こうして再び出会った、それだけで十分だった。

【永遠の別れをした、だがこうしてまた出会えた】

赤い光も出会えた喜びの方が強かった。

「そうだな……………なあ、もう一度力を貸してくれないかゴウリュウガン」

赤い光を手にする。

【わかった、もう一度共に戦おう、不動銃志郎】

男、不動銃志郎の手に赤く金の龍の頭を模した飾りが付いた銃ゴウリュウガンが握られていた。

「ああ行くぞゴウリュウガン！

不動銃志郎、再び龍となる！」

魔法の森に誘い込まれたギガンデスヘブンとギガンデスヘルはファイズと妹紅、騒ぎを嗅ぎ付けた魔理沙と奏歌が変身するキバ・バツシャーフォームとキャツスルドランが応戦していた。

「ザバト並にでけーな！」

ザバトとはファンガイアも同じようにギガンデス並みの巨大な怪物になってしまふことがある、その名前である。

「てかコイツ強くなってないか!？」

ギガンデスヘブンの尾から針がマシンガンのように発射し攻撃。オートバジンはバトルモードになっており針を銃弾で打ち落としていた。

【Burst Mode】

フォンブラスターの光弾で攻撃するがまったく効いてはおらず火炎弾の逆襲を受け地面が爆発し吹き飛ぶ。

「うわっ!？」

「タクミ、大丈夫か！」

妹紅が駆け寄るとギガンデスヘブンが再び火炎弾を放とうと、妹紅は大丈夫だがファイズは危険に、そこに銃声が響きギガンデスヘブンの体に火花が散る。

「さっきのおっさん！」

銃志郎はゴウリュウガンを持ち駆け付けた、危ないから下がれと言
うが。

【大丈夫だ、私達も戦う】

「「喋った!？」」

ゴウリュウガンが喋った事に驚く二人。

銃志郎はマダンキーという鍵を取り出し。

「リュウガンキー発動！」

リュウガンキーをゴウリュウガンのグリップに差し込む。

【チェンジ、マグナリュウガンオー】

「轟龍変身！」

銃志郎に銀色で赤い模様が入ったスーツを纏うとゴウリュウガンから銀色のメカニカルな龍が出てきて空を飛ぶと銃志郎に突撃し光に包まれる。

光が消えると銃志郎は龍の顔を模した仮面に金と銀や赤の着色が施された鎧を付けメカニカルな姿に、左手にはマダンマグナムという

銃を持つ仮面ライダーではない戦士。

「永遠を越え今ここに再び無限の炎が燃え上がる！」

マグナリユウガンオー、ライジン！」

マグナリユウガンオーに変身したのだ。

「仮面ライダーじゃない……………！」

マグナリユウガンオーを二つの銃をギガンデスヘルに向け引き金を引き銃弾を浴びせていく。

「スゲーパワー、わたし好みだぜ」

魔理沙も認めるほどのパワー、ギガンデスヘルにダメージを食らわせた。

「ギシャアアアアツ！！！！」

ギガンデスヘブンが突撃してくるがマグナリユウガンオーは横に飛び込み避け、回転しながら銃弾を食らわしていく。

【不動、嬉しいぞ、また共に戦えて】

「俺もだ、ゴウリユウガン」

地面に着地すると左右からギガンデス達が突進してくるがマダムマグナムとゴウリユウガンの弾丸を食らわせ勢いを殺しジャンプしてギガンデスヘルの頭にゴウリユウガンに収納された刃がスライドしそれを突き刺し至近距離から銃弾を打ち込む。

ギガンデスヘルは苦しみ、マグナリユウガンオーは離れる。

【不動、単体のマグナドラゴンキャノン強く推奨する】
「ああ！ファイナルキー発動！」

ファイナルキーをゴウリユウガンに差し込むと「ファイナルクラッシュ」と叫びマダンマグナムをゴウリユウガンの銃口と直結させマダンマグナムの刃もスライドし銃口に赤い炎のエネルギーが貯まっ
ていく。

「マグナドラゴンキャノン、発射！」

そして赤い龍の形をしたエネルギーが放たれた、必殺技マグナドラゴンキャノンを発射、エネルギーはギガンデスヘルに命中しギガンデスヘルは爆発し倒された。

「ジ・エンド」

「おっさんのおかげ助かったぜ」
「だからおっさん言うな」

里に戻りタクミと妹紅と銃志郎は話していた。

【不動がおっさんの確率は120%】
「ゴウリユウガンもか……………」

自分には味方いないとガツクリしていた。
元の世界に帰れるまで寺子屋の部屋を使う事にしたのだった。

第6話『復活の銃士！マゲナリユガンオー、ライジン！』（後書き）

ゴウリユウガンはオートバジン並みの癒しキャラ？
タクミが危うく殺されかけてるのが（笑）

次回予告

ユウスケ

「現場に響く殺人予告か……………必ず人がいる場所か」

霊夢

「嫌ね……………本当」

咲夜

「そつね」

レミリア

「今度の殺害現場がここね」

ユウスケ

「ゴウ……………ラム？」

次回『飛翔する翼、ゴウラム参上！』

第07話 『飛翔する翼、ゴウラム参上!』

ある夜の魔法の森の深く、そこで二体のバツタの性質を持ち外見も似ている茶色い体色のズ・バツィ・バと蜂の性質を持ち外見も似ているメ・バチス・バは何かから逃げていた。

「バゲジャズサガボボビ（なぜ奴らがここに）！」

バツィは焦ったような雰囲気を出しバチスに言う、二体はゲゲル（殺戮ゲーム）を始めようとしていたのだが何ものが現れ逃げた。

「ギスバ（知るか）！」

その何かとは……………

「グワアアアアアアアーツ!!!!!!!!!!?」

バツィは突然杖が長い斧で腰のベルトのバックルを叩き切られ爆死、爆炎が闇が照らされ木の陰にはアンノウン、アントロードの兵隊フォルミカ・ペデスが現れた、中には斧を持つ固体もありバチスは完全に囲まれていた。

バチスは飛び立とうと羽根を広げるがペデス達は羽根をむしり取り

地面に叩きのめすと二体のペデスは斧を振り上げ。

「ジャズソオオオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

ブライドを捨てグロンギ語でやめると叫ぶのだがその叫びも虚しく二つの斧は振り下ろされバックルを割られ爆死した。

グロンギ怪人は元々人間がアマダムという石を体内に埋め込み怪人となった姿、クウガもだがそれは心の問題、アンノウンが特殊能力を持った人間を殺すようにグロンギもその特殊能力を持った人間とみなし殺害対象に。

だがアンノウンのその行為は人間を恐れているから、それはあるものになるかもしれぬ前兆だからだ。

「っ!」

ペデス達は何かの気配を感じ同じ方向を向く、炎で明るくしっかりとその姿を確認できた。

金の二本に岐れた角に黒いマスクに赤い二つの眼に銀色の口元の仮面、

鎧もスーツも黒を基準に胸にはその仮面を模したように二つの金色で丸い模様とその間に黒い膨れ上がったような縦に長い四角い石に腹部は金色で腰回りが銀色の鎧となり、

バックルには金色に輝く賢者の石が埋め込まれた変身ベルト、オルタリングが巻かれた。

「アア……………ギイ……………トオ……………!」

大軍の中の一体が憎らしそうにその名を上げた、その戦士は超能力者の人間が更に進化しアンノウンが特殊能力を持った人間を殺害する理由でもある、その名は仮面ライダーアギト・グランドフォーム。

「……………ハッ！」

アギトが走りだすとペデス達も迎え撃つため走りだす。

「ハ、ハッ！」

向かってくる敵を殴ったり腕でを振るい弾いたりすると立ち止まり頭の角、クロスホーンが四枚開き計六枚となると両手を軽く広げ、足元にクロスホーンを模した金に輝くアギトの紋章が現れ右足を一歩引くと腰を低くし紋章を足に吸収、ジャンプし右足を前に伸ばし必殺技ライダーキックを炸裂し一体倒し爆発で何体か巻き込むが減らず。

オルタリングの右側のスイッチを押し賢者の石が赤く輝き鎧も赤く右肩の防具は赤と金の大きいものに、そして賢者の石から日本刀のような鍔がクロスホーンを模した飾りとなった炎の剣、フレイムセイバーを持ちアギト・フレイムフォームとなる。

アギトは走りだし後からペデス達はそれを追い掛け一列となりそれを見計らいフレイムセイバーのクロスホーンは展開し振り向いて走りだし次々とペデス達を斬っていき、最後に剣を振り下ろしセイバーストラツシュを炸裂。

「ア……………アアアア……………！」

頭に光の輪が現れ斬られた傷が燃え上がりペデス達は次々と爆死していった。

「……………」

アギトは変身を解いた、その姿、顔は咲夜に似ていた、髪の毛の色

も銀髪なのだが瞳は咲夜の青っぽい瞳ではなく黄金の魂を宿ったよ
うな色で女ではなく男だった。

「……………」

咲夜に似た青年は炎を見つめた後、森の奥深くの闇に消えていった。
その上を何か大きな物体が飛んでいるのを知らずに。

「ライダーキック！ハアアアアーツ！！！！」

夜は更けて昼前の時間帯、総が変身したキックホッパーはライダー
キックでグロンギ怪人を倒したところだった。

「これで終わりか」

数体いたらしく総は一人で倒したのだ。

「さて、行く……………」

総は歩き出そうとしたら突然叫び声が聞こえ辺りを見渡すと一人の

住人が倒れているのが見付かる。

「大丈夫か！？おい！」

だが住人はすでに息絶えていた。

『次は午後2時半、場所は子供達がいる場所、赤く染まった後の壁で殺人を行います』

どこからかまた声が響き犯行予告でもするかのようにペラペラと教えていた。

「どこだ！姿を見せろ！」

だが声は聞こえなくなり総は先ほどの犯行予告めいた言葉を思い返す。

「子供達がいる場所……………寺子屋……………！」

先ほどの犯行予告で次は寺子屋で起こると予想し急いでそれをユウスケに知らせるため遺体の方は通りかかった他の住人に訳を言わずに慧音に場所を伝えてくれとだけ言いゼクトロンに乗って博麗神社に向かつて走りだした。

「ではお嬢様、里へ行って参ります」

「帰りはゆっくりでもいいからね」

霧の湖の畔にある紅い屋敷、紅魔館から咲夜が飛び立った、それをその主人の悪魔のような羽根が付いた青っぱい髪で赤い瞳の吸血鬼で外見は少女のレミリア・スカーレットが部屋から見送った。帰りはゆっくりというのはレミリアの咲夜への気づかいから出た言葉でもある。

「ゆっくりでもいって言うけど……」

だからと言ってゆっくりできないメイド長、さっさと用を済ませて帰ろうと思っているとどこからかバイクのエンジンのような音が響き渡った。

「今のは……!!」

辺りを見渡すが何も見付からなかった。

「……………ゆっくりしながら帰ろうかしら」

そう思い魔法の森を越えようとしていた。

「犯行予告？」

「ああ」

博麗神社に戻った総は先ほどの事をユウスケ達に伝えていた。

「見えない敵か……」
「気になるわね」

居間にはいつものようにユウスケと総、葬に霊夢がいた。

「寺子屋でしょ場所は？」

「ああ、子供達がいる場所って言うていたから思い当たるとしたら」
ピンポイントで一家を襲うわけないと考えていたため子供達が多く集う場所と考えていたから寺子屋という答えが出たのだ。

「赤く染まった後の壁で殺人を行うって」

その言葉に霊夢は何か引つ掛かった。

(赤く染まった後の壁?)

赤く染まった後の壁、その言葉のままの意味だとすると染まっている壁の前で誰かを殺すのだが染まった後の壁となると意味は違ってくるが。

「どーかした霊夢？」

そこにキバーラが話し掛けてきた。

「いや……ちょっと引つ掛かるのよ、赤く染まった後の壁が」
「私もよ、けど」

もう三人は寺子屋に行こうと意気込む、子供だけが狙いではなくそこに訪れる大人や妖怪も狙いだと感じていたからだ。

「となりや 寺子屋に急行だ！」

「「ああ！」」

ユウスケ達三人は神社から出て寺子屋に向かおうとしていた。

「私も行く！」

霊夢も着いていき共に四人は寺子屋へ向かい見えない敵から人を守る事に。

「じゃあ私は先に」

キバーラは先に出て寺子屋に素早く向かうのだった。

その頃魔法の森では魔理沙が霧雨邸から飛び立とうとしていた。

「さて、そろそろ霊夢ん所に行くか」

箒に跨り飛び立つと。

「うわぁ!?!」

突然黒く巨大な影が通り過ぎ危うくぶつかり掛けた。

「な、なんだあ今の!?!」

振り向くが即にもう影はいなくなり見失っていた。

「ん？」

魔理沙は博麗神社へ進路を向け飛んでいったが里が騒がしい事に気付き寄る事に、そこで初めて殺人事件と犯行予告があったのを聞き寺子屋に行く事に。

「霧雨か」

「よっ、なんか大変な事になってるみたいじゃねーか」

寺子屋に到着すると慧音が出迎え先ほど聞いた話をする。

「ああ、この寺子屋で誰も殺させはしない、だからお前も」

誰もの中には魔理沙も入っている、そのため帰らせようとしていたが。

「ならわたしもいるぜ、わたしも誰も殺させたくないからな」

「……………まったく、すまないな」

「いって」

ニツと歯を見せながら笑うとユウスケ達が到着、魔理沙が来る前にキバーラが訪れ犯行予告の事は伝えてあった。

「来てくれたか」

「もちろん」

やはりほとんどは寺子屋で起こると認識してしまっていた。

「どーかしたのか霊夢？」

魔理沙は話し掛けたが霊夢は「何も」と素っ気なく返していた。

「誰かさんの事でも考えてたか？」

「っ！“咲一”の事なんて……………」

「誰も咲一なんて言っていないぜ？」

まんまと引っ掛かり顔を真っ赤にするとその名前で頭に電気が走った。

「咲一……………まさか！」

引っ掛けていた何かにやっと気が付いた。

「ユウスケ！今何時!？」

ユウスケは腕時計を見て「2時20分」と答えた。

「犯行現場はここじゃない！」

その発言に全員疑問符を浮かべ霊夢に注目。

「子供がいる場所でみんな場所を寺子屋だって思い込んでいたのよ！赤く染まった後の壁、赤く染まった壁、紅魔館よ！」

慧音と魔理沙は納得した、そこなら外壁は赤く塗られているためその後の壁で殺人、それなら意味が通る、だが子供は……………

「レミリアとフランの事ね……………」

フランドールとはレミリアの妹で一人とも幼女体型、姿だけで子供と判断できる。

「10分しかねーぞ！」

犯行予告の2時半までは残り僅か、紅魔館がある霧の湖は午後になると名の通り濃い霧が掛かる、もう掛かっているはず、ユウスケは頭より先に体が動きトライチェイサーに乗り走りだそうとしたが。

「小野寺！」

タクミがファイズフォンを投げ渡した、ペガサスフォームの事は聞いているため遠くから狙えてトドメを刺せるならユウスケに渡した方がいいと判断し渡したのだ。

「ありがとうな！」

「紅魔館なら魔法の森を抜けた霧の湖の畔にある！」

慧音はそれを伝えると今度こそ走りだす、後から霊夢と魔理沙が追いついて飛翔する。

「ふわあ〜……………霧が掛かってきましたね〜」

紅魔館の門番で中華風な服で赤い髪の毛の妖怪、紅美鈴ほんめいりんが欠伸をしていた。

「今日も紅魔館異常な〜し？」

だが遠くに人影が薄ら見えていたがすぐに消えてしまった。

「何かいたような〜……………まあいいか」

そのままうとうとし始めついには寝に入ってしまった、いつもなら咲夜が注意するがその咲夜もない。

「むにゃむにゃ……………」

立ったまま寝るとは器用な。

魔法の森の中をユウスケはトライチェイサーで駆けていた、これ以上誰も死なせないためにも。

「森を抜けて少しすれば湖よ〜！」

だが時間は迫っていた、時計を見ると後1分、間に合わないと感じていた、俺も空を飛べればそこから狙い射てるのにと思う、クウガに変身すれば空を飛ぶ能力を追加される、だがその能力を使うとペガサスフォームどころか他のフォームの能力も使えずトライチェイサーで移動するのと変わらない。

(翼が……俺を飛ばしてくれる翼があれば！)

強く願った、願うだけでは何も変わらない、だが願わずにして何をすればいい、森を抜けたその時だった。

「何よアレ!?!」

コウスケの上を巨大な黒く金色の模様が入ったクワガタのような物体が飛ぶ。

「あ、さっきわたしが見た奴かも」

その名はゴウラム、ゴウラムの背中に埋め込まれた緑色の発行体はアークルに埋め込まれたアマダムと同じものでクウガの仲間として古代の人間であるリントが作ったものである。

コウスケは上を見てゴウラムの足を見て思った、コイツに掴まれば飛べると。

「こうなりゃ一か八かだ!」

ファイズフォンをフォンブラスターに組み立て。

「変身!」

レオンのグロンギ怪人、メ・ガルメ・レが走っていた。

「こんなに霧が濃ければ見つかるまい

ガルメは走って最初のターゲットを美鈴に絞り込み後から他の面子も殺害しようと思論むが。

「グガアアアツ!!!?」

背中を空気の矢が貫きその傷に封印のマークが現れ。

「むにゃむにゃ……………ふえっ!?!」

ガルメは美鈴に手を出す前に爆発、その音と爆風で美鈴は目を覚ました。

「よし!」

爆音を耳で聞き取りゴウラムは下へ降りていき、クウガは手を放すと地上に降りる。

「ありがとつな」

そしてゴウラムはどこかへ飛び去った。
後ろを振り向くと森の中に人影が、顔を見て。

「咲夜？」

顔付きは咲夜に似ていた、見られた事に気付いた人影は森の奥深くに消えていった。

「あらユウスケ」

そこに咲夜がやってきて頭が混乱していたが変身を解きユウスケの姿に戻る。

「あれ？」

ユウスケは先ほど向いていた方向と咲夜を交互に見ていた。

「どうかした？」

「いや……さっき……咲夜、アツチにいなかった？」

森の方向に指を差すが咲夜は首を横に振る。

「さっきまで里にいたけど……」

「あ、よく見たら目の色違った、咲夜は青っぽいけど俺が見たのは……」

次の一言で咲夜はその人物を特定した。

「黄金……だったかな？」

「っ！」

その一言を聞き激しく動揺していた、嬉しさと心配が顕になっていた。

「咲……………！」

「えっ……………」

霊夢と魔理沙が合流、「咲……………」、その名を聞き二人の中で一番反応したのは霊夢だった。

「咲……………がいたの……………ねえどこ！どこにいたのユウスケ！」

霊夢はユウスケに掴み掛かり声を荒げ問い質す。

「咲……………って……………」

だがその咲……………が知らなかったのはこの場ではユウスケだけ、咲夜が走りだし、その後を霊夢は着いていく。

「魔理沙、咲……………って誰だ？」

この場に残っていた魔理沙に聞く事に。

「十六夜咲……………咲夜いざよい さくいちの双子の弟で、霊夢の……………恋人だ」

第07話『飛翔する翼、ゴウラム参上!』(後書き)

次回からアギト編に入ります、長編になるライダー他に何が……
……いましたね、電車の中の電車王が。

次回『目覚めてしまった戦士の行方』

第08話『目覚めてしまった戦士の行方』（前書き）

短いですが、なので前回次回予告をサブタイだけで済ませました。後、十六夜咲夜という名前はレミリアからももらった名前ですがこれでは名前は最初から咲夜と咲一で変わったのは名字だけです。因みに前の名字は……………お楽しみに。

第08話『目覚めてしまった戦士の行方』

数年前、外の世界で海上にあかつき号という船が東京に向け航行していた。

あかつき号には二人の少年と少女が乗っていた、なぜ東京に行こうとしていたのかは二人は姉がいた、だがある事故で死亡してしまつたらしくその直前手紙が届いた、それは自分が死ぬ事を予知し、二人を東京に来るように誘うような文章だったのだ、真相を確かめるべくこのあかつき号に乗っていた。

「ねえねえ！海が綺麗だよ！」

少年と少女は双子の姉弟だった、少年は弟、少女は姉。

少年は船に乗っている、そういう事もありテンションは高くはしゃいでいた。

「ホントね」

少女は反対にクールで海風に打たれ銀髪の髪を揺らしていた。

「咲奈姉さん、なんで死んでしまったの……………」

だがクールを気取るがその裏腹、姉の死をとて悲しんでいた、こ

の二人には両親はおらず咲奈という姉しかいなかったのだ、だがその姉もいなくなってしまうた。

「元氣出してよ咲夜……………」

そう、この少女こそが紅魔館メイド長の十六夜咲夜、だが旧姓は津川^{がわ}咲夜、十六夜の名はレミリアからもらったものだったのだ。少年は元氣付けようと声を掛け咲夜は次第に微笑む。

「ありがとう……………私は大丈夫だから……………」

姉を一番慕っていたのは咲夜であるためショックは大きかったのだ。

「うん、はい飴」

少年は飴玉を出し渡すともう一つあった飴玉を口に含む。

咲夜も口に飴玉を含み「美味しい」と言う。

だがそこで、異変は起こり始めていた、晴れていた空に黒い雲が被われ強い風は吹き、雨が降り、雷が鳴り始めすぐさま嵐となる。

「早く中に!」

二人は船内に入ろうとしたのだが目の前に杖を持ち額に の文字が描かれ牛みたいなのアンウンが現れたため中に入らず甲板に出たままになりだんだんと追い詰められ柵にぶつかり逃げられなくなる。

「人は人のままでいればいい」、そう吐くとアンウンは二人を船から投げ出し、二人は海中に沈んでいくのだった。

そして二人は気が付くと岸に打ち上げられていた、先に咲夜が起き、次に少年が、目の前に見えていたのは紅魔館だった。空は暗く満月が浮かんでいた。

「あら、人間の子供が二人も」

そこで二人は出掛けようとしていたレミリアと爆睡中の美鈴と出会ったのだった。

163

「これが私達のお嬢様との出会い」

そして現在、ガルメとの戦いから次の日の紅魔館、中で咲夜がユウスケ、総、葬、キバールに話していた。

霊夢と魔理沙は前に一度聞いた事があった。

「そして一緒に流れ着いて俺が見たのが……」
「十六夜咲一、私の双子の弟よ」

だがやはり疑問に思う事があった、なぜ咲一は姿を消したのかが気になった。

「それは……………」

咲夜や霊夢、魔理沙はユウスケを見ていた、最初は「俺が原因？」と一瞬でも思ったが違った。

「クウガの姿が、似てるのよ……………咲一がなる異形の姿に」

「クウガの姿に似た異形……………アギトか」

クウガに似ている仮面ライダーと言えば仮面ライダーアギト、もしくはそれを模した仮面ライダーG3とG3-X、仮面ライダーガタツクに仮面ライダー電王・ロットフォームが今まで自分が見た中でクウガに似ている仮面ライダー、特徴は眼は赤で黄金の体に黄金の曲がりぐわいがいい角でユウスケはそれがアギトと判る。

「そしたら私達もクウガの世界にある幻想郷、だからクウガの世界の住人のはずなのになんでアギトに？」

「ライダー大戦があつたからかな？」

ライダー組以外は首を傾げユウスケを疑問が込められた目で見つめた。

ライダー大戦とは、破壊者である仮面ライダーディケイドを全ての仮面ライダーが倒そうと起きた戦いだがディケイドにより全ての仮面ライダーは倒され、

が、仮面ライダーキバがディケイドを倒し全ての仮面ライダー、世界が元に戻り倒されたディケイドもユウスケやその仲間達により蘇ることに成功したとユウスケとキバは当事者として語る。

「その影響がまだ残っているのか？」

総が言う事は当たりとも言えるが間違いでもある、クウガとアギトの世界はほとんど同じなのだ、クウガの世界でグロンギがクウガに倒された後、そこにアギトとアンノウンが現れ新たな物語に繋がる可能性もある、必然的にクウガの世界はアギトの世界になってしまう事もあるのだ。

「まあアギトは超能力者の能力が進化してなれるものだからね、超能力者なんてどこの世界にもいそうだし」

だからこの世界の人間が超能力があればアギトになってしまう可能性もあるという事。

「私達は双子で時間を操る程度の能力を持っていた、だからかしら」

咲夜は懐中時計を見て呟く。

「だけど咲一だけは物を浮かばせる程度の能力と物事を予知する程度の能力があつたわ、後者はお嬢様の運命を操る程度の能力に似ているのよね」

咲一が持つ時間を操る程度の能力以外は一般的に知られる超能力のサイコキネシスと予知能力と判断、十分アギトになってしまいう可能性があつた。

「これはもうアギトになる要素……もしかしたら咲夜もあるかもしれない、アギトに」

「私が……仮面ライダーに」

もし自分もアギトになっていたら弟はいなくならずに済んだのかも
しれない、そう自分を責め始めていた。

「咲一はどこにいるのかしら」

そこで霊夢の口は開いた、居場所は誰にもわからない、咲夜でさえ、
だが幻想郷にいるのは確かかもしれないと思っっていると。

「彼はもう幻想郷にはいないわよ」

突然声が響いた、回りを見渡すが誰もいない、だが霊夢達には聞き
慣れていた。

「紫？」
ゆかり

すると目の前に空間に亀裂が入り出入口が現れる、中は無数の目が
浮かんでおりそこから銀髪の女性が出てきた。

「はい」

彼女の名は八雲紫、やくも ゆかり幻想郷最古の妖怪で幻想郷を包む結界の管理者
の一人。

「咲一がいないってどういう事かしら？」

睨むように咲夜は紫を見て問う。

「文字どおり外の世界にいるのよ、彼は、私がスキマで送ってね」

紫は境を操る程度の能力を持ち先ほどの出入口のスキマもその能力で作ったもの。

「なんでそんな事したのよ」

霊夢もすごい目で睨んでいた、自分の想い人を遠くに遠ざけるような真似をしたため。

「もしこのまま幻想郷にいさせてもあなた達の前に戻るかしら？」

言われてみれば確かにそうだ、何度も会うが逃げられてしまう。

「なら一回外の世界に帰してから戻しましょ」

紅茶を飲みそう言う。

「なんでそれが咲一が戻ってくるのよ」

「彼は逃げるためだけではなく確かめに行ったのよ、姉の死の真相を」

もしかしたら自分のこの異形の姿と関係あるかもしれない、確かめるには外の世界に行くしかない、もし判れば自分達の元に帰るかもしれないと思い始めていた。

「だから……………小野寺ユウスケ」

「はい！」

いきなり呼ばれ飛び跳ねるように返事をする。

「あなたも外の世界に行つてきて彼を手伝ってあげて、それがあなたの今のやるべき事よ」

なぜ紫はその事を知っていたかは知らない、やるべき事は各世界に到着した時に言う言葉だ、だが十六夜咲一を手伝う、それだけで理由は十分だった。

「わかりました、行きます」

快く了承した、外の世界には銃志郎も行く事に。

「あなたも行くわよね？」

だが咲夜は紅魔館の仕事があるのだが。

「いいわよ行つても」

レミリアは許してくれた、理由は咲一の料理が食べたいから、料理が上手いらしく味も天下一品らしい。

「ありがとうございます、お嬢様」

「霊夢も行ってもいいわよ？」
「え!？」

結果を管理するもの一人として幻想郷から離れていいのかと思っ
たが。

「その間は私達が支えるから」

霊夢がない穴を紫が支える事で外の世界へ行く事が決定した。
外の世界にはユウスケ、総、銃志郎、霊夢、咲夜、魔理沙が行く事
に。

「葬、こっちは任せたぞ」

「任されたよ」

葬は博麗神社で留守番となった。

「さて、スキマツアーに六名ご案内」

「つていきなりかよ!」

そして寺子屋にいた銃志郎とこの場にいたユウスケ達はスキマで落
とされたのだった。

第08話『目覚めてしまった戦士の行方』（後書き）

次回から本格的にアギト編に突入！

長編ライダーは今のところは電王、キバ、オーズが有力候補です、え？なぜキバが？電王とキバの組み合わせならわかりますよね？

悪の組織（仮）が……………（笑）

後みてみんにある人に代理で自分が書いた小野寺ユウスケの絵を公開してもらっています、良かったら見てください。

次回予告

霊夢

「まったく紫の奴……………いきなり落として……………」

咲夜

「名前は木野星也、医者らしいのよ」

二条

「G3-X、出勤します」

次回『クウガの世界のG3-X』

第09話『クウガの世界のG3・X』（前書き）

G3ユニットの名前の由来はあとがきで。

第09話『クウガの世界のG3-X』

前回、咲夜はユウスケ達に自分の過去とレミリアとの出会いについて話し、そこで十六夜咲一という双子の弟がいたのが判る。

だが咲一はアギトに目覚め変わっていく自分に耐えれなくなり失踪、八雲紫が外の世界へ出したと教えられる。

そこでユウスケ達も外の世界に行く決意、ユウスケ、総、銃志郎、霊夢、咲夜、魔理沙を紫はスキマで外の世界に連れていくのだった。

「あたた〜……………大丈夫かみんな？」

どこかの墓地、ユウスケ達はそこの中に落ちてきたのだ。

「まったく紫の奴……………いきなり落として……………」

「一体何が……………」

銃志郎はまったく把握していなかった、さしずめ何も知らされずにいきなり落とされたのだろう。

簡単に銃志郎にも説明すると幻想郷組はあることに気付いた。

「服が変わってる？」

霊夢は頭の紅いリボンや髪飾りはそのままだが服が変わっていた、巫女服ではないが紅いスカートに白いノースリーブの紅白な服装、魔理沙は帽子は無くなっており白いズボンに黒い服と言った格好で咲夜もメイド服ではなく白いワイシャツで紺のネクタイとスカートという格好に変わっていた。

「まああのままじゃ目立つからね、紫さんの計らいでしょ」

ユウスケはそう推測した、紫は結構はっちゃけているがこういうのはキチンとしている性格だったらしい。

咲夜は元々外の世界の人間だから着慣れているが霊夢と魔理沙は着慣れていないため珍しいという雰囲気だった。

「さて、咲一を探して咲奈さんの死の真相を確かめるぞ」

今回の目的は十六夜咲一の搜索と二人の姉、芦川咲奈の死の真相を探る、この二つである。

「いつもこの手紙だけは持つてるのよ」

そこで咲夜が咲奈から送られた手紙を出す、同じ文章を書いてそれを咲一が持っていると言っつけ足す。

「手紙に姉さんの恋人の名前が書かれていたの」

手紙を広げるとそれを持って海に投げ出されたため字が滲んでいたがなんとか読めていた。

「名前は木野星也^{きのせいせ}、医者らしいのよ手紙によると」

だが肝心な住所と所属している病院の名前は潰れていたため読めなかった。

「木野星也か……………聞いた事があるような……………」

ユウスケにはその名に聞き覚えがあった、なんとか思い出そうと頭をフルに回転させていたがそこで目に入った墓石があった。

「あつ……………ここだったんだ」

考えるのをやめ止められるが思いのままある墓の前に立つ、そうこは八代藍が眠る墓がある墓地だったのだ、ユウスケは手を合わせて挨拶する、そこでみんなにここに前に話した八代が眠っていると教えた、咲夜と銃志郎は初耳だが大事な人だったと思い全員手を合わせた。

「さて、行くか」

【そうだな】

最後にゴウリユウガンが答え墓地を後にした、その後ろ姿を薄らした姿のコートを着た女性が見つめていたのを知らなかったがこの先知ることはないのかもしれない。

ユウスケ達が現代入りしたその頃、警視庁の対未確認生命体対策班、通称SAULが所持する荷台に作戦室が設けられたらGトレーラーの中に三人の男女がG3-Xと呼ばれるパワードスーツの点検をしていた。

「二条くん、あなたは休んでいなさい、あなたが一番働いているんだから」

「ありがとうございます、野沢さん、俺は大丈夫ですから」

会話した三人の中の二人の男女は、最初に男性警官に話し掛けたのは野沢澄子のさわ すみこ、G3-Xを開発した責任者、そして返したのは二条誠にじょう まこと、このパワードスーツを着て未確認生命体と戦う警官。

「そうですね二条さん、休んで休んで」

「ではお言葉に甘えて」

野沢の言葉を後押しするように休むのを進めたのは小室次郎おむろ じろう、Gトレーラーのオペレーターで究極の凡人の警官。

「二条くんは真面目過ぎるわよ、もう少し誰かを利用するように」「利用って……言葉悪過ぎませんか野沢さん？」

結構言葉が悪いらしく利用とかという汚い言葉を平気で口にする。

「悪いかしら？」

威圧感たっぷりぷりで小室に聞くが。

「いえ何も」

その威圧感で怯み退いてしまった、ここでは誰も野沢には逆らえないのだ。

だが野沢は一番活躍する二条には甘く小室には厳しいというか舎弟的な扱いをしており相手により態度は変わる。

だが一番態度が悪い相手がいた。

「おやこれはまたお山の大将を気取っているのですか野沢さん」

「あら？また来たの東条くん？」

そこに現れたのは部署は違うが捜査一課いち課の東条透とうじょうだった。

野沢とは性格が近いのか口喧嘩が絶えず、それと二人はいわゆる天才てんさいでもあり喧嘩けんぱしている。

「で、どんな用件？まさか嫌味を言うためだけに来たわけじゃないわよね？」

「まさか、あなたじゃあるまいしそんな幼稚な事は私はしませんよ」

二条と小室はまた始まったと思いつながら二人の天才の小競り合いを見ている。

「二条さん、そろそろお昼ですからいつものラーメン屋に」

「そうですね、終わらなそうですし」

二人はそーっとGトレーラーから出て天才達の小競り合いを放置す

るのだった。

「これと言って手掛かりなしか」

ユウスケ達は木野星也なる人物の居場所を調べていたが成果はなく路頭に迷っていた。

「そいね……………てか飛んじやいけないなんて外の世界は不便ね」

「そうだけ、飛んじやえは移動楽なのに車って奴とバイク使わないと早く移動できないなんてな」

霊夢と魔理沙は主に空を飛んで移動するため飛べないのにイライラしていたが咲夜は普通だった。

「幻想郷には幻想郷のルールがあつて外の世界には外の世界のルールがあるのよ、郷に行ったら郷に従えよ」

やはり外の世界出身は違かった、もちろんユウスケや総、銃志郎は違う世界と言えども外の世界から来たのには変わりなく普通だった。

「それにしても木野星也って奴の居どころが判らねーな」

魔理沙は手紙を取って文を睨むが咲夜に取り上げられた。

「無くされたら困るのよ、これしかもう手掛かりがないんだから」

手紙を折り畳みポケットにしまう。

「てかお腹空いたわね」

霊夢の言う通りもう12時は過ぎていた、全員腹に手を当てて空腹を確かめる素振りをする。やはり空腹だった。

「どこか食べに行こうか？お金は俺が幻想入りする前に持っていた残りがあらし口座も残ってるから」

と、ユウスケが昼食の代金を出すことになり近くのファーストフード店に入り食事を取る事に。

「何これ、すごく美味しいじゃない」

「外の世界じゃこんなうめえーもんがあるんだな」

ハンバーガーやフライドポテトをガツガツと食っていた、何分珍しいからだ。

「やはり俺達の世界と変わらないなゴウリュウガン」

【変わると思ったらあけぼの町があるかないかだ】

回りに気付かれないように会話をする銃志郎達、総も久しぶりなためこれを葬にも食べさせようとテイクアウトを注文した。

「まあ口座もあるから大丈夫か……………」

なぜ天涯孤独のユウスケに口座が結構残っているかは八代がグロングを倒してくれるからと振り込んでくれていた資金がまだ残っていたからだ。

（ありがとう……………あねさん）

八代が他界してもなおまだまだ世話になり情けないなと思っていた。咲夜は外の世界にいた時、咲一と咲奈と一緒に食べたなと思い出していた。

（咲奈姉さん……………何も姉孝行な事ができなかったわね）

何もお礼というお礼ができなかった事を悔やんでいたが今回の死の真相を探る事により最初で最後の姉孝行をしようと誓う咲夜、まず最初に弟を探そうと意気込みハンバーガーをがつりと豪快に食べる。

「咲夜、いい食べっぷりね」

あまり見れない豪快な咲夜を物珍しそうに見る二人。

「ハンバーガーって言うのはこうやって食べるものなのよ」

自慢気に言うのだった。

昼食を食べ終え再び木野星也の搜索を始める一同、医者なため病院のあちこちを回れば何か手掛かりが見つかるかと思いい手分けをして探す事に。

ユウスケに霊夢、総に咲夜、銃志郎に魔理沙と二人一組で別れた。まず始めに銃志郎達がすぐに病院を見付けの中に入る事に。

「すみません、木野星也という医師をご存知ないでしょうか？」

銃志郎は警官のためもあるか丁寧な口調で聞き込む、だが看護婦は回りにいた医師達に聞いたが知らないと答え最後に魔理沙も釣られ一礼をしその病院を後にした、二人は小さな病院、大きな病気を問わずに探した。

「木野星也という方をご存知ではないでしょうか？」

総と咲夜は病院関係者だけではなく患者にも聞いて回った。

「すみません、木野星也さんというお医者様を知らないでしょうか？」

総がものすごく丁寧口調になり患者に聞くがやはり手掛かりは掴めない、これに苛立てる事なく総は聞き込む、かつていた組織で仕事はへそでするもの、納豆のように粘り強く嫌っているが言っている事は正しい男の言葉を思い浮かべながら聞き込みに戻り。

そしてユウスケと霊夢は関東医大病院に訪れていた、ここは八代の友人が勤める病院でその医師とは少しだけ面識がある。

「すみません椿山さん」

「いいって」

医師の名前は椿山秀一、八代の大学時代の同級生だ。

「いきなり行方不明になったって聞いたから少し心配してたよ」
「心配？」

少し驚いていた、まだ自分を心配してくれている人がいるとは思わなかったからだ。

「そうだぞ？お前の腹にはアレが埋まっているんだからな」

椿山もユウスケがクウガと知る数少ない人物の一人であり検査もよくしたものだった。

「はい……………」

「それとそこの子は彼女か？」

「違います」

「違うわよ」

即否定した。

「だよな、お前は八代にゾツコンだったからな」

それを言われるとユウスケは浮かない表情となり言った本人は「悪い」と一言詫びを入れた。

「それで聞きたい事ってなんだ？」

本題に入った、木野星也なる人物の事を尋ねると椿山は少し苦い顔をした。

「未確認の被害者だな……聞いた事あるだろ？弟を庇ったがその庇った弟は死んでしまいその兄の右腕は潰されたって」

「はい、あります」

その頃自分を認めてもらうためだけに戦っていたユウスケ、だが今はみんなの笑顔を守るために戦っていた、そのまだ青い時のユウスケもその兄弟の事は知っていた。

「木野星也、すごい医者だったらしいよ」

椿山が使う診察室に案内され中に入りコーヒーと紅茶を貰う、霊夢は日本茶がいいなと思うがそこまでワガママ言うわけにもいかないため紅茶を飲む。

「だが未確認に右腕をやられて死んだ弟の右腕を移植、医学界はそんな木野星也に手術は不可能と判断し医師免許を剥奪」

それではどこの病院にも属していないため探し出すのは更に困難になる。

「だが闇医者として裏で活躍してる、移植された右腕でもこれまでのようにな、医学界も表には出してないが裏では失敗したと戒める」

話はこれで終わったかと思いい立ち上がり去ろうとしたが。

「小野寺」

呼び止められある一枚のメモを渡された。

「これが木野星也の電話番号とメールアドレスに住所だ、何の用があるか知らないが渡しとくぞ」

「ありがとうございます」

最後に礼を言ってから二人は関東医大を後にした。

その頃咲一はあまり手掛かりがないまま都会の中をさ迷っていた。

(何も手掛かりはなしか……………これじゃ外に出た意味がないじゃないか)

時間も遅くなり夕日が見えていた。

人気がない路地裏に入ると殺気を感じ振り向くとそこには豹に似た青い体で剣を持つジャガーロードのパンテラス・キュアニュースと剣を持ち赤い体の豹の怪人パンテラス・ルベオーが戻る道を塞いだ。

「アンノウン……………！」

なぜ幻想郷にいた咲一がアンノウンという呼び名を知っているかは

こちら側に来た時捨てられた新聞を読んで名前を。
そして前をクイーンジャガーロードの黒豹で杖を持つ女性体格のパ
ンテラス・マギストラが行く手を塞ぐ。

「囲まれたか……………」

左手を拳にし曲げて後ろへ引くと右手を左に向け前に伸ばしそして
引いて指が上を向くように腕を曲げると腰にオルタリングが現れゆ
つくり前へと伸ばす。

「変身！」と叫ぶと自身が嫌うが生きるためにはならないといけな
い姿、仮面ライダーアギト・グランドフォームに変身するがすぐに
オルタリングの左側のスイッチを押し左肩は青と金の防具に変わり
鎧も青くなりストームフォームに変身、賢者の石から黒く両方の杖
先が金色の飾りが付いた棒常の武器を持つと飾りはスライドし展開、
刃となり杖も長くなり青い模様も見えたストームハルバードを手
持つ。

ストームフォームは素早く動ける超精神の姿で使いやすいフォーム
なのだ。

ジャガーロード達は唸りながら走りだし剣を構え襲い掛かるがリ
チの長いストームハルバードで剣を受け止められ蹴りの逆襲を受け
る。

「フッ！」

背後からマギストラが杖で攻撃してくるが杖を右手で掴みストーム
ハルバードで斬ろうとするが避けられる。

「ハッ」

この狭い路地裏では思うように戦えない、そう感じると高くジャン

押し建物の屋上に、ジャガーロード達も屋上に立ち夕日を背にし戦う。

「確かこの先だよこの住所は」

ユウスケ達は合流し椿山から教えてもらった住所を見て道を歩いているとパトカーが何台も道路を通過していった。

「慌ただしいな……………」

電気屋のテレビでニュース番組がやっておりそれを見るとアンノウンが現れたと報道されていた。

「アンノウン……………やっぱりこの世界に……………」

見過ごすわけにはいかない、それを悟っていたのか咲夜はユウスケに行くように勧める。

「わかった……………じゃあおっさん」

「おっさんじゃない」

「メモ渡すから後よろしく、総、行くよ」
「ああ」

後は銃志郎に任せユウスケと総はパトカーの後を走って追った。

「ゴウリュウガン、ナビ頼むな」

【了解】

銃志郎はゴウリュウガンにメモ用紙に書かれていたものを見せると途中で拝借した地図と一緒に読み込ませる。

「ゴウリュウガンすげーな、威力だけじゃなくてそんな事も」

「俺の相棒だから当然さ」

会話しているとすぐにゴウリュウガンは覚え四人を木野星也の自宅までナビゲートを始めた。

そしてパトカーが向かう現場には黄色い豹のジャガーロードのパンテラス・ルテウスと雪豹の弓を持つパンテラス・アルビュス、黒豹の槍を持つパンテラス・トリステイスが警官隊と交戦していた。

「射て射て！」

リーダーらしき人物が指示し敵を発砲し攻撃するが効果はあまりなく追い込まれていたがそこにサイレンと共に白バイが走ってきた、それに乗るのは青い装甲に腰に赤く光るゲージが付いたベルトが巻

かれ赤い二つの眼に銀色の三本に別れた角が付いた仮面ライダーG3-Xが到着し降りてサブマシンガン、GM-01スコープオンを発砲し食い止める。

「早く退避を！」

G3-Xを装着しているのは二条であった、G3-Xは警官隊を退避するように促しながらジャガーロード達を攻撃していく。

G3-Xは三対一では接近戦は危険と判断、GM-01で距離を取りながら戦っていく。

「フウツ！」

アルビュスが弓矢を放つと電磁コンバットナイフ、GK-06ユニコーンを使い切り払いをすると止まっていたアルビュスに弾丸を打ち込んでいき距離を保つ。

「拉致が開かないな……………」

白バイのガードチェイサーを見て後部に搭載されていた黒く四角い武器をチラッと見る。

そして再びGM-01の引き金を引き銃声を響かせていく。

そこにユウスケと総が到着。

「アレはG3-X！まさか完成していたなんて！」

戻って来た頃はまだその発展前のG3だったのが強化後のG3-Xというのに驚きを隠せなかったが。

「兄貴、取り敢えずあのライダーの加勢しようぜ」

「そうだな」

ホッパーゼクターが跳ねて来て腰にアークルが現れ「変身！」と同時
に叫びユウスケはクウガ・マイティフォーム、総はキックホッパー
に変身しG3-Xに加勢しジャガーロードに挑む。

「第4号!？」

クウガは未確認生命体第4号で扱われておりG3-Xは姿を消して
いたクウガが現れたのに驚きを隠せなかった。

「それとあつちは……………」

キックホッパーは見た事がないため動揺していた。

「野沢さん、第4号が目の前に……………」

【見えているわ】

Gトレーラーの作戦室からG3-Xのカメラを通し現場の映像が映
し出されていた。

「まさか第10号と一緒に消えたと思っていた第4号がね……………」

第10号とはこの世界でのディケイドの名前で通っている。

「大丈夫です、俺達は味方です」

「喋った……………!？」

驚く素振りを見せているとクウガとキックホッパーはトリスティス
とルテウスに接近戦を挑む。

「ハツオリヤーツ！」

トリスティスの槍による攻撃を掻い潜りながらパンチ連続で食らわしていくクウガ。

「フツハツ！」

キックホッパーは手を使わず名の通りキックでルテウスを追い込んでいく。

「すごい……………」

G3-Xは二人の戦いを感心しながら見ているとアルビュスが弓矢で攻撃してきた、それを後退しながら避けガードチェイサーに固定された武器をGトレーラーが固定を解除、その123のボタンを1、3、2と押し隣の大きなボタンを押すと【解除シマス】と電子音声响起武器は巨大なガトリング、GX-05ケロベロスに変形する。

アルビュスは弓矢を放つが腕で払われ銃口を向け引き金を引くと銃口は火を吹き弾丸は放たれていきその弾丸はアルビュスの腹部に浴びせていく。

「ウガガガガッ！！！！！！？」

腹部から火花が散りアルビュスは頭に光の輪が現れ爆死した。

「ライダージャンプ！」

【R i d e r J u m p】

ライダージャンプをしキックホッパーは高く飛び上がると。

「ライダーキック!」

【R i d e r K i c k】

飛び上がりその落下の勢いを利用、更にタキオン粒子のエネルギーを貯めた足で放つライダーキックをルテウスに炸裂し倒すと。

「超変身!」

クウガはトリステイスの槍を掴んだままドラゴンフォームに変身、槍はドラゴンロッドに変わり腕を引いてからドラゴンロッドでトリステイスの胸を突きスプラッシュドラゴンを繰り出す、封印のマークと光の輪が現れるとドラゴンロッドで軽く押しトリステイスは後退り爆死した。

「ふう……………」

二人はその場を立ち去ろうとしたが目の前にGトレーラーが停車し行く手を阻まれた、当然だろう、クウガも未確認扱い、キックホッパーも新たな未確認として見られているのだろうと。

作戦室から野沢が降りてくるとG3-Xも仮面を外し素顔を露出させる。

「ちょっと話、聞かせてもらっていいかしら?」

仕方ない、面倒な事は起こしたくないと考え変身を解除しGトレーラーに入った。

アギトに変身しクイーンジャガーロード達と戦う咲一は苦戦を強いられていた。

「くっ……………」

ストームハルバードを落とす屋上から地上に降りていた。目の前にキュアネウスとルベオーが立ち剣を振り上げていた、ここで終わりかと思ったその時、一台の緑色のバイクが突撃し二体を跳ね飛ばした。

「っ！」

アギトは驚愕した、バイク、ダークホッパーに乗ったものが自分によく似ているが姿は生物感が溢れ小さく常に展開されたクロスホーンに牙も生えておりオレンジの二枚の羽根のようなマフラーが目立つ、アナザーアギトが乗っていたからだ。

アナザーアギトはダークホッパーから降り「大丈夫か？」と問い頷き返すと「わかった」と言い両腕を曲げ右腕は拳が上に向くように、左腕は後ろに引く構えを取ると走りだしジャガーロードに立ち向かう、圧倒的だった、アナザーアギトはキュアネウスとルベオーに攻撃の隙を作らせず接近戦だけで追い込んでいく。

「今だ」

「は、はい！」

ストームハルバードを持つと走りだしアナザーアギトは離れるとアギトは必殺技ハルバードスピンドでジャガーロード達を横に一閃、ジャガーロード達は光の輪を出し爆死するとマギストラは逃げようとしていたが前にアナザーアギトが立ちはだかり先ほどの構えの前に腹部の前で腕を交差させてから構えると牙が上がり足下に緑色に輝くアギトの紋章が現れ吸収されていくとマフラーが羽根が羽ばたくように上がるとジャンプし。

「ハッ！」

必殺キックであるアサルトキックを放ちマギストラに浴びせる。マギストラは最初は平気な素振りを見せていたが胸に手を当ててから爆死倒された。

「あなたは……………」

アギトは変身を解くとアナザーアギトも変身を解く。

「私は……………木野星也」

「あなたが！？」

まさか自分が探していた人物も異形の姿になっていたとは思ってもよらなかった。

「君は？」

名前を問われ答えようと口を開く。

「俺は十六夜咲一……いや、芦川咲一です」

「君が……！」

十六夜の名字ではピンとは来なかったが芦川の名字で自分と関係がある人物と判断した。

「君が……咲奈の……ここではアレだ、近くの喫茶店でお茶を飲みながら話そう」

咲一は木野に誘われその場を後にした。

そして咲一が木野と会ったのを知らない霊夢と咲夜達の四人は木野邸の前に来て門の前に立って住所を確かめここだと判断、インターホンを押そうとしていたが。

「そこで何している？」

赤いバイクに乗った青年が現れた、青年はゴーグルとヘルメットを

取り素顔を露に、髪の毛は茶髪っぽく目付きは鋭かった。

「私達木野星也さんという方に用があつて来たものです」

用件を聞くと青年はバイクから降り押しして門の前に立ち開く。

「入れ、俺はここの住人の一人だ」

「そうですか、お名前は？」

「あしはらりょうじ葦原涼二だ」

第09話『クウガの世界のG3-X』（後書き）

二条誠、一条さんに一を足して氷川さんの名前を付けた。

野沢澄子、小沢さんを野に。

小室隆弘、文字変えただけ。

東条透、北を東に。

葦原涼二、文字足しただけ。

木野星也、これはリリマテでも……………ゲフンゲフン。

感想待ってます、もしかしたらこれが最後かも……………T Pがエ

……………

次回『仮面ライダーになっちゃったもの達』

第10話『仮面ライダーになってしまったもの達』（前書き）

因みにこの長編の名前は「再会！プロジェクト・アギト！」「という名前ですので名前にちなんだあのライダーも。

第10話『仮面ライダーになってしまったもの達』

前回、外の世界にやってきたユウスケ、総、銃志郎、霊夢、魔理沙、咲夜の六人。

咲一は姉の死の手掛かりとなる人物、木野星也と会う、ユウスケと総はアンノウンが現れた現場に行き二条誠が装着するG3-Xと共同しアンノウンを倒しGトレーラーに誘われる。

そして残った銃志郎、霊夢、魔理沙、咲夜の四人は木野邸に到着すると葦原涼二なる青年と会うのだった。

「木野なら今は出掛けているはずだ、どこかの病院でオペしているはずだ」

闇医者というのは聞いていたためそういふ事もあると思いつつ出された緑茶を飲む、霊夢は嬉しそうに飲んでいた。

「どう言った用件だ？」

今回訪れた理由を話すと葦原は少し考え。

「帰ってくるまで待ってればいいさ」

リビングに四人を残し別室に移動していった。

「無愛想だなアイツ」

「そうね」

三人には無愛想な青年としか見えていなかったが銃志郎の目には「何かを無くして藻掻いているような」青年と写っていた。

(アイツの目、深い悲しみが見えたな)

夜も遅く欠けた月が夜空に浮かんでいた、ユウスケ達が帰って来ないと思いつつ葦原の許可を取り夕飯を自炊する事に。

「何よこれ」

霊夢の手にはインスタントの焼きそばとカップラーメンが握られていた。

「それはインスタント焼きそばとカップラーメンね」

咲夜は魔理沙と一緒にそれらの作り方を教えていた。

「そんな簡単に……………」

「野菜もあるし焼きそばと卵焼きを作りましょ」

三人は調理を始めた、そして数分経ち焼きそばはできる。

「お、簡単で美味しいなこれ」
「そうね」

本当に美味しそうに焼きそばをすすする二人。

「焼きそばでここまで……………」

銃志郎はジトーした目で見ていたが確かに焼きそばは美味しいため深くは突っ込まなかった。

「作る奴が違うだけで味は変わるんだな」

葦原も食べており感心していた。

ユウスケ達はGトレーラーから場所が変わり焼肉屋で夕飯を食べていた。

「あなたみたいな若者が4号だったなんて、思いもよらなかったわ……………」
「生お代わり」

野沢は焼けた肉を頬張りながら生ビールをガツガツ飲みお代わりと繰り返していた。

「そうですか……………」

「後別の世界ね……………」
「あの10号も別の世界のものなら説明がつくわ……………」
「生お代わり」

「土か」と小声で呟きながら焼けた肉を食べていくユウスケ、肉の焼き加減は総が見ていた。

「これ焼けてますよ」

「気が利くわね……………生お代わり」

その肉をガツガツ食べていく野沢はまた生ビールをお代わりする。

「光荣です、まさかグロンギを倒した第4号、クウガに会えるなんて」

「グロンギを倒せたのは俺の力だけじゃないですよ」

烏龍茶を飲みつつ二条に返す。

小室は会話に入れず総が焼いていき焼けた肉をこっそりと食べていた。

「もう一度聞くけどあなたは知り合いの姉の芦川咲奈の死の真相を確かめるべくこちら側に来て木野星也なる人物に会おうとしたのね……………生お代わり」

幻想郷の事は口外しないのを条件に教え目的を教えていた。

「はい、どうしても真相を知りたいんです」

「他人の事に一生懸命になれるなんて、思った通りの人物だったわ、4号は……………生お代わり」

野沢の言葉は胸に深く突き刺さった、他人の事に一生懸命になれる、最初、グロンギと戦っていた時は自分のためだけに戦っていたのに、複雑だった。

「後で警視庁のデータベースを見てみましょう、芦川咲奈の事件が載っているかもしれないわ……………生お代わり」

「よろしくお願いします」

深々と頭を下げ、また肉を食べていく。

一方咲一と木野は喫茶店で和風たらこスパゲティを食していた。

「遠慮なく食べてくれ、私のおごりだ」

「いただきます」

食事を終えてからコーヒーで一息吐きながら会話を始める。

「咲奈との出会いは彼女が私の病院に研修で来た時だった……………」

芦川咲奈は看護婦になるために東京に上京、その間咲一と咲夜は両親が残した貯金や近所の人達の協力があった、咲奈は看護婦になるのを諦めていたが双子や近所の人達が背中を押してくれたおかげで大学行くのを決意し上京したのだ。

「研修先の病院で木野さんと」

「ああ、彼女は優しく思いやりがある人だった」

「はい、いつも姉さんの世話になってました俺達」

その後は研修期間を終えて正式な看護婦となり木野が当時勤めてい

た病院に就職、それから関係は発展していき恋の仲に。

「彼女が双子の姉弟がいると聞いた時、私が君達をこちらに來させ一緒に暮らそうと言ったのだが……………咲奈はそれを躊躇った」

咲一にも超能力があれば血が繋がってるため姉の咲奈にもあつておかしくない、木野も超能力があると知っていたが信じたくなかった。その能力は予知能力、先の未来が見えるというもの。

だが咲奈は折れ二人に手紙を送った途端に事故で死亡しあかつき号に乗り海難事故に会い海に投げ出され幻想入りをしてしまった。

「まさか本当になるなんて思わなかった、咲奈が死に、君達は幻想の地に辿り着くなんて」

咲奈はそこまで予知していたのだ、まるで運命を知っていたかのよう。

「……………木野さん、なぜあなたはあの姿になって戦っていられるんですか？」

自身はアギトの姿を嫌っている、だが木野は躊躇わずその姿、自分より更に異形な姿をしたアナザーアギトとなり戦っているのかが。

「それは……………確かに嫌だ、あの姿は」

「でしたら!」

「だが、もうあんな悲しみを繰り返したくないんだ……………俺は二人の大切なものを失った」

感情が高ぶったのか、私から俺と変わっていた。

二人とは最初は咲奈、そして弟の事だろう。

「もう失いたくない、だから俺はあの姿で戦うんだ、誰かが大切なものを亡くし居場所が無くなるのを見たくないから」

「居場所が……………無くなるのを……………」

「ああ」と返しコーヒーを飲み切ると携帯に着信が入り通話に出る、用件を聞くと通話を切り携帯をしまう。

「俺の家に君の姉と恋人が来ているらしい」

「咲夜と霊夢が……………！」

驚いた、まさかここまで追い掛けてくるとは思わなかったからだ。

「君は、俺と同じ過ちを繰り返すなよ、咲奈を守り切れず、未確認の事件で弟を失った俺みたいに」

「……………」

「はい」とはまだ返せなかった、アギトの姿を認めていないからだ、木野も承知していた、もう少し時間が必要だと。

「今日は俺の別宅に泊るといい、まだ会える覚悟ができていないだろうか？」

咲一は静かに頷くと会計を済ませてから二人は別宅に向かうのだった。

Gトレーラーの作戦室、過去の事件のデータベースを見ていた。
一覽を眺めていると数年前に起きたあかつき号の海難事故と芦川咲
奈の事故の事が記載されていた。

「これか……………あかつき号の事は咲夜からだいたい聞いているから
……………芦川咲奈さんの事故だな」

事故の詳しい詳細を調べ当時の現場の現状や場所、死因等を見てい
たが何かおかしかった。

「死因は爆発の衝撃に巻き込まれ全身打撲と火傷、脳の損傷による
死亡……………現場は……………自然公園の中!？」

まずはあり得なかった、爆発は埋められていた爆破装置によるもの
と、だがその装置の破片は見付からず、目撃者によると何か宙に紋
章が現れ落ちてきて爆発したと証言したが警察は非現実的と言いつ
りもしなかった爆破装置を原因としてそのありもしない犯人を追い
続けていたと。

「当時は未確認も出ていなかったから非現実的な事故はほとんどそ
んな風に片付けられていたのよ」

グロンギが現れるようになってからそういう事件や事故もちゃんと
調べられるようになったらしい。

「私はこれをアンノウンの最初の犯行だと思っているわ、人間が進化して力を付けないようにするための、彼等はグロンギが暴れていた頃、影からグロンギを殺害していたと思っているわ」

アンノウンが現れ始め似たような犯行がないか過去の資料を調べた野沢の結論だった。

「この頃から……俺のこの世界でのやるべき事はまだ終わっていなかったのか……！」

拳を震わせ悔しさを露にしていた。だが野沢はまだ気にしている事があった。

(この前自衛隊から研修に来た深見理沙も気になるわ、調べたら自衛隊の名簿に彼女の名前はなかった、一体……)

前にSALUに深見理沙という自衛隊員が研修に来たのだが一週間弱でやめ姿を消し自衛隊の隊員名簿には彼女の名前はなかったらしい。

木野の本宅では葦原に咲夜達は詳しく目的を話していた。

「姉の死の真相か……それを調べるためにわざわざな」

幻想郷の事は話しておらず遠くから来た事になっていた。

「そしてその真相を調べるために姿を消した弟が先にか」

「ええ……………」

すると葦原は何かを感じたのか出掛けると言い外へ、霊夢と咲夜は気になり後を追うとそこにはステンドグラスの体で全身を硬質な甲羅で被い腕に盾のような亀の甲羅が付いたトータスファンガイアが人間を襲っていた。

「アンノウンじゃない……………！」

なず葦原はアンノウンではなくファンガイアの気配を察したか理解どころか相手の種族もわかっていなかった。

「ファンガイア！」

だが咲夜は一度ファンガイアを見た事があるためその名を叫ぶ。

「知っているのか？」

「ええ……………まあ」

トータスファンガイアは三人に気付き突進してくる、巨体には似合わないスピードで迫りくる、もしあの硬質な甲羅に激突したら一溜まりもない、葦原は横にサイドステップで避け咲夜は懐中時計を出しスイッチ押すと霊夢といつの間にかトータスファンガイアの背後に。

「今のは……………!？」

「説明は後よ、人はいないから存分に戦えるわね咲夜」

「ええ」

霊夢は札を出し、咲夜はナイフを出し戦う素振りを見せる。

「お前達は逃げる、ここは俺が！」

腕を顔の前で交差し「変身！」と叫ぶと緑色のカミキリムシのような姿に、赤い眼にクウガのように二本に分かれた緑色の角に牙が付いた口に胸に黄色いワイズマンモノリスという賢者の石が付きベルトは赤く綱のように赤い触手が体に巻かれている仮面ライダーエクシードギルスに変身した。

「アギト……………いや違う」

エクシードギルスもアギトの力を持つ仮面ライダーだが少し怪人寄りの姿だった。

「ガアアアアッ！」

エクシードギルスは両腕から赤い鋭い爪エクシードクロウが伸びると走りだしトータスファンガイアに立ち向かう。

「ハアアアアッ！」

エクシードクロウで切り裂いていくが傷一つ付かず咲夜もナイフを投げ付けるが硬質な甲羅に弾かれてしまう。

「効かない……………」

霊夢は人がいないのをいい事に札と弾幕を放つがトータスファンガイアは硬い甲羅で防ぎ切る。

「ギヤアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

トータスファンガイアは断末魔を上げ砕け散り倒された。

「今のはなんだったんだ……………それにお前達も」

エクシードギルスは変身を解除し二人を見るのだった。

第10話『仮面ライダーになってしまったもの達』（後書き）

G4フラグは即には立っていた………立っていたんです。

因みに豹、亀、と来たのはV3とアギトの怪人順で今回は蛇ですが

………ヤバイ蛇が、あゝあゝ………祭りの場所はここかあゝ………
サバじゃない！（笑）

ギルスはエクシードで行こうと思います。

次回『G4システム』

第11話『G4システム』（前書き）

今回はイチャイチャしています、すごくイチャイチャ。
後最初だけの泥棒が。

第11話『G4システム』

前回、ユウスケと総はGトレイラーで芦川咲奈の死に疑問を抱きア
ンノウンによる犯行と確信する。

咲一は木野の戦う理由とアギトの姿の受け止め方を聞き考えを改め
る。

そして霊夢と咲夜は葦原が変身したエクシードギルスと共同しト
クスファンガイアを倒すのだった。

まだ夜が明けない時間の真っ暗な東京タワーの展望台の屋上に一人
の青年が立っていた。

「小野寺くんのクウガの世界、いや、クウガとアギトの世界、いつ
たいどんなお宝があるのだろうか」

青年がにやりと笑うと屋上から鉄骨に着地しつつ地上へ向かい飛び
降りていくのだった。

夜が明けて外の世界での二日目を迎えていた。

「う………胃がもたれ………」

Gトレーラーの作戦室、ユウスケと総はここで寝ていたが昨夜の焼き肉を食べ過ぎたため胃がもたれており腹を押さえ苦しんでいた。

「兄貴………軽く十皿食ってたからな」

総はそれほど食べておらず平気だった、立ち上がったと同時に二条が作戦室に訪れてきた。

「二条さん、おはようございます」

「おはようございます」

二人は背伸びして体を解していた。

「よく寝れましたか？」

「ええ布団があったので………それと二条さんの方が年上なんですから敬語じゃなくていいですよ」

それからコーヒーを用意してもらい後の二人が来るのを待つ事に。

「二条さんはなんでG3-Xの装着者に？」

「俺は………新米だった頃、あかつき号の海難事故を目撃してその乗客を助けた事により上層部から………だが、二人取り残していたとは………不覚だった」

咲一と咲夜を救出できていなかった事に悔しさを露にしていたが。

「二条さん、その事をバネして頑張ればいいんです！」

「小野寺……………そうだな」

その後、野沢と小室がやってきてGトレーラーは発車する、Gトレーラーの一日は都内を走り回っており燃料もソーラー発電のためほぼ無限である。

「一日中走り回っているんだ」

「そうよ、いつでもガードチェイサーを発進できるようにね」

ユウスケは外のカメラの映像をモニターで見ていると警官に取り締まられていたバイクを押しした女性が一瞬映り。

「あ！野沢さん！停めて！」

「え？」

Gトレーラーを停車させるとユウスケは降りて走っていた道を逆走すると先ほどの警官と女性が見えた、ユウスケの目に止まったのは女性とバイクだったのだ。

「幽香さーん」

「やっと見付けたわ」

その女性は風見幽香だった、幽香が押ししていたのはトライチェイサーだったのだ。

「知り合いですか？彼女無免許でバイク押していたので取り調べし

ていたのですが……」

何となくわかった、見ず知らずの人間に止められる筋合いないから何も答えずにただイライラしていただけなのだろうとな。

「すみません、バイク持ってきてって頼んだのは俺なんです」

適当に誤魔化して警官には引き取ってもらいGトレーラーと一緒に戻った。

「なんでこっちにいたんですか？」

「それは今朝の事よ」

〈回想〉

「いい朝ね」

幽香は朝早く起きて太陽の畑を朝日を浴びながら散歩していた。彼女は一年中花に囲まれて暮らしており主な活動場所は幻想郷の奥地にあるこの太陽の畑である。花がある場所をゆらりぶらりと歩き回りよく博麗神社にも出没している。

気持ち良さそうに歩いていると行く先の宙に亀裂が入るとスキマが開かれ中から。

「あら紫じゃない、珍しいわね朝早く」

「おはよう、幽香」

紫が出てきた、いつもなら寝ているはずなのだが、スキマから出ると更にスキマは広がり中からトライチェイサーが出てきた。

「それ、ユウスケのじゃない」

「そーよ、これとアレを外の世界に連れて行ってユウスケに渡して欲しいのよ」

空にはゴウラムが飛んでいた、ただ物運びを頼むためにここに来たのだ、幽香は拒否しようとしたがあこのユウスケ達を外の世界にいきなり送り込むような性格している紫が答えを聞くわけなく。

「じゃあよろしくね」

「ちよつとま……………」

幽香はスキマに落とされトライチェイサーとゴウラムをスキマに入れていった。

〜回想終了〜

「というわけよ」

ユウスケは苦笑いだが総は「俺にはないのか」と思っていた。

「まったく………気持ちがいい朝だったのに」

すごく機嫌が悪そうでは何か機嫌を損ねる事があつたら自分が危ない、触らぬ神に祟りなし、そう思いながら苦笑し続けた。

「外の世界に来た瞬間バイク押してただけで人間には絡まれるし」

いつ終わるか分からない愚痴を延々と聞き機嫌損ねないように気を付けていた。

「だからユウスケ、虐めなさせなさい」

「却下！」

最終的にはそういう結果となりそれはやはり却下となった。

「そうか……………ああ……………」

木野の本宅で葦原は電話で通話しており通話を切る。

「木野から連絡があった、十六夜咲一は今木野という」

それを聞き一安心する咲夜と霊夢達。

「……………贅沢だな、お前の弟は」

「どういう意味？」

突然の言葉だった、葦原はソファーに座り前屈みとなる。

「心配してくれる恋人や姉弟がいるのにな……………俺が失ったものを持っているのに」

「失ったもの？」

「ああ……………父親、恋人、恩師、みんな俺がギルスになって離れていった、異形の姿を恐れて、だから俺は異形の姿を認め戦う事にした、それから木野と出会い孤独から少し解放された」

自分の過去について語っていく葦原、銃志郎はやはりと思いながら聞いていた、瞳の奥に宿る悲しみ話察していたからだ。

「……………ねえ、今から言うものを買ってきてくれない？」

霊夢は葦原に頼み事をするのを決めたのだった。

「さてユウスケ、少し案内してくれない？」

興味があったからか、ユウスケに案内を求める幽香。

「えー……………」

嫌がるが選択する権利はない、そう思い了承する事に。

「小野寺くん、何かあったらトライチエイサーの無線機で連絡しなさい、それは元々警察のものなんだから」

「わかりました」

ユウスケと幽香は作戦室からトライチエイサーも一緒に降りるとGトレーラーは走り去る。

「まったくはこっちなな……………」

「何か文句あるのかしら？」

胸ぐらを掴みまるで脅すかのように更に素晴らしい笑顔で問い詰める。

「な、何もありません……………」

逆らう事はできなかった、逆らうたら幻想郷に行けなそうだった、もし行ったら何されるかわからないからだ。

「じゃあ行きましょ？」

「てか……………こんな事してていいのかな……………」

不安だったがもう目的はほぼ達成しているのと同じなためそれぞれ
思い思いの時間を過ごしていたため大丈夫だろう。

(まあいつか)

ユウスケはヘルメットを渡して一緒にトライチェイサーに乗り走り
だした。

「どこ行きたいですか？」

「花がある所」

やっぱりそう来ると思い、頭に浮かんでいた場所へ向け走りだす。

「着きましたよ」

バイクを飛ばして到着した場所は都内郊外にある植物園だった、こ
こは気温等を調整し一年中四季の花を楽しむのに有名だった。

「こんな所に花があるの？」

敷地内は建物ばかりのため疑問に思うが「着いてくればわかりますよ」とユウスケは植物園の中に入って行く。

「まずは春からですね」

二人が最初に入ったのは春の棟と呼ばれる建物の中だった。

「桜……………」

建物内は外のような一本道が続いており左右に桜の木が並んで生えており枝には花が満開だった。

「ここは気温とか調整されていて夏なのに春の花が見れたりするんですよ」

「ふーん、この私に無理矢理咲かした花を見せるの」

「えーっ!?!」

幽香は季節感にはうるさくその季節にはその季節の花を楽しむため無理矢理咲かした花とかはあまり好きではないらしい。

「……………まあいいわ、こっちじゃあなたが一番詳しい、あなたの案内に着いていくわよ」

「はい」

桜の花びらが散る中、二人は一本道を並んで歩いていた。

「外の世界はすごいわね、気温も操るなんて」

「そうですね？」

「ええ、こつやつて四季の花を咲かして楽しめるようにできるのだから」

隣を歩き桜に見惚れている横顔の幽香を見て「来てよかった」と思っているとその横顔のまま微笑んでおり更によかったと感じていた。道を歩くと次の棟に入る前に職員に長靴とカップとビニール傘を配布されそれを着て梅雨の棟に入ると中は雨が降っていた、天井から水を撒くような感じだったが降り方は工夫してありちゃんと雨だった。

「梅雨ですね」

「梅雨ね、梅雨と言えば」

やはりここも一本道、その左右にはあじさいが咲いていた、なぜ雨なのかは雨とあじさいは昔からセットというイメージが強いからだ。

「ほどいいぐらいの雨だしこれはいいわね」

長靴のためびちゃびちゃと音が立ちながら歩きあじさいに顔を近付けじつくりと見ていた。

「転ばないでくださいよ」

「私を誰だと思っているのかしら？」

「私は四季のフラーマスターよ」と言おうとしていたのだが「フ」の所で途切れて。

「えっ……ひゃっ！」

ユウスケが言う通り滑って転びこのままでは床、泥の上に倒れてし

まいそうになっただが。

「おっと……………っと……………」

そこでユウスケは倒れそうな幽香を支えるのだが、自分も足を滑らせ。

「うわぁっ!?!?」

転倒して泥の上に倒れ傘はその後手放し宙に舞って泥水が跳ね二人に降り掛かる。

「ユ・ウ・ス・ケ」

「はい!」

笑顔だった、素晴らしい笑顔だったが目は笑っていなかった、めっちゃくちゃ怒っていた。

「どうしてくれるのかしら?私、泥まみれよ?」

「あつと……………えつと……………」

対応に困っていると回りからクスクス笑い声が、「だいたんね」とか「若いな」とか「わしも後何年」とか聞こえていた、改め自分達の今の体勢を見る、それはユウスケの上に幽香が倒れこんでいる、幽香がユウスケを押し倒したような体勢になっていたからだ。

「「あ……………」」

一瞬間まると「カシャッ」と音が聞こえた。

「一枚撮らせていただきました」

立ち上がり梅雨の棟の出口と次のブースへ繋がる通路に更衣室や脱衣場があり軽く洗濯もできたためここで用意された衣服に着替え通路に出ると職員が「これ、先ほどの写真です」と先のアクセシビリティの写真を見せた、ここではこのようなアクセシビリティが多いため写真を撮りそのカップルに配っているらしい。

二人は流れのままカップルという事にされ写真を受け取り先の行為を思い出し顔を赤くしていた。

「……………ユウスケ」

「はい！」

「帰ったら覚悟できているわよね？」

「もちろん！」

死んだな、と思い次の夏の棟に入るとその名の通り夏の気温で咲いていたのは太陽の畑でもお馴染みの。

「向日葵ね……………」

向日葵だった、太陽の畑ほどのものではないが一面に広がっていた。

「やっぱり幽香さんは向日葵が一番好きかな？」

「当たり前よ、だからあんな奥地で活動しているんじゃない」

やはり自分が好きな花があるからなのか、嬉しそうでさっきまでの機嫌が悪い雰囲気ではなくなっていた。

「よかった……………機嫌良くなった」

「いや？帰ったらお仕置きは決定だけど？」

「あれえ！？」

的外れで少しガクツとなり間が抜けた表情となり、その表情を見て少しクスツと笑い「やっぱ許してあげようかしら」と思っていた。

「フフ」

「結構楽しめたわ」

洗濯した服も濡れておりそれに着直して植物園を後にしてトライチエイサーに乗らず押して歩く。

「た、楽しんでもらえて光栄です」

幻想郷に戻った後の事を考え笑顔になれないでいた。

（煮るなり焼くなりもう……………）

（面白い……………ユウスケイジメこんなに面白いのね）

DSの花が満開し当分は許さないと言い続けて反応を楽しもうとし

ていた。

（当分は楽しませてもらうわよユウスケ）

（死にたくないよ）

その頃木野の別宅にいる咲一は空を眺めていた、どこまでも続く青空を。

（咲夜もこの空眺めているのかな……………霊夢ちゃんも）

やはり名残惜しいのか、二人や幻想郷の友の所に戻りたい、そう感じていたがアギトの姿を受け入れてくれるのか不安だった。

（俺は……………できるのだろうか、木野さんみたいに人の居場所を守る事が……………）

幻想郷にいた時は影からアンノウンと戦ってきた十六夜咲一、木野は自分のように誰かが居場所を失わないようにするために戦う、それができるのか不安であった。

ため息を吐き部屋の中に戻るとアンノウンの気配を感じ別宅から外へ出て走りだす。

トライチエイサーに入電が入りアンノウンと Grongi が同時に出現したと情報が入り。

「幽香さん、ちょっと行ってきます」

「気を付けなさい」

ユウスケはヘルメットを被りトライチエイサーに跨り走りだしその後ろ姿を見送るのだった。

現場ではスネークロード、コブラのような杖を持つ怪人、アングイス・マスキルスとメデューサのような鞭を持った怪人、アングイス・フェミニウスが Grongi の海蛇の怪人、当たった物を一瞬にして凍らせる鞭を持つゴ・ベミウ・ギと戦っていた。

その戦闘のせいで怪我人は多く出ておりこのままでは被害が広範囲に広がってしまいそうだった。

そこに三体を弾き飛ばす一台のバイクが現れた。

「変身！」

そのバイク、トライチエイサーから降りたユウスケはアークルを出し叫びクウガ・マイティフォームに変身し怪人達に挑む。

「クウガ！」

ベミウは一番に反応し襲い掛かってくる。

「ハアアアアッ！」

力強く殴るがベミウはグロンギの中で最上位の怪人の一体であるため並大抵の攻撃ではダメージを与えられず。

「フッ！」

「ぐっ……………！」

鞭を振るい肩に叩き付けると一瞬にして白く凍結しこれでは危険と感じ防御と持久力に優れたタイタンフォームにチェンジする。スネークロード達もベミウより先にクウガを倒そうと共に襲い掛かってきた。

「三体はやっぱりキツイか……………！」

トライチェイサーまで距離はある、その間に三体相手はキツイと感じていると。

「ハッ！」

そこにアギト・フレイムフォームがフレイムセイバーを持ち割って入り怪人に剣を振るう。

「アギト……………君が……………十六夜咲一か？」

アギトは静かに頷くと食い止めるから早くやる事を済ませると言わんばかりに三体の怪人と同時に戦う。

「ありがとう！」

クウガはトライチェイサーの横に立ちトライアクセラーを抜くとそれはタイタンソードに変化。
両手で太剣を握り走りだしベミウにカラミティタイタンを炸裂し腹部に突き刺すのだが。

「なっ……………」

封印のマークは現れたが一瞬だけですぐに消え剣を握られて抜かれ鞭による連打攻撃を食らいタイタンブロッカーは凍結していく、もしこれで力強い打撃を食らえば鎧は砕け散ってしまう、すぐにドラゴンフォームにチェンジし距離を取る。

「ハッ……………」

武器はない、あるのはキックかトライチェイサー、もしくはゴウラムのみ、ベミウは鞭を振るって行くがここでクウガはペガサスフォームにチェンジした、ペガサスボウガンなどになる武器はない、だが考えはあった。

ベミウは鞭を素早く振るうがクウガはいとも簡単に避けていく、感覚神経が発達したペガサスフォームは遠距離射撃だけではなく相手の攻撃の軌道も読んで連続で避けていく事も可能だった、だが制限時間は迫る、ギリギリの所でマイティフォームに戻りトライチェイサーにアクセラーを挿し走りだし体当たりをしベミウを跳ね飛ばす。

（決定的打は無理か……………）

するとゴウラムが現れ半分に分かれ頭部と上半身は前部に、下半身は後部と合体し大きな顎は前に突き出すトライゴウラムへと合体を遂げたのだ。

「合体した……！」

これはチャンスだと思い。

「咲一退いて！」

「っ！」

アギトはストームフォームにチェンジし高くジャンプしスネークロードから離れるとトライゴウラムが顎に炎が纏った状態で体当たりをするトライゴウラムアタックで二体を弾き飛ばすと頭に光の輪が現れ爆死、ベミウは後ろから鞭を振り上げ走りだすがUターンしまた加速しトライゴウラムアタックをベミウに、先ほどカラミティアイタンでできた傷にピンポイントで顎をぶつけ跳ね飛ばすとその体に大きな封印のマークが現れ苦しむと爆発し倒された。

「よし！」

クウガはガッツポーズを取り勝利を喜びアギトと視線を合わせるがそこに次元の壁が現れ中からG3-Xに似た黒く水色の眼で角が二本に分かれ四発のミサイルを搭載したロケットランチャーを持つ仮面ライダーが現れた。

「G3-X？」

いや、このライダーの名は仮面ライダーG4、G3-Xより強力な仮面ライダーだが。

そこに二条のG3-Xと総のキックホッパーが到着、カメラを通し野沢は驚愕した。

「G4!？」

そう、この世界でG4は野沢が開発しそのシステムの力に恐れ封印したはずなのだが。

「ごきげんよう野沢さん」

隣に一人の自衛官の服を着た女性が立つ、三人はその女性を知っていた。

「深見理沙……！」

研修として自衛隊からやってきたと思われていた深見理沙だったのだから。

野沢はたまらず外に出て問い質した、一体何者なのだと。

「私はデスシヨツカーの幹部の一人、タブー・ドーパントなんです」

深見はニコニコしながら仮面ライダーWの世界のアイテム、ガイアメモリのタブーメモリを見せて自己紹介する。

「デスシヨツカー……まさか、幻想郷に送り込んできたライダーや怪人達は！」

「そう、そこにいるキックホッパーやここにはいないパンチホッパー、そしてカイザや怪人達は我々デスシヨツカーが送り込んだ刺客なんです、

デイケイドとその仲間をなんとかしてでも倒したい偽りのゾル大佐、鳴滝さんと共同して」

深見は笑顔を途絶えさせなかったがその笑顔は邪悪なものであると明白だった、野沢は彼女はG4システムを盗み、開発するために研

修に来たと分かり怒りを露にする。

「G4システムは危険なものだよ！人間には操作できないわ！」

「人間でなければの話ですよ野沢さん、このG4の装着者はそのために作られた改造人間なんですよ？」

改造人間、それは悪の組織ショッカーが人間と様々な生物を合成し手術し生み出される怪人達だがそれに反逆したのがバツタの改造人間となった仮面ライダー1号だった。

「ではG4の力を存分に楽しんでいってください、生きていたから今度は私が焼き肉ご馳走しますね」

深見は一礼すると次元の壁の中に消えG4はGM-01改四式というG3-XのGM-01を改造したサブマシンガンを持ち発砲してきた。

「野沢さんはGトレーラーに戻ってください！」

G3-XもGM-01を持ち発砲し野沢は作戦室に戻る。

「超変身！」

クウガはまたドラゴンフォームにチェンジし落ちていた鉄パイプを拾いドラゴンロッドに変える。

アギトはストームハルバードを持ち二人は小回りが効き素早さに適した姿となり戦う事を選択した。

「兄貴」

「気を付ける、どんな力があるか分からない」

警戒しながらジリジリと詰め寄りながらクウガ、アギト、キックホッパーは一斉に駆け出し攻撃を仕掛けようとしたが。

「……………」

G4はGM-01改四式で同時に打ち三人は体から火花を散らし苦痛の叫びを上げながら吹き飛ぶ。

「くっ!」

G3-XもGM-01を連射するが連射性能はG4の方が上だった。

「二条くん!G4のGM-01はフルオートで連射はあっちの方が上手よ!」

「そんな……………!」

G4は走りだしG3-Xに殴りかかりぼこぼこに殴っていく。

「二条さん!」

クウガはトライゴウラムに乗り走りだしトライゴウラムアタックを繰り返すのだが。

「何だと!?!」

顎を掴んで持ち上げてしまい投げ飛ばされ合体は強制解除、クウガは倒れ込む。

「クロックアップ!」

キックホッパーはクロックアップでG4に近づくが。

「読まれてる！」

G4システムの前にはクロックアップシステムも無効のよう動きを読まれGM-01の弾丸を食らい吹き飛ばす。

「うわあっ!?!」

「ハッ！」

アギトはストームハルバードの刃を前に向け突貫してくるが武器を掴まれ、そのまま押し折り殴り飛ばされる。

「総!咲一!」

クウガはフラフラしながら駆け寄りG4はその間ロケットランチャーのギガントを持ちケーブルをベルトと繋げミサイルを放った。

「っ!」

クウガは自然と前に立ちミサイルは直撃し四人は爆発に巻き込まれた、G4は消し飛んだと確信し次元の壁の中に入っていった。

「ユウスケ、遅いわね」

そうになっているのを知らず幽香はユウスケが迎えに来るのを待っていた。

第11話『G4システム』（後書き）

王蛇出せなかった……………まあいいか。

次回『G3-X対G4！人間の意地は無限大！』

感想お待ちしています。

第12話 『G3 - X対G4！人間の意地は無量大！』

前回、ほとんど目的は達成していた、そんな事も知らず紫にトライチェイサーとゴウラムを運ぶはめになった幽香はユウスケと合流したのだがグロンギとアンノウン、同時に現れクウガ、アギトが倒すとデスショットと呼ばれる悪の組織の幹部、深見理沙が野沢のデーターから盗みだしたG4を完成させ襲いG3 - X、キックホッパーもろともミサイルで吹き飛ばしたと確信しG4は次元の壁に消えていった。

炎が収まるとそこにはタイタンブロッカーが大きく凹んだクウガ・タイタンフォームが立っていた。

「兄貴……!!」

「小野寺!!」

「ああ……!!」

三人のライダーがそれぞれの反応を見せているとクウガは崩れ落ち変身は解除され服は焦げ血塗れで傷だらけの姿となったユウスケに

戻る。

「大丈夫か！？おい！」

G3-Xは力を加減し揺さ振るが起きず野沢の指示で関東医大病院に運ぶ事となり変身を解いた咲一はその場からそそくさと立ち去った。

「やっぱり俺は守れないのかな……………」

咲一の脳裏には身を犠牲にして自分達を守ったユウスケの姿が映っていた。

別宅に到着すると中には木野ではなく。

「咲夜に……………霊夢ちゃんまで……………」

「久しぶりね、咲一」

霊夢と咲夜が待っていた、咲一を。

関東医大病院、意識不明の状態のユウスケが運ばれ椿山が担当し緊急オペが行われた。

「死ぬんじゃないぞ……いや、絶対死なせるか……！」

院内には総と二条も居り野沢の立ち会いの元、傷の手当てをしていた。

「G4システムはG3-Xが完成したのよ」

野沢はG4システム完成するまでの系列を語る、もともとはG3-XとG4もあまり変わらないシステムだったがG4は装着者にかなり負担を掛け死に至らしめてしまうため負担が少なく、制御するためのAIチップを搭載したG3-Xを完成させG4システムは封印したのだが。

「深見理沙が自衛隊から研修に来たなんて偽ってGトレーラーに潜入、コンピュータの中から封印したG4システムを盗みだしたのよ」
「もっと早く気が付いていれば……」

「G4は呪いのシステムなんだな」

総がそう言うと野沢は頷きくと「二条くん」と突然呼び掛け。

「G4を、破壊して、私もGトレーラーに残っているG4システムのデータを消すわ」

消してもデスショットカーにG4システムは残る、だが元を消しておけば他の組織に悪用される事はない。

「わかりました、野沢さん」

「ユウスケは？」

魔理沙と出会えた幽香は関東医大に共に行き手術室の前にいた銃志郎と葦原にユウスケの容体を聞く。

「あまりよくないみたいだ、全身打撲と火傷で意識がまだ」

ギガントは通常のミサイルより強力でありデスシヨッカーが開発したとなるともつと強力な兵器と仕上がっていたのだ。

「そう……………」

「まさかお前が人間の心配するなんてな」

幽香にはあまりそんなイメージはなく思った事を口に出す魔理沙。

「そうね」

怒りはしなかった、自分でもまさか人間の心配をするとは思ってもしなかったからだ。

「今はアイツの生きるって気力に賭けようぜ」

「ええ」

手術室の方を向き中で戦っているユウスケが帰ってくるのを祈った、すると葦原は席を外し病院の外へ。

「……………木野か？オペをしてもらいたい奴がいるのだが……………」

「わかった、すぐに」

先ほど木野は別室にいたため姿を見せていないだけだった、葦原から連絡があり木野は関東医大に向かう事に。

「緊急のオペが入った」

そして関東医大へバイクで向かう、人を助けるために、残ったのは咲一、霊夢、咲夜の三人、中の空気は重苦しかった。

「……………一年半ぶりかしら？」

「そうだね……………」

「そうよ」

ただそれだけしか会話は進まなかった、咲一は何から話せばいいかわからなかったが咲夜は。

「ユウスケと戦ったのよね」

名前は知らない、だがクウガの事を差しているのと分かり頷く。

「あなた、なんでユウスケがああ異形の姿で戦っているかわからないでしょ？」

これにも頷く、木野の戦う理由は知っていた、だがユウスケの戦う理由は知らなかった、クウガとアギトの姿は近いため自分と同じよ

うに人間ではなくなっているのではないか感付いていた。

「聞いたのよ、永遠亭に行った時、ユウスケと永琳の話を」

そう、咲夜はあの時、パチユリーと永遠亭を訪れた時に聞いていたのだ、ユウスケの体で起きている変化を。

それを咲一と霊夢に話す、霊夢は初耳だった、ユウスケは誰にも喋らずこの事を隠して戦っていたのだ。

「それなのになんで彼は戦っていると思う？戦えば戦うほど人間の体じゃなくなる体で」

木野ならば人の居場所を守るために戦う、そしたらユウスケならば？

「みんなの笑顔を守るためよ」

そこは霊夢が言う、咲夜も知っていたがユウスケの話を最初に聞いた彼女が丁度良いだろう。

「最初は誰かに認めてもらうために戦っていた、だけど大事な人を失ってからその戦う理由に辿り着いた、咲一はまだ私達を失っていないよね？」

咲奈を失い今は目の前にいる二人が自分の大切な人達、この二人を失ってから何かに気付くのでは遅い、咲一は。

「そう………だね」

間が空くがちゃんと言葉を述べる。

「そうよ、咲一は、姿が変わるうとも、咲一のままいけばいいのよ」
「もしかしたら私もアギトになるかもしれない、なら私は逃げない、咲一と一緒に立ち向かう、その運命に」

その言葉を聞き咲一は自分みんなの所に帰っていいのかを聞いてみる。

「いいに」

「決まってるじゃないの」

それを聞いて次第に笑顔になっていく、すると霊夢は弁当箱を出しテーブルに置く。

「この前教えてもらったの、美味しい鯖味噌の作り方」

中には鯖味噌、白米、きんぴらごぼうが入っており質素な弁当だったがそれを勢いよく食べ始めた。

「美味しい」

その一言を聞いて霊夢の表情はもっと明るくなり自分の弟の食べっぷりを見て微笑む姉がそこにいた。

二条は外に出ていた、ああは言ったがG4を倒せる自信はなかった、何も能力がなかったただの人間が装着したパワードスーツでただの人間ではないそれを装着するために生み出された人間が装着したパワー

ドスーツに勝てるのかと。

二条は思い悩んでいたのだ、葦原と木野とは知り合い、その二人は異形の姿に変身し圧倒的な力で敵を倒す、だがいつも自分は後方に回る、そんな自分が勝てるのか、そう考えながら歩いていた。

（ただの人間が異形な人間に太刀打ちできるのだろうか）

自信を喪失していた、逃げ出したかった、戦いから、だが自分が逃げたら野沢の思いを踏み躪る、本当はG4は自分で破壊したいはずなのに彼女は自らが作ったG3-Xの装着者である二条誠に頼んだ、自分にはそういった力はない、だが自分が作ったパワードスーツで戦い一番に信頼できる部下に破壊を頼んだ、逃げ出したい自分と上司の頼みを成し遂げたい自分との板挟みとなっていた。

（俺は……………）

壁に拳を付き逃げ出したい気持ちを抑えていた、約束もあつたからだ。

（八代……………お前も逃げたかったのか？）

八代、そして椿山と大学の同期なのだ、グロンギに勇敢に立ち向かい殉職し今亡き八代に問うが答えるものは誰もいない、人間ながら異形の存在に立ち向かった八代、そして異形の存在となっても戦ったユウスケ、だがそのユウスケは緊急手術で生死の境をさまざざしている、もしかしたら戻って来ないかもしれない、もし彼が戦えるのなら共に戦いたい、そう申し出るが総も先の戦いで傷ついていた、軽傷で済んだ自分しかG4を止められるものはいない、次第にそう思い始め決心した、G4は俺が倒すと。

すると携帯に着信が、出ると小室から八王子にある自衛隊の駐屯地

がG4に襲撃されていると通報が入ったと聞き二条はGトレーラーに走って戻る。

八王子にある自衛隊の駐屯地、基地の中でG4は破壊の限りを尽くしていた、廊下を歩いていると前方に自衛隊員が数名機関銃を持って現れ一斉射撃をするがそんなものでG4の装甲は貫けない、GM-01改四式による逆襲を受け死亡、その隊員達の死体を踏み付け前進する、格納庫に入ると戦車やバズーカを構えた自衛隊員達が待ち構えており一斉に砲撃を食らうが効果はなく、戦車の砲身を曲げ向かってくる隊員を射殺、撲殺を繰り返し我が物顔で破壊を繰り返すG4、そこに格納庫の壁を突き破りG3-Xがガードチェイサーで駆け付けた。

「またお前か」

G4は呆れながら言う、自分に勝てるものは誰もいない、そう考えていたからだ、だがその力はG4システムによるもの、そんな事も気付かず、G3-Xはガードチェイサーから降りると同時にGX-05をパスワードを入力してから床に置く構える。

「まさか、肉弾戦で戦おうと？面白い、どちらのシステムが性能がいいか確かめるか、まあ決まっているがな」

G4は走りだし殴り掛かるが。

「何！？」

拳は掴まれ受け止められ逆に殴られた、まぐれだと思い蹴りを入れるが足を掴まれまた殴られ吹き飛ばす。

「装着者違うのか！？」

装着者が違う、そう考えたが装着者は二条である、そう教える。

「まさか……………お前も改造人間！？」

「違う」

「じゃあなんなんだ！」

G3-Xは深呼吸してからこう叫んだ。

「ただの……………人間だ！」

関東医大、手術中のユウスケの心臓が止まった、医療器具はずっと同じ音が流れていたが医師達はそれにめげずに電気ショックの準備をしていた。

「戻って……………！」

椿山が電気ショックをユウスケの胸に当て電気を流す。

「いい！」

一瞬音が変わるがまた同じ音が流れ続けもう一度電気ショックを使うがやはり同じ結果に、もう一度やろうとしたが手術室のドアが開き黒い手術服を着た木野が入ってきた。

「誰だ？」

「木野星也」

その名前だけで誰かわかった、凄腕の医師であると聞いているからだ。

「私もこのオペに参加させていただきます」

今は猫の手も借りたい、いや、猫の手以上の助っ人、椿山は快く了承し木野を中心に手術を再開する。

「……………」

手術室の前、魔理沙、幽香、銃志郎、葦原はユウスケのオペが成功するのを祈っていた。

その時幻想郷組は永琳か幻想郷にいるもう一人の巫女が奇跡を起こしてくれるばいいのにと思っていたが今は自分達が奇跡が起きるのを祈るしかないのだ。

「ユウスケ……………」

だが誰も気が付かなかった、電気ショックを行った事によりアークル、アマダムに大きな変化が起きているとは。

「じちそうさま！」

咲一は弁当を食べ終え大きな声で挨拶する。

「ありがとう霊夢ちゃん、おかげで元気が湧いてきたよ」
「それはよかった」

咲夜が紅茶を入れ出すとその咲夜にも礼を言う。

「おじよーやパチュ、フランにこあはどうしてるの？」
「みんな元気よ」

おじよーはレミリア、パチュはパチュリー、余談だがレミリアはパチュリーをパチエ、パチュリーはレミリアをレミィとあだ名で呼び合っている、フランはフランドールのこと、こあはパチュリーの助手みたいな小悪魔の事である、基本様とかは付けないのだ咲一は。

「みんなには心配掛けちゃったな……………っ！」

反省している矢先だった、咲一はアンノウンの気配を感じ取り立ち上がると二人にそれを伝え。

「私達も」

「行くわ」

「ありがとう」

三人は咲一がアンノウンの出現場所と予知した八王子の駐屯地に向かった。

G3-XはG4を圧していた、性能はやはりG4が上で攻撃を食らうと大ダメージを負うがそこは二条の人間としてのプライドで保たれていた、何度もパンチを食らわしていくとG4の動きは鈍くなってくる。

「そろそろ調整に戻らないとタイムリミットが」

G4にはタイムリミット、改造人間が負担に耐えられる時間があつたのだ、ただ長く扱えるだけでずつとではない、それをチャンスと思いいG3-XはG4を逃がさないように踏ん張る、そして時は来た、G4の装甲から煙が噴射され苦しみ始めた。

G3-Xを跳ね除けGM-01改四式を持ち発砲しようとしたが倒れた、G3-Xのマスクの右目は破壊され顔が露出していた。

だが、G4は動き出す、中の改造人間は死んだ、だがG4はそんな事どうでもいい、理由は人間というパーツさえあればG4は自分の判断で動けるからだ。

「もついい……………」

二条は、気付いていたのだ、戦っている時に装着者の改造人間は苦しんでいたのを、苦痛な声を上げながら戦っていたのを、その苦痛な気持ちを察しやっとなんか楽になれた、それなのにG4は動く、それに嘆き。

「もういいだろ！」

声を荒らげてそう叫びGM-01を抜き発砲しG4を打ち抜くと倒れ。

「G4システム、活動停止」

そう報告する、二条誠が人間として勝つたのだ、しかし、回りはアントロードの大軍に囲まれていた。

「まだやるのか……………仕方ない」

G3-Xは立ち上がりGX-05を變形させて持ち。

「命ある限り、俺は戦う……………仮面ライダーとして！」

するとそこに咲一達も現れ。

「変身！」

仮面ライダーアギト・グランドフォームに変身した。

「もう俺は逃げない！この姿からも、みんなからも！絶対に！」

二人のライダーと巫女とメイドはこのアントロードの大軍に挑むの

だった。

「手術は成功した、後は彼が目を覚ますのを待つだけだ」

ユウスケの手術は成功し意識が戻るのを待つだけだったが、
だが、アーケルが突然現れ金色の稲妻を放つ。

「な、何が起きているんだ？」

「ユウスケ！」

手術が終わったの知り部屋に幽香達が入ってきて今の状態を目撃する、アーケルに金色の着色が施されていたもの、ライジングアーケルに変化していたのだ。

次第にユウスケはクウガの姿に一瞬だけ変わる、マイティフォームだが金色のラインが追加されていた姿、ライジングマイティフォームだった。

第12話『G3 - X対G4!人間の意地は無限大!』(後書き)

二条さんが最終回と劇場版の台詞を……………氷川さんってただの人間として戦い続け、逃げずに戦ってきた英雄なんですよ。

次回で「再会!プロジェクト・アギト!」編は終わりその次からは妖怪の山で異変が、時の零の列車ライダーが……………誰がなるんでしょかね?

次回『覚醒!三位一体!』

第13話 覚醒！三位一体！（前書き）

ノンストップで投稿（笑）

今回でアギト編は終了です。

第13話 覚醒！三位一体！

前回、ユウスケはG4の攻撃から皆を守るため自ら攻撃を受け関東医大に搬送され緊急手術に。

咲一は霊夢と咲夜のおかげで自分の戦う理由を見付けだし一緒にアンノウンの出現場所へ向かいG4を倒した後の二条と共にアンノウンに立ち向かう、木野の助けにより手術が成功したユウスケのアイクルに異変が起きていた。

「ハッ！」

アギトはフレイムフォームとなりフレイムセイバーでアントロードを一閃し斬る！

アントロードのフォルミカ・ペデスは斧で咲夜に襲い掛かるが目の前から姿を消し背中と頭部にナイフが刺さり爆死、背後に咲夜が立っていた。

「こつちでも使えるかしら……………」

スペルカードを出し霊夢は唱えた。

「霊符『夢想封印』！」

すると複数の光弾が放たれアントロードを撃ち抜いていく、スペルカードは発動できたのだ。

「できたやった、スペルカードルールがない外の世界で」

驚きつつ『殺すため』の弾幕を使用しアントロードを倒していく。

G3-XはGX-05を使い広範囲に弾丸が発射できるように体を捻りながら引き金を引いていく。

「ハアアアアア………ハア、ハアッ！」

アギトは襲い掛かってくる敵を斬り倒していき数を減らすが減らした数だけペデスは現れる、更に鎌を持つフォルミカ・エクエスがペデスより少ないが数体现れる。

「キリがない！」

「諦めるな、戦っていれば勝機は掴めるはずだ」

G3-Xにそう言われ意気込むアギト、咲夜と霊夢もアギト………咲一をもっとバックアップするため弾幕の密度を濃くしていく。

「咲一！」

アギトの背後に迫るエクエスにお札を投げ飛ばし怯ませるとセイバースラッシュによる斬撃でエクエスを倒す。

「ありがとう霊夢ちゃん！」

「別にいいわよ、アンタをお嫁に迎えるまでは死なせないわよ」

「お嫁つて……………俺は男だよ」

横から飛び掛かりペデスを切り捨てながらしょんぼりとした声で霊夢に返す。

二人の出会いは霊夢が紅魔館に遊びに来ていた時だった。

魔理沙が図書館から本を盗むと対応を相談していた時だった。

「あれ？ここつて咲夜以外に人間いたんだ」

「そうよ、十六夜咲一、咲夜の双子の弟よ」

レミリアの言葉に耳を疑った、まさか弟がいるとは思わなかったから。

「どこに行くのかしら？」

「庭に作った自家菜園の手入れよ」

自家菜園に興味を持った霊夢は庭に出る事に。

「もしかして君が俺の姉さん負かした巫女さん？」

紅魔館は前に異変を起こした事がありその時咲夜とスペルカードルールで戦い勝利して咲一は霊夢の事を咲夜から聞いていたのだ。

「そうよ、だけどそっちが異変起こすのが悪いのよ」

「仰る通り」と返し水を撒いていく。

「これ全部アンタが育てたの？」

「うん、キャベツにピーマン、トマトにブロッコリー、今はトウモロコシを育ててるよ」

咲一は菜園で育てている野菜の種類や特徴を教えていった、楽しそうに。

「食べてみる？美味しいよ」

トマトをすすめられ嚙り付き味わつと。

「美味しい……………」

「でしょー！」

自分が育てた野菜を美味しいと言ってもらえて喜ぶ咲一は生で食べられる野菜を一つずつ食べさせた、どれもすべて美味しいと答え霊夢は満足していた。

「本当美味しい」

「ありがとう霊夢ちゃん」

そこで疑問に、なんで野菜を育てているか、里でも売っているのに。

「だって楽しいじゃん」

それだけだった、他には理由ないか聞いてみた。

「うーん……………あ、この野菜が育っていればまだ世の中捨てたもんじゃないと思わない？」

野菜を育てる中、咲一は平和を感じていたのだ。

「それに人生って美味しいじゃん」

「人生が美味しい？」

「うん、大根食べてもキュウリ食べても、何も食べてなくても美味しい、人生ってこんなに素晴らしいじゃん！」

能天気、そう思っていた、だが時間が経つにつれ咲一や咲夜の過去を知るきっかけがあった、それはパチュリーが話していたのだ。

「あの二人、姉を亡くしてるのよ」

そう、咲一は死んだ咲奈の分も人生を楽しみ、美味しく感じて素晴らしいと思いたい、それもあるから野菜を育てているのではないか。次第に霊夢は咲一の明るく能天気でお調子者だがしっかりした人柄に惹かれていた、それは咲一もだ、自分よりしっかりしているがぐうたらな部分もあるがすごく優しい霊夢に惹かれていた、気が付けば二人は付き合うようになっていた、だがその幸せはすぐに引き裂かれた。

「これは……………！」

咲一がアギトに覚醒してしまった。

(みんなとはもう……………)

そこに牛のような額に と描かれ三又の槍を持ったバッファローロードのタウルス・バリスタとクイーンアントロードのフォルミカ・レギアとまたもやアントロードの大軍が現れた。

「まだいるの……………」

これだけでも気持ちは落胆する、終わりが見えない戦いに。

「幻想郷の住人か……………」

なぜかそれを判った、だが今はそんな事よりこの状況をどう打開するかが問題、だが打開策が見出だせず諦めかけていた。

「くそ……………！」

「これでやっと貴様ら姉弟も始末できる」

タウルス・バリスタは咲一と咲夜の事を知っていた、なぜかを問い詰めると。

「貴様らの姉を殺したのはこの私だからな」

タウルス・バリスタこそ姉の仇のアンノウンであるがもう一つ。

「あかつき号で私達を襲ったのも貴様か？」

咲夜の質問を聞くと頷き返す、すべてバッファローロード、タウルス・バリスタから始まっていたのだ。

「あのあかつき号の事件はお前が……………」

G3-Xはアントロードに囲まれていたため身動きが取れなかった。主犯が判つたのに何もできずこのまま終わるのではないか、そう思っている。格納庫のシャッターを突き破り、アントロードを跳ね飛ばしていくバイク、トライゴウラムに乗ったユウスケが現れた。

「ユウスケ！」

だがそのユウスケの頭には包帯、頬には絆創膏が貼られており傷は完全に完治していなかった。

「なんとか間に合った……………」

トライゴウラムから降りるとアークルを腰に出す。

「貴様、クウガカ」

「ああ」

「では貴様の抹殺対象だ、力を持つ人間はすべてな」

アンノウンはアギトになってしまいかもしれない人間を襲う、クウガも抹殺対象だった。

「……………人間はお前達に守られて生きていけばいいって言うのか？
力を持たずただお前達に従って」

「そうだ、人間は力を持つとすぐに過ちを犯す愚かしいもの、力など不要なのだ」

タウルス・バリスタの主張ももつともだ、確かに人間は力を持つ度に過ちを繰り返してきた、だが。

「確かに人間は愚かだ」

ユウスケの口からそんな言葉出るとは誰も思っていなかった。

「大事な人を守れずもう戦えないという奴もいる、けどな、新しく守りたいものが現れるとそれを守るために立ち上がる、過ちを犯しても直す事ができ直す事もできる、何度転んだって立ち上がる、それが人間だ………だから」

一旦区切り、他のメンバーも駆け付けると口を開く。

「お前達に道案内される筋合いはないんだ！」

ユウスケは咲一に手を差し伸べた。

「俺は誰かの笑顔を守りたい、そのために戦う、コイツは誰かの居場所を守り戦う、そう信じてる」

木野や銃志郎達は変身の準備が整う。

「コイツの笑顔、悪くないかもしれないから」

まだ咲一の笑顔を見た事はない、だがきつと素晴らしい笑顔だと信じていた。

「ありがとう」

その手を握り立ち上がりユウスケに笑顔を見せる。

「貴様、何者だ？」

「通りすがりだった仮面ライダークウガだ、覚えとけ！」

仲間の言葉を使うと二人は変身ポーズを取り。

「変身！」

クウガ・マイティフォーム、アギト・グランドフォームに変身。

「俺、分かったよ、大切な人を守るのも大事、だけど一緒に立ち向かう勇気も大事って、だから咲夜、霊夢」

その後の言葉は何か分かっていた、だが聞く事に。

「一緒に戦ってくれるかい？」

「もちろんよ、私はあなたの姉なのよ」

「私だってアンタの………恋人なんだから」

仮面の下微笑み礼を言うとアナザーアギト、エクシードギルス、キツクホッパ、マグナリユウガンオー、魔理沙、幽香が駆け寄り。

「幽香いたの？」

「紫に無理やりね」

霊夢と咲夜は居たことに今気づき簡単な説明を聞き納得した。

「さて、行くか」

「あなた病み上がりなんだから無茶しないでね」

「わかってますよ」

先ほど手術が終わったばかりなのであり病み上がりなのは当然、無茶して戦おうとしているが誰も止めるものはいないだろう。

「かかれ！」

アントロード達は走りだし襲い掛かるがマグナリユウガンオー、G3-Xの銃撃で返り討ちにあう。

「雑魚どもわたし達に任せておきな！」

クウガとアギトはタウルス・バリスタ、フォルミカ・レギアにはアナザーアギト、エクシードギルス、キックホッパーが立ち向かう。アギトはフレームフォームにチェンジ、クウガもタイタンフォームとなり落ちていた斧を持ちタイタンソードに、タウルス・バリスタに斬り掛かる。

「くっ…………ハッ！」

三又の間で受け止め押し合いとなるが二人は蹴りを浴びせ攻撃。

「フ、ハッ！」

アナザーアギトは腕と足にバイオクロウというエッジを生やし攻撃、エクシードギルスもエクシードクロウ、エクシードヒールクロウを生やしてアナザーアギトと共に攻撃していく。

「ハアッ！ハッ！」

キックホッパーは素早く足蹴を繰り返しフォルミカ・レギアにダメージを与えていく。

フォルミカ・ペデスやエクエスを外に誘導し弾幕やナイフ、銃弾が飛び交っていた。

「この蟻ども多過ぎるな！」

「こんなのがいたら花も育たないわね、普通に考えて」

近寄ってくるのには閉じた日傘でぶん殴る幽香。

「ゴウリュウガン、敵は何体だ？」

【魔的反応がないため測定不能】

「だよな………ダブルショット！」

ゴウリュウガンに問うが今まで戦ってきた相手とは違うため測定できず数は分からないがこの二人に取っては数はどうって事はない、この魔弾銃士に取って一万居ようとも一億居ようとも変わらないのだ、マグナリュウガンオーとゴウリュウガン、この二人が居れば数など関係ないのだ。

「おっさんスゲーな！」

「誰がおっさんだ魔理沙！」

地の文を読んだかのように誉めるが一言余計だった。

「一気に消し飛ばした方がいいじゃないのかしら？」

それも一つの手、だがそうするには一ヶ所に集めなければ効果はない、散らばったままではただ消耗するだけ。

その矢先、【KAMEN RIDE・・・】と聞こえ【GLABE LARC RUNS】と続けて響き金と赤、緑のライダーが現れ戦い始める。

「お前達……一体？」

だが答えない、まるで操り人形のように。

「まさか意思がないのか……？」

三人のライダーはアントロードを一ヶ所に集めていき。

「彼等は操り人形だから倒しても構わないよ」

声が聞こえた、だが今はその通りにするしかない。

「マグナドラゴンキャノン！」

「恋符『マスタースパーク』！」

G3-XはGXランチャーというミサイル、マグナリユウガンオーはマグナドラゴンキャノンと魔理沙と幽香はマスタースパークと砲撃系の攻撃が放たれ三人のライダーを巻き込みアントロードを全滅させた。

「ん？これは……」

爆発の後、そこに三枚のカードが落ちていた。

その時目の前に銃を持ったシアンの仮面ライダーが現れた。

「あなたは？」

「僕は海東大樹、仮面ライダーディエンドさ」

海東大樹、ユウスケの旅の仲間の一人のトレジャーハンターであり他のライダーを召喚する事ができる仮面ライダーディエンドだ。

先の三人のライダーもディエンドがディエンドライバーとライダーカードを使い召喚したものだ。

ディエンドは赤いカードを装填しスライドさせる【KAMEN RIDE・・・】と響いてから引き金を引き【AGITO】と鳴り響きアギト・グランドフォームが召喚された。

自分と同じアギトが召喚されたのに驚くがそれだけではなかった、カードを装填すると【FINAL FORM RIDE・・・】と流れ引き金を、【A A A AGITO】と響き。

「痛みは一瞬だ」

召喚したアギトの背中を打ち抜くとクウガみたいに變形、金と赤のバイクのような姿だがサーフボードみたいな乗り物となったアギトトルネイダーに變形した。

「これに乗って追い掛けたまえ」

「ありがとうございます！」

アギトはアギトトルネイダーに乗り天井を突き破り飛んでいく、外から霊夢がそれを見る。

「咲……………」

上空ではクウガゴウラムとタウルス・バリスタが激しい空中戦を繰り広げていた。

「うおおおおおっ!」

大きな顎とスピードで攻撃しつつタウルス・バリスタはプラズマ弾を放つがアマダムはそれを吸収し金色の装甲が取り付きライジングクウガゴウラムに変化。

「これは……………!」

本人も変化に驚いていた、そこにアギトトルネイダーに乗ったアギトが駆け付ける。

「それどうしたの!？」

「海東さんって人から借りた!」

「海東さんが!？」

まさか自分の仲間がやってきているとは思わず大きな声を上げると同じように仮面ライダー龍騎を変形させた赤い巨大な龍リュウキドラグレッダーの背に乗ったディエンドもやってくる。

「久しぶりだね小野寺くん」

「海東さん!」

ディエンドはクウガゴウラムを召喚するとライジングクウガゴウラ

「海東さん久しぶり」

「僕の方こそ」

戦いが終わり一息吐いている時にユウスケと海東は再会を喜んで
いた。

「なんで海東さんはここに？」

「僕も自分の世界に帰ったんだ、そしたらデスシヨッカーって組織
が僕を狙って来たんだ、デイケイドの仲間としてね」

もしかしたらユウスケも狙われているかもしれない、そう考えた海
東はクウガの世界にやってきて案の定怪人と戦っていたのだ。

「当分はこっちにいる、またよろしくね」

「こっちこそ！」

再び一緒に戦える事を喜びつつ握手を交わす。

「木野さん、俺もみんなの居場所を守るために戦います、姉さんみ
たいな人を増やさないために！」

「頑張れよ、咲ー」

「はい！」

外の世界はアナザーアギトらの木野達に任せる事にしユウスケ達は
幻想郷へ帰るのだった。

その夜、妖怪の山の頂上らへんにある守矢神社と呼ばれる神社の鳥居の前でその巫女、東風谷早苗（とうふや さなえ）が星空を眺めていた。

「今日も綺麗な星空だな」

他愛もない事を呟き夜風に髪の毛が揺れながら星空を見ていると流れ星が横切る。

「流れ星！願い事しておこうかな？」

と手を合わせて願い事をしようとしたが後ろに何か落ちる音が聞こえた。

「なんだろうこれ？」

バックルがまるでAと緑で描かれているようなマークが描かれ右に何かカードを入れるような挿入口があり一緒にカードケースのような物も落ち着いた、早苗は手に取り中から一枚のカードが、表は緑だが裏は黄色と赤で無限（インフィニティ）と描かれていた。

「切符？」

そのカードは切符にも見えた、早苗は元々外の世界出身で神社は近

くにある湖ごと幻想入りしたものだ。このベルトから彼女の物語は大きく変わろうとしていたのだ。

第13話 覚醒！三位一体！（後書き）

いいところをカツさらうのが海東さんと俺は思っています（キリッ
ここでライジングが登場、ですがユウスケはあまり使いませんね、
ライジングマイティキックの威力に少し恐怖が。

最後に早苗が………因みにカードは無限に使えます、オーナーのマ
スターパス的なものでカードもインフィニティと描かれていますし。

次回予告

ユウスケ

「妖怪の山？」

霊夢

「行くなら気を付けて、あそこ縄張り意識高い妖怪が集まってでき
た一つの社会だから」

天狗

「余所者はこの山には入れない！」

文

「あやや………あの人はどこに行ったんだろっ」

クウガ

「ライジングマイティ使うわけには……………」

キバーラ

「アルティメットフォームの影響でここまで……………」

次回『妖怪の山』

感想お待ちしております。

第14話『妖怪の山』（前書き）

はつきし言うところも長編として扱われるかと………タイトルは決まっていないので『妖怪の山（仮）』編で。

因みにあややとけーねせんせーともこたんも結構好き。
だけどゆうかりんが！（血涙）

第14話 『妖怪の山』

「あたたた……………」

朝目覚めるユウスケ、そこはいつもの博麗神社の居間だった、小鳥の囁りが聞こえるが寝起きで体が鈍っているため傷が痛む、まだ傷は完治していない。

「まだ痛むな……………」

立ち上がり縁側に出て朝日を浴びる、大きく背伸びしていると太陽に黒い影が一瞬だけ写り何か落ちてきた。

「何だこれ？」

その落ちてきたものを拾う、新聞っぽかった。

「ぶん？」

「文々。ぶんぶんまるしんぶん新聞よ、読み方は」

起きたばっかで欠伸をする霊夢が出てきた。

「へー、こんな新聞まであるんだ」

物珍しそうに新聞を広げて読もうとすると。

「また号外？まったく記事の内容は薄いくせに量だけは多いんだから」

「どれどれ」

そこにキバーラがやってきて新聞を取って床に置き開いて記事を読む。

「妖怪の山で妖怪達の死体が発見……………妖怪の山？」

聞いた事がない名前で首を傾げていると霊夢から説明が。

「ここから見える山があるでしょ？」

神社の表の方から見える山がある、そこが妖怪の山らしい。

「アレがな」

「妖怪がそんな簡単に殺されているのを見ると……………」

「怪人の仕業か……………」

どうするかは決まっていた、妖怪の山に行こうと、だが。

「行くなら気を付けて、あそこ縄張り意識高い妖怪達でできた一つの社会で仲間の妖怪がやられたのにピリピリしてると思うから」

ユウスケは頷き朝食を食べ終えてからキバーラと一緒にトライチェイサーで妖怪の山へ向かう事にし出発した。

「行く前に里に寄ろう、山の事を慧音に聞いてからにしよう」
「さすがユウスケ、情報収集の天才」

「いやあ」と照れていると木にぶつかり掛けギリギリ避ける。

「危なっ！ユウスケ危ないわよ！」

「ごめんごめん」

里に到着しトライチェイサーを適当な場所に停めて中に入り歩いているとよく挨拶される、ユウスケとキバーラの顔を覚えて受け入れてもらっているのだ、誰も幻想郷の平和を守っている仮面ライダーだとは知らずに。

「なあキバーラ、ライジングってさ本当は何なの？」

ユウスケの口からその単語が出た事にある事を悟った。

「^{ライジング}金の力使えるようになったのね」

「ああ………凄まじい破壊力だった、もし地上で使ったら………
なんでライジングマイティになったんだ？」

「アルティメットフォームよ、ライジングフォームは通常フォームと最強フォームの中間の姿なのよ」

キバーラが言うにはアルティメットの前の前の姿でライジングの上にはアメイジングマイティフォームというのがあらしくアルティメットな更に近付いた姿である、

ライジングフォームには制限時間があるが手術の時に電気ショック、タウルス・バリスタとの戦闘でプラズマ弾の攻撃がアマダムが吸収前に地の石という物でライジングアルティメットに変身した時のエネルギーも注ぎ込まれており制限時間はなくなっているらしい。

ライジングマイティ以外にもちゃんと水、風、大地の姿も使える、ライジングの属性は雷である。

「どうかしたの？いつものユウスケなら新しい力で喜ぶわよね？」
「いや……………もし人が沢山いる場所で金の力を使ったらと思うとね……………」

人を巻き込んで敵を倒したくない、その気持ちから出る不安だった。

「ユウスケ……………」

「金の力を頼りにしないようにしなくちゃ」

話していると寺子屋に到着、中に入って職員室に行く。

「なんだ小野寺か」

「妹紅もいたんだ」

「よっ」

室内には慧音だけでなく妹紅も居たがタクミと銃志郎は居らずだった、お茶を出され飲みながら話を聞く事に。

「妖怪の山なあ……………」

タバコ吸おうと妹紅が出すとその手を慧音に叩かれ落とす。

「職員室は禁煙だ、話を戻すが博麗から聞いていると思うが妖怪の山は妖怪達が独自の社会を築き上げて成り立っている国とも呼べる、縄張り意識や仲間意識が高く仲間の妖怪がやられたと聞けば黙ってはいない、今朝の文々。新聞で恐らく妖怪達はピリピリしているだろっ」

霊夢から聞いた以外の事も聞けたため寄った甲斐があった。

「行くなら妹紅を連れて行けばいい、いいだろ？」

「もちろんさ」

「頼むよ、ところでタクミ達は？」

その二人はどこに行ったか聞いてみると。

「不動は里の見回りだろう、犬神は……………」

慧音が向く方向には妖怪の山がある、タクミはもう文々。新聞を読んで即に出発していた。

「なるほどな、じゃあ俺達も行くか」

お茶を一気に飲み立ち上がると。

「そうだな」

妹紅は立ち上がって二人と一匹は職員室から出ていくと慧音は窓から外を覗いて空を見る。

「何事もなければいいのだが……………」

そしてトライチェイサーで妖怪の山に向かうユウスケと妹紅、キバ

ーラ。

「幽香じゃなくて残念ね」

「キバーラ何言ってるの!？」

「ほほ、お前は風見幽香にホの字なんだな」

「妹紅まで!」

少しバランスを崩すが立て直し真っ直ぐ走行を進め魔法の森の中に入り道無き道を進んでいく。

「少し早くね?」

「そう?」

魔法の森は魔力が高く薄暗くじめじめしているため茸の胞子が舞いそれを吸い気分を悪くする事もあるからさっさと魔法の森から出たいのだろう。

思惑通り魔法の森から早く出て走行を続ける、数分後には妖怪の山に到着、参道に入ろうとしたら。

「待て!」

前に山の妖怪、天狗が何人が降り立ち行く手を塞いだ。

「この妖怪の山には余所者を何匹たりとも入れさせません!」

その中のリーダーらしき天狗1はそう宣言しそこで気になった事が。

「ん?わたし達が来る前に男が来なかったか?」

「お前は竹林の……… ああ、来たが追い返した」

追い返した、そうならば引き返すタクミと会うはず、だが会わなかったとなると。

「あ、タクミ」

ユウスケの目に天狗達の後ろにいるオートバジンに跨り駆るタクミが入る。

「バカ！」

どうやら囿にしたらしいがそんな事を知らずにバレてしまい。

「待て人間！」

「逃げよ！」

そのままタクミは参道を走りだし逃走を測る。

「待て〜！」

天狗達はユウスケ達を放っておいてタクミを追い掛けた。

「……………行こうか？」

「そうだな」

「そうね」

トライチェイサーから降りて押して歩く事に。

「あれ？小野寺くんとキバーラは？」

海東も神社に寝泊まりしておりなぜか神社の屋根の上から賽銭箱の前に降り立つ。

「ユウスケ達なら妖怪の山よ」

霊夢は答えた、なぜ行ったかは文々。新聞を見せた、その記事の内容を見て把握。

「なるほどね……………僕も行ってみようかな」

その際ユウスケにも注意したように海東にも妖怪の山がどんな場所か注意を促す。

「わかった、気を付けるよ」

そして海東は走りだして博麗神社を後にした。

「……………仮面ライダーってこんなにじっとしてるのが苦手なのかしら」

総と薙も見回りのため外出している、咲一もアンソウンの気配を感じたらじっとしておれずよく飛び出すと咲夜から聞く。

「私も仮面ライダーになればわかるのかしらね」

そう思いながら掃除を続けた。

（今日は咲一からもらった野菜で野菜炒め作るー）

夕飯の献立を考えつつ手を止めない皆の帰りを待つのだった。

妖怪の山の参道、ユウスケと妹紅は歩き進み、キバーラはユウスケの肩に座って羽根を休ませていた。

「あの妖怪達が戻って来ないとなるとタクミが上手く引き付けてくれているんだね」

「そうだな、アイツには犠牲になってもらったよ」

「妹紅も悪だね」

「ユウスケほどじゃ」

怪しい笑みを浮かべながらタクミの犠牲で道を進めていた事に喜んでいた。

「てかさっきの妖怪って何なのよ？」

「あーりゃ白狼天狗だな、妖怪の山の警備団の」

「天狗！？ 天狗ってあの羽根があって鼻とが長くて長い下駄履いてるあの！？」

オーバーリアクションを取るユウスケ、それを笑いながら見るキバーラ。

「ま、まあ間違っちゃいないけど……天狗と言っても種類はいるからな、さっきのは白狼天狗って主に警備を担当する奴、

文々。新聞とかそういう広告書いているのは鴉天狗、天狗は昔から幻

想郷に住んでいる妖怪だからな」
「なるほどなるほど」

後は河童もいると聞くと少し苦笑する、河童にはいい思い出があまりないからだ、仮面ライダー響鬼の世界で魔化魍まかもうと呼ばれる怪人であるが妖怪に近い種族に河童がおりそれが出現した時すごい声を上げて逃げていたのだ、それから河童が少し苦手となり河童巻きを食べれなくなっただとか。

「まだいっぱい妖怪いるんだな」

「ああ、この山に地下に繋がる穴があつてな、そこから旧都って鬼や色んな妖怪が住んでる都市があるんだ」
「鬼まで」

響鬼ライダーズは名前の通り鬼で心、技、肉体を極限まで鍛え抜いて変身できる仮面ライダーである。

「仮面ライダーってまだそんなにいるんだな」

響鬼ライダーズの事を話すと他のライダーズの事を話す、ダブルホッパーらのカブトライダーズはクロックアップ使ったりブレイドライダーズはカードを使い能力を解放するとか。

「カード使うライダーは後二つ有ってね、まずはデイケイド、色んな仮面ライダーに変身できてその能力も使う事ができる、後は龍騎……………」

龍騎ライダーズの事を話そうとしたら声が聞こえてきて空を見上げると何者かが黒い鴉のような羽根を広げ目の前に降りてきた。

「黒くてすばしっこい奴が来たな」

「あなた方は一体どうやってこの道に入ったんですか？」

降りてきた天狗の少女はかなりピリピリしているように見えた、霊夢や慧音が言っていた通り仲間意識が強く山の妖怪が殺されたのは本当のようだった。

「というか妹紅さん？」

「悪いな、コイツに山の案内していたんだ」

ユウスケとキバーラに指を差してなぜこの山に来たか説明、妹紅が着いてきたため話がしやすかった。

「ですけど、今朝の新聞の通り今ここはかなりピリピリしてます」

「それが気になるから調べに来たんだよ」

「妖怪の山の問題は山の妖怪で解決しますからお構い無く」

平行線の会話を続け拉致が開かなそうと考えたユウスケは割って入って自己紹介をする、キバーラもつられて名乗る。

「私は射命丸文しゃめいまる あやです、文々。新聞を発行している鴉天狗です」

「君がああの新聞を……」

「あの記事読んだんなら早く山から降りてください……」

ピリピリした雰囲気だけではなくそわそわした雰囲気も出していた。

「他にも何かあるの？」

「あ……一人迷子になってしまった人がいます……」

疑問に思い聞いてみると答えてくれたため深く聞いてみる事に。

「数日前、この山に人間が現れたんです、しかも外来人、あの時は博麗神社に行ったのですが霊夢さんが留守で外来人の人間とそこにいるキバーラの二人がいた時です」

ユウスケ達が外の世界に行っている時とわかった。

「酷い怪我だったので永遠亭に運んで診てもらったのですが……そしたら永琳先生はここ（妖怪の山）で見付けたらその山の妖怪で外に帰るまで面倒見なさいって……」

「それで目を覚ましたそいつは興味を持って山山中探検してるって事か」

「はい」と疲れた表情を見せながら返すと。

「じゃあその外来人を俺達が探すでいいか？ そしたら俺達がここに居てもいいか？」

取引だった、ユウスケは探す代わりに山にいることはつべこべ言わず黙認しろという事だった。

「取引ですか……分かりました、私からみんなに話を付けておきますがその代わり私と一緒に行動してもらっても構いませんよね？」

郷に入ったら郷に従え、先ほどの取引を了承してもらえたためこれ以上何かを求めるのは我儘であると判断、共に行動するのを了承するとすぐさま文は先ほどの取引の事を仲間を伝えるべく飛び去った。

「速いな、あの子」

「幻想郷最速だからな」

するとすぐに戻ってきた、山の妖怪のネットワークならすぐに広まるから一人に伝えれば全員伝わるといふ。

「では行きましょう」

四人は参道を進み山を登って行くのであった。

「侵入成功」

海東は参道から入らず木に登り枝から枝へと飛び移って移動していた、天狗が巡回しているのに気付いたからだ。

「何かあるのは確かだな……………ここに僕が欲しがるようなお宝はあるのだろうか……………」

枝へまた飛び移ると人影が見えた。

「人間？ 確かこの山は人間の出入りは禁制のはず、気になるね」

海東はその人影を追い掛ける事にし素早く移動していくとすぐに追いつき。

「待ちたまえ」

人影の前に降り、正体は一人のカメラを持ち肩掛けバッグを肩からぶら下げた青年だった。

「アンタ誰？」

名前を問うと細かい事は気にしない海東は名前を名乗りトレジャーハンターも付ける。

「俺は………城戸シンジ、ジャーナリストでカメラを担当してる」

「城戸シンジくんね………君はどこの世界出身？」

海東にはすぐ判ったのだ、彼はこのクウガの世界の出身の人間ではないと、シンジも判っていたが確証がなく困っていたが海東のおかげで確証が掴めた。

「俺は仮面ライダー龍騎の世界の人間なんだけど………レイドラグリーンとハイドラグーンの群れに突撃してそれからは何も」

「君も仮面ライダー？」

「ああ、俺は仮面ライダー龍騎」

シンジはその証拠に龍の顔が描かれたカードデッキを見せる。

「後………」

今度はコウモリの絵が描かれたカードデッキを見せた、それは仮面

ライダーナイトになるための物だった。

「それはナイトの………」

シンジは自分の身に起きた事を話し始めた。

〈数日前〉

シンジの龍騎の世界、そこではライダー同士が願いを叶えるために戦うライダーバトルが神崎士郎という男が開き戦わし、ライダー達は命を落としていつていた、神崎の思惑通り。

ライダーの数は少なくなっていき残ったのはシンジの龍騎、秋山レンが変身する仮面ライダーナイト、そして仮面ライダーリュウガと神崎の分身でもある仮面ライダーオーデイン。

「残ったのは俺とお前みたいだな」

「そうだな」

シンジとレンはライダーバトルの真実を知っていた、願いを叶える代わりに自分の命を失い神崎の死んだ妹の神崎優衣に注がれると、二人は鏡の世界、ミラーワールドの優衣の命を貰い二十歳までしか生きられない優衣と会い親友でもあったが何回もシンジやレンとい

ったメンバーでライダーバトルは繰り返されていたのだ。

「どうする？ 俺達が戦って誰がオーデインと戦うか決めるか？」

「……………願いは叶えたい、優衣の命を何とかしたい、けどな城戸、アイツがそれを願っているとも思うか？」

「同感、優衣ちゃんはそのような事願ってないんだ、だから俺達は」

二人の考えは一致していた、神崎士郎を、ライダーバトルを止める
と。

「城戸、お前はリュウガを任せる」

「お前はオーデインを頼むな、レン」

それぞれ倒すべきものを決めその者が待つ場所へ向かい変身し戦い
シンジは自分の影であるリュウガを倒したが。

「レン！」

レンはオーデインと相討ちとなりその命は風前の灯だった。

「城戸……………」

「しつかりしろよ！ レン！」

「俺は……………お前を唯一の共だと思っている……………だから、お前だ
けには生きていて欲しい……………」

「ならお前も生きるよ！」

レンは少し笑うと「バカ」と呟いてから目を閉じ一生を終えた、手
にナイトのデッキを持ちながら。

デッキを持つとシンジは空を見る、そこにはミラーワールドと現実
世界を繋げる亀裂ができておりミラーモンスターと呼ばれる種類の

怪人の群れが出てきていた、優衣は命を貰うのを拒み自害しその事に絶望した神崎はミラーワールドと現実世界の境を無くしてしまったのだ。

「……………変身！」

シンジは仮面ライダー龍騎サバイブに変身しドラグランザーという龍に乗りその亀裂を指しミラーモンスターの群れの中を特攻したのだった。

〈現在〉

「その後の事は覚えていないんだ、気付いたらここに」

まさかクウガの世界に飛ばされているとは思っていなかったらしい。

「そうか……………オリジナルの龍騎に近い世界、EPISODE
FINALの世界から……………」

海東はその世界を龍騎の世界ではなく龍騎EPISODE FIN
ALの世界と判断した。

「俺の世界はどうなったか判らない」

最後に付け足すと物音が聞こえ身構えた、姿を見せたのは。

「酷い目にあつた」

オートバジンを押すタクミだった。

ユウスケ、キバーラ、妹紅、文は山に現れた外来人、城戸シンジを探して参道を歩いていた。

「え、あなた方が来る前にも人間が？」

「ああ、犬神タクミって奴、この前お前が慧音んとこ来た時にいた」

「あ、あの方の彼氏さん」

何か誤解していた、どこからか違うと二重に響くが気のせいだと思
い進んでいるだが、

今度は悲鳴が聞こえ何事かと思いついてトライチェイサーを置いたまま走
って声が聞こえた方向へと向かうと。

「こりゃ……………」

天狗達が血塗れで倒れ息耐えていたからだ。

「ど、どうなっているんですか!？」

目の前に鼻先に大きな血に塗れた角が生えたサイミたいなグロンギ
怪人、ズ・ザイン・ダと鋭い牙と腕のカッターが特徴的で血に塗れ
ているピラニアのグロンギ怪人、メ・ピラン・ギが立っていた。

「グロンギ……！」

この天狗達を殺害したのはこの二体なのは明白だった。

「まさか……この数日間で妖怪達を殺したのは」

このグロンギ怪人達であった。

ザインとピランは次の獲物が見付かったと思いきや襲い掛かろうとした
がユウスケが前に出て誰かを守りこれ以上誰かを傷つけない、これ
以上奴等のために流す涙と失われる笑顔を増やしたくない、そう願
いと決意を込めて叫ぶ……

「変身！」と、ユウスケはだんだん赤く燃えるような姿に変わって
いき仮面ライダー・クウガ・マイティフォームに変身した。

「ユウスケさんが……仮面ライダー」

文々。新聞でも仮面ライダーは特集した事があるがまさかユウスケ
がクウガとは思ってもみなかった。

クウガは二体の怪人に挑み飛び跳ねて殴りかかる。

「ハアアアアッ！」

パンチはピランの顔面に命中するがザインが背後からクウガの首を
腕で締め上げる。

「グウウウウ……！」

腕を震わせながらザインの手を掴み力付くで放そうとするがザインの方が力は強く引き離せなかった。

「グウウウウ……………超……………変身……………！」

途切れ途切れだが精神を集中させタイタンフォームに変身しザインを背負い投げをし地面に叩き付ける、

トライチエイサーはこの場に向かう時に参道に置いてきてしまったため剣となる武器はなく持ち前の怪力とトドメはマイティキックで決めるしかない。

「ギシャーー！」

ビランはクウガに飛び掛かり噛み付いてきた、甲冑を纏っている所ではなくない場所を噛み付いたためダメージを食らい膝を付くが殴り飛ばして距離を離す。

「ユウスケー！」

隣に妹紅とキバーラ、文が駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「なんとか……………」

クウガは立ち上がる際に落ちていた木の枝を拾い今度はドラゴンフォームに、ビランはまた飛び掛かるがその枝を突き出した瞬間ドラゴンロッドに変化しその杖先は命中しカウンターの要領でスプラッシュドラゴンを炸裂する。

止まった。

(……………この力を使ったらみんなを巻き込む)

クウガはその場で止まったままでいい的だった。

「なんでユウスケ止まってるんだよ！」

「まさか……………」

キバーラに分かった、ライジングフォームを使おうとしたの思い止まったのを、蹴り飛ばされ更にタックルで跳ね飛ばされてしまう。

「ぐうっ！」

拳を振り上げられもろに顔面に命中すると次はアームハンマーを食らい地面に叩き付けられる。

「ユウスケ〜！ このっ！ このっ！」

キバーラはザインの回りを飛び回り注意を向かせようとしますが興奮し切っていたため意味がなく何度もクウガを踏み付けていた。

「その場しのぎでしかないですが……………風符『天狗道の開風』！」

文はスペルカードで前に向け竜巻を放つ。

「ひゃっ！」

キバーラはすれすれで避けザインは竜巻で吹き飛ばされる瞬間を直視する。

(竜巻……………)

竜巻を見て何かを思った、この竜巻がザインをライジングフォームを使わず倒す方法を思い付かないかと。

竜巻で吹き飛ばされたザインはそのまま逃走するとクウガは立ち上がり力を抜くと変身が解け倒れ込む。

「そっぴゃ病み上がりだった……………」

ここまで話が進んで覚えている人が居るかわからないがユウスケは病み上がりで外の世界での戦いの傷はまだ癒えていなかった。

「大丈夫かよユウスケ！」と妹紅達は駆け寄る。

「ギリギリ……………」

だが糸が切れた人形のようにうつ伏せとなり意識を手放した。

「何か起きたみたいだね」

海東達が今の戦いに気付き向かおうとしたがそこに次元の壁が現れ中から。

「見付けたぞディエンド」

龍騎ライダーズのメカニカルで銀と緑色の仮面ライダーゾルダとフ

アイズライダーズの一人、 を模した仮面で眼がオレンジで白いフトンストリームが流れる仮面ライダーデルタ、カブトライダーズの一人で仮面の眼がトンボの羽根みたいな形でもその羽根みたいな物が取り付き銃を持った水色の仮面ライダードレイク・ライダーフォームが現れた。

「デスショットカーに歯向かうものは有罪だ有罪」

ゾルダは銃型の武器マグナバイザーを抜き引き金を引いて銃弾を乱射、三人が避けると地面に火花が散る。

「銃使いのライダー達が……………」

海東はディエンドライダーを出しライダーカードを装填しスライドすると【KAMEN RIDE．．】と響きディエンドのマークが武器に浮かび上がると【KAMEN RIDE】という文字も浮かぶ。

「やるしかないみたいだな……………」

タクミはファイズドライバーを巻いてファイズフォンを開いて5を三回押しエンターを押すと【Standingby】と響く。

「あまりやりたくはないけど……………」

シンジは龍騎のデッキを持ち変身を決意すると腰に変身ベルト、Vバックルが現れる。

「変身……………」

引き金を引き【DIEND】と響かせるとディエンドに、
ファイズフォンを閉じてファイズドライバーに装填するとファイズ
に、
デッキをバックルに入れると影がオーバーラップしシンジは赤いス
ーツに銀の仮面と鎧、左腕に赤い龍の頭を模した道具、ドラグバイ
ザーが装着された龍の騎士、仮面ライダー龍騎に変身した。

第14話『妖怪の山』（後書き）

デルタとドレイクは海東がアギトの世界で召喚した仮面ライダーだつたりします。

城戸シンジはEPISODE FINALみたいな世界ですがナイトが死亡という結末で。

因みに文が竜巻放ったのは伏線なんです、ザインを倒すための。次回はユウスケ、妹紅、文の共同による必殺技が。

次回予告

ファイズ

「10秒間付き合ってやる！」

龍騎

「あれ？ アクセルベントなんて有ったっけ？」

妹紅

「その体で何する気だよ！」

ユウスケ

「奴を倒す方法が頭の中でできてるんだ……………」

クウガ

「文！ 竜巻を俺を中心に起こしてくれ！」

文

「わかりました！」

【Altair Form】

ゼロノス

「私はかゝなり強い！」

クウガ

「これが……ライダーきりもみシュートだ！」

次回『巻き起こせ、竜巻！ライダーきりもみシュート！』

第15話『巻き起しせ、竜巻！ライダーきりもみシューター！…』(前書き)

内容いつもより薄い気が……………

第15話『巻き起こせ、竜巻！ライダーきりもみシュート！』

【ATTACK RIDE・・・BLAST】、デイエンドライバーから無数のシアンの光弾が放たれデルタに襲い掛かるがデルタはデルタフォンとデルタムーバを直結させ組み立てたフォンブラスターを抜き「ファイヤ」と音声入力すると【Burst Mode】と鳴り響き白いレーザーを放ちシアンの光弾を打ち落としていく。

「ちっ…………やるね…………」

だがデルタは音声入力する時だけしか声は出さず無言で引き金を引き続けていく。

「貴様も有罪だ有罪！」

ゾルダは両肩で背負うように装備した砲台ギガキャノンで強力なビームを放ち攻撃する。

「危ねっ！」

龍騎はすれすれで避けるが次の砲撃が放たれまた避ける。

「すばしっこいな！ すばしっこい奴も有罪だ有罪！」

「有罪有罪うるさいな！」

龍騎はドラグバイザーをスライドさせカードの装填口を出すとデッキからカードを出し装填しまたスライドすると【SWORD VE NT】と電子音が鳴り空から龍の尻尾を模したような剣ドラグセイバーが降ってきてそれを持ちゾルダに突貫していくが。

「バカが！」

「おわっ！」

やはり砲撃の前には歯が立たず接近できなかった。

「こりゃ近付けねーな」

ファイズは木の陰に隠れドレイクのドレイクゼクターによる銃撃を避けていた、オートバジンは自動的に主人の危機を察知しバトルモードに変形しドレイクに向け遠慮無し全力全開の銃撃を行う。

「こういつ時に豪快にやれば文句ないのに俺ごと撃つからな……」

軽くため息吐いていると【Clock Up】と聞こえ銃撃が止みおかしいと思い振り向くとそこにドレイクは居らず。

「どこ行き……っ！」

何かにぶつかったように弾き跳ばされ地面に落ちる前にまた弾かれ宙を舞う、ドレイクはクロックアップを使い高速移動をしている模様だった。

「こんやろ……………」

地面に転がり込み起き上がると弾かれながらファイズポインターを取り外しミツシヨンメモリを挿入し右足に装着し受け身を取りながらチャンスを待つ。

「おわつと!?!」

龍騎はゾルダの砲撃をやはり避けるだけでドラグセイバーで受け止めたりする。

「拉致が開かねえ……………」

デッキからカードを出すと首を傾げた。

「アクセルベントなんて有ったっけ?」

それは龍騎のカードにあるはずのないカード、アクセルベントだったがこれはまたのないチャンス。

「まあありがたく使わせてもらっぜ!」

ドラグバイザーにそのカードを装填するとその効果は発動し一時的に加速。

「くっ!」

「おらああああっ!」

加速しドラグセイバーでゾルダに斬撃を食らわせていく。

「行くよ！」

「やけくそだ！」

ファイズブラスターから必殺光線ディエンドフォトンが発射しデルタを直撃し大爆発を起こし炎が消え残ったのはデルタドライバーとデルタフォンだった。

「あだあっ!?!」

ファイズブラスターを放り投げるとファイズの姿に戻る。

「てめえな！」

完全ぶちギリで殴り掛かろうとしていたが軽く避けてデルタドライバーとデルタフォン、ドレイクグリップを拾うと変身を解いた。

「これは使えそうだから貰っておこう」

ニヤリと笑いながらどこぞにそれらを仕舞いまたタクミに殴られそうになるが避ける。

「わるすぎる!?!」

勢い余ってシンジが殴られた、海東は山の頂上の方角を見ていた。

「この山、何かあるのかな……………」

「あだだだ〜……………」

山のどこかにあるブン屋、その小屋の中でユウスケは目覚めた、起き上がるつもりしたら全身に痛みが走りまた倒れ込む。

「まだ寝てるよ」

隣には妹紅とキバーラが居り止められるが無理やり起き上がるつもり。

「だから寝てなきゃダメよ〜！」

「いや、今やらないと、1分、いや、1秒でも早く」

ユウスケがザインの倒し方に何か掴んだようだった。

「何か掴んだの？」

「ああ、竜巻だ」

脳裏に文がスペルカードで竜巻を放つ場面が浮かんでいた。

「竜巻のように投げ飛ばして落ちてくる時に上に飛んで回転しながらキックをすれば倒せるはず」

外に出て地面にその図を木の枝で描いて説明。

「相手の落下する勢いを利用して当たるのを待つような感じか……なるほどな」

「今からその特訓をな」

「はあ!?」と声が上がった、理由はもちろんその怪我で何をすることがつりなのかである。

「何か手頃な岩を上に向かって投げる」

「やめろ!」と制止されるがユウスケの決意は変わらずもう「やる!」とオーラを醸し出していた。

「こうなったら止まらないわよ……………」

「まったく……………」

呆れていたがしょうがないと思いつつ付き合っ事に。

「やんぞー!」

どこかにある崖の下、横には滝が流れている。

その崖をユウスケは登っていた、生身で、まずは体を温めてから動こうと登っていた。

「ファイト〜!」

そして手を伸ばして岩肌に掴むとその岩は崩れて下へ落下。

「あー！」

「おっと」

そこで飛んでる妹紅が腕を掴んで下まで下ろす。

「やっぱやめといたら？」

「まだまだ〜！」

また登り始めたのだった。

「これは……………」

参道、トライチェイサーはそのまま置いたままでそこに河童の少女、
河城かわしろにとりがやってきた。

「バイクという物じゃ……………」

興味深そうに見ていた、よくよく見るとトライアクセラーは差しっ
ぱなし、いわゆる鍵は掛けたまま。

「そうだ、これを元にしてこの前香霖堂かうりんどうで買ったあの設計図の通り
に作ってみよ！ “ビートチェイサー2000”を！」

にとりはトライチェイサーを押しして自分の住み家へと戻って行った。

「やっと参道に出たね」

にとりが去った後に海東達三人は森の中から参道に出てきた。

「お前まだ話は終わっちゃ！」

まだタクミは変形された事に怒っていたがシンジが落ち着かせていた。

「さ、頂上を目指そうと」

「勝手に仕切るな！」

三人は頂上へ目指し足を動かした。

「体は十分に暖まったな」

ユウスケ崖を登りきり軽く体操し回りを見渡しながらそこらにある自分の背ぐらいある岩を見つける。

「まずはこれを持ち上げないと話は始まらないよな」

「おいおい持てるのかよ」

妹紅に突っ込まれたが「まあ見てて」と返し岩を掴んでゆっくり持ち上げる。

「おー、持てましたね〜」

文は戻って来ており特訓を見物していた。

「うおおおおおお………」

脳裏に竜巻を浮かべながら回転するかのようについに体を捻り。

「オリヤアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

気合いを入れ声を上げて岩を上へ向けて投げるがあまり飛距離はな
く落ちてきた。

「あまり飛びませんね」

「ユウスケ、やっぱり無茶じゃ」

「大丈夫！ 竜巻をイメージして……………ハアアアアアーツ！！
!!!!!!!!!!!!!!」

また岩を持ち上げて上へ向けて放り投げるがやはり飛距離は伸びな
い。

「まだまだだ！」

だが諦めずユウスケは同じ行動を繰り返したまた岩を持ち上げ投げる
という行為を繰り返していった。

「アレ、体保ちますかね？」

「保たないかもな」

「わからないわよ、ユウスケは意外性がスゴいから成し遂げちゃう

かも」

遠くから眺めているとユウスケは投げた岩の下敷きとなり身動きが取れなくなった。

「やっぱり訂正しようかしら」

文は仕方ないと思い突風を起こして岩を退かした。

「うーん、どうしたら……………」

考えているとまた何処からともなく悲鳴が響いた、その方向へ走りだす一同、走っていると目にしたのは。

「にとり？」

「あ、文！」

「それ俺のバイク！」

やはりザインが現れたのだが襲われていたのはトライチェイサーを運んでいたにとりだった。

「ってなんで人間がいるの!？」

「今はいいから逃げて!」

ユウスケは走りだしクウガ・マイティフォームに変身した。

「アレが……………仮面ライダー」

変身のメカニズムが知りたい、そんな目をしていた。

クウガはザインに殴り掛かるが簡単に拳は受け止められ投げ飛ばさ

れるが上手く着地し走り迫るザインに足払いを掛け転ばせる。
持ち上げようとするが蹴られて木に激突、角を前に向け走りだしてきたため横に移動して避けるとザインの角は木を貫通し抜けなくなる。

「くっ！」

ザインを羽交い締めしタイタンフォームとなる。

「うおおおおおっ！……！！！！！！」

そのまま持ち上げると上へ向かって投げ飛ばす。

（飛距離が余らない！）

マイティに戻る暇もなくザインは地面に落下。

「ダメか……………」

ザインはすぐに立ち上がり突進し跳ね飛ばす。

「くっ……………！！」

「ダメですね……………」

投げ飛ばしても飛距離がなければ意味がない。

「もっと高く投げたいの？」

突然にとりが話し掛けてきた。

「できた……………」

最後にそう呟き空を見上げていた。

「それで俺のバイクどうしようとしたの？」

その後、にとりにトライチェイサーを何をするために運んだか聞いていた。

「えっと……………バイク作るからそれを元に……………」
「バイクを？」

にとりは頷き返した。

「香霖堂でバイクの設計図買ったから……………」
「そうだったんだ……………だけどダメ、このバイクは大事な人からもらった物だから」

にとりは渋々「はい」と返す。

「だけどまさかあんな風にライダーきりもみシユート使うなんて」
ライダーきりもみシユートとは仮面ライダー1号と2号が使っ投げ技である。

「さて、これで妖怪の山も静かになると思っけど………」

シンジが見つからなかったと考えていると光弾が放たれてきた。

「な、なんだ!？」

発射してきた方向を向くとそこにはクラゲのような怪人、ジェリー
イマジンが立っていた。

「イマジンだと……!」

先の戦いから時間もあまり経たない内に怪人、ユウスケは変身しよ
うとしたら。

「待ちなさい!」

女性の声が響いた、後ろから走ってやってきたのは。

「早苗さん!？」

守矢神社の東風谷早苗だった。

「そ、それ!」

キバーラの目に止まったのは早苗の腰に巻いてあるベルト、ゼロノ
スベルトだった。

「下がってください! あの妖怪は私が倒しますから! 変身!」

ゼロノスカードを取り出しバツクルの自動改札口みたいな挿入口に

挿入すると【Altair Form】と響き早苗の姿は変わり、緑色の二つの眼に胸のY字で線路に見える黄色いラインが目立ちベルトの両サイドに四つのパーツが付いた。

「最初に言っておきます！ 私はかゝなり強い！」

仮面ライダーゼロノス・アルタイルフォームに変身した。

第15話『巻き起こせ、竜巻！ライダーきりもみシュート！』(後書き)

自力ではなく文の力もありライダーきりもみシュートはなんとか使えましたがユウスケの成長次第で単体で頑張れるかも。

卍キックは回転しているので………まあこれもちゃんと使えるようになるのはまだまだ先。

最後に早苗がゼロノスに！

なぜゼロノスかは色的に、因みに原作キャラがライダーに変身させる基準は色と見た目で決まります、後少し性格？早苗は完璧色です。

次回予告

早苗

「やったー！」

ユウスケ

「スゲー見た事あるような………」

キバーラ

「これマスターカードじゃない！」

にとり

「そのベルトを私に！」

デネブ

「初めまして、デネブと申します」

早苗

「八代さん？」

Aゼロノス

「私も……………みんなの笑顔の為に……………！」

デネブ

「一緒に戦おう！」

【V e g a F o r m】

次回『東風谷早苗の“ゼロのス”タートル〜Action Z
ERO〜』

サブタイに懲り過ぎた（笑）

感想お待ちしております、結構ライダー寄りのためライダーしか知らない人も、東方好きな人の意見も聞いてみたいのでライダー知らない人もできたら。

第16話『東風谷早苗の“ゼロのス”タートル〜Action ZERO〜

タイトルにこだわってます、某トリロジー風に練って更には挿入歌
まで……………

今回はシンジとタクミは違うライダーに。

「私はかゝなり強い！」

前回、ザインをライダーきりもみシュートとマイティニキックで見事倒したユウスケはトライチェイサーをにとりから返してもらいもう妖怪の山は大丈夫と思つた矢先、

ジェリーイマジンが襲撃してきてユウスケはクウガに変身しようとしたがそこに守矢神社の巫女、東風谷早苗が現れ仮面ライダーゼロス・アルティフォームに変身し戦い始めたのだつた。

「ハアツ！」

「がつ!？」

ゼロノスはジェリーイマジンを思い切り殴り飛ばすとその際にベルトに付いた四つのパーツを取り外し組み立て巨大な剣、ゼロガツシヤー・サーベルモードに組み立てると大きく振り上げジェリーイマジンを斬っていく。

「ゼロノス………電王ライダーズの仮面ライダーよ」

仮面ライダー電王、他のライダーとは異なる点が多いライダーでその戦う相手のイマジンが憑依する事によりそのイマジンの特性に合

ゼロノスは飛び跳ねてキャツキャツと喜ぶとベルトを取り変身を解除した。

「見ました見ましたあ？ あの妖怪を倒しましたよ〜！」

怪人を倒した事を自慢する早苗を見てユウスケは首を傾げていた。

「スゲー見た事あるような……………」

脳裏にかつてクウガに成り立ての頃八代の前でグロンギ倒して自慢して飯をおごつてとせがんだ自分だった。

「ああ、なるほど」

納得してまず本題に、なぜゼロノスベルトとゼロノスカードを持っているかだ。

「落ちてきたんです」

その言葉に全員耳を疑った。

「はい、この前夜に空を眺めていたら流れ星が流れてお願い事しようとしたら後ろに落ちてきたんです」

嘘偽りは無さそうだった、ニコニコしながら言っていたため疑えなかった。

「ちょっとそのベルトを私に〜」

にとりはゼロノスベルトに興味を持ち貸してほしそうによるよろと近付くがそれはもちろんダメであった。

「だけどなんで使い方解ったの？」

一番の疑問はそれだった、なぜ使い方を知ったのかを。

「色々試したんです、そしたら変身できるって判ってそれから」

「ねえ、カード見せて？」

「え？」

キバーラは早苗が持つゼロノスカードを見せるように言い見せてもらうと。

「これマスターカードじゃない！」

「マスターカード？」、全員揃って呟くとキバーラからゼロノスについて説明が、ゼロノスカードはあるものを消費して変身できるよようになるのだがこのマスターカードはそれを消費せず変身できると。

「その消費するものってなんだキバーラ？」

「それは……………変身者が存在した記憶よ」

驚愕した、ゼロノスは自分が存在したという記憶を引き替えに変身すると、だがこの幻想郷は忘れられたものが辿り着いたりする場所だからあまり意味はなさそうだが。

「よかったね早苗、それがマスターカードだったので」

「は、はい……………」

軽く涙目になっておりびくびくしていると妹紅は石を持ち後ろの木に投げ付けた。

「そこに居るのは判ってる、出てこい」

何かしらの気配を感じて石を投げたようだった、その当たった木の影から出てきたのは黒子みたいな怪人だった。

「妖怪!？」

「ありやイマジンだな……………」

黒子イマジンは「こんにちは」と丁寧にお辞儀して挨拶してきたためユウスケ達もお辞儀して挨拶した。

「初めまして、デネブと申します」

黒子イマジンの名前はデネブというらしく目的を聞くと。

「そのベルトを探していたんです」

早苗のゼロノスベルトに指を差して言うと言いつつ仮面ライダーを抹殺するための刺客だと思いきや違った。

「俺はそのデスショットカーの裏切り者なんだ」

「ショットカーの……………裏切り者？」

「ああ、そのベルトは元々デスショットカーの物だったんだがやり方が気に入らなくて一人でそのデスショットカーに立ち向かう仮面ライダーを見てベルトと一緒に組織から出たんだ」

ショットカーの事を知らない妹紅以外の幻想郷組に簡単に説明しデス

シヨツカーの魔の手がこの世界にも迫っていると話す。

「じゃあそのお前が味方に付いた仮面ライダーって？」

「その仮面ライダーに君を助けるように言われたんだ」

ユウスケに指を差して「俺え？」と自分に指を差してリアクションを取るユウスケ。

「その仮面ライダーって誰なんだおデブ？」

完全に妹紅から間違った名前と呼ばれたため「デネブです」と訂正し。

「仮面ライダーディケイド、門矢士からだ」

「士から！」

士についてはキバラーが簡単に説明。

「ああ、門矢からクウガの世界に行ってくれって」

「士が……………」

少し嬉しそうにするが少し複雑だった、まだ士から見たら未熟なんだなど。

「後これ証拠にしるって」

デネブは一枚の写真を出した、ピンぼけしていたが誰が写っているかわかる写真だった。

「ピンぼけしてますね」

「それがアイツの写真だから」

それにはユウスケともう一人写っていた、そのもう一人を見た早苗は。

「八代さん……………」

「え？」

「なんで俺達追い掛けられてるんだよ〜！」

「僕に聞かないでくれたまえ！」

「てめえな！」

『待て〜〜〜！！！！！！』

海東、シンジ、タクミは天狗達に見つかり追い掛けられていた、ユウスケ達は文が話を通しているため出歩き自由だがこの三人は入っていないため天狗達に追跡されていた。

「よし！ 城戸くん戦ってきたまえ、戦わなければ生き残れないだよ〜！」

「絶対嫌だ！」

「じゃあ犬神くん、その疾走する本能で囿になりたまえ」
「お前な……………ギャーツ！」

海東に足を掛けられ派手に転ぶと天狗達はタクミを標的し後の二人は森の中に逃げ込んだ。

「海東後で覚えてるよ！」

「私は元々外の世界の人間だったんです」

守矢神社の境内の賽銭箱の前、早苗は八代との関係を語り始めた。

「両親が轢き逃げで死んでしまつて、その時の事件を担当して私を励ましてくれたのが八代さんだったんです、いつもいつも神社に来ていっぱいお話して楽しかったな」

空を見上げながら昔の懐かしい思い出を喋っていく。

「それで八代さんは今？」

知らなかったようだった、守矢神社が幻想入りしたのは Gronski が現れる数年前、知らないのも当然で八代が殉職したとユウスケは自分から話した。

「そうだったんですか……………八代さん、どんな最後でした？」

「……………笑ってた、俺にこう言い残して、“世界中の人の笑顔のた

めならあなたはもつと強くなれる”って」

ユウスケは空を見上げながら話した、八代の事を思いながら。その話を聞いていたデネブは号泣していた。

「辛かったんだな……………大変だったんだな……………」

「お、おデブ……………」

文は取り敢えずハンカチを渡したがそれで鼻を咬んだためどん引き。

(まさかな……………)

ユウスケは感付いた、早苗の今の戦う理由が。

「早苗の戦う理由って何かな？」

「私の……………ですか？」

怪人を倒した後の喜びようから悟っていた。

「八代さんや霊夢さんみたいな強い人になりたかった、それで認めてもらいたかった」

ここで確信できた、彼女は昔の自分だと、八代に振り向いて欲しくみんなに認めてもらいたい為に戦っていた自分だと。

「だけどあねさんは……………」

「はい……………」

霊夢もというのは同じ巫女だが実力は霊夢の方が上だと言うのが解っているからだろう。

「早苗、その戦う理由さ、悪いとは言わないよ、俺もそうだったから」

「ユウスケさん？」

「だけどね、誰かに認めてもらいたい為に戦うより誰かの笑顔の為に戦う方が今よりもっと強くなれるんだ」

八代に言われた同じような言葉を使い優しく話し掛けていく。

「俺もそうだから、みんなの笑顔をもっと見たい、みんなの笑顔を失わせたくない、だから俺は戦うんだ、それがあねさんとの約束でもあるから」

早苗の頭に手を乗せて微笑むと。

「あねさんがいないから戦う理由や意味がないからもう戦えないなんて言ったらダメだよ、

それが一番のあねさんへの裏切りになるから」

自分もそうだった、命が長くないと言われ戦意を喪失してもう戦えないと言ってしまったが八代のその言葉があったから今があるのだと。

「……………できますか？私にもみんなの笑顔の為に戦うこと」

「できるよ、シヨッカーから抜け出したデネブだって守るために戦おうとしているんだ、な？ デネブ」

デネブは「うん」と頷くとユウスケは再び微笑みわしわしと頭を撫でる。

「だから自信を持ってもいいんだよ、誰かの笑顔の為に戦う事に
「はい！」

ユウスケは昔の自分を見ているような気持ちだったため自分と同じ
悲しい思いをさせないための思いはちゃんと伝わったようだった。

「ユウスケっていい師匠になりそうだな」

「そうですね妹紅さん」

小野寺ユウスケという人物の凄さを文にとりは実感し妹紅とキバ
ーラは見方を改める。

「ん？ 小野寺くん見つけ」

「海東さん！」

「あー！ シンジさん！」

「あ、文ちゃん」

階段を上って来て境内に立ったのは海東とシンジだった。

「シンジさんなんで勝手にうるつくんですか！？ 一応この山は人
間禁制の地なんですから」

「ごめんごめん」

注意され謝るシンジ、海東とユウスケも軽く話していると。

「そっいえばタクミは？」

沈黙が流れた、知らない者は知らないが全員忘れていたようだった。

「僕達が逃げるために困にしたからな」

ユウスケは苦笑していた、「変わらないなこの人」と思いつつ。

「ゼエ……………ゼエ……………ゼエ……………」

そこに息を切らせたタクミが上がってきて倒れ込む。

「し、死ぬかと思った……………」

「大丈夫かよタクミ」

妹紅が寄ってタクミを立たせる。

「あのこそ泥っぽい奴のせいだよ、背中打たれて変形させられるわ天狗達の囷にさせられるわ散々だった」

哀れみの目でタクミを見る一同、一番の原因の海東もその目だった。

「お前なあ……………」

殴り掛かる元気もなく支えられていた。

海東がデネブの事を聞かれてユウスケが代わりに答えると。

「まさか……………おデブくん」

「デネブです」

「君、ここに何で来た？」

「ゼロライナーだけど……………」

海東はニヤリと笑い確信した。

「デスシヨッカーの狙いはそれだよ」

ゼロライナーとは、時を駆ける列車の一つで過去や未来、ましてや異世界も時間の部類に入るためそれらを行き来できる列車である事を海東は説明、その列車なら確かなデスショットカーが狙うはずと納得。

「ゼロライナーはこの神社の近くにある湖の畔の森の中に隠してる！」
「行きましょ！」

一同は守矢神社の近くにある湖へ向かった。

その湖の畔では隠されていたゼロライナーはヤモリをイメージして生まれたゲッコイマジンとモグラをイメージして生まれた両手が鋭く長い爪だったり左腕がドリルだったりハンマーのよう武器のモルイマジンが多数、カメレオンの特性を持つカメレオンファンガイアに黄緑色でカメレオンみたいな仮面ライダーベルデがゼロライナーを強奪しようとしていた。

「見付けたぞ！ 手間掛けさせやがって」

その中ではベルデがリーダーらしくすぐにでも強奪しようとする乗り込もうとしたら足下に火花が散る。

「何者だ！」

ベルデが叫ぶと「通りすがりの仮面ライダーだ」と返って来て横を向くと。

「覚えておきたまえ」

ユウスケや海東達が立っていた。

「貴様は海東大樹に小野寺ユウスケ！」

ベルデは二人の事は知っていた、もっとも注意するべきの仮面ライダーだと。

「裏切り者のイマジンもいるぞ！」

ゲッコイマシンはデネブを見て叫ぶ。

「お前達のやり方に付いていけなくなっただんだ！ 俺はお前達を倒すために戦う！」

敵イマジン達はゲラゲラと笑うがデネブは真剣だった。

「早苗、まさか俺が落としたベルトで変身して戦う事になったの、本当に済まないと思っている」

「いいよいよ、デネブも予想外だったんでしょ？ それに私も戦う理由、見つけたから」

ユウスケを見てそう言つとゼロノスベルトを腰に巻きマスターカードを持つ。

「今回はナイトで行くか」

シンジはナイトのカードデッキを出すと腰にVバックルが、本当は鏡に映さないといけないうが幻想郷の結界がその鏡の代わりになるため現れるのだ。

「シンジさんが仮面ライダー!?!」

「文が助けた外来人が!?!」

「ごめん、隠してた訳じゃないんだ」

「海東、デルタギア貸せ」

「しょうがないね、さっきの事もあるし」

海東はデルタギアを貸しそのデルタドライバーをタクミは巻きデルタフォンを出し「変身」と音声入力し【Standingby】と響く、なぜデルタなのかはファイズになったらファイナルフォームライドされる可能性があるからだ、妹紅は気になり聞いたが答えはくれなかった。

【KAMEN RIDER...】

デイエンドライダーにライダーカードを装填しユウスケの腰にはアークルが現れる。

シンジは右腕を曲げて「変身!」と叫びデッキをバックルに装填すると西洋の騎士のようなダークブルーのスーツで銀色の仮面と鎧の仮面ライダーナイトに変身した。

「んしゃっ!」

クールに見えるナイトに似付かわしくない行動を取ると鍔にコウモリのような飾りが付いたナイトバイザーを抜く。

デルタフォンをビデオカメラ型のツール、デルタムーバと直結させ【Complete】と流れタクミはデルタに変身。

『変身!』

【DIEND】

【Altair Form】

そして後はユウスケはクウガ・マイティフォーム、海東はディエンド、早苗はゼロノス・アルタイルフォームに変身する。

「最初に言っておきます! 私はかゝなり強い!」

Aゼロノスのその台詞で一斉に走りだし戦闘は開始された。

「ハアツ! ハアツ!」

ナイトバイザーでベルデに斬り掛かる、ベルデはホールドベントのカードをバイオバイザーに装填してヨーヨー型の武器バイオウィンダーを召喚して持ちトリッキーな攻撃を仕掛けてきた。バイオウィンダーを投げるとヨーヨーは一旦動きを止めてギザギザとした動きを見せナイトを翻弄する。

「うわっ!?!」

ヨーヨーを避けていくナイトだがベルデには狙いがあった、気付くと森の中に入っておりナイトはバイオウィンダーで木を使い張り巡らした糸に囲まれ身動きが取れなかった。

「しまっ……………」

すると鎧に火花が散る、クリアーベントで姿を消したベルデが攻撃しているのだ。

「こりゃヤバいな……………」

デッキからカードを取り出しナイトバイザーのコウモリの飾りは羽根を開くようにスライドしその窪みにカードを置きましたスライドして羽根を閉じると【TRICK VENT】と音声流れナイトは8体に分身した。

「あやや！？ 分身した!？」

「そのメカニズム、気になりますね」

にとりがニヤニヤしているとナイト達はナイトバイザーで糸を斬っているベルデに剣が当たり姿を現すと一人に戻り斬撃を食らわしていく。

「ファイヤー！」

フォンブラスターに音声入力し引き金を引いて白いレーザーを発射しモールイマジンを銃撃していく。

オートバジンが到着しバトルモードへ変形して銃撃を加えていく。

「待て待て！ 俺に当たる」

オートバジンは広範囲に銃撃しているため危うくデルタに誤射し掛け降りると殴られビークルモードに戻る。

「確か……………村上が……………」

デルタドライバーのミッションメモリを抜いてグリップに差すと起動し赤ではなく白いフォトンブラッドが流れるファイズエッジとなりデルタはそれを抜く、ファイズエッジ改めデルタエッジでモールイマジンを斬っていく。

「やっぱ俺はこっちの方が性に合ってるな……………オラァァァーッ！」

一体を一閃するとそれにフォンプラスターによる銃撃を食らわし後ろから襲い掛かるモールイマジンの前を向いたまま蹴りを放ち飛び掛かるモールイマジンのデルタエッジを突き刺し「チェック」と音声入力するとイクシードチャージが発動し刃は強く輝き必殺技スパークルカットが炸裂されデルタエッジを下に向け振り下ろすとモールイマジンは爆散。

「ふう……………よし」

「タクミ、お前やっぱり戦い方が……………」

「うるせ！ 勝てれば問題ないだろ！」

妹紅にやはり正義の味方らしくない戦い方と言われるが反発、残りのモールイマジン二体が襲い掛かってきた。

「挟み撃ちでトドメ刺すけどいいよな？」

「もちろん！」

二手に別れモールイマジンを挟み込むように囲んで戦う。

「海東さん、俺をフォームライドしないでくださいよ？」

「わかってるよ」

カメレオンファンガイアにはクウガとディエンドが相手をしていた。

デイエンドは援護を担当しクウガは接近戦を、いいコンビネーションを見せていた。

Aゼロノスとデネブはゲッコイマシンと戦っていた。

「ハアアアアッ！」

ゼロガツシャー・サーベルモードを振り回し力強い斬撃を食らわしていく、後ろからはデネブが指から弾丸を放ち援護を担当していた。

「ありがとうデネブ！」

「いやあ〜」

少し照れるとゲッコイマシンは光弾を乱射、伏せて避けるとデネブは射撃による攻撃を繰り返す。

「そつだ………早苗！ マスターカードを裏返して黄色の方が見えるように入れてみて！」

「え？ こつ？」

マスターカードを抜いて言われた通り裏返し赤、黄色の面を黄色が出るように挿入すると【V e g a F o r m】と流れデネブはAゼロノスの後ろに立ち腕を交差させ肩に置くと黒いマントが現れ包み込むと胸にデネブの顔が、マントが着いて肩にデネブの指を模した砲台が取り付きドリルのような形状の仮面がスライドし星型に展開され眼は赤い仮面ライダーゼロノス・ベガフォームに変身した。

（これは？）

「これが俺と早苗の力だ！」

デネブは早苗に憑依する事によりこのベガフォームになれるのだ。

「最初に言っておく！ 胸の顔は飾りだ！」
『は？』

敵味方問わずVゼロノスの言葉に凍り付いた。

（デネブ？）

「いやあ、嘘はいけないと思って」

ゲッコイマジンは「ふざけるな！ 真面目にやれ！」と逆上、光弾を乱射してくるが。

「俺はいつも真面目だ！」

ゼロガツシャーを片手だけで持つ、パワーと防御が向上しているため光弾をもるともせず肩のゼロノスノヴァから砲撃が放たれゲッコイマジンを攻撃し少しずつ接近していく。

（けど強い！）

「ハアアアアッ！！」

「グエエツ！？」

ゼロガツシャーを高く振り上げゲッコイマジンに思い一撃を食らわせる。と斜めに向けて右下へ振り下ろし更に攻撃。

「強いな……………妹紅！ 合わせろよ！」

デルタエッジを戻しミッションメモリを抜いてフォンブラスターに挿入すると銃身が伸びる。

「こつちの台詞だよ！」

妹紅もスペルカードを発動しようと準備が整う。

「チエツク！」

【Exceed Charge】

「不死『火の鳥 - 鳳翼天翔 - 』！」

フォンブラスターから白いマーカーが放たれモールイマジンを拘束、妹紅は火の鳥を放ち残りのモールイマジンを火の鳥は体当たりしそのまま押し出していき拘束されたモールイマジンの方へ飛んでいく。

「ハアアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

デルタはマーカーに飛び込んでルシファーズハンマーを炸裂した瞬間火の鳥に押されたモールイマジンと拘束されたモールイマジンは激突し二つの技に挟み撃ちとなり撃破された。

「やったな」

「ああ」

ナイトの方も決着がつくところだった、ファイナルベントを発動するとダークウイングというコウモリのミラーモンスターと合体し羽根となり羽ばたくとマントとなりナイトはドリルみたいに回転しだしベルデを貫くと爆発、飛翔斬で決めカードデッキごと葬った。

「小野寺くん、後よろしくね」

シアンの光弾を無数放ちカメレオンファンガイアの動きを止めクウガはマイティキックでカメレオンファンガイアを倒した。

「ハアアアアッ！！ デリヤアアアッ！！！！！」

Vゼロノスは力強い斬撃を食らわした後左腕で殴り飛ばす。

「トドメだ！」

マスターカードをボウガンモードに組み立てたゼロガツシャーに挿入。

【Full Charge】

銃身は強く輝きゲッコイマジンに向ける。

「発射あっ！」

引き金を引きV字の金色の光弾グランドストライクが放たれゲッコイマジンを打ち抜くとV字が浮かび上がりゲッコイマジンは断末魔と共に爆死した。

(勝った勝った〜！)

「これで一件落着だ！」

変身を解くとシンジは何かに気付いた。

「文ちゃん？ 何やってるの？」

「明日の文々。新聞の記事が決まったのでメモと写真を撮ってるんですよ！」

気持ちは分かった、自分も記者の端くれのため文の記者としての仕

事に情熱を燃やしているのが。

「名前とか伏せておいてね？」

それだけは注意をしておきシンジは元の世界になかなか帰れなそう
な事を予想してこのまま残る事に、ブン屋で働く事にした。

そしてデネブは……

「これからお世話になるデネブです」

守矢神社の居間、そこに二人の神が、綱が目立つ女性の八坂神奈子
と帽子の目みたいなの飾りが目立つ幼女の洩矢諏訪子もりや すわこが座っており目
を見開いていた。

「えっと……人間じゃ……ないわよね早苗？」

「はい、これから四人で仲良くやっていきましょう」

もうデネブの同居は決まっているような物であるため話はどんどん
進み。

「これからよろしくお願ひします」

第16話 『東風谷早苗の“ゼロのス”タートル〜Action ZERO〜』

タクミはデルタを制御できると思ったので、巧もですし。シンジはTVスペシャル的な感じで。

次回予告

慧音

「犬神起きろ、朝だぞ」

タクミ

「お前は俺のオカンかよ」

妹紅

「アイツも妖怪だから長生きしてるからな……………寂しいんだよ」

タクミ

「俺は……………オルフェノクだからな……………」

カイザ

「マリの次は今度はその妖怪に手を出すのかなあ？ 犬神くん？」

タクミ

「てめえだけは許さねえ……………絶対にな……………」

次回『灰色の心』

第17話『灰色の心』（前書き）

最近新作を考えてしまい執筆中小説一覽が大変な事になってしまい
そうなので書き上がっているものはすべて時間を空けて今日中に投
稿します。

第17話『灰色の心』

妖怪の山で散々な目にあつたタクミ、今日はその寺子屋に居候する犬神タクミにスポットを当ててみよう。

「犬神起きろ、朝だぞ」

扉を開け慧音はタクミを起こしに来るが案の定タクミはまだ爆睡していた。

「後3分………」

ベタな台詞を返し布団を被りまだ寝ようとしていたが慧音に掛け布団を取られ「寒っ」と嘯くと体を丸めるが今度は敷き布団を抜き取られゴロゴロと転がる。

「さっさと起きろ、もう朝食の支度は済んで不動が先に食べ始めているぞ」

「あー………うるせーな………お前は俺のオカンかよ」

つて！」

会話の途中また寝だすタクミにまたまた頭突きを食らわせ二重にたんこぶを作る。

「目、覚めたか？」

また寝たら頭突きがもう一発やられると思ひ頷いて朝食を食す。

(まったく……どっかの誰かさんに似すぎなんだよなコイツ……)

ただ怒ってその誰かさんを思い出しているのではなく淋しさと悲しみ、怒りが込み上げながらその誰かさんの思い出を思いだしていた。

(……マリ……俺は……)

遠くを見るような目をしていた為、慧音に話し掛けられ「何でもない」と素っ気なく返した。

(何でもないという者の顔ではないぞ)

慧音はタクミの表情を見てただならぬ過去を持ち修羅場を何度も潜り抜けてきたのだろうと察していた。

「ごちそうさん、美味かった」

手を合わせて挨拶すると食器を台所に持っていき自分の使った食器は自分で洗い居間に戻ってきた。

「犬神……………」

「なんだよ？」

何か聞いたかった、彼の過去を知らない慧音はタクミの過去を聞きたかった、そして自分の過去も、だが聞けず「何でもない」と言っ
てしまい話は終わる。

「なら話し掛けるなよ……………」

同居を始めて以来、少しは遠慮しなくなってきたがどこか壁がまだ
間にある感じがしていた、

接しようとするがタクミは自分から離れてしまう、どんなに距離が
近くて今のように一緒の部屋で過ごしていても距離は近くなく離れ
ていた、やはりその壁が原因である、彼の心の壁は白くもなく黒く
もない、灰色の心だった、その灰色の心を開かせるにはどうしたら
いいかを考えていた。

「上白沢」

まずは名前から、名前を名字ではなく下の名前で呼んでもらえるよ
うにしてもらおうと考えた。

「どうかしたかた……………犬神？」

馴れというのは恐ろしいものである、一度定着してしまった呼び方
を変えるのは一苦労である。

「……………いや……………何でもない」

タクミも何か言いたげだが躊躇ってしまった、慧音も気付いた、そしてその躊躇いからは恐怖みたいなものを感じていた、タクミは何に恐怖しているのか、それが気になった、それが分かれば近付けるかもしれない、近付けなければ更生どころではないからもある。

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続くがその沈黙を破ってくれた救世主がやってきてくれた。

「よっ、慧音、タクミ」

『妹紅』

妹紅が訪れ二人は下の名前で同時に言う。

（妹紅は下でか）

それはばつちりと聞いていた。

「今日の授業はわたしも参加させてもらおうよ」

「おお、それはありがたい、助かる」

「タクミはどうする？」

妹紅は気軽にタクミと呼び話を振るうと。

「俺はいい、部屋にいるから」

と返した、ここまで明確な答えはタクミから聞いた事無くどんな魔法を使っているのかが気になっていた。

「どうかしたけーねせんせー？」

「あ、いや、何でもないぞ」

授業中、考え事しているのを生徒に感付かれ返していた。

「ホントにー？」

「タクミにーちゃんの事考えてたんじゃないのー？」

図星だった、生徒に当てられた事に少し動揺し始めて黒板に当てていたチョークを折ってしまった。

「ち、違う！ 犬神の事なんて考えてない！」

「けーねせんせー動揺し過ぎ」

生徒の笑い声に混じって聞こえる声が。

「妹紅おおおおー！！！！！！！！」

「やば」

中に妹紅も混じって笑っておりそれに気付いた慧音は暫らく鬼ごっこしていた。

「やっぱけーねせんせーはもこーとカップル？」

「いやいや、カップリングは無量大」

「ボクの妄想も無量大！」

「いやいや三角関係も捨てがたい」

男子生徒は何かを話し始めて帰ってくるまで口論が続いたとか。

「で、本当何考えてたんだ？」

授業の後にたんこぶができた妹紅が問い掛けていた。
その問いに答えた、どうすればタクミは普通に話すのか。

「そうだな………やっぱりそのお硬い考えを直した方がいいじゃないか？」

「そんなに硬いか？」

「考えもその頭もろとも」

「そんなに硬いか？」と呟きながら頭を擦り「ああ、硬い」と妹紅が頭を撫でる。

「そういうものか………じゃあお前と犬神はなんであんな普通に会話しているんだ？」

「普通に？ いや、普通に会話してないよ、わたしにも壁作ってるから」

「下の名前で呼ぶのにか？」

「呼び方はそれほど問題じゃないな」

何が原因なのか、二人は判っていなかった、だがそこで思い出した事が。

「そういえば奏月と小野寺が戦った時に乱入してきた仮面ライダーが犬神のこと知っているようだ」と紅魔館のメイド長が言っていたな
……………」
「だけどそいつもうここには居ないだろ」

前に現れた仮面ライダー、カイザなら犬神の過去を何かしら知っているはず、だが都合良く現れるはずなくため息を吐いていた。

「だろうな、妹紅はどう思ってる？ 犬神を」

「……………素直になれない不器用な奴かな？」

「そうだな……………それしか出てこないな」

自分達はタクミの事をまだ何も知らない、彼の事を理解するにはもつといい所を見付けて理解する、それが一番いいのかもしれない、無理に考えたり心を開かせようとするよりは。

「……………」

寺子屋の屋根の上、タクミは横になって空を眺めていた、ポーツと。

「ここにいていいのだろうか……俺はここに」
「君の居場所はどこにも無いんだよ、犬神くん」

突然後ろから声が聞こえ振り向く、そこには一人の男が、ベルトを巻いて。

「草風………！」

男の名は草風マサト、前に現れた仮面ライダーカイザの変身者だ。
タクミは立ち上がり草風を睨む。

「何しに来た？」

「君がどうしているか気になってね〜」

ただ興味本位で見に来た、それだけでもタクミの機嫌を悪くさせるには十分だった。

「なるほど……マリの次はあの妖怪に手を出すのかなあ？ 犬神くん？」

「アイツは関係ない！」

「そうやって怒るから関係あるって分かるんだよ」

草風は笑みを浮かべていた、喋る毎にボロが出て本音を口に出してしまうタクミを面白がるように。

「マリの時もそうだったからな、何も関係はないとか言いながらできていた癖に……俺からマリを奪った化け物の癖に……」

「奪ってねーよ、アイツが俺の所に来たんだ、お前のその性格に耐えられなくてな！」

いつも慧音と接するよつな素っ気ない態度ではなかった、怒りを露にした悲しみが見え隠れする態度だった。

「君はいつもそつやって熱くなる、暑苦しいんだよ君は……………君のそついう所が気に入らないんだよ！」

手に黒い携帯電話、カイザフォンを出しスライドし913と入力しエンターを押し【Standingby】とファイズフォンより低い声で響く。

「犬神、どうした？」

そこに慧音が上がって来てしまい。

「来るな慧音！」

今は本音が露になっているからか、名字ではなく名前で呼ぶタクミに少し動揺している。

「変身」

カイザフォンを閉じカイザドライバーに差し込み【Complete】と響き草風マサトは仮面ライダーカイザに変身した。

「仮面ライダー……………！」

「フツ」

カイザは鼻で笑いながら駆け出しタクミに襲い掛かる。

「くっ！」

パンチが繰り出すが間一髪の所を避け足払いを掛け転ばせる。

「ごさかしい真似を！」

デジタルカメラ型の武器カイザショットにミッションメモリを挿入し起動させる。

「逃げるぞ！」

「ちよつとま……！」

タクミは慧音を抱き抱える、所謂お姫様抱っこ状態となり。

「しっかりと掴まってるよ！」

タクミはその高い屋根の上を駆け出し大きくジャンプし森の中に消えていった。

「逃げたか………ん？」

下を見ると忘れ物があったのか、一人の女の子が寺子屋の中に入っていた。

「使えるな………」

仮面の下、笑みを浮かべ屋根から飛び降りた。

「おい犬神、あの仮面ライダーは……………」

「草風マサト…………俺の敵だ」

森の中を暫らく歩いてしていると寄りかかり休む事に。

「アイツは…………俺の大切なものを奪った奴だ…………いや、俺もアイツから大切なものを奪ったか……………」

その言葉から考えられる草風との関係は互いに好きになった女性が同じだった、という事だ。

「園田マリ…………俺を初めてオルフェノクだと分かってても離れなかつた変り者だよ、俺はそいつに好意を持っていた、アイツもだ、次第に惹かれていき付き合うようになっていた」

タクミの雰囲気からか、もうその女性はこの世にはいないと悟れたが余計な言葉を挟まず聞く事に。

「草風はマリの幼なじみだった、昔から好意を持っていた、それも会って間もない俺に奪われたのに逆上したんだ、そして草風はマ리에手を出した、無理やり」

所謂強姦という奴だ、それによるショックが強かった彼女は。

「自害したというわけか？」

「噂だつちまつたんだよ…………アイツは美容師なんだ、仕事場や世間からの白い目に耐えられなくなってな…………草風はそんな事お構い無しに話し掛け噂は悪化していったんだ……………」

ここで話は終わり暫らく沈黙が続くと。

「マリはな、俺がオルフェノクになって初めて目標を持たせてくれた奴なんだ……………」

「目標？」と返すと。

「夢を守るってな……………アイツは美容師になるのが夢でその夢を叶えた、けどちゃんと守り切れなかつたんだ……………だから怖いんだよ……………目の前で夢を守れないのが、そいつの夢を守るって言って守れないでそいつの気持ちを裏切るかもしれない自分に」

初めてタクミの本音を聞いた、だがそれは悲しいものだった。

「……………だから……………あまり関わらないように？」

「ああ、小野寺や他のライダー達にも……………もしかしてオルフェノクの本能が抑えきれなくなって襲い掛かったらと思うと」

気持ちだけではなく人の信頼も裏切ってしまったらという思いから人と深く関わらず影から人を守っていこうと思っていたのだ。

「怖いのか？」

「ああ……………裏切られるより裏切るかもしれない自分がな……………どうしても怖いんだよ……………」

「なら、私の夢を……………守ってくれないか？」

タクミはなぜ裏切るかもしれない自分に頼んできたか分からなかった、聞いてみると。

「お前は絶対人を裏切らない、その怖さを知っている限り一生な」と返ってきてタクミは彼女の夢を聞く事にした。

「私の夢は、歴史を教えていく事だ、正しい歴史をな、妖怪に比べたら人間の寿命は短いから書物等で頼り間違った歴史を覚えてしまいかもしれない」

妖怪は遥かに寿命は長く書物等で書かれている歴史を体験しているが人間はそうでもない、間違った歴史を身に付けてしまいかもしれない。

「その間違った歴史で争いを起こせば損をするのは人間だ、だからちゃんとした正しい歴史を後世に残す、それが私の夢だ」

その夢を聞くとフツと優しい笑みを浮かべ。

「いい夢だな……………俺の夢は……………欲張りだから二つもあるよ」

「なんだ？ 言ってみろ、笑わないから」

「人の夢を守るのと……………」

空を見上げる、森の中だがはつきりと見えた白い雲が浮かぶ青空を見て。

「世界中の洗濯物が真っ白になるみたいに……………みんなが幸せなるように……………」

少し恥ずかしそうに自分の夢を語るタクミ、慧音は。

「いい夢だな……………」

微笑みながら言い更に恥ずかしがるタクミ。

「なあ上白沢……………」

「慧音だ、さつきみたいに慧音って呼んでくれタクミ」

「……………ああ、慧音」

「なんだ？」

「ありがとう、その一言に気持ちを込めて口に出した。」

「お涙頂戴ありがとう犬神くん」

そこにカイザが現れた、二人は立ち上がり身構える、だが今のタクミにはファイズドライバーは無かった。

「草風……………！」

「待て待て、あのガキがどうなってもいいのかなあ？」

カイザの後方にある木に先ほど忘れ物を取りに来た寺子屋の生徒の女の子が縛り付けられ回りにはブロンズのフォトンストリームが流れるライオトルーパーと呼ばれる仮面ライダーが何体も居り専用の武器アクセレイガンを持って立っていた。

「貴様は……………！」

慧音は改めてカイザ、草風マサトの外道さを知り目を吊り上げ睨む。

「けーねんせー!」

女の子は泣き叫び助けを求めている。

「動くなよ? 動いたらこのガキがどうなっても知らないぞ?」

ライオトルーパーAはアクセレイガンの刃を女の子の首筋に近付ける。

「やめろ!」

「何が目的だ?」

「決まってる、お前のファイズギアを奪いにきたが取引だ、このガキと引き換えだ」

渡そうにも今手元にあるのはファイズフォンだけ、だが渡したからとカイザが返すわけがない、一つだけ策はある、ウルフォルフェノクと化し切り抜ける、だが女の子に見られたらここには居られなくなる、慧音も生徒を盾にされたため動けないでいた。

「ファイズフォンで妙な真似はするなよ? 少しでも変な動きしたら流血ものだぞ?」

早くファイズギアを寄越せ」

「今は………ファイズフォンしかない」

ファイズフォンを出して見せる。

「それだけでも寄越せ」

そのまま投げ渡すとカイザはそれ掴む。

「渡したんだ、解放しろよ」

「俺はファイズギアと言った、ファイズフォンだけではなあ」

やはりこうなったかと思うとライオトルーパーAはアクセレイガン
を振り上げた、女の子は目をギュツと瞑り死を覚悟していた、だが。

バキューン！ と銃声が響きライオトルーパーAが持っていたアク
セレイガンは吹き飛ばされた。

「何!？」

突然の事態に焦りを見せるカイザ。

「人質なんて正に外道だな」

「不動のおっさん!」

そこに銃志郎が変身するマグナリユウガンオーと妹紅が駆け付けた。

「後それもな!」

マダンマグナムでカイザの手を射ちファイズフォンが弾き飛び手が
離れる。

「しまった……………!!」

タクミはファイズフォンをキャッチし。

「すまねえおっさん!」

「ならおっさんって呼ぶのやめる！」
「大丈夫か？」

その間に妹紅が縄を切り女の子を解放。

「わたしはこの子連れていくから」
「ああ」

妹紅は女の子を連れその場から去った。

「タクミ！」

マグナリユウガンオーはファイズドライバーをタクミに投げ渡した。

「……………ありがとよ……………」

ファイズドライバーを腰に巻きファイズフォンを開いて変身コード
を入力。

「なあ慧音」
「なんだ？」

背を向け閉じたファイズフォンを持った手を頭上高く挙げる。

「俺はあそこにいるいいのか？」
「……………もちろんだ、私の夢を、頼む」

そるだけを聞くと目を瞑り、笑い。

「変身！」

一気に真剣な表情となりファイズフォンをファイズドライバーと連結させ仮面ライダーファイズに変身した。

「後は任せたぞ」

カイザはその場から立ち去った、追い掛けるつもりはないようだ。た、今は目の前の敵を倒す、それだけだ。手首をスナップさせると走りだしライオトルーパー達に戦いを挑む。

「ダブルショット！」

マグナリユウガンオーはゴウリユウガンとマダンマグナムの両方を使い連続で銃撃をライオトルーパーAとBに食らわしていく。

【不動、後ろ】

「ああ！」

ゴウリユウガンを後ろへ向け引き金を引き背後から斬り掛かることしたライオトルーパーCに銃弾を食らわす。

「ハッ！」

次々と襲ってくるライオトルーパー達を殴っていきながらファイズフォンを抜いて開く。

「来いよ早く」

オートバジンを呼び出すコードを入力するとすぐにライオトルーパー達に銃弾を浴びせながらバトルモードに変形したオートバジンが

駆け付けビークルモードに戻る。

ミッションメモリをハンドルグリップに差し込みファイズエッジとして引き抜く。

『うおおおおおーっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

アクセレイガンを手手にライオトルーパーDとEが同時に襲い掛かる。

【Burst Mode】とファイズフォンをフォンブラスターに変形させる。

「フ、ハアッ！」

ファイズエッジを振るいアクセレイガンを持ったライオトルーパーDの腕を切断する。

「うわあああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

切断された腕から灰が零れるのを見てパニックになるのを余所にライオトルーパーEはファイズに斬り掛かるが至近距離からフォンブラスターの銃撃を食らい吹き飛ばされる。

「うわあああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

自棄になったライオトルーパーDは片手で殴り掛かるかがファイズエッジを腹部に当てられ、ファイズフォンをファイズドライバーに戻すとエンターを押し。

【Exceed Charge】

「ハアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そしてジャイロアタッカーで走りだしたライオトルーパーもマーカ
ー、アクセルクリムゾンスマッシュで貫き、ライオトルーパー隊は
全滅した。

【3・・・2・・・1】

ラスト3秒、カウントが流れ1秒過ぎると【Time Out】
Refomation】と流れ高速移動を止め通常フォームに戻っ
た。

「タクミ」

「なんだよ」

「何でもない」

「なら呼ぶなよな慧音」

居間の中、名前で呼び合う男女そこに居たのだった、壁もなく呼び
合う二人が。

第17話『灰色の心』（後書き）

今回はあの切り札の仮面ライダーが！

次回予告

【ROYAL STRAIGHT FLASH】

士

「お前にクウガの世界に行ってきて欲しいんだ」

妖夢

「幽々子様〜ご飯できましたよ〜」

幽々子

「私のご飯……………」

レミリア

「桜が見たいわね」

一魔

「変身！」

次回『駆け抜ける稲妻』Run through Lightning

第18話 『駆け抜ける稲妻』 Run through Lightning

英語はそのままの意味です、駆け抜ける稲妻。

イド・キングフォーム。

二人は変身を解く、マゼンタのトイカメラを首からぶら下げ、黒いコートを着た青年が門矢士、

ブレイドの変身者はBOARDと書かれたマークのワンポイントを付けたジャケットにジーンズを履いた黒髪の青年の名前は剣崎一魔けんさき かずま、とあるブレイドの世界の人間だったがデスシヨッカーに占領されてしまい

その世界の仮面ライダーは彼一人になってしまったが士が現れその世界を占領したデスシヨッカーを壊滅させ後は次世代ライダーに任せ連れ出したのだ。

「さ、次の世界に行くか」

一魔は背伸びしながら促すのだが士は待てと言わんばかりににシャッターを切る。

「お前にはクウガの世界に行ってきた欲しいんだ」

「クウガの？ デネブがゼロライナーで行った？」

「ああ」と返す。

「アイツだけじゃかなり不安なんだよ」

「納得、わかった、行ってやるぜ」

黄金の大剣、醒重剣キンググラウザーを出現させ持ち、了承した。

「頼んだ、仲間を」

士はカメラに似たバックル、デイケイドライバーを腰に着けサイドレバーを引いて回転させベルトに掛かったカードアルバム、ライド

ブツカーを開いて赤いカードを取り出す。

「変身！」

カードを装填しサイドレバーを押してバックルを回転するとバーコードのようなマークが浮かび上がり【KAMEN RIDE... DECADE】と音声that響き土はエメラルドグリーンに眼にカードが突き刺さったようなマゼンタの仮面、
Xの字に流れる白く間に黒が流れる模様とマゼンタと白で着色された鎧を身に付けた仮面ライダーディケイドに変身する。

「じゃあデネブとユウスケによろしく言っておいてくれよ」

「おう！」

ディケイドはライドブツカーを持つとそれから刃が伸びソードモードに、それを振り下ろすと次元の壁が現れ一魔はその中に飛び込んだ。

「……………あ、そっぴやアイツ幻想郷にいるって海東言ってたな、教えるの忘れて行かせちまったけど……………まあ妖怪に殺され掛けても死なないから大丈夫か」

無責任な世界の破壊者だった。

「幽々子様〜ご飯できましたよ〜」

ここは幻想郷の冥界に在る白玉楼はくぎょくとうと呼ばれる大きな和風な屋敷、この庭は見事なもので一般にも公開されており観光名所にも、中庭は見れないがそこも見事なものでその庭の手入れをしている庭師が銀髪で緑を基準にした服を着て隣に白くてふわふわしたような玉が浮かんでいる少女、魂魄妖夢こんぱくようむ。

「待つてたわよ〜」

居間で昼食が用意できるのを待つていたのが薄い紫だが桃色に近い髪の毛で頭に@のようなマークが描かれた布を掛け、水色を基準にした服を着た女性で回りに白い湯気みたいな塊が何個も浮いているのが西行寺幽々子さいぎょうじゆうじゆうし、この屋敷の主である。

「それじゃ頂きましょう」

丸いテーブルに食事が並べられると向かい合うように座り「いただきます」と幽々子はさっさと食べようとしたり。

「ヴェッ!?!」

テーブルの上に何か落ちてきて料理が一瞬にして駄目になった。

「……………」

「桜が見たいわね」

「藪から棒に、どうかなさいましたかお嬢様？」

紅魔館、咲夜が紅茶淹れながら話しているのはこの屋敷の主、コウモリの羽根を背中に生やした赤い瞳で青っぱい髪の毛の少女、吸血鬼のレミリア・スカーレットである。

「なんか紅が薄くなった淡い桜が見たいのよ、バイオリンの演奏を聴きながら」

「バイオリンならプロがいますが？」

奏歌の事であろう。

「そうね……………だけど桜も見たいのよね……………」

カーテンを見ながら愚痴を零していく、カーテンを閉めているのは日光が入らないため、日光は吸血鬼の大敵なのだ。

「時間操って桜咲かせない？」

「そんな事したら風見幽香が殴り込みに来ます」

「まさしくその通りよ」

いつの間にか屋敷の中に入って紅茶を飲む幽香、外には紅美鈴ほんめいりんという妖怪の門番がいるはずだが、それを聞いてみると。

「もしかしてトライチェイサーで轢いちゃったのが……………」
「だろっね」

ユウスケと海東も呑気にティーブレイク。
門の前では赤い髪で緑を基準にした中華風な服を着た妖怪、紅美鈴が伸びていた、タイヤの後が付いて。

「何しに来たのかしら？」

勝手に堂々と入ってティーブレイクを楽しむ三人に対して殺気を放ちナイフを持ちながら問うと。

「あなたの弟と霊夢が原因よ」

「あの二人が？」

「読めたわ」

レミリアは察した、今の博麗神社の様子が。

「イチヤイチャし始めていらなくなっただよ、なあ兄貴？」

「そうだな」

「そうよね」

まだいた、総と薙、キバーラが。

「咲夜、今回は咲一が悪いから許してあげなさい」

「お嬢様がそう仰るのなら……………」

ナイフを仕舞い自分用の紅茶を淹れ始めた。

「そしたら風見幽香は関係ないはずでは？」

「私は……………なんとなくよ」

視点を横に向けユウスケを見ていた。

「どうかした幽香さん？」

「な、何でもないわよ、ただ今度はどうやってユウスケを虐めようかってね」

「そんな〜」

誰もがこの二人は将来いいカップル、もしくは夫婦になると思っていた。

「こんにちは〜」

「来てやったぜ〜」

するとバイオリンのプロ、奏歌とキバットが訪れた、バイオリンケースを持ち。

「ちょうどいいわね、あなた演奏しなさい」

「まあそのつもりでしたから、予約も入ってますし」

誰もが誰に予約されたかが気になっていた。

「私です、この前お嬢様が聴きたいと仰っていましたので」

「今度言うのが今日ってよくわかったわね」

「お褒めに預かり光栄です」

奏歌のバイオリン演奏会が始まったのだった。

「で、私のご飯は？」

「幽々子様、今はそれどころではないかと」

食べ物の恨みは恐ろしいと言わんばかりのオーラを放ちながら縛り上げ横に倒れた一魔を見下す。

「お願いします！ 許してくださいー！」

「嫌だ」

即答だった、一魔の叫びを聞かずどうしてやるつか考えていると。

「ここにいたのね」

「あら紫」

スキマが開いて紫が出てきた。

「よりもよって食事中の幽々子の所に着いちゃうなんて無責任な破壊者ね……………」

「知ってるの？」

「ええまあ……………ちょっとした系列で」

紫は居間に入り縄を解くように言い妖夢が縄を切る。

「死ぬかと思つた……………」

「死ねないでしょ？ あなたは尚更」

「俺のこと、知ってるのか？」

「ええ」と口元をセンスで隠す笑みを浮かべた。

「仮面ライダーブレイド、剣崎一魔、デスシヨッカーに占領された
とあるブレイドの世界の最後の仮面ライダーにして最後の切り札」

「最後の切り札」、その言葉が出ると浮かぬ表情となる一魔。

「あら〜ちまたで噂の仮面ライダーなの？」

「あ、ああ……………なんでその事を？」

紫に問い掛けるとまた笑みを溢し。

「門矢士の協力者、と言えはいいかしら？」

それだけで十分の答えだった、その言葉で納得すると。

「私は八雲紫、この幻想郷を被う結界を管理するものの一人」

自分の役割も含め名前を紹介すると二人にも自己紹介するようにセ
ンスを閉じて振るって促す。

「私は西行寺幽々子、この白玉楼の主で幽霊よ〜」

「庭師の魂魄妖夢、半霊です」

半霊とは幽霊でもあり人間でもある、隣に白くふわふわしたものは半霊の分身である。

「俺は剣崎一魔、仮面ライダーブレイドだ」

背面を向いて背中にスペードのマークが付いた青いヘラクレスオオカブトの絵が描かれたブレイドに変身するためのスペードのカテゴリAのカードを見せた。

「食事をダメにして悪かったわね、門矢士がちゃんと送る先を調整していけば」

「そうね……………お腹空いたわね……………」

「今藍が食事の準備してくれてるから後でこっちにいらっしやい」

「ゆかりん大好き！」

食べ物くれる人は基本好きらしい。

「ブレイド……………ブレイド……………剣ですか？」

「まあな」

一魔は銀色の刃でグリップの上の部分にスペードの絵が描かれた飾りのような長い箱が取り付けた剣、醒剣ブレイラウザーと重醒剣キングラウザーを見せた。

「二刀流ですか？」

「基本的はね、君も剣の使い手？」

「はい！ 同じく二刀流です」

妖夢は鞘に収められた自分の身長以上の長い刀を二刀見せた。

(身長の割りには長い刀だな………。だけど力強い斬撃を繰り出
てきそうだな)

まるで昔を思い出すかのように見ていた、自分も身長より長い木刀
を持ってたなど。

だけど彼女が持つのは真剣、自分の木刀なんてオモチャ程度だろう
なと思ったが今は自分も本物の剣以上の剣を持っていると思いきや
せていた、自分には重いものを背負っている、仲間や後輩の思いと
いうものを。

「どうかしましたか？」

「ん？ なんでもないよ、そうだ、少し相手しようか？ 真剣じゃ
なくて木刀だけどさ」

「よろしいんですか？」

「ああ、だつてすぐ戦つてみたい！ って目してるからさ」

自分でも気付かない内にそんな目をしておりそれを指摘され少し恥
ずかしがる妖夢。

「あらあら、もう仲良くなってるわね」

「そうね、少し見物しましょうか？」

白玉楼の中庭、妖夢が綺麗に整えられた場所で二人は木刀を持ち対峙していた。

「あの娘が動いたら勝敗は決まりね」

「どついうことかしら？　うちの妖夢が瞬殺されるとでも？」

自分の庭師兼護衛がすぐにやられると言われ少し反論するが。

「剣崎一魔はそれほどの実力者なのよ、彼は剣術の戦闘に関しては天才よ」

まるでこの目で見た事があるように語る紫、その会話の中、未だに動かない二人の剣士、二人の耳に入るのは風が吹く音だけ。

「……………」

すると一魔が動く素振りを見せ妖夢は身構えるが動かなかった。

（フェイント？　まさか私が動かせるために？）

様々な思考を駆け巡らせるがなかなか答えは出ない、答えが出ないのなら、相手が動きを見せないのなら自分から動けばいいという考えが生まれ駆け出した。

（来た……………左か……………いや、右だな！）

一魔の方が頭の回転が早く。

「見切られた!？」

木刀を右方向に振るった妖夢だが一魔はそれを紙一重で同じように左方向に動き刃先が顔面ギリギリの所で躲しその刹那、木刀を下から振り上げて妖夢の木刀を弾いた。

「聞いていた通りだわ」

「あらま」

勝敗は一瞬で決まった、暫らく沈黙が続く。

「ふう……………」

その沈黙は一魔が息を吹いた時に破られた。

「どうしつ私の動きを？」

「分かっちゃうんだよ、その動きを見ると次にどんな風に動くが」

一魔は凄まじい洞察力がありそれを戦いに活かし相手の出方を伺うのだが相手が動かないとどんな戦い方をするか判らないという欠点もある。

「だけど妖夢の振り、強かったよ、当たってたら確実に落ちてたな、当たってたらだけど」

大事なことのため二回、その二回で結構傷付くが戦うものならばそれを乗り越えろと一魔の隠されたメッセージがあったり、だが会って間もないためそのメッセージは届かないだろうがそれを頭ではなく心で感じられた妖夢は「はい」と返事を返した。

(ホント昔の俺見てるよいな感じだな……………)

懐かしそうに、さらに切なそうに妖夢を見る一魔。

「劍崎さん！ 私に劍術を沢山教えてください！」

突然の弟子入りを頼み込む妖夢、彼女にも師はいるが今はいない。

「うーん……………」

少し考え込む一魔、士に頼まれたこともあるが当分はこの世界にいない、ならばならない、なら自分の住む場所も欲しい。

「なら俺が幻想郷にいる間ここに住む、それが条件！」

妖夢は幽々子に頼み込むようなキラキラした視線を送った。

「いいわよ」と返ってきた。

「これからよろしくな妖夢」

「はい！」

縁側まで歩いてくると紫は思い出したようにスキマを開いた、「預かっているものがあつたわ」と言いながらスキマに手を入れがさごそと何かを探していた。

「これ預かってるの忘れてた」

スキマから出したのは青い装甲に黄色いライトが付きスピード、ブレイドのマークが描かれた二輪車。

「ブルースペイダー！」

ブレイド専用のバイク、ブルースペイダーだった。

「土と一緒に送るの忘れてたからって持ってきたのよ」

紫の口振りから土はこの世界に来たのが伺えるがもう別世界に行つただろう、デスシヨッカーが悪事をほとんどの並行世界で働いているため世界を渡れる彼は忙しいのだ。

「その暇あるなら一人で行かせるなよ」

ごもつともである、土の性格を知るものは仕方ないと片付ける、彼もその一人のためそう片付けた。

「あなたは取り敢えずユウスケに会いに行きなさい、はいこれ地図」
いつもならカオスな事を好む紫だが幻想郷が危険に曝されているという事もあり一魔に地図を渡した、彼女なりにこの幻想郷があるクウガの世界や様々な並行世界の危機であるというのは感じている、だからおふざけとかはできない。

「どーも」

「そうだわ、妖夢、案内してあげたら？」

幽々子の言葉で一魔に幻想郷を案内することに決め、妖夢と二人でブルースペイダーで出掛けることに。

白玉楼に残ったのは紫と幽々子だけだった。

「ねえ紫、なんであなた、仮面ライダー達に関わってるの？」

どう言った系列で協力者になったかが気になる幽々子は率直に聞いてみた。

「この幻想郷があるクウガの世界が……始まりだからよ、新しい時代を戦う仮面ライダー達のね」

「新しい？」

それだけしか言わなかったがいずれ紫の口からすべてが話されるだろう、その時は近いかもしれない。

(あの方にも話しておいた方がいいかもしれないわね……………)

そして冥界の道を走るブルースペイダー、一魔が運転して後ろに妖夢が。

「空を飛ぶより速いかも」と感想を盛らしていると現世に、着いた先は魔法の森の中だった。

「ここは魔法の森……………」

一旦バイクを停車させ地図を見る、ユウスケがいる場所は博麗神社と聞いているためその方向を目指すことに。

その頃ユウスケは……

「そろそろ置賜しよーか」

海東のその言葉に同意して紅魔館から出ようとしていた。

「また来なさい、門番通してからだけど」

門番を轆き逃げて屋敷の中に入ったからそこを突っ込まれつつレミアに言われユウスケ達は博麗神社への帰路に。

「それじゃ私はここで」

幽香とは別方向、途中で別れを告げると。

「送って行こうか？」

ユウスケが誘った、総達はどんな答えが返されるか耳を向けていた。

「お願いするわ」

ちよつとしたツーリングが実現しユウスケは軽くガッツポーズ、トライチェイサーに二人は乗り走り去った。

「小野寺くん幸せそうだな」

海東は色々と成長しているユウスケを見てこれからが楽しみだと思いつつ見送った。

「今日は兄貴の鯖味噌食べたいな」

「そつだな……………帰りに里に寄るか」

葬の言葉で今日の夕飯は決まるのだった。

「あれ？　なんかトライチエイサーの調子が変わだな……………」

一度停車させアクセルを回しエンジンを吹かし音を聞き首を傾げる。

「壊れたの？」

「いや、普通に走れるけど……………大分整備もしてなかったからな……………」

あの際ににとりに改造されれば良かったと考えたが過ぎた事はしようがないと片付け。

「取り敢えず送るよ幽香さん」

「お願いね」

トライチエイサーを再び走らせ太陽の畑へ向かった。

「ここが博麗神社ですよ剣崎さん」

一魔と妖夢は博麗神社へ上がる階段の前に立っており一段一段上がりながら会話をする。

「なんか少しボロいな」

「まあお賽銭が集まらないですからね」

上から「大きなお世話！」と響いてきた、聞こえていたのではないかと妖夢は思っていた。

二人は境内に上がるとそこには二人の男女、霊夢と咲一がいた。

「咲一さん！」

「あ、妖夢ちゃん久しぶり〜」

咲一は妖夢とも知り合いだったというよりは咲一の顔が広いのだ、この幻想郷の中で、地獄にいる閻魔様とも仲がいいぐらい。

「そっちは誰？」

霊夢に聞かれ自己紹介する一魔、妖夢はつい口が滑り仮面ライダーと教えると咲一は自分はアギトだと教えた。

「ここ、クウガの世界じゃ……………まあいいか」

クウガの世界でありアギトの世界でもあるこの世界、土からはクウガの世界としか聞かされていなかった。

「まさかまた仮面ライダーが来るなんて〜」

「それでユウスケって奴は？」

「そういえば」と今頃ユウスケ達がないのに気付き辺りをキョロキョロしていた。

「そりゃあなた方が二人で……………」

想像できた、近寄りがたい雰囲気だったから神社から離れたのだと。

「悪いことしたわね……………」

「そういえば屋敷出て三時間……………おじょーに怒られそうだな……………」

「当たり前よ」

咲一の背後に咲夜が現れた。

「げげっ!?!?」

「三時間以上も喋って……………帰ったらどうなるか分かるかしら？」

「ええっと……………まあ確かに咲夜とイチヤイチャするのは悪くないけど〜」

咲一はかなりのシスコンである、そのため寝てる途中に咲夜のベッドに潜り込むのもしばしば、胸がどれくらい成長してるか揉むことも。

「アンタまだシスコン治ってないの……………」

彼女は呆れていたがそれも込みで受け入れているからとやかく言わない。

「それじゃ私達は」

咲夜は咲一を連れて帰った。

「なんか楽しそうな人達だな」

一魔は能天気な感想を述べていたがその通り。

「帰って来たわね」

十六夜姉弟が去った後、海東達が帰って来たがユウスケがいないのに気が付いた。

「彼ならゆうかりんを送ってたよ」

なぜかそのようなあだ名で呼ぶが気にせず「そっ」と素っ気なく答えた。

そしてまた一魔は名を名乗った、ブレイドの名も込みで土に頼まれここに来た。

「土がね、わかった、小野寺くんには僕から伝えておくよ」

「頼む、じゃあ帰ろうか？」

「はい」

一魔と妖夢は要件を伝え神社をブルースペイダーで駆け後にした。

「今日の夕飯は鍋にしましょう、剣崎さんの歓迎会的な」
「一魔でいいよ、妖夢」

ブルースペイダーで走りながら他愛もない話をしているとブレーキを掛けて停車させた。

「剣崎さん？」

「何かいる気がする……………」

「何かって……………」

森の中を覗いてみるとそこにはコーカサスオオカブトのような金色の盾と剣を持った怪人がいた。

「カテゴリーKキングだと!？」

一魔は咄嗟に自分が持っているスペードのカテゴリーKのカードを見たがちゃんと手元にある。

「……………」

コーカサスオオカブトの怪人、コーカサスビートルアンデッドは無
言で襲い掛かってきた。

「くっ！ しっかり掴まってる！」

「えっ！？ ひゃっ！」

ブルースペイダーによる後輪キックをコーカサスビートルアンデッ
ドに食らわせ吹き飛ばすとそれから降りる。

変身ベルトのブレイバックルにカテゴリーKのカードを挿入し腰に
付けるとランプを繋いだようなベルトが巻かれていき装着、

ゆっくり右腕を伸ばすと「変身！」と叫び手首を捻り左腕を伸ばし
右手でバックルの横に付いたターンアップハンドルを引くとバック
ルは裏返しスピードのマークが描かれた面が変わり「Turn U
p」と響く、

そこから本来は青いはずの壁オリハルコンエレメントが現れるが黄
金に輝いておりそれはコーカサスビートルアンデッドを弾き飛ばし
一魔はそれを潜り抜けると。

「あれが仮面ライダーブレイド……………」

仮面ライダーブレイド・キングフォームに変身しキングラウザーを
握る。

キングブレイドとコーカサスビートルアンデッドとの戦い、普通に
は絶対見られない戦いだ、なぜならキングブレイドはコーカサスビ
ートルアンデッドの力を使い変身しているからだ。

「……………」

ブレイドはキンググラウザーを下に向け仁王立ちをしていた、そのま
まゆっくりと歩きます。
コーカサスビートルアンデッドは剣を振り下ろしてきたがそれを左
手で掴む。

「っ！」

それには激しく動揺した、すごい衝撃だっただろうにびくともしな
かったからだ。

「ウェイッ！」

キンググラウザーを翳し振り下ろし一閃するとコーカサスビートルア
ンデッドの体に火花が走り後方へ吹き飛ばす。

「なんて力強い剣なんだ……………」

妖夢はブレイドの力強い斬撃に見惚れており何か盗めるものはない
か注目していた。

キンググラウザーの刃に電気が纏いその状態で斬撃を食らわしていく、
コーカサスビートルアンデッドは盾で防ごうとするがその盾すら切
り落とされ体から火花が散っていく。

そして、鎧の五ヶ所から五つの金色の光が出てカードとなり手元に
10、J、Q、K、Aのカードだった、それをキンググラウザーの力
ードリーダーに装填していく。

【SPADE TEN】

【SPADE JACK】

【SPADE QUEEN】

【SPADE KING】

考え込んでいると後ろから呼ばれる声が、妖夢が駆けてきた、長居は無用と思いブルースペイダーに乗りその場を後にした。

…黙って見てるわけにはいかないんだ……………」

奏歌

「あなたの言うこともわかります、ですがすべて物分かりがいいフアンガイアばかりじゃ……………」

シンジ

「人と妖怪、俺は両方を守るためにライダーになったんだ！」

咲夜

「咲一だけに、戦わせたくないから……………その力を貸して！」

葬

「兄貴？」

総

「俺の本当の名は……………天道……………総だ……………」

霊夢

「咲一がまた……………進化した」

ユウスケ

「だから、見ててください、俺の……………変身」

次回『凍てつく暴君』POWER to TEARER』

次回からオーズ編スタート！

第19話『凍てつく暴君とPOWER to TEARER』(前書き)

今回はオーズが最初からエ アンゲリオン状態、では始めまります。

第19話『凍てつく暴君とPOWER to TEARER』

ある日の妖怪の山。

「すみませんシンジさん」

その上空、シンジが変身したナイトがダークウイングと合体し巨大なコウモリの羽根を広げ鴉の翼を広げた文と共に並んで飛行していた。

「いって文ちゃん、この山に居させてもらってる身だしこのくらいは、俺も気になってたし、空を飛ぶ天狗が何人も落下して大怪我をしたり……」

この先は言い難かった、その空を飛んで落下した天狗が大怪我だけではなく死亡しているのもいると口から言い出せなかった。

「大丈夫ですよ………だけど天狗に追い付くなんてどんな手品を使ったのでしょうか？」

「だよなあ、俺だってナイトに変身しても文ちゃんに追い付けないのに」

その襲撃犯は天狗のスピードに追い付くぐらいの速度らしくそこ

で幻想郷最速の文と仮面ライダーであるシンジが調べることに、文はシンジを巻き込むのはよくは思っておらず仲間の天狗が依頼に来た時、断らせようとしたのだがその本人が気になったら首を突っ込まずにはいられないため引き受けてしまったため渋々と一緒に調べに。

「そつだ、これ持ってて」

ナイトは龍騎のデッキを出し文の手に渡した、なぜそんなことをしたのかわからなく聞いてみると。

「俺がナイトになってる時は持ってて、お守り代わり程度に思ってた」

つまりは龍騎の時はナイト、ナイトの時は龍騎のデッキを預けるということである。

「迷惑かな？」

「い、いえ、そんなことはないですよ、ありがとうございます」

取り敢えず礼を言う、使い方はシンジのを見ていたから分かる、だが何かものすごい不安に見舞われた。

「シンジや」

名前を呼ぼうとしたら「待った」を掛けられ首を傾げる。

「俺は文ちゃんって呼んでるんだから文ちゃんもさんじゃなくてくんでも呼び捨てでもいいんだよ？」

文は大抵敬語だがそれは仕事の時でそれ以外はタメである、だがシンジに対しては何か遠慮があった、基本はさん付けか呼び捨てだがシンジは仲良くしたいという気持ちから出た言葉だった。

「それなら……………シンジく」

名前を呼ぼうとした時、突然森の中から紫に輝く強力な光線が放たれ空に向かって伸びていく。

「危ない！」

二人は左右に散開し光線を避け地上を見る。

「今のは……………一体……………」

「来るよ！」

ナイトバイザーを持ち構えると森の中から紫の異形が飛び出し紫の大きなマントのような羽根を広げ羽ばたく、翼竜が羽根を広げたような紫の仮面に紫色の眼に胸には円、オーラングルサークルの中にプテラノドン、トリケラトプス、ティラノザウルスの絵が描かれておりスーツは白く肘から手、

膝から爪先は恐竜のような鋭い爪が生えた腕と脚に手には斧型の武器メダガブリューが持たれており肩にも鋭い爪が、

腰には三枚の紫色のメダルが挿入された傾いたバックルのベルトが巻かれていた。

「仮面、ライダー……………」

それは仮面ライダーと呼べる姿だった、そう、彼は欲望のエネルギーをセルメダル等にしそれを使い戦う仮面ライダーオーズ・プト

ティラコンボだが眼の色が違った、通常は緑だが今二人の目の前にいるのは紫の凶暴そうな目付きをしたまるで暴君のようなものだった。

「かなり危険な感じがします……………！」

「ああ……………文ちゃん、山を降りてタクミやおっさん、慧音や妹紅に伝えてきて、仮面ライダーが出たって」

近場ならゼロノスに変身できる早苗がいるのだが相手のオーズが実力者であると感じたため経験が少なく未熟なため危険だと感じ里にいる経験豊富なタクミと戦闘のプロと言ってもいいぐらいの銃志郎の名前を上げたのだ。

「……………わかりました」

自分も戦いたいと思ったがここは戦闘経験があるナイト〃シンジに任せ人里へ向かって飛行するがオーズは獣のような唸り声を上げつつ羽根を飛ばたかせ文を追い掛け。

『速い！』

その速さは幻想郷で最速の速さを誇る文と引けを取らないぐらいだった。

「待ちやがれ！」

ナイトはオーズを追い掛けたがスピードが段違いだった、このままでは彼女が危ない、そう感じその場しのぎで使うのも癪だが今はこれしかないためファイナルベントのカードを出しナイトバイザーに装填した。

飛び立とうとしたが羽根を痛めたらしく思うように飛べず渋々歩いて山を下る事に、山道ではなく森の中を歩く、理由は山の妖怪は縄張り意識が高いためこの天狗襲撃事件によそ者が介入するのをよくは思っていないからだ。

(ただの天狗や妖怪では歯が立たない)

先の戦いでオーズの尋常ではない速さを目の当たりにしたため恐ろしさはわかった、

山の妖怪だけでは解決できない、それは理解しているため山の妖怪の縄張り意識など関係なしに禁に向かって足を動かしていった。

「ネズミ」

「ネズミね」

ユウスケとキバーラの前に一匹のネズミ……ではあるがネズミの妖怪の少女が立っていた。

「この耳、某あの有名で著作権が厳し過ぎるキャラクターに似てるよね」

「ええ……大丈夫かしら？」
「要件を言わせてもらえない？」

ようやくその少女がユウスケ達のトークに口を挟んだためそのトークは終わった。

「あんたが小野寺ユウスケ？」
「そうだけど？」

なぜ自分に用があるのかわからなかったが話は最後まで聞いた。

「今日の正午過ぎ、命蓮寺みよつれんじへお越しをと」

「命蓮寺？」と首を傾げ互いを見合わせると。

「やっぱり目を付けたのね、怪人を倒してる仮面ライダーや私達に」

後ろから声が聞こえ振り向くと賽銭箱の前に霊夢が立っていた。

「居たんだ」

「そりゃここは私の家だからね、異変がないか茶葉がない限りは出掛けないわよ」

いつもの霊夢とは違う、そう感じているユウスケは身構えていた。

「聖に伝えておきなさい、妖怪と人間が分かり合えてもアンノウンとは分かり合えないって」

「う、うん」

少女は頷くと博麗神社を後にした。

「霊夢、今の子は？」

「里にある寺知ってるわよね？ その命蓮寺って所に住む妖怪のナズーリンって奴よ」

イラつきながら説明していく霊夢、言葉を返すことも許されない秀困気を醸し出しており言葉を挟めないでいた。

「その寺の主、聖白蓮ひつじつびやくれんって魔法使いがいるの、妖怪や神、仏に人間は全て同じって絶対平等主義なの」

「それっていいことじゃない？」

ユウスケから見たらそうであるが幻想郷の人間や妖怪からはそうではないらしいようだ。

「それで怪人も仮面ライダーも平等って言い出したのよきつと……」

「……………アンノウン……………咲奈さんのこと？」

まさかユウスケに当てられるとは思わず頷く。

「ユウスケ、キバーラ、怪人と人間が分かり合えて共存してる世界って見てきたんでしょ？」

「そうよ……………だけどアンノウンと分かり合えてる世界は……………」
「グロンギもだよな」

霊夢は咲一の肉親を殺された憎しみからアンノウンとは分かり合えない、そう考えていた、確かにそうである、アンノウンと人間では見方が違う、アンノウンは人間を自分達が管理できるように力を奪おうとアギトになりえる人間を葬っていった。

「命蓮寺には私も行くわ」

「……………ああ、ちよつとその平等主義を考え直させた方がいいかもしれないかもな」

怪人達により何人も犠牲者が出ている、そう考えるとその平等主義は少し直した方がいいと思ひ始めた。

「総達はどつする？」

屋根の上を掃除している総と葬に聞いてみる。

「そつだな……………兄貴どつする？」

話し掛けるが総は上の空だった、何かを思ひ出しているかのよう

「兄貴？」

「ん？ なんの話だ？」

聞いていなければたらしく葬は始めから簡単に説明した。

「俺は残るよ、葬が行つてこい、少しは勉強になるかもしれないか

ら

「わかつた」

するとまた空を見上げて何か考え込み始めた。

「シンジが？」

「はい……………」

寺子屋の職員室、タクミ、銃志郎、慧音、妹紅に山での事件を話し文がその事件を起こしていた仮面ライダーの事を話していた。

「大天狗には？」

「いえ、許可なんて取ろうとしても山の妖怪だけで解決しようと思え栄を張ると思ったので」

大天狗とは天狗で二番目に偉い天狗で主に管理職を勤めている。

「なるほどな……………それに永遠亭に行ってきたらどうだ？」

文の傷んだ羽根を見て慧音は進めてきた。

「ですが……………シンジさんが」

一緒に飛んでいたシンジの安否が気になり傷の手当てどころではないようだ。

「んな傷で着いてこられても迷惑だ」

面倒くさそうにタクミは立ち上がるが山には行く気があるみたいだった。

「そうだな、この人達には恩があるからな、ゴウリュウガン」

【ああ】

銃志郎も立ち上がりサングラスを掛けた。

「妹紅とおっさんと行くからてめえは永遠亭に行つてこい」

「わたしは強制的かよ」

「……………分かりました」

するとタクミはデルタフォンを慧音に渡す。

「なんかあったらこれで俺のファイズフォンに電話しろよ、使い方は声で番号を言えば俺のに繋がるから」

ファイズフォンの番号を教え外に出るとオートバジンに跨る。

「おっさんは後から着いてきてくれよ」

「だからお……………まあいい、分かった」

タクミと妹紅が先に出発し銃志郎は後から着いていく形で出発した。

「では行くか」

「はい」

慧音は文を連れ永遠亭に向かつていった。

「ん…………あ…………ここは……………」

「気が付きましたシンジさん？」

その頃シンジは気絶から覚ますと目に入ったのは早苗とデネブだった、ここは守矢神社らしい。
起き上がるうとしたらデネブに止められ。

「まだ寝てなきゃダメだよシンジ」

「俺……………ナイトデツキは!？」

早苗の手にちゃんと握られておりホッとした。

「森の中で倒れてるのを見付けたんですよ？」

だんだんと何があったかを思い出し始めていた、オーズと戦っていたことを。

「そっか……………ちゃんと生きてるんだ……………」

オーズ、仮面ライダーと戦っていた事を二人に伝えると。

「その仮面ライダーでしたら……………」

隣の部屋の襖が開いておりそこには一人の短い黒髪の青年が布団で眠っていた。

「すごい爆発が見えたので何事かと森に入って、それから見付けた時に紫の仮面ライダーがいたんです、私はすぐにゼロノスに変身しようとしたのですが急に苦しみだして変身が解除されて倒れちゃったんです」

正直戦わないでよかった、そう思っている、それはデネブもだった。

「腰にベルトが着いているんですが取れなくて、その中の紫のメダルも」

青年はまるで死んでいるかのように眠っており寝息もあまり聞こえていなかった。

「目が覚めてまた暴れるなんて事がなければいいのですが……………」

ユウスケと薺、キバーラと霊夢は言われた通り命蓮寺を訪れていた。

「妖怪の寺なんだけど元々は宝船だったのからそれが妙に人間が感
心を持つちゃって人間の信者も来るのよ」

要は博麗神社と守矢神社の商売敵。

「なるほどね……確かに興味湧くわ」

「海東が聞いたら颯爽と侵入するわね」

「そうだな」

ユウスケ、キバーラ、葬と喋っていくと命蓮寺の扉に手を掛けそ
の中に入っていく。

「ようこそ命蓮寺へ」

入るとすぐ目の前に金髪つばい長髪で黒い服を着た女性がそこに
いた、彼女がこの寺の主である聖白蓮である。

「初めまして、小野寺……」

ユウスケが自己紹介しようとしたが霊夢が先に出て
しまい。

「要件は何かしら？」

「分かっていますよね？ 私の考えが」

「そうね、どうせ妖怪や人間は平等だから怪人も仮面ライダーも平
等とか言いたいんでしょ？」

完全に喧嘩腰な霊夢、これでは話にならないと感じたユウスケは
一旦話を止めた。

「一回落ち着こ霊夢ちゃん？ そんな喧嘩腰じゃできるものもできないから」

「…………ごめん」

明らかに自分は冷静じゃなかった、そう思い謝り後はユウスケに任せた。

「小野寺ユウスケ、仮面ライダークウガです、こっちは影山葬、仮面ライダーパンチホッパー、この子はキバーラ」

後の二人を紹介すると寺のもっと奥に進んでいき居間のような部屋に入り座る。

「それで話とは」

「先ほど彼女も言っていた通り怪人と仮面ライダーについてです」

やはりと言う表情をし白蓮の話聞く。

「私は人間も妖怪、神も仏も対等であると思っています、それを広めるためにこの寺を建てました」

「それは立派なことです、聖さん」

目的を聞くと賞する言葉を送る。

「俺は人や、この幻想郷に住む妖怪達の笑顔を守るために怪人や悪の道に入ってしまった仮面ライダーと戦っています」

ユウスケも自分が戦う理由を話す。

「確かにそれは立派なことです」

その言い方からして怪人やライダーを倒すことをよくは思っていないと判断できた。

「ですが私は怪人も仮面ライダーも平等だと思っております」
「人や妖怪を殺してでもですか？」

その質問に白蓮は頷くと霊夢は少しピクツとなるがキバーラが肩に乗り耳元で話し掛け落ち着きを取り戻す。

「あなたが言う通り怪人も仮面ライダーも平等かもしれませんが、さすがすべてがあなたと同じ考えではないことは分かりますよね？だからこの命蓮寺を建てた、そうですね？」

少し圧されつつ頷く白蓮。

「俺が戦ってきた Grongi は人間を見下していました、そして人間を自分達のゲームのための動物的としか見ていませんでした………
…そしてアンノウン、アンノウンは人間を自分達の管理下に置けるように特殊な能力を持った人間を次々と殺しています、今も」

ここでアンノウンの話が終わると思いきや。

「だから霊夢はアンノウンを憎んでいます、自分が好きな人の姉をそのためだけに殺され不幸な目に会うことになったので」

まさか自分がアンノウンを敵視し憎んでいる理由を言うとは思わず呆気に取られていた。

「自分がなんで敵視しているか、なんで嫌いなのか、それを伝えな

いと分からないよ」

考えてみれば自分の口から言っただけではないなかつた、それを代わりにユウスケが言ってしまった、自分が話さなければならぬのに。

「悪かつたわね……………また」

「いいよ、俺も経験あるから、理由も聞かないで殴り掛かつた事かね」

苦笑しつつ昔の事を思い出していた。

「ですが中にも人間と共存を求める怪人もいます、オルフェノクやファンガイア、味方になってくれるイマジンも、だからその志を間違つた方向にさえ行かなければ」

それ以上は言わなかつた、後の答えは自分で見付けるしかないから。

「……………分かりました、お時間を取らせてしまいすみませんでした」
「いえ、あなたみたいな人と会えて良かったと思います」

微笑みながら言葉を返し立ち上がろうとしたのだが。

「あ……………足が痺れた」

正座をしていたため足が痺れ立ち上がろうとしたのだが倒れてしまった。

「兄貴……………さっきまでかつこ良かったのに」

「ごめん」と葬に詫びを入れると起き上がり痺れが取れるまで座ることに。

「だけどユウスケがここまで成長してたなんて思わなかった」
「俺だってただ情報収集をしていただけじゃないよキバーラ」

ニツと笑いながら喋ると葬は何か気になっていた様子だった。

「どうかした葬？」

「ちよつと総の兄貴が気になって」

「総を？」

葬は頷くと口を開いた。

「俺、兄貴のこと全然知らないんだ、昔何をやってたのかも、聞いても話してくれないし……組織に入ったのは知ってるけど他は全然」

「葬でも知らないことがな……」

博麗神社では。

「……………お前は必要ない、二度と俺の前に現れるな」

総の前に赤いカブトムシ型のメカが飛んでいたが目を背けていた。

「太陽の英雄……そんな過去の栄光だ、俺は自分の妹を守れなかった……だから名前を偽った……過去を忘れるために……天道総真と決別するために……だからもうお前は必要ないんだ、カプトゼクター」

カプトゼクターはしょんぼりとしたような反応を見せその場から消え代わりにキックホッパーとは別のベルトが落下してきた。

第19話『凍てつく暴君とPOWER to TEARER』(後書き)

次回予告

タクミ

「どっつするっ？」

妹紅

「道はここだけじゃないからな」

エイジ

「ウガアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ゼロノス

「一体何が!？」

霊夢

「妖怪の山が……………」

魔理沙

「凍っちまったぜ……………」

次回【メダルと暴走と氷河期】

第20話『メダルと暴走と氷河期』（前書き）

守矢神社がエ……………大変な事に（爆）
プトティラが好き過ぎてたまりません！

第20話『メダルと暴走と氷河期』

「どうする？ バカ正直に参道から入るか？ 天狗が見張ってるぞ？」

「お前が何バカ言ってるんだよ、モコるぞ」

妖怪の山の禁、茂みの中ではタクミと妹紅は山に入るための参道を見張る天狗達を見て話していた。

「じゃあタクミ、お前が囮になれ」

「またかよ！」

つい大声を出して口を塞がれる、見張りの天狗達は身構えて更に見張りに力を入れる。

「おいおい……………力入っちゃまったじゃん」

「わりい……………」

考え込んでいるとタクミは後ろに停めていたオートバジンを見て

「そっだ」

「なんだアレ!？」

天狗達の目に入ったのはバトルモードとなり飛び回るオートバジンだった。

「逃がすな！　もしかしたら襲撃事件の犯人かもしれない！」

天狗達はオートバジンを追い掛け飛び去っていった。

「いつも俺を巻き込むのが悪いんだから」

日頃の恨みを晴らしたかのように笑みを浮かべていた。

「お前なあ……………慧音にちくるぞ？」

「じゃあお前が職員室でタバコ吸ってたのちくるぞ？」

「スミマセンデシタ」

「行くぞ」と言い見張りがいなくなった参道を登り始め妖怪の山に入ってしまった。

「ここにいたか小野寺と博麗は」

命蓮寺にユウスケ達を探して慧音が訪れてきていた。

「あら慧音さん」

「白蓮殿、どうもだ」

寺の主と軽く挨拶を交わすと座るように進められたので自分も座る。

「私達を探してたの？」

「一応お前達にも話しておいた方がいいと思っただけ」

妖怪の山での襲撃事件の話をはじめシンジが行方不明、謎のライダー、文が永遠亭にいとこの順番で説明していく。

「シンジが……その恐竜みたいな仮面ライダーって……」

キバーラは色合いで名前はすでに浮かんでおりオーズ・プトティラコンボであると教え簡単にオーズについて説明、初めて幻想郷でグモンと戦った時にグモンに力を与えたセルメダルを使い戦うと。

「だけど……プトティラコンボの眼は緑のはずなのよね、なぜかしら？」

「暴走してるのかな？」

舞も自分の意見を上げその意見に皆は注目し「それだ」と声を揃えた。

「あり得るわね」

「あり得る……」

眼の色が違う暴走した仮面ライダーにはユウスケが一番知ってい

た、なぜなら自分でもあるからだ。

「タクミ達を追い掛けよう」

「そうね」

「賛成」

これはさすがに心配だと思いユウスケ達も妖怪の山に向かうことに。

「これじゃ完璧異変ね、私も着いていくわ」

霊夢も名乗りを上げ役者達は立ち上がるうとした刹那、突然大きな爆発音が轟いた、
急いで外に出てみると目にしたのは。

「妖怪の山が噴火？」

妖怪の山の頂上から煙が上がっていた。

「山は火山ではない、となると何か爆発したのでは？」

様々な意見が出ていた。

ユウスケ達が外に出る数十分前。

守矢神社でシンジがお茶を飲んでいた。

「どうですかお加減は？」

「大分良くなつたよ、ありがと早苗ちゃん」

「いえいえ」

早苗に対しては年下の友達であるからしてさん付けは仕方ないと考えている。

「だけどあの男、全然起きないな」

「だよな」

オーズの変身者である青年を見ながら三人は話していた。

「起きないと何も分からねーよ」

「あ、俺そろそろ夕飯の準備してくるよ」

デネブが立ち上がろうとしたその時、青年はピクリと動きだし何かになされているような苦痛の声と表情をしながら目覚めそうだった。

「起きる！」

「大丈夫ですか？」

三人は青年の元に近付き完全に目覚めるのを待っていたが「逃げ

て………」と小さく弱々しく囁いた。

「逃げて？」

だが遅かった、青年の臉が上がると目は紫に輝いておりまるで何かに取り付かれていているように。

これには危険と察しデネブは二人を担いでできるだけ遠くに離れ青年に掛けられていた掛け布団が吹き飛びベルトの右側に掛けられていた丸いアイテム、オースキャナーが勝手に浮遊し変身ベルトのオーズドライバーのバツクルが傾きオースキャナーをバツクルの上でスライドさせ中の三つのプテラメダル、トリケラメダル、ティラノメダルを読み込ませてしまう。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああつ!!」

断末魔にも聞こえる叫び声を上げると「プテラ！ トリケラ！ ティラノ！ プットツティラノザウルス！」と歌のような音声が流れ青年はオーズ・プトティラコンボに変身してしまい立ち上がる。

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!」

手にはメダガブリューが持たれており振り回し暴れ始める。

「おい何が起きてるんだ？」

神奈子と諏訪子がやってくるが。

「二人も逃げた方がいいですよ！」

「どうかしたの？」

首を傾げ聞いてみるがデネブは二人を担いだまま走り去った。

「一体何が……え？」

部屋を覗くと獲物を探し辺りを見渡すオーズが立っており啞然と
している。

「グルル？」

【プツツティラ／＼ノヒツサ／＼ツ！】とメダガブリューをバズー
カモードという形態にし銃口に紫色のエネルギーが溜まりゆき神奈
子達に目が付いた。

「あ、いや………お邪魔しました！」

「ちよつと先に逃げないでよ！」

二人も走りだしオーズから逃げた、するとメダガブリューに溜ま
ったエネルギーを放つシンジがナイトに変身している時にも使った
ストレインドウムを炸裂してしまった。

そして現在、大きな爆発音が響いた後に至る。

「あの辺り、守矢神社がある辺りよ！」
「何かすごく嫌な予感してきた」

「なんだよ今の爆発？」
「わたしに聞くなよ」

山を登るタクミと妹紅にも爆発音が聞こえ頂上の辺りから煙が上がっているのが見えた。

「守矢神社の辺りだなあそこ……………」
「最悪かもしれないぜ」

頂上の辺りから紫色に輝く光線が天に向かって放たれているのが見えたためファイズフォンを出し変身コードを入力し腰にあらかじめ巻いておいたファイズドライバーに連結しファイズに変身した。

「行くぞ」
「ああ」

二人は走りだし頂上を目指した。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

守矢神社、だが神社自体はストレインドウムで吹き飛び崩れており焦げた柱や崩れた壁しか残っていなかった。

「グルル……！」

オーズはメダガブリューを斧型のアックスモードに変形させ振り回し暴れていた。

「神社が……！」

茂みに隠れ涙目になる早苗と神奈子と諏訪子。

「どうする？ このまま戦っても」

振り返ちに会うのは目に見えていた。

「俺は……アイツを助きたい」

いきなり何を言いだすのかとシンジに注目する。

「アイツ、苦しんでたからさ………本当はあんなことしたくないんじゃないかな」

オーズは獣のような遠吠えを上げながら神社の階段を降りようと残っていた鳥居を潜ろうとしたら鳥居の柱に火花が散り崩れてその下敷きとなった。

「鳥居があああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

早苗は血の涙を流しつつ叫ぶ。

「いいのか？ 壊して」

「構わねーよ」

境内にファイズと妹紅が上がってきた。

「お前らかあああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

御柱をどこからか出して持ち上げ神奈子が殴り掛かるうしていたがデネブとシンジに止められる。

「今はそれどころじゃないでしょ！」

「落ち着きましようよ神奈子様〜！」

ファイズは正直面倒くさそうに右手をスナップさせるとオートバジンが隣に着地しビークルモードに変形しミッションメモリをハンドルグリップに挿入し引き抜きファイズエッジとして起動させる。

「さて……………コイツやれば天狗襲撃事件も終わりか」

と走りだそうとしたのだが。

「タクミ後ろ！」

シンジは腰にVバックルが巻かれている状態が出てきて注意をするような呼び掛けをし後方から光弾が飛んできてすぐに振り向きファイズエッジで切り払いする。

「分かりました」

「妹紅も着いていけよ、もしかしたらおっさんが来てる途中かもしんねーから」

「任せるぞ」

Aゼロノスと妹紅達は神社から離れていくのを見て。

「俺が仮面ライダーと戦うからタクミは」

「ああ」

ファイズはショッカーグリード、ナイトはオーズに向かって一斉に走りだした。

【チェンジ！ マグナリユウガンオー】

「轟龍変身！」

銃志郎はマグナリユウガンオーに変身しウルフキーというマダンキーを取り出しゴウリユウガンに挿入する。

【マグナウルフ】

ゴウリユウガンの銃口から光線が放たれると赤い魔方阵が現れそこにメカニカルな銀色の狼が召喚された、これがマグナウルフである、マグナウルフはバイク形態であるビークルモードに変形しマグナリユウガンオーを乗せると走り出す。

「頂上で何が起きているんだ……………」

マグナウルフの走行音が響き渡る妖怪の山、そして頂上から聞こえ、見える爆発音と閃光、不安を抱きながらも進んでいった。

守矢神社では二大ライダーはほとんどシヨツカーグリードとオーズに圧されてしまい苦戦を強いられていた。

「強すぎるだろコイツら……………！」

倒れ、ファイズエッジを杖代わりにし立とうとするファイズ、ナイトもナイトバイザーを杖代わりにし立ち上がっていた。

「シヨツカアアアアアーツ!!!!!!!!!!」

「があああああっ!!!!!!!!!!」

オーズはメダガブリューにセルメダルを挿入しグランド・オブ・レイジを炸裂し地面に突き立てると地割れが発生しファイズ達の方へ向かっていき岩等で吹き飛ばされてしまう。

「ぐわあああぁっ!!!!!!!!!!?」

「がはっ!?!」

階段から転がり落ちてしまい二人の姿は見えなくなってしまった。

「グルル……がああああああああああああああああ
あつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

オースキヤナーでメダルを読み込むと【スキヤニングチャージ!】
と鳴り響きオーズの足下から広範囲に掛けて凍結していく。

「霊夢く!!」

「魔理沙!!」

魔理沙がユウスケ達と合流し妖怪の山がある方を向くとその緑豊かな妖怪の山がみるみるうちに真っ白に凍っていつてしまっていく。

「妖怪の山が……」

「凍っちゃったぜ……」

「タクミ……」

「山が!!」

森の中を走るAゼロノス達、足下や木々が凍っていくのを見て立ち止まる。

「上で何かあったんじゃ……」

に巻く。

「俺に前振りはいらねー、最初から最後までクライマックスだけ！」
「意味わからん」

神奈子に突っ込まれつつ黒い定期券入れのようなケース、ライダーパスを持ちターミナルバックルにタッチ、セタッチという行為をすると【Sword Form】と電子音が流れ駅で流れるようなメロディーがベルトから流れるとモモタロスの姿は変わっていく、赤い桃が開いたようなデンカメンに赤い鎧の仮面ライダーに。

「アレは電王！」

驚いたように声を上げていくイマジン達。

「電王ってなんだおデブ？」

「電王は……………イマジンから時間を守る時の守護神……………まさかあのイマジンは電王に変身する、時間の影響を受けない特異点に取り付いた……………」

モモタロスが変身した仮面ライダーの名は仮面ライダー電王・ソードフォーム。

「俺、参上！」

親指を立て顔に向け左腕を前に、右腕を後ろに伸ばし姿勢を低くしポーズを取った。

「妖怪の山が……………」

博麗神社からも妖怪の山の異変は見えしており総は握りこぶしを作り今にでも飛び出しそうだった。

「凍ってしまった妖怪の山……………それを溶かせるのは太陽の輝き……………」

カブトゼクターが残したライダーベルトを見て手を伸ばす。

「俺は再びコイツを……………」

総は悩むのだった、過去の栄光であったものになっていいのかと、その栄光に浮かれ取り返しの付かない事をしてしまった事を思い出していた。

第20話『メダルと暴走と氷河期』（後書き）

今回はかなりフラグが立ちましたよ！
シヨツカーグリードにモモタロス！、そしてオーズ！これでやるこ
とはただ一つ！セイヤーッ！ですよ！

次回予告

タクミ

「助けたいなら手加減するな、全力で立ち向かえ」

マグナリユウガンオー

「なんだよあのエ アンゲリオンは!？」

早苗

「あなたは？」

健太郎

「僕は野上健太郎」

文

「龍騎を届けないと……シンジくんに」

第21話『仮面と伝説とダブルライダー』（前書き）

タイトルがいいものに（笑）

最近昭和やダブルライダーが出る確率が高いような。

第21話 『仮面と伝説とダブルライダー』

「大丈夫かシンジ！」

「なんとかな……」

シンジとタクミは肩を貸し合い見つかりにくくするために凍り付いた森の中を歩いていた。

「まったくシンジ、お前手加減してたたる？」

「バレたか……」

オーズと戦っている時、明らかに手加減し戦っていたのを気付いていた。

「アイツ、苦しんでるんだよきつと………暴れたくないのに、何かに取り付かれてるような」

「………シンジ、そいつ助けたいなら手加減するな、全力で立ち向かえ」

「タクミ？」

「………」

後は何も言わなかった、言う必要はない、後は自分で考えろと。

「わかった……………」
「タクミ！ シンジ！」

そこに銃志郎が変身したマグナリユウガンオーが合流した。

『おっさん！』

「おっさん言うな！」

同時におっさんと呼ばれ言い返すが今はそれどころではない。

「大丈夫かよ」

「ギリギリな」

「妖怪の山全体が凍り付いてしまった」

マグナリユウガンオーの言葉に耳を疑った、まさかここだけだと思っていたからだ。

「山だけではなく冷気は禁にも侵攻してる、このままじゃ幻想郷が凍り付いちまう」

「そこまで騒ぎが広がるなん……………おっさん後ろ！」

マグナリユウガンオーが振り向くとそこにはオーズ・プトティラコンボが獣のような呻き声を上げながらゆっくりと迫っていた。

「なんだよあのエ アンゲリオンみたいな奴！」

【不動、例えが何とも言えないのだが】

ゴウリユウガンの静かなる突っ込みが放たれたがそれを完全スルー、マグナリユウガンオーはマダンマグナムを持ち身構えていた。

「相手が何であるうと関係ない、行くぞゴウリュウガン」

【……………ああ】

「今の間はなんだ？」

【なんでもない】

マグナリュウガンオーは走りだしオーズに立ち向かった。

「奏歌、外見ってみるよ」

「分かってるよキバット」

キヤッスルドラン、キバットが外を見て騒いでいた、妖怪の山が凍り付いているのを見たのだ。

「だけどあのままでもいいのか？」

奏歌はエプロンを掛けバイオリンを作っており外に見向きもしていなかった。

「うーん……………」

考え込んでいると部屋の扉が開き中に咲夜と咲一が入ってきた。

「失礼します」

「お、メイドの姉ちゃんにその弟じゃん」

「どうかしましたか？」

作業を止めて二人に近寄る。

「お嬢様からのお依頼です、山で起きている異変を解決して欲しい
ようです」

「あのまま禁も凍結したら紅魔館を巻き込むからね、冬支度もでき
てないから大変なんだよ」

要件を伝えると奏歌は掛けていたエプロンを取り椅子に掛けると
クローゼットから上着を出した。

「わかりました、レミリアさんの頼みならば、行くよキバット」

「おしゃ！ キバットて行くぜ！」

三人と一匹はキャツスルドランから出て妖怪の山へ向かった。

「ダブルショット！」

マグナリユウガンオーとオーズは激しい戦いを繰り広げていた、
シンジとタクミは接近戦だったのに対しマグナリユウガンオーは長
距離戦、接近戦が特異のオーズに取っては厳しい戦いである。

「俺達があんなに苦戦したライダーにあそこまで有利な戦いするな
んて……………」

自分達がまだ青臭い若造だと改めて思い知らされた。

「まだまだだ！」
「ガルウウ！」

マグナリユウガンオーとオーズが戦っている頃、モモタロスと遭遇した早苗達、モモタロスはソード電王、早苗はAゼロノスとなり妹紅、神奈子、諏訪子、デネブは10体以上のモールイマジンと激闘を繰り広げていた。

「オラオラ！」

ソード電王はベルトの両側に掛けていたパーツを組み立てた剣、デンガツシャー・ソードモードを振り回しモールイマジンを斬り付けていた。

「ありゃタクミ以上の癖の悪さだな……………」

タクミより酷い戦い方に唖然としつつも向かってくるモールイマジンの顔面を蹴り付ける。

「あの紫の暴君よりは……………」

オーズに破壊された神社をどう再建しようかと計画を立てながら御柱でモールイマジンを叩き付けていく。

「神奈子様、すごく面倒くさいって雰囲気……………」

「そうでしょ早苗……………あそこまで骨組みまで木っ端微塵に……………」

「神奈子…………その怒りをこのモグラ達にぶつけよう……………」
「そうだな……………」

モールイマジン達は何か悪寒を感じていた、この神二人を相手にしているのか、だが遅かった。

『おらああああーっ！！！！！！！！！！』

『ぎゃあああああっ！！！！！！！！！！？』

モールイマジン達はばったばったと尻ぎ倒されていく。

「気の毒だな……………あのイマジン達」

「そうだな」

デネブの言葉にソード電王に便乗しつつモールイマジンを哀れみの目で見ていた。

「そろそろトドメだ！」

ライダーパスをターミナルバックルにセタッチすると【FULL Charge】と流れデンガツシャアの刃に電王ライダーズのエネルギの源であるフリーエネルギーが溜まっていき。

「必殺、俺の必殺技、パートー！」

刃が外れブーメランのように回転し飛び交い次々とモールイマジンを切り裂いていく。

「バジンとタクミが合わさった以上か！」

モールイマジン達はエクストリームスラッシュにより爆死していた。

「これで終いだ、悪く思うなよ」

デンオウベルトを取ると変身が解けモモタロスの姿に戻るとAゼロノスも続く。

「で、お前も仮面ライダーなのか？」

「そうだが、俺は仮面ライダー電王、まあだけど俺の契約者とはぐれちまってな……………迷ってたところなんだよ」

イマジンの契約や特異点についてなどはユウスケやデネブに聞き済みであるため深く聞かなくてもわかる。

「ちょっと知らね？ 不幸そうな奴なだけでさ」

だが知る訳もなく首を横に振る。

「そっか……………ならいいや、ならさ着いていっていいか？ 俺の契約者が見つかるまで」

「別にいいんじゃないか？」

「そうだね」

神二人は何かスッキリした様子だった、それほどまでにストレスが発散できたのだろう。

「あれだけモコればスッキリするか」

「モコるってなんですか」

デネブのごもつともな突っ込みに「言ってない、ボコるって言ってる」と全否定。

「じゃあよろしく頼むぜ！」

【プットツティラ〜ノヒツサ〜ツ！】、【ファイナルキー発動！】と響きマグナリユウガンオーのマグナドラゴンキャノンとオーズのストレインドウムが放たれ光線は激突しものすごい衝撃が走り凍った木々を粉々に砕け散っていく。

「おっさん俺達のこと考えるよ！」

だが言い返す暇がなかった、少しでも気を抜けば自分の攻撃が返されるからだ、ストレインドウムの威力は今ので分かった、直撃したら一溜まりもないだろう。

（状況は最悪だな、どうするか）

だんだん後ろへ押されていき後がない状況に陥っていく。

（剣司が居れば攻撃してくれるんだけどな……………）

自分のもう一人の相棒と呼べる男の名前を心中で呟く、だが今はいないし同じような魔弾戦士の力も今はない、なので今は自分どうにかするしかなかった。

や強いから」

タクミからそんな注意をされるとは思わずそれほど強い怪人だと理解し身構える。

「ガア……………ガア……………」

オーズはメダガブリューを拾おうとしていたがショットカーグリードに腕を蹴り上げられ苦戦した事により暴行を受ける。

「アイツ仲間を……………！」

マダンマグナムとゴウリユウガンの引き金を引いていき弾丸を連射しショットカーグリードに浴びせていくが効果は余りないようだった。

「？」

ショットカーグリードは何事もなかったようにマグナリユウガンオ―に狙いを変える。

「効いてない……………」

【気を付ける不動、あの怪人、ものすごく危険だ】

「ああ……………」

ゴウリユウガンの銃口を向け横にジリジリと動き相手の出方を見ていた。

「剣崎さん剣崎さん！」

その頃白玉楼、妖夢が一魔を探し襖をバンバン開いていくが見付からず居間に入り幽々子が呑気にお茶してた。

「どうかしたの？」

「妖怪の山がすごいことになっているんですよ！」

「あー、凍っちゃってるんでしょ？」

「はい、なので剣崎さんに知らせようと探しているのですが………」

だが見当たらない、その事に首を傾げていると。

「一魔くんならもう行っちゃったわよ？」

「え……… 剣崎さん私を置いていかないでくださいー！」

それを聞いた途端白玉楼を出て妖怪の山へ向かった。

「元気がいいわねー二人とも」

一魔は冥界を出ておりブルースペイダーで妖怪の山を目指していた。

「オーズ・プトティラコンボか」

一魔には山の異変をオーズが起こしているのを感じていた。

「急ぐか」

アクセルを深く回して更に加速した。

「そのまま飛んだら打ち落とされるわよね」

命蓮寺、ユウスケ達はまだ出発しておらず。

「天狗のスピードに着いていけんだろ？ わたしでもお手上げだぜ」

オーズ・プトティラのストレインドウムを食らえばまず助からない、このメンバーは知らないがシヨツカーグリッドもいる、このまま行っても返り討ちだろうと考えていると。

「なら船で行きますか？」

白蓮が手を上げてニコニコしながら話に入ってきた。

「船って……なあ兄貴？」

「そんなもんどこに……」

「あるぞ」

慧音の言葉に耳を疑うライダー組。

「言ったじゃない、この命蓮寺は宝船が変形したものって」

「一発ぐらいなら耐えられるかと」

言っただなと思いついてると命蓮寺が慌ただしかった。

「なんか騒がしいですね？」

再び寺の中に入るとその中ではナズーリンや他の妖怪が見知った顔の男を追い掛けていた。

「……………」

「やあ小野寺くん！ ここすごいよ！ 宝の山だ！」

海東が侵入していたようだった。

「海東さんエ……………」

「夢想封印」

「マスタースパーク」

「え？ ぎゃあああああつ！！！！！！！！！！？」

霊夢と魔理沙はスペルカードによる攻撃で海東を黙らせておいた。

「これでいいわよね」

「え、まあ……………いいか」

海東の後始末はナズーリン等に任し。

「じゃあ変形させましょう」

「ジャ ファイト！ とかトラ スフォーム！ やトラン フォー
メーションとかみたいなの掛け声するの？ もしかしてマク スにな
るの！？」

妙なことで興奮するユウスケ、どこでそんな知識を身に付けてき
たのだろうか。

「ユウスケ、なんかキモい」

「あ、ごめん、つい興奮しちゃった」

「と、取り敢えず………配置に着いてください」

白蓮の指示で妖怪達は動き出しアナウンスが響く。

「えっ！？ なんで放送機器があるんだよ！？」

「河童に付けてもらいました」

里の文化を考えれば無理もないが妖怪の山の河童は技術が進んで
いるから放送機器を取り付けるのも簡単である。

「兄貴、なんか緊張してきた」

「ああ、この寺が船に………」

「男ってホントこういうの好きね」

すると準備が整ったのか辺りから機動音が鳴り。

「では命蓮寺はこれより聖輦船に変形します」

ガシャン！ ギシャン！ と響き命蓮寺は変形し船に変形した。

「海賊船っばい！」

なぜか放送機器から機動戦士クロスボーンガンムのBGMが流れ始めた。

「宇宙海賊！？ 何？ ク スポーン・バ ガード！？」

「兄貴！ それよりもゴーボーイジャーだよ！」

「キバール、軽くユウスケ達、壊れてない？」

「軽くじゃないわ、かなりよ霊夢」

ユウスケと葬のテンションに呆れていた。

「では聖輦船！ 出航してください！」

聖輦船は妖怪の山に向かって出航した。

「ダブルショット！」
「ショ〜ツカーツ！」

ゴウリュウガンとマダンマグナムの銃弾とショツカーグリードの

光弾が激突し爆風を起こした。

「そろそろキツイ！」

オーズもそろそろ回復しそうでこのままではショッカーグリードと二対一となりかなり不利な状況に陥る。

「タクミ！ 無理でも行くぞ！」

「ああ！」

二人は変身しようとしたが突然バイクのエンジン音が響いた。

「誰だ？」

マグナリユウガンオーは振り向きそのエンジン音を響かせているバイクに乗った者を直視、だがシンジとタクミは驚倒する、そのバイクに乗った者を見て。

「まさか……………アレは！」

タクミが高ぶっている気持ちで喋る。

赤い眼にマフラー、二人の共通点は深い緑の胸部と黒く二本の白いラインが流れるスーツを着て腰に赤い風車を埋め込んだライダーベルトを巻いている、片方の仮面は薄い緑で銀色の手袋とブーツ、もう片方は黒で赤い手袋とブーツの仮面ライダー……………

「伝説の仮面ライダー……………！」

銀色の手袋とブーツを履いたのは仮面ライダー新1号、赤い手袋

とブーツのは仮面ライダー新2号、そうこの二人は全仮面ライダーの原点の、様々な悪の組織と戦ってきた伝説のダブルライダーだった！

「仮面ライダーだと……アレも」

二台の新サイクロンは停車しダブルライダーは降りる。

「ここは我々に任せる！」

1号は右腕を左斜めに上げポーズを取る。

「ショッカーグリードは俺達が倒す！」

2号は左腕を曲げ力強さをアピールするポーズを取る。

「ダブルライダー………だけどあの仮面ライダーは！」

オーズをどうしても助けたい、シンジは訴えようとしていた。

「大丈夫だ、我々のライダーパワーを注入すれば仮面ライダーオーズは正気に戻る！」

「マグナリユウガンオー、君はこの二人を連れて離れるんだ！」

「分かりました」

マグナリユウガンオーはシンジとタクミを連れて離れた。

「ショッカーッ！」

ショッカーグリードは声を上げるとダブルライダーに襲い掛かっ

た。

「行くぞ一文字！」

「ああ本郷！」

「なんかまたすごい音がしてますよ」

落ち着いたと感じ早苗達は山を登り始めていた。

「なんか楽しそうなことになってるじゃねーか」

楽観的な視点でモモタロスは言葉を出す。

「楽しくないだろ」

「そつだよ……………神社がねえ……………」

守矢神社の神と巫女（一応神だが）、イマジンはお先真っ暗だった。

「まあ元気出そうぜ！」

「そ、そうだ！ 元気があればなんでもできる！」

妹紅も元気付けようと言葉を掛けるがどんよりする一方だった。

「逆効果だな」

「ああ」

何か関係ない二人も気持ちが悪くなってきていた。

「イマジンだ！」

「俺も感じた！」

モモタロスとデネブはイマジンの気配を察知し一同は身構える。

「スウ……………ハア……………」

目の前に現れたのは灰色のモモタロスに似ているが角が長く巨大な鎌を持つデスイマジンと右腕に鉤爪、左手に杖のライオンに似た金色のイマジン、アルビノレオイマジンと兵隊としてモールイマジンが数体現れた。

「気を付ける早苗、藤原さん達、このイマジン達かなりのやり手だ！」

「これちつとやべーな」

腰にデンオウベルトを巻くモモタロス、それに続いて早苗もゼロノスベルトを巻く。

「デネブ、ベガフォーム行くよ」

「おう！」

一斉に変身しようとしたのだが。

「ん？ この気配は……………」

モモタロスは何かを感じた、懐かしい気配を。

「モモタロス見付けた！」

「お！ 健太郎〜！」

デスイマジン達とは反対方向からやってきたのは茶髪の少し小柄な青年だった。

「やっと見付けたよ」

青年はモモタロスの元に駆け寄ると「誰？」という目で見られたため。

「僕は野上健太郎、仮面ライダー電王です」

自己紹介を済ませると早苗は健太郎の腰に巻かれたターミナルバツクルに赤い携帯みたいなケータロスが装着されたデンオウベルトを見た。

「モモタロスとは違う……………」

だがデスイマジンとアルビノレオイマジンは光弾を放ち座談をする自由を与えてくれなかった。

「今はそれどころじゃないな」

「うん、そつだね」

健太郎とモモタロスはライダーパスを持つ。

『変身……！』

セタッチすると健太郎のベルトからは【Liner Form】と流れモモタロスはソード電王、健太郎は鎧が電車の真つ正面を描いたようなもので仮面は新幹線のようなデンカメンの仮面ライダー電王・ライナーフォームに変身した。

「変身！」

早苗もゼロノスに変身しデネブが憑依しVゼロノスとなる。

「最初に言っておく！ 胸の顔はやはり飾りだ！」

『やっぱりそれ言っの』

神奈子達のその言葉が空を切った。

「嘘はいけないから」

かつこつけて言うが言葉が言葉なため全然決まらない。

「健太郎、ダブルライダーは？」

「シヨッカーグリードとエイジの所だよ」

「まあアイツらなら大丈夫か」

ソード電王はデンガツシャー・ソードモード、ライナー電王はソード電王の仮面以外に青や黄色、紫のデンカメンが付き峰打ちにラ

イダーパスを挿入したデンカメンソードを持つ。

(すごい派手な剣)

早苗は内心思っていたがライナー電王はその剣を大切そうな感じだった。

「ふう……………翼も楽になってきた」

文は永遠亭から出て里に行くと聖輦船が妖怪の山へ向かっているのが見えていた。

「……………」

龍騎デッキを出して見ていると。

「これを……………龍騎を届けないと、シンジくん」

呟くとデッキを仕舞い羽根を広げ羽ばたき飛翔していった。

第21話『仮面と伝説とダブルライダー』（後書き）

今回は次回予告なしでサブタイだけ。

次回『落ちる太陽』

第22話『落ちる太陽』（前書き）

今回は過去編です。

彼の過去が明らかに。

第22話『落ちる太陽』

今から12年も前、あるカブトの世界の少年が銀色のベルトと出会った。

「これは……………」

拾うとどこからか助けを求める声が聞こえ辺りを見渡している、今いる場所は隕石が落下した事により新宿が瓦礫の山となっていた。

「助けて……………！」

その声は弱々しかったが生きたいという強い意志が籠もった声だった、少年は探した、その助けを求める声の主を一生懸命。

「見付けた！」

少年はその助けを求める声の主の下半身が瓦礫に埋まった少女を見付けた、だが瓦礫に阻まれ少女がいる場所に入れないが手だけは伸ばせたため差し伸ばす。

「掴まって！」

「うーん！ 届かない……………！」

後少しのところ、少年は乗り出して少女の手を掴み瓦礫から引っぱり出した。

「ありがとう、お名前は？ わたしは矢車日和やぐるま ひより」

「僕は……………」

なぜか少年は名前を言うのを躊躇ったが自分の名を日和に教えた。

「天道……………総真そま」

それから七年の歳月が経ち少年と少女は大人になっていた。

「お兄ちゃんおはよう」

「おはよう日和」

少女だった黒髪の長いまだ体は成長途中である日和は高校を卒業し大学生に、少年だった総真は祖母の資産があるため働かず家で二ト生活だがやる事は何もかも完璧にこなしていた。

日和は両親が新宿での隕石の落下により死亡してしまったため総真の祖母に引き取られ天道の性をもらい正式に兄妹となった、本当の兄妹のようであると評判がいい二人である。

「忘れ物ないか？」

「ないよ、ご飯いただきます」

朝食を食べ始めると総真は新聞を読んでいた、記事には「連続失踪事件多発！だが一週間後には帰ってくる！」というものだった。

「ごちそうさま、じゃあお兄ちゃん、行ってくるね」

トートバッグを持つと食器を台所に置いて「行ってきます」と行ってから外に出た。

「行ってらっしゃい日和」

総真は微笑みながら日和を見送るとそこに赤いメカニカルなカブトムシのメカ、カプトゼクターが飛来する。

「ワームか」

ワームとは、カプトライダーズの敵である地球外生命体で人間に擬態する能力がある。

「行ってやるか」

総真は赤いバイク、カプトエクステンダーに乗り走りだしていった。

港にある廃倉庫で黒いライダースーツにヘルメットを被り右腕に丸いマシンガンを装着したワームと戦うための組織ZECTの兵隊ゼクトルーパーが緑色の虫みたいな怪人、サナギワーム数匹と交戦していた。

数はゼクトルーパーが勝っているが力量では。

「脱皮します！」

一匹のサナギワームの体が赤く光ると皮が向け脱皮し新たな姿となる、ムカデに似たジオフィリオワームとなってしまう。

「ギョルル！」

ジオフィリオワームはクロックアップをしゼクトルーパー達を攻撃、弾き飛ばしていく。

「少隊が！」

そこにZECTの隊員である青年、加賀美^{かがみ}新人^{あらし}が駆け付けたが後の祭りとも言える状況でゼクトルーパー隊は全滅しサナギワームが次々とジオフィリオワームへ脱皮していた。

「来い！ ガタツクゼクター！」

右手を翳すと青いメカニカルなクワガタのメカ、ガタツクゼクターが飛来し手に収まる。

「変身！」

腰のライダーベルトに装着すると【Henshin】と電子音が流れ新人は重装甲の銀色の鎧に肩に大砲を備え赤い眼の仮面ライダーガタック・マスクドフォームとなる。

「行くぜ！」

二つの大砲から光弾を放ちジオフィリオフォーム達に直撃させると爆発が起き吹き飛んでいく。

「ギョルル！」

ジオフィリオフォーム達はクロックアップして散開してしまうがガタックゼクターの顎を動かすと鎧が浮かび上がる。

「キャストオフ！」

【Cast Off】

装甲は弾け飛び頭に二本の角が上がり薄い青の装甲が見える、ガタック・ライダーフォームに変身したのだ。

「クロックアップ！」

ベルトの右側のスイッチを押しクロックアップを作動させて自分も光速の空間の中に入りフォームを追う。

「待て！」

ガタックは肩の双剣ガタックダブルカリバーを抜きジオフィリオフォームを一匹一閃する。

「オリヤアアアツ!!!!!!!!!!!!」

ガタツクダブルカリバーをハサミのように組み立てジオファイリオ
ワームを挟み込む。

「ライダーカッティング!」

ガタツクゼクターのスイッチを押し【R i d e r C u t t i n
g】と流れカリバーにタキオン粒子の光が纏われそのままジオフイ
リオワームを切り倒した。

「まずは一体!」

次の敵がいる方向へ走りだし仮面の下、その目でジオファイリオワ
ームを確認するとガタツクゼクターのスイッチを押しいき顎を動
かす。

【1 . 2 . 3】

「ライダーキック!」

【R i d e r K i c k】

ジオファイリオワームの前に立ちジャンプして上段回し蹴りを食ら
わし。

「ギョルルルル!?!?!?」

ライダーキックで倒したのだが残りの一匹が見当たらず探してい
るとその一匹が見つかるが一組の親子の方へ向かっておりどうして
も間に合いそうになかったがそこに赤い閃光が通り過ぎると最後の
一匹は爆死した。

「天道！」

「爪が甘いな加賀美」

赤い角に薄い鎧、水色の眼にカブトゼクターがライダーベルトに装着された総真が変身すれ仮面ライダーカブト・ライダーフォームだった。

二人は人気がない場所に移動しクロックアップが解除されると同時に変身を解く。

「すまねー天道、助かった」

「気にするな、俺も助けられることもあるからな」

二人は拳をぶつけ合い感謝の意を見せ合つと新人は。

「なあ天道、最近の連続失踪事件知ってるよな？」

「朝刊にも載っていた、一週間後には戻る、そして」

「その失踪した人間が帰るとその家族の一人が失踪する」

あの新聞の記事には「失踪した人物が戻るとその人物の家族の一人が失踪していく」とのようなことを書かれていたのだ。

「その失踪し帰ってきた奴を調べた結果、完全にワームだった」

「そうか」と繋げるとカブトエクステンダーに跨る。

「何かあつたら連絡してくれ」

「わかつたぜ」

二人は別れそれぞれの戻る場所へと向かっていった。

そして学校など部活やサークルに入っていない学生の下校時間、
総真は自宅で日和の帰りを待っていた。

「遅いな……………」

だが帰ってこず、遅くなるなら連絡があるはずと思い電話を掛けるが繋がらない、ふと今朝の朝刊の記事や新人との会話の内容を思い出す。

「まさか……………」

最悪な展開を予想してしまった、事件に巻き込まれたのではないかと。

「だが日和は……………」

日和には秘密がある、自分と祖母、新人にしか知らない秘密が。

「……………探しに行くか」

総真は探しに行こうと支度し自宅から飛び出ていった。

ZECT本部では。

「クロックダウンシステム？」

新人はZECTが提案した計画の資料を読み部下に聞いていた。

「なんでもワームにクロックアップを使わせないでゼクトルーパーでも倒せるようにするためだそうですよ」

資料を一通り目を通してしていると携帯に着信が入り電話に出る。

「もしもし？ 天道か、どう……………日和ちゃんか！？ わかった、もう上がりだからすぐに行く！」

携帯を閉じると走りだしすぐに日和を探しに外へ出ていった。

「日和！」

「日和ちゃん！」

名前を呼び暗い夜道の中探しているが全然見付からなかった。

「日和ちゃん見付かったか？」

「ダメだ……………く、もし例の事件に巻き込まれていたら……………」

「だけどあの子は！」

「ああ……………まさかとは思うがワームはそれを狙っているかもしれない……………」

ワームは知能が高い、ライダーの変身者は独自のネットワークで知っているため身内を狙われる可能性も十分にあるが日和は特別であつた。

「加賀美、後は俺が探す、お前は帰って休んでくれ」

「けどよ！」

「いい、俺が探す」

新人は迫力に圧され渋々了承し帰宅し総真だけは日和を探し走り回つた、朝日が昇るまでずっと、だが見付からず帰宅した。

「日和！」

だが自宅に帰宅した形跡もなくまだ帰って来ていないのがわかつた、携帯に電話を掛けても電源が入っていないためと流れる。

「くそ……………」

そこに朝早くにも関わらず呼び音が鳴り日和が帰ってきたのだと思いすぐに玄関に向き叱ろつと考えていた。

「日和、こんな朝にかえ……………て……………」

絶句した、目の前にいたのは胸、口から血を流し倒れていた日和だったからだ。

「日和！ 大丈夫か！ おい！」

すぐにしゃがみ抱き抱えてお超し揺さ振り目覚めさせようとする。

「おにい……………ちゃん……………」

薄らと目を開け弱った声で呼ぶ。

「何があつたんだ!？」

「ワームに……………誘拐されてね、擬態されそうになつただけどわたし……………ネイティブだから」

ワームは二種類存在する、地球に逃亡してきたネイティブ、それを追うワーム、日和はネイティブのワームだったのだ。

「もう喋るな、すぐに病院に！」

首をゆっくり横に振りもう助からないと示す。

「お兄ちゃん……………楽しかったよ……………」

「お、おい！ 日和い！」

目からポロポロと涙を流し日和の頬に落ち弾けていく。

「あり……………がと……………おにい……………ちゃん……………」

最後の力を振り絞りその言葉をするとカゲロウに似たシシーラワームとなり息耐えてしまった。

「日和……………」

自分の衣服は血塗れだった、だがそれにも気付かず呆然と空を眺めていると。

「天道！ 日和ちゃんは……………」

新人が心配してやってきたが時は遅かったのだ。

「嘘だろ……………誰だよ、誰がやったんだよ！」

地面に膝を付いて日和の死を悔やむ新人。

「くそ……………くそおおおおおおおつ!!!!!!!!!!!!!!」

総真の叫びは虚しく空へ消えていった。

その後、新人に勧められZECTに入ったが馴染めず、カブトゼクターとライダーベルトを放棄し組織から姿を消したがホツパーゼクターと別のライダーベルトを持ち姿を現した、天道総真ではなく矢車総として。

そして現在。

「俺は一度お前を捨てた、それなのになぜ出てくるんだ、カプトゼクター」

カプトゼクターは再び総の前に現れており問い質していた、それほどにまでカプトに変身しろと言っのかを。

「なぜなんだ……………なぜ俺を選んだよ……………」

地面に膝と手を付き苦悩していると。

「それがお前の運命だからだ、天道総真」

後ろに何者かが現れた、立ち上がり振り向くとそこには茶髪で白いジャケットに茶色いズボンを履いた男が立っていた。

「誰だ……………俺の本当の名を知っているのは」

「俺の名は……………」

「風見志郎」

「デストロンの改造人間じゃない！」

風のエル

「人は人のままでいればいい」

霊夢

「アンノウン……………！」

咲一

「お待たせ霊夢ちゃん！」

「天の道を往き、総ての真を司る男……………」

次回『1の技と2の力とプライドのV3』

第23話『1の技と2の力とプライドのV3』

「風見……………志郎だと……………」

総には聞き覚えがあった、この男、風見志郎の名に。

「なぜ……………俺の前に……………」

「お前のプライドを取り戻すためだ」

腰には二つの赤い風車を取り付けられその間にVの文字が描かれたベルト、ダブルタイフーンが巻かれていた。

「俺のプライドを？ そんなもの、当の昔に捨てた……………」

「妹を守れなかったからか？」

静かに頷いた、なぜその事を知っているのかわからないが風見が言っている事は間違いではないからだ。

「風見志郎、なぜ俺のプライドを取り戻しに来た？ 牙を抜かれた俺の」

「牙を？ いや、お前はまだ抜かれていない、むしろ鋭くなってきている」

ルタイフーンの風車は回転し強い風が巻き起こり風見の姿を変えた。その姿は赤い仮面、緑の眼にライダースーツ、白と赤の体に白いマフラーとブーツ、手袋のトンボのようにも見える姿をした、仮面ライダー1号と2号の技と力を受け継いだ仮面ライダーV3（ブイスリー）。

「変身！」

総はキックホッパーに変身。

「お前から掛かってこい」

「望み通りそうさせてやるっ！」

キックホッパーは声を荒上げV3に向かって走りだし飛び跳ね上段回し蹴りを繰り返すが。

「何……………？」

右腕一本で止められ左手で足首を掴まれる。

「お前の力はその程度か？」

「ぐわっ!？」

そのまま遠くへ投げ飛ばされるが木に足を付きバネのように飛び跳ね突撃する。

「トオウ！」

「っ！」

だがその目論みも虚しくV3は高く飛び上がるとその落下を利用

し。

「V3イイイイ………キイイイイック!!!!!!!!!!」

V3の基本の必殺技V3キックが炸裂さた!

「ぐわあああつ!!!!!!!!!!?」

V3は背中に直撃し地面に叩き付けられ石でできた道は吹き飛び倒れたキックホッパーを中心に小さなクレーターができていた。

「これで終わりか?」

「な、舐めるな!」

左足を軸にし足払いを掛けようとするが避けられる、そして立ち上がる。

「V3イイイイ………パアアアーンチ!!!!!!!!!!」

次に強力なV3パンチが炸裂し拳が空を切りキックホッパーの右頬に直撃し殴る。

「くっ……………」

その拳で何かが目覚めたのか仮面の下、目付きが鋭くなりあまり使わない腕でV3の左頬に拳を叩き込んだ。

「やっと本気になったか」

もう一度V3パンチを繰り返すがキックホッパーは左手だけで拳

を受け止めるとキックを繰り返し直撃するとV3は後退る。

「……………」

キックホッパーは身構えないで腕を下げた。ただV3を見るだけで余裕を見せてきた。V3キック、V3パンチを連続で受け総の中で何が目覚めていた。

「少しは戻ったか？」

「やられ続けているのは俺の性に合わないから……………」

「なら本気で来い」

だがキックホッパーは変身をホッパーゼクターを取り解いた。

「どうした？」

「もついい……………牙は磨き終えた」

今巻いているライダーベルトを外しゆっくりと歩き賽銭箱の上に置く。そこに置いておいたもう一つのライダーベルトを腰に装着する。

「どうしてもやりたいなら山で起きている異変を終らせてからにな」「取り戻したな、プライドを」

「ああ……………先も言ったがやられ続けているのは俺の性に合わないからな、

日和みたいな悲劇、繰り返してはならないんだ……………お前もだろ、
風見志郎」

「ああ」

風見志郎がV3になったのは家族が悪の組織デストロンに被害さ

れ復讐心から来たものだった。

「日和を殺したワームがなんだったのかは分からない、だが同じような悲劇を繰り返さない事はできる」

「そうだな」

妖怪の山の方を向き。

「太陽の輝きで山の……いや、この幻想郷を被う氷を溶かすか」
「行くぞ、天道総真」

二人は妖怪の山へ向かって行くのだった。

聖輦船の中……

「スゲー！」

ユウスケと葬は船内を走り回っていた。

「コイツらガキか」

「ガキよ霊夢、それも寺子屋の子供以上の、だから慧音、生徒にしない？」

「ごめんこうむるキバーラ」

二人と一匹はかなり呆れており白蓮は「あらあら」と近所かお隣さんの奥さんかお姉さんみたいな反応をしてニコニコとしていた。

「元気だなあ二人は！」

海東は縄にぐるぐる巻きにされ頭を下に向け宙吊りにされていた。

「アンタはバカ？」

「お宝バカよ」

「こつちなら生徒にしてもいいな」

「いえいえ、そしたら私達の方で引き取りますよ？」

山ではとてつもない大異変が起きているのに船内はかなり緩やかだった。

「ん？ 山の裏側に何か……………」

学生が着るセーラー服ではなく船乗りが着るセーラー服を着用した青っぱい緑の髪と瞳のこの聖輦船の船長、村紗水櫂むらさみづなみが何かを目撃しよく確かめると目を大きく開いて驚愕した。

「なんか見つけたのか？」

なんとかなく操舵室にいた魔理沙は村紗が向いている方向を向いて唾然とした。

「てことはああいうのが何個もあるってこと？」
「そうだけど……………」

「アレ」と言って指を差した方向には裏側から現れたのを合わせ五体のキングダークだった。

「キングダークが五体もお！？」

キングダーク達は聖輦船に向かって角から破壊光線を発射。

「面舵いっぱい！ 緊急回避！」

右に向け大きく動き船体は急な動きのため激しく揺れ船内では転ぶものが多かったが破壊光線はどうにか避けれたがキングダーク達は再び破壊光線を放とうとエネルギーを貯め始めた。

「ヤバイヤバイ！ 海東さん行くよ！」

「ならこの縄を解いてくれないか？」

甲板に出るユウスケ、海東、キバーラ、薺、霊夢、魔理沙。

「キングダークがすごい数……………よく隠してたよな……………」
「確かにね……………」

チャージに時間が掛かるのか、キングダーク達は動きを止めていた、今がチャンスと思い早く変身して破壊しようと考えたのだが。

「胸が開いたぜ？」

キングダークの胸部が開き中から大量の飛行系の怪人達が放たれた。

「用意周到過ぎるぜ！」

怪人達は真つ直ぐ聖輦船に向かってきている、このまま船内に侵入されてもしたら厄介な事になる。

「海東さん、射撃系のライダー召喚して」
「オツケー……………」

「変身！」と叫びユウスケはクウガ・マイティフォーム、海東はデイエンド、葬はパンチホッパーに変身。

「じゃあ今日は出血大サービスと行きましようか！」

何枚かデイエンドライバーにカードを装填し仮面ライダーG3-X、仮面ライダーゾルダ、クワガタのような仮面ライダーギャレン、仮面ライダーラルク、青い鬼の仮面ライダー威吹鬼に仮面ライダードレイク・ライダーフォーム、メカニカルな銀と緑の仮面ライダーバースを召喚した。

「じゃあ一斉射撃ね！」

威吹鬼は音撃管・烈風というトランペット型の武器の引き金を引き鬼石と呼ばれる弾丸を放ち怪人達に命中させていく。

「じゃあ行くよ」

召喚した仮面ライダーの必殺技を炸裂させるクロスアタックのカードを装填すると各ライダーは必殺技の準備に入る。

ゾルダは契約モンスターであるマグナギガの背中にマグナバイザーを連結させG3-XはGXランチャーをGX-05に取り付けギヤレンは醒銃ギヤレンラウザーに三枚カードをラウズしていきラルクモラルクラウザーにカードをラウズ、

威吹鬼は音撃管を口に近付けドレイクゼクターに水色の光弾を生成していきバースは胸部に大砲を付けると一斉に必殺技が放たれ怪人達を打ち落としていく。

「やっぱり弾幕はパワーだぜ！」

その光景を見て叫ばずにはいられずミニ八卦炉を向けてマスタースパークを放ち後方にいた怪人達を砲撃が飲み込んでいく。

「これもオマケ！」

デイメンションシールドも放ちほとんどの怪人を打ち落としたがまだ残りがおり船に取り付いてしまった。

「やっぱり残っちゃったか」

召喚したライダーは消えると次のカードを装填していた。

「弾幕は難しいな」

今にでも船体に穴を空けて船内に侵入しようとしている怪人、主にグロンギやアンノウン、イマジンを見て呑気に言っているが。

「呑気なこと言っていないでさっさと落として！」

スピーカーから村紗の声が響く、彼女も大変なのだ、船の操舵に。

「しょうがねーな」

箒に跨り空を飛び降下していきレーザー等を放ち取り付いている怪人達を落としていく。

「じゃあ僕も」

紫の鬼の仮面ライダー、響鬼を召喚しFFRさせ赤い鷹を模したようなヒビキアカネノタカに変形させその足に掴まり飛び立ちデイエンドライバーの銃弾で敵を打ち落としていく。

「さて、私も……………」

主にアンノウンを潰そうとお札を出したがどのアンノンよりも比べ物にならないぐらいの速さで接近するアンノウンを目撃した。

「何アレ！？ 速くない！？」

「アレは風のエル！ アンノンの中であり得ないぐらい速い奴よ！」

アンノンの中で高位に立つ鷹のよいな姿で弓を持つ風のエル、文以上かもしれない速さで飛行し甲板に降り立つ。

「人は人のままでいればよい……………」

決まった言葉を言うと弓を向け矢が現れる。

「その矢に刺さったら消滅するから気を付けて！」

キバールが注意し終えた瞬間矢は放たれ霊夢は間一髪のところを避けるがその刹那、また風のエルは弓に矢を掛ける。

「クロツクアップ！」

パンチホッパーはクロツクアップをし攻撃を仕掛けるがいとも簡単に避けられてしまった。

「はや……うわっ!？」

突如パンチホッパーは何者かの攻撃を受けて弾き飛ばされ危うく甲板から放り出されそうになった。

「葬！」

「大丈夫……それに今はクロツクアップ……いや、ハイパークロツクアップだ」

風のエルの隣に現れたのは黄金で青い眼の巨大な角が付き左腕にはカプトゼクターのような金色のカプティックゼクター、コーカサスゼクターが装着され右手に青いバラを持つ仮面ライダーだった。

「コーカサスだと……！」

ディエンドすら驚愕させるライダーだった、その名は仮面ライダーコーカサス、ベルトの右側に装備されたハイパーゼクターにより超高速のクロツクアップを越えるハイパークロツクアップを使用し

神奈子の言葉を返すものもとてもそんな余裕は見えない。

「案外強いものだな……………怪人も」

「そうだね……………数も多いし」

神である彼女らが言うからには冗談ではないだろう、モールイマジンも倒しても倒しても判らないが地底を掘り進んで姿を現す、数が減らないのだ。

「山ごと燃やしていいか？」

「それは犬神並に質が悪いだろ」

もちろんその考えは却下、その瞬間モールイマジンの何体かが赤いマーカーに貫かれ倒されていきファイズ・アクセルフォームが姿を現し通常フォームに戻るとマグナリユウガンオーも駆け付ける。

「タクミにおっさん！」

「だからおっさんじゃない！」

「結構やばいみたいだな」

だが一人いないのに気付くのに時間は掛からなかった。

「シンジは？」

「知るかあんなバカ！」

喧嘩でもしたかのように怒鳴っておりファイズエッジを持ちモールイマジンを次々と斬っていく。

「まさかな……………」

「ライダーアアキーイック！」

1号はライダーキックを炸裂するがショッカーグリードは腕をクロスし受け止めてしまう。

「ライダーアアパーアーンチ！」

2号はオーズ・プトティラコンボにライダーパンチを繰り出すが赤い拳をメダガブリューに受け止められ後ろの腰から生えた長い尻尾で弾かれ吹き飛ばされてしまう。

「くっ……………」

ダブルライダーでも相手がショッカーグリードとオーズ・プトティラコンボとなると苦戦を強いられてしまっていた。

「どうする本郷？」

「風見を呼びたいがすぐに来られるか分からない……………」

シヨツカーグリードは光弾を放とうと手に力を入れるが。

「キシヤアアーツ!!」

ダークウイングが現れオーズもろとも体当たりをし怯ませる。

「ダークウイング……………」

横を向くとシンジが走ってきた。

「なぜ戻ってきた?」

「やっぱり、自分で決めたことは自分でやらないとダメだと思ったので」

自分でオーズを助けたい、その思いだけでここに戻ってきたようだった。

「そうか……………」

ナイトに変身しようとデッキを出すのだがオーズがメダガブリュールを翳し迫ってきていた。

「危ない!」

助けに入ろうとしたがシヨツカーグリードに邪魔をされ動けずこのままでは取り返しが付かないことになる、最悪な考えが脳裏を過った時だった。

「グガッ!?!」

「ガッ!?!」

何かに跳ねられショックカーグリードに激突し倒れ込み何事かと思
っている。目の前に見慣れた人物が立っていた。

「清く正しく射命丸文です」

「文ちゃん!?」とお決まりの反応をするとそれを言われ。

「お決まりの反応乙です」シンジ“くん”

呼び方が変わっているのに気付いたが今はそれを気にする余裕は
なかった。

「仮面ライダー! そっちの怪人を頼みます」

「ああ、任せろ!」

ナイトデッキを出す。龍騎デッキを出す文。

「お届けものですよ」

「これを……届けるために?」

「はい、こっちの方が慣れていると思ったので」

ニコツと笑うとシンジは「ありがとう」と言いデッキを受け取る
が。

「そっちは私がいいますね」

代わりにナイトデッキを手にしてしまった。

「文ちゃん?」

「言いましたよね？ ナイトになる時は龍騎、龍騎になる時はナイトのデッキを預かってってくれて、だからです……………よ！」

そのまま腕を伸ばし腰にVバックルが現れる、変身しようとする意志があるようでシンジは止めようとしたが。

「使わないと宝の持ち腐れじゃないですか」

「……………う……………わかったよ、もう何も言わない」

シンジも龍騎デッキを持った腕を突き出しVバックルが腰に現れる。

『変身！』

同時にバックルにデッキを装填すると龍騎やナイトの影がオーバーラップし体に重なりと通常の姿ではなく龍騎は赤い龍の顔を模したような鎧と左手にもその顔を模したドラグバイザー・ツヴァイが握られ、

ナイトはコウモリの姿を模した青と金色のライン、左腕には剣が収められたダークバイザー・ツヴァイを装備した、サバイブという形態に変身したのだ。

「んしゃっ！」

龍騎はいつもの掛け声を発するとオーズに向けて構える。

「ダブルライダーが怪人を倒すまで俺達が止めてやるからな」

「あやや……………シンジくんの無茶に突き合わされるんですね」

龍騎とナイトはオーズを食い止めるため、倒す戦いではなく止め

「ハイパークロックアップ」

【Hyper Clock Up】

コーカサスはハイパークロックアップをしクウガとパンチホツパを一瞬で攻撃していく。

「くっ………追い付けない！」

ペガサスフォームになるが眼で追い掛けられるが体が追い付かず攻撃を食らい制限時間が訪れそうになるがマイティフォームに戻り凌いでいた。

「クロック………」

「遅い」

クロックアップをしようとするがハイパークロックアップには適わず拳を食らい吹き飛ばすとその攻撃の衝撃で変身が解けてしまった。

「薙！」

コーカサスに殴り掛かろうとしたが一瞬にして攻撃を食らわされ動きを止められる。

「貴様から息の根を止めてやるっ」

コーカサスはゆっくりと葬に近付いていきハイパーゼクターの角を動かしライダーキックより強力なハイパーライダーキックで確実に殺そうとしていた。

「葬！……………く、夢想封印で！」

スペルカードを出し使用しようとするのだが。

「霊夢！ 危ない！」

「えっ！？」

動きを一瞬止めてしまったため風のエルが放たれ一直線に向かっていた。

「キャッ！？」

反射的に横に傾くが肩を霞めバランスを崩し落下していきその恐怖により目を瞑る。

「れい……………邪魔だああああっ！！！！！！！！」

回りに怪人がおり助けに行ける余裕はなかった、このままではと最悪な事態を考えたその時だった。

「お待ちませ霊夢ちゃん！」

聞き覚えがある男の声が響いた、霊夢は誰かに抱き抱えられると感覚がし目を開けて見えたのは赤い六つの角だった。

「咲ー！？」

白い鋼のボディに赤い展開されたクロスホーンに黄色い眼、咲一が変身したアギト・シャイニングフォームだった。

アギトが乗っているのはアギト・トルネイダーに似たマシントルネイダー・スライダーモードだった。

「その姿は？」

「気付いたら変身できるように、多分トリニティになった時からなれたんじゃない？」

余り気にしていないらしい。

「アギト……………！」

風のエルは自分が抹殺すべき対象が目の前に現れた事により目の色を変えた。

コーカサスは一刻と舜に迫る、だがカプトゼクターが体当たりをしハイパーライダーキックを阻止された。

「アレは……………カプトゼクター」

カプトゼクターは船の先端にいつの間にか立っていた男の手に収められた。

「兄貴!？」

総なのだが。

「済まない葬……………俺は矢車総じゃないんだ」

ゆっくりと歩きだすと右手の人差し指を天に向けた。

「おばあちゃんが言っていた、俺は天の道を往き、総ての真を司る男……………天道総真」

左手に掴んだカブトゼクターを右手で掴み。

「変身」

ライダーベルトにカブトゼクターを装着すると【Henshin】と鳴り響き銀の重装甲の鎧を纏ったカブト・マスクドフォームへと変身した。

「兄貴が……………」

「総が……………カブトだなんて……………」

カブトゼクターのゼクターホーンを動かすと鎧は浮かび上がり。

「キャストオフ」

【Cast Off】

鎧は吹き飛び赤い角が上がりカブトはライダーフォームに変わる。

「カブトか……………だがいかにカブトが強くともハイパークロックアップには適わない」

コーカサスにはハイパーゼクターがある、クロックアップを上回るハイパークロックアップを使えるためカブトの苦戦は確実だと思っただが。

「生憎、俺は未来を掴んでいるんだ」

右手を挙げるとその手にコーカサスと同じハイパーゼクターが収められた。

「な、なんだと………！」

「おばあちゃんが言っていた、俺が望みさえすれば運命は絶えずに俺に味方すると………ハイパーキャストオフ」

ハイパーゼクターをライダーベルトに装備し【Hyper Cast Off】と電子音が響き渡りカブトの装甲が形を変えていき角も巨大な物となり仮面ライダーカブト・ハイパーフォームへと強化変身を遂げた。

第23話『1の技と2の力とブレイドのV3』（後書き）

最強フォームが勢揃いする今回、次回で各戦いの決着がつくかと。

次回予告

カブト

「遅いな」

霊夢

「咲ー！ 合わせて！」

アギト

「オツケー！」

ブレイド

「着いてきちちゃったのかよ……………」

妖夢

「黙って行くななんてあんまりです！」

ライナー電王

「電車切り！」

ダブルライダー

『ライダーパワー！』

次回『NEXT LEVEL』今の自分を越えて』

第24話 『NEXT LEVEL』今の自分を越えて』

「遅いな」

ハイパーカブトとコーカサスは超光速空間の中で目に見えない速度で戦闘を繰り返していたがカブトは余裕を見せていた。

「当たれ！ 当たれ！」

コーカサスは攻撃が当たらない事に焦りを見せていた、その焦りで空回りしかえって攻撃が直撃せずカウンターを食らわされる。

「その程度か？」

超光速空間を抜け通常空間（幻想郷内は通常じゃないが）を出るとカブトは倒れたコーカサスに背を向けていた。

「くっ！ ハイパー……………」

「遅い！ ハイパークロックアップ！」

【Hyper Clock Up】

ハイパーゼクターのゼクターホーンを動かし再び超光速空間の中に突入しコーカサスにハイパークロックアップを使用させる暇を与えず、

コーカサスは身体中から火花が散る度に宙を無残な格好で舞っていき度々カブトの優雅な姿が浮かぶ。

「強え……………」

薙はカブトの強さに驚いているとトドメを射そうとハイパーゼクターとカブトゼクターのゼクターホーンを動かす。

【Maximum Rider Power】

次にカブトゼクターのスイッチを押していきゼクターホーンを動かす。

「ハイパー……キック」

【1・2・3・・・Rider Kick】

右足にタキオン粒子のエネルギーが集結していく。

「ハッ！」

ジャンプすると背中から翼みたいな形で光が放たれ加速し右足を前に突き出しコーカサスに突撃し。

「らああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ぐわあああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

必殺キック、ハイパーライダーキックはコーカサスを直撃、コーカサスは甲板から放り出され空中で爆死した。

【Hyper Clock Over】

船の先端の上、カブトはコーカサスが起こした爆発を背に優雅に立ち右手の人差し指を天に翳し勝利を示していた。

「フ、ハッ！」

聖輦船の上でシャイニングアギトは白銀の赤いラインが走る龍を模したような双剣シャイニングカリバー・ツインモードを両手に握り、トルネイダー・スライダーモードを駆り、霊夢と共に風のエルを攻撃を掻い潜っていた。

「咲ー！ どうするの!？」

「奴を甲板に落としてからが本当の戦い！ だから落として!」

トルネイダー・スライダーモードでは高速で飛び回ってもまだ慣れていないため自由が効かない、最近ちよくちよく外の世界に行きバイクの免許を取りに行っていたがまだ乗り始めて間もないのだ。

「無茶言うわね」

「霊夢ちゃんには言われたくないな」

風のエルは次の矢を弓に掛け狙いを定めていた、自分の使命がアギトを葬ることだからか、アギトを優先的に狙っているためそこが一番の隙だった。

「確かにね……………」

自分でも納得ができた。

そして風のエルは矢を放つがシャイニングカリバーで弾き返される。

「じゃあ私に合わせなさいよ!」

「G・I・G!」

何か別の某未来は無限大な巨大ヒーローに出てくる組織の返事をするとトルネイダー・スライダーモードを減速させその隣を霊夢が並んで飛ぶ形となり一直線に突貫する。

「っ！ くっ！」

風のエルは上手くいけば二人同時に倒せると思考を始め弓に矢を二本掛けて狙いを一瞬で定めたが。

「今よ！」

「うん！」

トルネイダー・スライダーモードが上昇しアギトが最優先のためそっちの方に注意が向く、それが二人の作戦でもあった、アンノウンの特性を利用した。

「よそ見してる暇なんて………ないわよ！」

前方から霊夢がお札を乱射、それに対応し切れず腕を交差し攻撃を防いでいると照らした太陽が雲に隠れたのか、自分を影が被い頭を上げ見たものは。

「ハアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!」

トルネイダーがバイクモードに変形し自分に向かって落下してきている、避けようにも前方から霊夢の攻撃を受けているため動けず

………

「ぐわあああっ!!!!!!!!!!?」

「ちっ！」

ファイズエッジを手放し大きく飛ばされるが武器がなくても素手でアルビノレイオイマジンに殴り掛かるファイズ、そして後ろから援護射撃を行うマグナリユウガンオー。

「大丈夫かよタクミ、おっさん！」

「心配すんな、こんな猫、片付けてやつから……………」

「ああ、だけどキツいな」

疲れを見せていた、妹紅も死なないからと言っても疲れたり痛みを感じる、普通に死ぬ痛みでも死なないがそれはそれでかなりの負担が掛かる。

「無茶すんなよ、慧音が心配するから」

「ああ……………アイツの夢を守り切らなきゃなんねーから……………」
「後その言葉は自分もだろ」

マグナリユウガンオーは妹紅がタクミに掛けた言葉に突っ込む。

敵から距離を取るとオートバジンがバトルモードで隣に立ち何かケースみたいだが穴が空いていた、ちょうど の字に、

それを受け取るとファイズフォンを抜きそれに連結させ【Awakening】と電子音が鳴り響きファイズの姿を変えた、黒いライダースーツが赤く輝きフォトンブラッドの流れが止まりフォトンストリームが黒くなった、ファイズ・ブラスターフォームへと。

「アクセル以外なれたのか」

「まあな……………奏歌と咲夜か」

そこに奏歌が変身したキバ・エンペラーフォームと咲夜が駆け付けた。

「遅くなりました」

タツロツトからザンバツトソードを抜き刃先をアルビノレオイマジンに向ける。

「まだいるみたいよ」

次にまたエンペラーキバのように黄金の騎士が、一魔のブレイド・キングフォームだった、

一魔自身会いたい人物に直接会えず顔は余り知られてないが名前だけ一人歩きしていて白玉楼に住んでいるぐらいだろう有名なものは。

「なんかめちゃくちゃ失礼なことを……………」

「気にしない、気にしない方がいいわよ」

アルビノレオイマジンに銃撃しナイフを投げ付けながら突っ込みをされていると。

「酷いですよ一魔さん！ 一人で黙って行っちゃうなんて！」

刀を二本持った妖夢が姿を見せブレイドは軽く驚いた、バイクで来たのに後を着いてきたのかと。

「夕飯前までには終わらせましょう！ でないと幽々子様が材料つまみ食いして無くなっちゃうんですから！」

「ラジャー！」

こっちは某ダイナミックな巨大ヒーローに出る組織の返事をする
とキングラウザーを持つ。

「取り敢えず早く決めて」

「こっちで動きは止めておくから！」

気付けばアルビノレオイマジンの回りに炎が囲みナイフが飛び交
い。

【ファイナルクラッシュ！】

「マグナドラゴンキャノン！ 発射！」

マグナドラゴンキャノンの直撃を受けていた。

「じゃあまず僕から」

ザンバットフェッスルをキバットに吹かせ「ウェイクアップ」と
叫ぶとザンバットバットを刃先まで上げてから元の位置に戻す。

「ハアアアアアア……………ハアツ！ ハアツ！ ハアアアアアア
アツ！！！！！！！！」

炎の中を駆けファイナルザンバット斬による斬撃をアルビノレオ
イマジンに食らわせると次に【ROYAL STRAIGHT F
LASH】と響く、通常ならばカードの3Dを潜るのだが今回は五
枚のカードの3Dはキングラウザーの刃に吸収され黄金に輝く。

「じゃあ行くよ妖夢！」

「はい！」

妖夢と同時に走りだし炎には構わず走り。

「ウエエエエエエエエエエエーイイイツ!!!!!!!!!!!!!!」

「でりゃあああああああーっ!!!!!!!!!!!!!!」

ブレイドと妖夢の斬撃が繰り返されるとファイズはケースを変形させる。

「後は任せな」

変形させたファイズブラスターに付いているボタンを「5246」と入力し【Faiz Blster Take Off】と流れ背中に装備されたマルチユニット、フォトン・フィールド・フローター、訳してPFFが起動し空中を飛行し高く上昇していき「5532 ENTER」の順に入力すると【Faiz Pointer Exceed Charge】と長い電子音が流れると右足が赤く光る。

「ハアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

右足に向けて突貫し必殺技ブラスタークリムゾンスマッシュ、又の名を超強化クリムゾンスマッシュをアルビノレオイマジンに叩き込むと赤く輝くフォトンブラッドの渦が生まれる。

「しゃがめえ！」

言われた通り咄嗟にしゃがむとフォトンブラッドの渦は回りにいたモールイマジンを倒していきそしてアルビノレオイマジンは大爆発を起こし絶命した。

「これでいいだろ」

「タクミ危ねーよ!」

「あだっ!?!」

妹紅の飛び蹴りを後頭部に食らい喧嘩を始めてブレイド達は仲裁に入るのだった。

デスイマジンと戦うライナー電王、途中から加勢したソード電王、Vゼロノス、神奈子と諏訪子は何としてでも動きを止めて大技を叩き込もうと奮闘していた。

「コイツと戦うのは二回目だが強過ぎるだろやっぱ」

「さっきまでの威勢はどうしたんだ赤鬼?」

「うっせー、蛇」

軽口を叩いているとデスイマジンは三日月状の光の刃を放ち咄嗟にエクストリームスラッシュで受け止める。

「アイツらがいれば楽なのによ!」

向かってくるモールイマジンをエクストリームスラッシュを炸裂した状態のデンガツシャーで一閃していくとデスイマジンにライナー電王とVゼロノスが接近しそれぞれの大剣で斬り掛かる。

「だけど諦めちゃダメだ」

(そうですよ!)

Vゼロノスはボウガンモードに組み換えたゼロガツシャーにゼロノスカードを挿入しゼロ距離でグランドストライクを発射しデスイマジンは大きく後ろへ後退ると。

「はぁぁーっ！」

ライナー電王のデンカメンソードによる強烈な攻撃に吹き飛び木に激突。

「よし今……………おわぁっ!？」

その時、ソード電王に異変が起きた、デンカメンの桃のようなマスクの皮が向け左肩に青いオレンジの眼のデンカメン、右肩に金色の斧のようなデンカメン、胸に紫の龍のようなデンカメンに背中に白と青の翼のようなデンカメンが装着されるとデンオウベルトにケータロスが連結され【Super Climax Form】と流れスーパークライマックスフォームに変身した。

「先輩、まさか僕達を必要にしてくれるなんてね」

青いデンカメンからモモタロスではない別のイメージンの声が響いた。

「亀！ それに熊と小僧！ 手羽先まで！」

青はウラタロス、金はキンタロス、紫はリュウタロス、白はジークと呼ばれるイメージンの意志が宿っていた。

「みんな来てくれたんだ！」

「当然や、それにわいらだけやないで！」

赤いデンカメンに青を基準にした体に電王のマークが刻まれ剣でありイメージンでもあるマチェーティイを持つたNEW電王・ス

トライクフォームがそこに現れた。

「じいちゃん来たよ！」

「幸太郎！」

どうやら祖父と孫の関係らしいが二人共まだ若い。

「こうなったらこっちも張り切るぞ！」

Vゼロノスはゼロノスカードを赤い面が見えるように差し替え【Zero Form】、ゼロノスはベガフォームだが緑ではなく赤いゼロフォームとなり分離したデネブはデネビツクバスターと呼ばれるガトリング型の武器となる。

「デネブがガトリングになっちゃった！」

「あれ？ ばあちゃん？」

いきなりNEW電王はZゼロノスに向かってそう呼び回りは間が抜けた感じとなるが。

「幸太郎」

「あ、やばい、まずった」

マチエーティに注意されて謝り。

「さあ、て、全員揃ったみたいだし全員でクライマックスと行こうか！」

SCX電王はケータロスのボタンを押し【Charge and Up】と音声を鳴らすと背中の子ークのデンカメンの羽根が大き

く広がり右足にフリーエネルギーが貯まってゆく。

「う……………がつ!？」

デスイマジンは動こうとしたが回りを御柱に挟まれ更には雨のように降り注ぐ弾幕に動きを封じられると。

「動きの方は」

「私達に任せて!」

御柱と弾幕は神奈子と諏訪子によるものでZゼロノスはデネビックバスターを構えゼロノスカードを挿入していた。

「最初に言うの忘れてました、私はかくなり、強いですよ!」

「プトティラは無茶だけどね」

水を刺すような事を言うが今は気にせず金色に輝く砲撃バスターノヴァを放ち更に動けなくするとそのZゼロノスの右にフリーエネルギーのレールが現れその上をライナー電王が駆け、左をNEW電王が挟むように駆け抜けていく。

「電車切りっ!」

「センス無^なっ!」

ほとんど全員からそのネーミングを非難する声上がるが一人だけ「かっこいい!」とZゼロノスは叫んでいた。

ライナー電王はデンカメンソードで繰り出す電車切り、正式名称フルスロットルブレイク、NEW電王はマチエーティディから繰り出す斬撃カウンスラッシュで一閃するとSCX電王は空を舞っており必殺キックを炸裂しようと突貫した。

「俺達の必殺技！ 全員集合だよ！ スーパークライマックスバー
ジヨン！ + アツ！」

ライナー電王に負けないあまりセンスの欠けらも見られない必殺
技名を言うのがこれの正式名称は超ボイスターズキック、今回は全員
で次々と必殺技を繰り出したから先ほど避けた名前となり必殺キ
ックはデスイマジンを粉碎した。

「よっしやあああああつ！！！！！！！！！！」

SCX電王は歡喜余って喜びの叫びを上げるとそれぞれのデンカ
メンに意志が宿っているため色々な方向に跳ねていく。

「そっいえばあの俺からあると思わなかったコアメダル抜いた赤い
手羽先野郎は？」

「アंकクならもうエイジの所に飛んでつたよ」

ショットカーグリードが生み出したイカデビルとガラガンダーと
戦うダブルライダーと、ダブルライダーが怪人を倒すまでオーズ・

プトティラコンボを止めようと戦うシンジの龍騎サバイブと文のナイトサバイブ。

「結構使いやすいですね……………！」

初変身にも関わらずナイトを使いこなしダークバイザーツヴァイからソードベントを使わず引き抜ける剣ダークブレードを持ち、引き抜かれた後のダークバイザーツヴァイはダークシールドとなる。

文自身の持ち前の速さを活かしオースの隣を一瞬で横切り一太刀入れていきドラグバイザーツヴァイのドラグブレードを起動させている龍騎は「すげえ」と呟き見ているしかなかった、彼女一人に任せれば大丈夫ではないかと思いついてはじめていたがそうはさせないのが城戸シンジというバカ、辺りが凍っているため使える戦法があるのに気付いていた。

「文ちゃんも速いけどこっちも負けないぜ！」

「ガルツ!？」

突然龍騎が視界から消えて焦るオースだがナイトの斬撃により捜索ができず背中に火花が散り振り向くが何もなくまた背中に火花が散るがナイトは目の前にいた。

光を反射するものならばなんでも鏡となる、氷もそうだ、そう龍騎は光を反射する氷を鏡として使いミラーワールドに入って奇襲を仕掛けていたのだ、当面はオースの動きは止まったままだろう。

ダブルライダーはイカデビルとガラガラランダーの邪魔によりシヨツカーグリードを倒せずにはいたが。

「本郷先輩! — 文字先輩!」

「来たか風見！」

V3がやってきた、彼にならショッカーグリードを任せられる。

「風見、お前はショッカーグリードを頼む」

「はい！」

V3は飛び上がり白いマフラーをなびかせショッカーグリードの前に降り立ち戦闘を開始。

「V3キイック！」

先制としてV3キックをショッカーグリードに食らわす。

「トオオーウ！」

1号はイカデビルの頭部を狙いライダーキックを炸裂、そこが弱点なのだがそこを攻撃させないのが怪人である。

「やはりそこが弱点か」

セルメダルから生まれても弱点は同じだと察し頭部を狙うように打撃を加えていく。

「ライダーパンチ！ ライダーチョップ！」

次々と技をガラガンダーに決めていく2号、その猛攻に防戦一方のガラガンダー。

「ギシャアアアーツ！！！」

シヨツカーグリードは勝てないと感じ大空へ舞い逃走を測る。

「逃げられると思うなシヨツカーグリード！」

青いバイク、ハリケーンが自動運転が走ってきて飛び跳ねるとV3も高くジャンプ、ハリケーンは空中で逆さまになるとその回転する後輪を踏み台にし蹴りもつと高く飛びブーメランのように回転しシヨツカーグリードを追跡する。

シヨツカーグリードは追い掛けてくるV3に激しく動揺するが右へ飛ぶ、方向転換できないと思ったのだろうか見当違いだった。

V3はなんと旋回してシヨツカーグリードを追尾したのだ、これにはもう小細工は効かないと思い真っ直ぐ逃げるがだんだん距離を詰められ。

「V3イイイイイーツ!!!!!!!!!!!!!!」

V3は必殺技の態勢に入り。

「マツハ……………キイイイイイイイイーツク!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!」

必殺技、体をブーメランのように回転しながら炸裂するV3マツハキックでシヨツカーグリードに直撃し上半身と下半身が別れて空中で爆発しセルメダルが散らばるとシヨツカーグリードのコアメダル、金色の鷲の絵が刻まれたシヨツカーメダルも飛ばされたが赤い鳥のような爪が生えた手でそれを掴むものがいた。

腕を引き抜くとオーズの瞳は緑に戻り正気に戻った。

「アंक！」

腕を放しライダーパワーの照射を止めるとオーズはふらつきつつも自分の足で立ち後ろを振り向く。

「ようエイジ、まんまとんなもん入れられやがって」

アंकの手の平には鮫、鯨、オオカミウシの三つのコアメダルが乗っておりそれを握り潰し粉々に粉碎する。

「ごめん、ショッカーグリッドと戦ってたらデスイマジンに入れられて……………」

申し訳なさそうにするが助かったからよしにした。

「君の声、聞こえてたよ、ありがとう」

今度は龍騎に礼を言った、見ず知らずの自分を一生懸命助けようとしてくれたからだ。

「当然、人や妖怪を助けるために変身するんだ、ライダーだって助けるさ」

ここで天狗襲撃の事を思い出したがそれは保留にした、自分の意志でやったのではないからだ。

「俺は城戸シンジ、仮面ライダー龍騎さ」

「俺の名前は狭間エイジ、仮面ライダーオーズ」

第24話『NEXT LEVEL』今の自分を越えて』(後書き)

ダブルライダーとV3のトドメの技がSPIRITSのからだった
り。

あとNEW電王の言葉は気にならずに。

次回はかなりタイトルだけで予想がつくのでサブタイだけ発表。

次回『OOO Full Combo Change Speci
al Medley Edit』

第25話『OOO Full Combo Change Special』

オーズ編は今回でお終いです、オーズ無双です、OPの映司版聞きながら読むとムービー大戦っぽくはなりませんよ？（爆）

「ダブルライダー、仮面ライダーV3、キングダークは俺に任せてください」

一人でキングダークを全体倒すと言い出すオーズ・プトティラコンボ、龍騎はそれを止めようとしたがV3は必要ないと首を横に振った。

「できるな、仮面ライダーオーズ」

1号に問われ「はい！」と2号の力技と同じ以上力強い返事をし。

「なら思い切りやれ！」

アंकは軽くため息を吐いたがそれが仮面ライダーオーズ、狭間エイジだとわかっていた、長い付き合いだからだ。

「ならコイツ使ってさっさと終わらせろ」

アंकは緑のクワガタ、カマキリ、バッタのコアメダルを渡す。

「じゃあ、行きますー！」

オーズドライバーのメダルを受け取ったものと入れ替えオーズキヤナーで読み込むと左腕を右斜めに胸の前に翳し捻り。

「変身！」

【クワガタ！ カマキリ！ バッタ！ ガータガタガタツキリバ！ ガタキリバ！】と歌が流れオーズの姿が緑を基準にしたものに変わって行く、

クワガタみたいな頭にオレンジの眼のクワガタヘッド、腕にカマキリソードが付いたカマキリアーム、足は緑のラインが流れるバッタレッグとなりオーラングサークルは読み込んだメダルの絵となりガタキリバコンボとなった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおつ！！！！！！！！！！！」

雄叫びを上げるとなんと分身を始めていき10体が増え。

「分身した！？」

ナイトはカメラを持ちシャッターを切って撮影しているとアंकは十数枚以上もコアメダルを投げ渡し分身したオーズ達は一体だけガタキリバのままにしすべてメダルを入れ替え一斉にオーズキヤナーでスキヤンし。

『変身！』

最初は【タカ！ トラ！ バッタ！ タットツバ！ タトバ タットツバ〜！】と流れ頭がタカみたいな仮面で緑の眼のタカヘッド、腕は黄色い爪トラクローが装備されたトラアームにバッタレッグの

オーズの基本コンボのタトバコンボに変身、ガタキリバももう一度スキャンし【ガータガタキリツバ！ ガタキリバ！】と流した。次に【ライオン！ トラ！ チーター！ ラタラタアッ！ ラトラーター！】、仮面が青い眼でライオンのようなライオンヘッド、トラアームに足は黄色いライン流れるチーターレッグとなった俊敏なラトラーターコンボ。

【サイ！ ゴリラ！ ゾウ！ サゴーズ………サゴーズォ！】、次は眼が赤く白い一本の角が伸びるサイヘッドに腕に太いアーム、ゴリバゴーンを装備したゴリラアームに銀色のライン流れるゾウレッグの重量系のサゴーズコンボ。

【タカ！ クジャク！ コンドル！ タア〜ジャア〜ドオル〜】、タカヘッドとは違う赤い眼とバイザーが付いたタカブレイズヘッドに左腕に盾型の武器タジャスピナーが装備されたクジャクアームに鋭い爪が伸びるコンドルレッグ、

オーラングサークルがまるで不死鳥を描いたような絵となり、飛行能力が備えられたタジャドルコンボ。

【シャチ！ ウナギ！ タコ！ シャシャシャウタ！ シャシャシャウタ！】、青を基準にし眼が黄色くシャチヘッドに鞭、ボルタームウィップを装備したウナギアームにタコのような吸盤が付いたタコレッグの水棲系のシャウタコンボに。

【プットッティラ〜ノザウル〜ス！】、そして今回の主な被害の原因である緑眼のプトティラコンボ。

【タカ！ イマジン！ ショツカー！ タアマアシ！ タマシー！ タアマアシ！ ……ライダアア……タアマアシ！】、そしてタカヘッド、モモタロスのような腕と肩に角を生やしたイマジンアームに足はコンドルレッグのようだが色は金のショツカーレッグの特殊なタマシーコンボ。

【コブラ！ カメ！ ワニ！ ブラカ〜ワニ！】、茶色を基準に紫の眼、けして暴走はしていない、コブラヘッドにカメの甲羅を肩や腕に装備したカメラームにワニを表すようなラインが入ったワニ

レッグの爬虫類系の防御のブラカワニコンボに。

「スーパータカ！ スーパートラ！ スーパーバツタ！ スーパー！ タトバ タットツバ！ スーパー！！」、タカブレイズヘッドに爪が更に鋭くなったトラクロー・ソリッドが装備されたにトラームにバツタレッグ、タトバコンボとは違うのはスーツの色が反転している所である、未来のコアメダルで変身したスーパータトバコンボである。

「オーズのフォーム多いな！」

龍騎が仰天している中、職務を全うしようとシャッターを切りまくるナイト。

「あ、ついでにそちらの三人もお願いします」

声を掛けられてダブルライダーとV3はポーズを決めてカメラに収められた。

「職務と欲望に忠実なんだな」

職務が似ている所が多い2号は関心していると。

『ハッ！』

オーズ達は一齐に走ったり飛び立ったりしキングダークを倒しにいった。

「なんとか怪人達は倒したよ」

甲板にデイエンドと魔理沙は降りた時には聖輦船はボロボロで煙が上がっていた。

「あ、ねーさん」

アギトが言うねーさんは白蓮の事でやはり顔が広い咲一。

「咲一さん帰って来てたんですか」

「ご心配をおかけしました、まあそれはいいとして聖輦船の修理費は紅魔館のレミリア・スカーレットの方に請求しておいてください」

自分が仕える主に請求するように言うとは怖いもの知らずだがシヤニンングアギトに歯向かうのも怖いもの知らず。

「終わったか？」

怪人の死体を引きずって慧音が甲板に出てきた。

「どつやって倒したの!？」

クウガのごもつともな突っ込みが空を切る、スペルカードの発動

すれば船内が更に被害がと思ったからだ。

「あ、それは頭突きでな」

『頭突きスゲー！』

葬も一緒に叫ぶが。

「あのでかぶつどうする？」

カブトはキングダークを見て問う、破壊しないとならないのだが。

「なんか見えるぜ？」

キングダーク達の回りを飛び回る影が見えた。

「アレは……………仮面ライダー！？」

それはタジヤドルが赤い翼、クジャクウイング、プトティラが翼を広げて飛ぶ姿だった。

「ハアアアアツ！！！！！」

タジヤスピナーから火炎弾を連射していきキングダークに取り付こうとするが暴れるためなかなか接近できない。

「セイヤーッ！！！！！」

プトティラが獣の如く素早く取りつきメダガブリューでキングダークの装甲に穴を空けると。

「セイヤーアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

同じ掛け声でメダジャリバーという大剣に三枚セルメダルを入れ
オースキヤナーで読み込み【トリプル! スキヤニングチャージ!】
と鳴り響き必殺技オースバツシュが炸裂した状態でタトバはその穴
に剣を突き刺す。

【ゴックン! プットッティラクノヒツサツ!】とプトティラ
がグラランド・オブ・レイジをキングダークに叩き込み更にスキヤニ
ングチャージしたラトラーターがトラクローで相手を切り裂くガツ
シুকクロスを炸裂しキングダークの一体は沈黙し倒れ機能を停止さ
せた。

「嘘!? 倒しちゃったよ!?!」

まさか倒すとは思わず驚いているとキングダークの一体が破壊光
線を発射してしまった。

「ダメ! 損傷が激しくて反応が鈍い!」

聖輦船は損傷が酷く反応が鈍く方向が変えられずこのままでは直
撃とは思われたその時、タジャドルがブラカワニを連れて現れ、腕
の盾で破壊光線を防ぎ切る。

「大丈夫ですか?」

「え、あ、ありがとうございます」

白蓮が代表した感じで礼を言つと。

「キングダークは俺に任せてください! セイヤーツ!!!!!!」

全壊した守矢神社の境内で早苗達に謝っていた、天狗襲撃の方は反省しているため大天狗等に言う必要ないと考え文が怪人達の仕事と報告することに、後、金髪で赤いズボンを履き右腕の裾が赤くなつた白い服を着た青年となつたアंकも一緒に怒っているような感じだつた。

「直してくれるなら別にいいが」

「本当ですか！？ わかりました！」

神奈子は冗談のつもりだつたらしいがかなり本気らしく神社の修理は彼らに任せる事に。

「そつといえばダブルライダー達は？」

いつの間にかダブルライダーが居なくなっているのに気付きシンジは空を見上げると白く赤いラインの新幹線が空を走り光の渦に入つていった。

「つてかデンライナーが！？」

健太郎やモモタロス、青い亀のウラタロスに金の熊のキンタロス、紫の龍のリユウタロスに白い鳥のジークが取り残されてしまった。

「オーナーが当分はここに居てだつて」

健太郎はその消えた新幹線、デンライナーのオーナーからの伝言を伝え納得させた、NEW電王もそのデンライナーに乗っていたためこの場に姿はなかつた。

(だけど幸太郎はあの娘の事を……………まさかね)

ウラタロスは何かを悟り始めていた。

「健太郎くん達はこれから？」

早苗に聞かれ考え始めた、野宿でもいいが食料も現金もない、どこか泊まる事を考えていると。

「なら命蓮寺に泊まりますか？」

まるで聖人君子の如くの微笑みで話し掛けてきた白蓮の申し出に
続った。

「ありがとうございます、これからお世話になります」

後エイジと健太郎は電王とオーズの世界が合わさった世界の住人であり、エイジが神社を建てる事を言い健太郎やモモタロス達もそれを手伝うことになった。

博麗神社、総真と薺は話し合っていた。

「済まない……………もう矢車総に戻らない」

「いいよ兄貴、兄貴は本当の自分を取り戻したんだから」

総が総真に戻ろうともこの二人の仲が変わるような事はないのだ
ろう。

「良かった良かった」
「そーね」

ユウスケ、キバーラ、咲一、霊夢はその二人を見ていた。

「そろそろ自分の宿見つけなきゃな……………俺達も」

「まだいてもいいわよ？」

「だって男が住むのもアレでしょ？ 霊夢ちゃんには咲一がいるんだから」

「そつよ」

顔を見合わせると咲一は微笑む、霊夢は顔を赤くした。

「そ、そつね」

「一応いいところ何個か見付けたから今週中には総真達とそつちに行くよ」

「チツ……………デスシヨッカーの奴……………あんなん持っていやがったのか……………」

とある世界、土が変身したディケイドがクウガに似ているが体は白く、瞳は黒く残忍な性格を表していた。

「門矢さん！」

そこにはユウスケではないクウガがいた、そのクウガは四本の金の角にアークルがライジングとなりアマダムは黒く輝き鎧も黒く金色のラインが流れ優しさを表した赤い眼、仮面ライダークウガ・アルティメットフォームがいた。

「五代……………奴は……………」

「グロンギの最強の怪人……………ン・ダグバ・ゼバです……………俺が自分の世界で倒した」

五代と呼ばれたクウガとディケイドはいつでも戦えるように構えていたのだがダグバは興味がないかのように背を向けた。

「どういつつもりだ？」

「僕は自分の世界に帰るだけだよ」

無邪気な声を上げ今の自分の目的を告げると目の前に次元の壁が現れる。

「自分の世界……………」

「僕はオリジナルクウガの世界の僕じゃない……………僕は……………」

表情は判らないがにやりと笑っているようにも見えていた。

「ガミオが封印された時、別の世界に飛ばされたリイマジネーション

ンのクウガの世界の僕だから」

ダグバは次元の壁の中に入りオーロラは消えた。

「リイマジネーション……………まさかユウスケ……………」

「門矢さん」

二人は変身を解く、クウガの変身者は次元にほくろができた優し
そうな青年だった。

「行くか、リイマジのクウガの世界に……………」

今回のフルコンボは夏の映画でタマシーもいたらしいのにも思っ
てムービー大戦のスーパータトバも合わせてやっちゃいました。

冬のアレはすごかった……… だけどプティラ涙目、POWER
to TEARERが好きなんです！

二番目はラトラーターですかね？一人じゃカラオケで歌えませんが
タジャドルならギリギリ！

そして最後のクウガはもう一つの始まりでもある仮面ライダーでし
た。

次回予告

キバツト

「今日は里で演奏会だったよな」

妖夢

「ウゾダドンドコドーン！」

慧音

「奏月、少しいいか？」

奏歌

「ファンガイア……………」

一魔

「ギャレンの資格者は彼女がいかもしれない……………」

一魔 / 奏歌

「「変身！」」

次回『仮面組曲・二人の黄金騎士』

第26話『仮面組曲・二人の黄金騎士』（前書き）

終盤力尽きてしまった……………

第26話 『仮面組曲・二人の黄金騎士』

「お、奏歌、今日はすごくご機嫌だな」

「そうかな？」

キャットスルドランの中、奏歌は鼻歌を交じらせながらバイオリンの手入れをしていた。

「今日は確か里で演奏会だったよな」

「うん、慧音さんに頼まれてね、里の人達にバイオリンの演奏をね」

奏歌は度々どこかに呼ばれてバイオリンの演奏を披露したり子供達と歌を歌ったりしている、声も一般で言う美声のため歌声も人気なのだ。

「だけどよ、ここはいいな」

「うん、僕の理想がほとんど叶ってるもん」

この幻想郷は人間と妖怪が共存している、自分が目指すファンガイアと人間の共存、その目標に近いものを感じていた、弾幕ごっこやスペルカードルール、そう言った部類のゲームもあれば人間もファンガイアと思いつて体を張った遊戯ができるのではないかと考えていた。

「何より吸血鬼もいるのがいいな」

ファンガイアはキバの世界では吸血鬼の元になったとされているため幻想郷の吸血鬼はゆわばファンガイアなのだ。

「うん、鈴歌すずかには悪いけどもう少しここで色々学んでから帰ろうと思っ」

「だな、奏歌が居ない間は鈴歌がキングの代わりしてくれてるだろうな……………まったく、妹に苦労掛ける兄だな」

面目ない、と返すとバイオリンをケースに入れ。

「じゃあ行くのか？」

おう！、とキバツトは返し一緒にキャツスルドランから出ていった。

「ウゾダドンドコードーン！」

白玉楼、突如妖夢の叫びが響き渡るが何を言っているか分からない、因みにそれは嘘だそんなことー！ と叫んでいます。

「どうした妖夢！？」

一魔が台所に駆け込み状況を把握しようとするがなかなかできず。

「剣崎さん……………」

ただならぬ事が起きたのだと感じ緊張が走り息を飲むと。

「朝ご飯の材料がすっからかんで料理ができません」

「ウゾダ……………ソナ……………ウゾダドンドコドオオオオオオ
オーン!!!!!!!!!!!!!!」

妖夢よりも大きな叫びを上げた、今の時間帯は朝。

「幽々子様アツ！」

材料がすつからかんの原因は察しが付いていた、なぜなら幽々子
がつまみ食いの常習犯のため。

「だってお腹空いたんだもん」

居間に行くと満足そうなニコニコ笑っている幽々子が座っていた。

「だからって私達の分の材料まで！」

怒っているが聞き耳持たず、それどころか。

「で、朝ご飯どのくらいでできる」

ブチッ、何かがキレるような音が聞こえ一魔がいるはずの方を向
くど。

【ROYAL STRAIGHT FLASH】

変身しロイヤルストレートフラッシュを放とうとしているキング
ブレイドが。

「幽々子様、フォローできませんよ？」

「あらら……………どつしましょ？」

数秒後、その日、白玉楼から爆音が響き部屋の一つが壊滅した。

「ん？」

それを察したのか引越し準備に掛かっていたユウスケは白玉楼がある辺りの方を向いていた。

「どうかした？」

「いや、なんか爆発したんじゃないかと」

霊夢も何かの準備をしているようだった。

「霊夢ちゃんは何してるの？」

「ああ、夏になるとここで宴会開くのよ、だからそろそろ準備しなきゃなんないの」

総真と舜はもう里の方に引越していた、荷物などバイクぐらいしかないからだ、ユウスケは外の世界から自分の自宅から持ってきた物もあるから準備に時間が掛かっていた。

「なるほど……なら宴会の準備ができてからにしようかな？」

「いいの？」

「もちろん」

自分の荷物を適当な場所に置いて霊夢が運んでいた荷物を代わり

に持つ。

「ありがとう……………お兄ちゃん」

「え？」

いきなりそう呼ばれ戸惑っていた。

「この前のオーズ事件の時、アンノウンを憎みまくって聖に食い掛かろうとした時に止めてくれたじゃん、なんかかつこ良かったから、咲一が一番だけど」

少し考えていると頭にキバーラが乗ってきて。

「呼ばせてあげなよユウスケ」

自分も八代をあねさんと読んでいたから気持ちは分かる、キバーラに背中を押され決心がつき。

「いいよ霊夢」

いつもの無邪気で歳のわりには幼い笑顔を浮かべ、ちゃんを付けないで返した。

「あ、ありがとう、お兄ちゃんさえ良ければ神社に居させてあげるから」

「まあ考えておくよ、取り敢えず今は宴会の準備しよ？」

うん、返事をし二人は宴会の準備を再開した。

「ユウスケもたくましくなって、もう士の助けはいらないわね、あ

の子も」

キバーラは少し淋しそうにも見えた、子供が自立していくような感覚だった。

「キバーラ、物置の高い場所にある物取ってくれな〜い？」

「はいはい、今行くわよ〜！」

「奏月、ありがとう、いい演奏だった」

いやあ、奏歌は頭を掻きながら照れていた、演奏会は終わり寺子屋の職員室でお茶を飲んでいた。

「昼食は？ 今から用意してやるぞ？」

「いいです、そろそろ」

するとそこに咲夜が突如現れた。

「奏歌、お嬢様が演奏を聴きたいそうよ」

「やっぱり」

最近では紅魔館で演奏をするのも日課であった。

「というわけですから」

「わかった、また頼む」

返事を返すと寺子屋から咲夜と共に出ていく。

「では……………」

懐中時計を出して時間を止め奏歌は気付かない間に紅魔館の前に。

「美鈴……………」

門の前、美鈴は爆睡しており頭にナイフを突き刺しておいて敷地内に。

「こつちよ」

「うん」

咲夜に連れられ屋敷の中に入ろうとしたら門の方からバイクのエンジン音が響いてきた。

咲夜はその来客に対応するために門の方に行く、美鈴が寝ているというかナイフで気絶しているため。

「あら、妖夢に剣崎さん」

ブルースペイダーで妖夢と一魔がやってきたのだ。

「すみません、咲一さんいますか？」

「咲一？ 今日守矢神社の方なのよね……………ほら建物吹き飛んだじゃない」

咲一も手の器用さを活かし守矢神社の建て直しを手伝いに行っている。

「そうですか……………困ったな……………」

「何かあったの？」

聞いたのだが不機嫌で黙っている一魔の腹の虫が鳴る音を聞き察した、幽々子が原因だと。

「材料分けてもらいたくて……………野菜はいつも咲一さんのですし」

やはり咲一の顔は冥界でも広く誰とでも仲良くなれる交友範囲は霊夢よりも広いかもしれない。

「分かったわ、取り敢えず入りなさい、奏歌もいるから」

二人も敷地内に入り奏歌と共に一度屋敷の中に入る。奏歌はレミリアの部屋に行き残りの二人は厨房に。

「これとこれでいいかしら？」

材料の中から選びテーブルの上に何個か抜き並べていき問う。

「はい、いつもいつもありがとうございます」

このように咲一の菜園の野菜にお世話になることが多く、頭を深く下げて礼と謝罪を表す。

「いいわよ、何となくあなたの苦勞わかるから、こっちは別だけど」
完全にレミリアの事であろう、似たような役職、共通点も多いの
だろう。

「それより……………先に食べていかない？ お昼余り物でいいなら」
一魔がそろそろ空腹で放心状態になり掛けているの見て進めてき
た。

「劍崎さんもそろそろ限界ですね、まあロイヤルストレートフラッ
シュを放つぐらいでしたから」

それを聞き今の白玉楼の状況はどうなっているのだろうと想像す
るがやはり壊滅している絵が浮かぶ。

「幽々子様はロイヤルストレートフラッシュにより気絶してしまっ
たので昼食は大丈夫かと、お腹空けばおやつ食べてると」

主の話は後にして今は一魔の空腹をどうにかするのが先決だと考
え簡単な食事を用意した、ここでもロイヤルストレートフラッシュ
は勘弁だと思い。

すると、紅魔館中に音色が響き渡った、心地よく、余裕がなく荒
れたり乱れた心を落ち着かせるほどだった。

「音楽？」

「奏歌のバイオリンの演奏よ、お嬢様が気に入ったのよ」

食堂、一心不乱にバイオリンの弓を弾き演奏をする奏歌がそこにおりその演奏を聴きながら昼食を取るレミリアがいた。

曲を弾き終わるとバイオリンを下げで一礼をする。

「さすがね」

いえいえ、奏歌は返すとバイオリンと弓をケースに仕舞う。

「そりゃ奏歌は楽器を持たせればなんでも弾けちまう天才なんだぜ！」

シャンデリアの上に止まっていたキバットは羽根をバタバタと動かしゆっくりと降りてテーブルの上に立つ。

「なんでも………ピアノもギターも？」

「ギターなんてバンド組んでボーカルまでやってたんだぜ？」

「やめてよキバット」

恥ずかしがりながらもキバットを止めようと声を掛ける。

「恥ずかしがることないんじゃないの？」

「ですけどキバットは盛りすぎなんですよ………」

「いいじゃねーかよー本当なんだから」

顔を真っ赤にし何も言えなくなってきた黙り込んでしまっていた。

「満腹満腹」

一魔は空腹が満たされ屋敷の廊下を食後の運動がてら歩いていた。

「ん？」

歩いていると地下へ続く階段を見つけ、好奇心旺盛なため降りられずにはいられず一段二段と階段を降り始めた。

この紅魔館には二つの地下への階段がある、パチュリーがいる図書館、そして……………

レミリアの妹、フランドール・スカーレットがいる部屋。

「あれ？ 剣崎さんは？」

妖夢と咲夜は彼が居ないのに気付き厨房から廊下に出て辺りを見渡していた。

「どこに行つたのでしょうか？」
「それが判れば……………」

苦勞はしない、と繋げようとしたら突然爆発音が屋敷中に響いた。

「な、何！？」

「まさか…………… フランドール様の部屋に入ったんじゃない？」

最悪な事態が頭に過つていた、なぜならフランドールの能力は姉と同じぐらい強力なものであるからだ。

「いつもなら咲一が相手してるけど今日はいないから……………」
「取り敢えず早く行きましょう！」

フランドールの部屋がある場所を目指し走りだした。

「お嬢様！」

フランドールの部屋の前にはレミリアと奏歌が、先ほどの爆発音が気になり。

「半霊がなぜって聞くまでないわね」

幽々子が原因なのは明白だったが今はこの部屋の中がどうなっているかが先だ。

「扉、開けますよ」

奏歌はその部屋に繋がる重い扉を開き目に入ったのは金髪の背中に宝石がぶら下がった羽根を生やしたレミアアの妹のフランドール・スカレットと彼女の前にカミキリムシのような姿で黒く、青い模様の体で胸は丸く青白く発光した怪人が立っていたが右腕が無く床にその腕が緑色の液体が流れていた。

「怪人……………！」

奏歌達は身構えていたがフランもだった、だがその中、怪人は転がった右腕を持ち右肩に押し込むように付けあまりいい光景ではなかった。

「お兄さんは……………なんで壊れないの？」

怪人に向かってフランはお兄さんと呼んだ、すると怪人の姿は変わり見覚えがある男の姿に。

「剣崎さん……………？」

その怪人の正体は剣崎一魔だった。

「……………」

奏歌達が部屋に来る前、一魔はフランの部屋に入っていた。

「君は……………」

「私はフランドール・スカーレット」

ファミリィネームが同じなためレミリアの血縁関係者だと察した。

「なんでこんな地下に？」

「……………お兄さん、私の事知らないで来ちゃったんだ、私の力を」

この時に一魔はフランのその無邪気そうな雰囲気の中から危険を察していた、レミリアが運命を操る程度の能力を持つ、そして彼女もものすごい能力があるのではないかと考えていた。

「私の能力は強過ぎて幻想郷そのものを破壊しかねないかもしれない」といふほどはこの部屋にいるんだよ？」

「強力過ぎる力……………」

それは閉じ込められているようなものだと考えていたがほとんどという事から外にも出る事がある、自分よりマシだと思い始めていたその時だった。

「私の能力はありとあらゆるものを破壊する程度の能力」

それを聞きそれなら世界をも破壊しかねないと考えていた、そこで部屋の状況に気付いた、四散したぬいぐるみ散らばっている、その力を使ってガス抜きしないといけないのだろう、そして今彼女の手にはぬいぐるみはない、となるとそのぬいぐるみの代わりにするのは自分。

「きゅとして」

フランが何かを握る動作をするとドカーン、と繋げ一魔は危険を感じ今緊急変身ができる怪人の姿に変わり右腕が吹き飛んだ。

そして今に至る。

回りはかなり警戒していた。

「俺は……………アンデッドだ、見ての通り」

緑色の血はアンデッドの証拠である、アンデッドは不死の生物、そのため大ケガを負い死ぬ事はない。

「なんで……………」

一番驚いていたのは妖夢だった、近くに居たのに気付かなかったのも無理はない。

「俺は人間を捨てた人間なんだ」

場所は変わり食堂。

「俺はブレイドの世界でBOARDという会社に入社しブレイドの資格者になりアンデッドを封印し戦っていた」

一魔は包帯を貰い繋げた右腕と肩を完全に繋ぎ合わせるため巻き、昔の事を語り始めていた。

「人を守る仕事に就けた、それが嬉しくて戦い続けジャックフォーム、キングフォームとなった、だけど俺のキングフォームは違うんだ」

テーブルに13枚、スペードのスイートのカードを並べる。

「キングフォームはカテゴリーKと融合しただけの姿だが俺はこの13体のアンデッドと融合してキングフォームであってキングフォームじゃない、BOARDはそれが狙いだった」

全員聞いているのを確認すると口を開いた。

「BOARDの上層部の目的、それは人間のアンデッド化、永遠の命を得ることだった、キングフォームを越えた俺をアンデッド化の実験のために」

「そして地下に閉じ込められた、何度も無理やりキングフォームにされ、アンデッド化を進めていきこうしてアンデッド、亜種である

ブレイドジョーカーに」

ブレイドのライダーシステムはジョーカーアンデッドがアンデッドを倒すとラウズカードにする能力を真似たシステムである、ジョーカーアンデッドは解放されてはなかったようだった。

「何年経ったか分からない、気付いたらデスシヨッカーが攻め込んできていた、BOARDは壊滅し一人取り残されてたところを土………デイケイドが来たんだ」

土に助けられ共にブレイドの世界に侵入したデスシヨッカーを追い出し今に至っていた。

「出る前に一つのライダーシステムを持ってきたんだ、53枚あるラウズカードは俺の手元にすべてある、悪用されないために」

今度はブレイベックルに似た箱型のバックル、ギャレンバックルを置いた。

「地下に閉じ込められる気持ち分かるんだ」

ん？、何かレミアは腑に落ちない反応をしていた。

「確かに地下に閉じ込めるような真似はしたけどあの子、自分からも出ようとしてなかったわよ？」

「ヴェッツ!？」

引きこもり少女でもあった事実に関心した自分が恥ずかしいと思い始めた。

「で、このシステム、どうするんですか？」

「誰かに使わせるのも考えてるんだけど」

「はいはい！」

妖夢が自分が使うと手を挙げて返事をしているが。

「ギャレンは銃だから妖夢じゃ相性悪いよ」

銃系ライダーのため剣を使う妖夢に使いこなせるのはほとんど無
だった。

「みよん……………」

しょんぼりとするのだった、もしブレイドとかそついう剣系だっ
たらチャンスはあったのかもしれない。

(なんか……………気になるわね)

咲夜はギャレンバックルをただじつと見ていた、何か親近感を感じ
ていた。

「騒がしいわね」

図書館でメガネを掛けて本を読むパチュリー、本の整理をしている小悪魔。

「何かあったのでしょうか？」

「まあいいわ……………」

気にせず本を読んでいるとどこからか気配を感じたのかそわそわし始めた。

「パチュリー様？」

「こあ（小悪魔）、何か気配を感じない？」

「言われてみれば……………」

本のページを見たままだが進んでいない、空気が重くなってきた。

「美鈴は……………寝てるわね」

「妖精メイド達は……………」

今動けば何が起きるか分からない、動けないでいた。

「じりゃ……………」

話が終わり廊下に出て歩いていると妖精のメイド達が体が透明に

なり倒れていた。

「おいおいこりゃ……………」

奏歌とキバットは確信した、これはファンガイアの仕業だと。

「門番は何してるのよ」

誰もが居眠りだと思っていたが。

「咲夜さん」

「あゝ……………」

気絶してる、咲夜の手により。

「この先は図書館ね、パチエがいる」
「パチユリーさんが？」

奏歌の言葉にええ、と返す。

「行ってみますか」

「一体どこ……………」

緊張感が詰め寄るがページから目を離さずずっとそこを讀んでいた。

「……………」

背後に透明の牙が二つ現れ先を向けて狙いを定めているようだった。

「パチュリー様！」

小悪魔が声を掛けたが牙は動き出しパチュリーを突き刺そうとしていたが。

「……………まだ読んでる途中だったのに」

持っていた本で牙を防ぐと本に穴が空く。

「いつからいたのかしら？ その容姿だと揚羽蝶のようだけど？」
「よく分かったな」

天井にコウモリのようにぶらさがった揚羽蝶のような容姿のスワローテイルファンガイアがいた。

「答えはお前が気付き始めた頃だ、扉は開いていたから入りやすかった」

「空気を入れ替えていた時に……………」
「ここにはキバは居ないようだな」

キバを狙っているらしく先ほどの奇襲は気付かれるの前提であり挨拶のようだった。

「キバを？」

「私は不甲斐ないキングを抹殺にきた」

奏歌がファンガイアのキングであるのは聞いていた、共存をよく思わないのもいると知っていた。

「なるほどね、ファンガイアは他の種族からライフエナジーを吸収するのが掟だと」

「物分かりがいいな」

「……………馬鹿馬鹿しいわ」

返ってくる言葉を察していたため受け止めはよく床に降りると剣を抜く。

「いあ」

椅子から立ち上がると身体ごと振り向きスワローテイルファンガイアを睨む。

「はい」

戦う姿勢を見せるとスワローテイルファンガイアは刃先を向け駆け出し突き貫こうと剣を突き出してきた。

「おっと」

軌道を読みそれを避けると貫通するレーザーを放つが剣で受け止められる。

「彼を抹殺する……………無理ねそれじゃ」

相手の神経を逆立てるような事を言い出しスワローテイルファン
ガイアはなんだと!?、と問い質してきた。

「私達はあなたに勝つ事はできないと思うわ、けど私達を倒せても
奏歌には適わないわね絶対」

「言わせておけば……………」!

本棚の陰からネズミのようにネズミの容姿を持ったラットファン
ガイアが何体も出てきた。

「まだ居たのね……………」

呆れたように呟いていると忽ち回りを囲んできた。

「どうしますか?」

「まあ大丈夫よ、来たから」

扉の方に目をやると扉がゆっくりと開く、中にゆっくりと黄金の
鎧とマントを身に纏い剣を持ったキバ・エンペラーフォームが入っ
てきた。

「キバ……………」

「ビシヨップか」

スワローテイルファンガイアもチェックメイトフォーのファンガ
イアであり相当の実力者だった。

「よくクウガの世界にまで」

「ご苦労なこつたな」

「そうですね」

キバットとタツロットも呆れていた、このスワローテイルファン
ガイアとは長い付き合いらしくよくこの世界にまでと。

「こ、この女がどうなってもいいのか!?!」
「えっ!?!」

パチュリーの腕を掴み剣を首筋に突き付けた。

「お決まりなことしてるよこの人!」
「芸が無いですねキバットさん!」
「そうだなツラ」
「ツラじゃない、桂だ」

コントをする二匹に対しバカにしているのかと感じ。

「貴様らぁ……………!」
「火符、アグニシャイン」
「なっ……………」

コントに付き合っていたからか、完全に隙が生まれパチュリーに
スペルカードを使わせてしまいその炎で吹き飛び壁に激突。

「ビショップ様! この女!」

ラットファンガイア達は襲い掛かろうとしたのだが流水に流され
てしまった、これもパチュリーによるもの。

「て、きゃーっ!」

小悪魔も巻き込まれて流されていった。

「大丈夫なんですか!?!」

「美鈴ぐらい丈夫だと思うから大丈夫よ、多分」

曖昧な答え、苦笑するしかなかった。

「というより派手ね、その姿」

「そうですか？ 黄金のキバの鎧と言われてますからね」

ファンガイア達そっちのけでゆるやかな話をしているがスワロー
テイルファンガイアはゆっくりと立ち上がり。

「私を無視するなあ!」

斬り掛かろうとしていたがザンバットソードで受け止め蹴り斬撃
を食らわしていく。

「グワアッ!?!」

「くそお……………水で流しやがって!」

ラットファンガイア達はグチグチと言っていると【TURN U
P】と聴こえてきて廊下の先を向くとブレイラウザーとキングラウ
ザーを持つブレイド・キングフォームが立っていた。

「え……………」

ブレイドの無双が始まるのだった。

「ハアアアッ！」

「らあああっ！」

図書館の二階の手すりに飛び移ったキバとスワローテイルファンガイア、踊るか如く剣と剣がぶつかり火花が散る。

「ビショップさんよ、奏歌を狙うの諦めたらどうだよ」

「そうですね、彼も王なんですよ？」

基本無口になるキバの代わりキバットとタツロットが喋る事が多い。

「王？ 鳴滝に騙され自分の世界に帰れなくなった者が」

どこからその事を聞いたのか、だが簡単に想像は付いていた、デスシヨッカーだろう。

「我々現ファンガイア社会を否定するものが集まりしもの達は全員デスシヨッカーに参加した」

やはり、キバは小さく呟き剣に力を入れていくと相手も力を入れて更に戦いは激しさを増していく。

「そして我々は手始めにもう一人のキングを拉致した」
「っ!」

その内容に大きく動揺し力が抜けザンバットソードを弾かれ発火性がある鱗粉を吐き掛けられ身体中に火花が散り手すりから足を滑らせ一階に落下し床に背中から落ちる。

「奏歌!」

パチュリーが駆け寄りスワローテイルファンガイアがいる場所を見上げる。

「おいてめえ! 鈴歌をどうするつもりだ!？」

「キバットバット二世もろとも洗脳して我々の外僕にしてやるっ!」

その言葉を聞いた瞬間、仮面の下、瞳孔が開き。

「うわああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「奏歌!」

「奏歌さん!」

キバットとタツロットは弾き飛ばされキバは翼龍のような姿の飛翔態、エンペラーバットとなってしまった。

「アレは!?!」

「エンペラーバット………想いが高ぶる事になれる姿だ………」
「ですけど奏歌さん、アレを完全には制御できてないんです!」

エンペラーバットは遠吠えを上げると飛び立ち一直線にスワロー

「奏歌〜！」

キバット達は急いで駆け寄り脈を確かめる、生きているのは判りホツと一息をつく。

【STRAIGHT FLASH】

2、3、4、5、6、7のラウズカードを使用して放つストレートフラッシュでラットファンガイアを次々と切り裂き撃破していった。

「これで終わり？」

「はい」

妖夢も残りの一体に刀を突き刺してラットファンガイアを倒した。

その日、奏歌は目覚める事無くキャッスルドランに運ばず紅魔館で過ごす事になった。

その夜。

「すっかり遅くなっちゃった」

咲一はアギト・グランドフォームとなりトルネイダー・スライダーモードに乗り空を駆けて帰っている途中だった。

「もう寝てるよな……………なら咲夜も寝てる……………今日でどのくらい成長してるかな」

仮面の下、ニヤニヤし始めた、霊夢もなかなか成長しているのかな？と思っていると。

「おーい、そののなんか変な金色、ちょっといいか？」

トルネイダー・スライダーモードの速度に付いてくる赤毛の青い和服のようなものを着て大鎌を持ったなかなかの胸を持った少女がいた。

「あ、こまつちゃん！」

「え？ その声咲一！？」

彼女の名前は小野塚小町^{おのづか こまち}、死神である。

「久しぶり〜」

「久しぶりはあたいの方だよ！ 一年半も行方暗ませてあたいも心配したんだから」

「ごめんごめん、と返し会話を続ける。

「その姿は？」

「かくかくしかじかでねえ」

「なるほどね」

「だけどこまっちゃんいつ見ても美人でピチピチだね」

「誉めても何も出ないよ」というかアンタには博麗の巫女がいるじや〜ん」

こんな風に話していると紅魔館が見えてきた。

「アンタも仮面ライダーなら近いうち四季様が来るかもしれないから」

「わかった、じゃあね〜」

二人は別れを告げ、アギトは紅魔館へ帰っていった。

第26話『仮面組曲・二人の黄金騎士』（後書き）

キバ編が始まると思いきや次回はユウスケの話が。

次回予告

バダー

「死んだか？」

ブウロ

「博麗霊夢だな、人間の中でかなりのやり手らしいからな」

ユウスケ

「魔理沙ちゃん来ないね」

霊夢

「あれ？ 賽銭箱が……………ない！？ おのれ魔理沙あああああ
「っ！！！！！！！！」

ユウスケ

「じゃあ香霖堂って所に行ってくるね」

幽香

「足は遅いのよね……………相性悪いわ」

クウガ

「トライチエイサーが……………！」

次回『大破』

第27話『大破』（前書き）

トライチエイサーが……………フラグは立ちましたから、そろそろ
ビートチエイサーが……………

第27話『大破』

ある夜、バイクのエンジン音が森に響き渡っていた。

その音の中に何かと激突していく生々しい音も混じっていた。

そのエンジン音を鳴らしていたバイクの後方には何人もの妖怪が倒れ怪我をしている者、死亡してしまった者もいた。

バイクのライダーは赤いマフラーを首に巻き黒いヘルメットを被り素顔を露出していなかった。

「こりゃ……………」

そこに騒ぎを嗅ぎつけた魔理沙がやってきて惨状を見て何が起きたかを把握しようと思いを巡らせる。

「コイツか……………」

ライダーに眼が入るとその者の姿は変わった、赤いマフラーは巻かれたままで緑色の体をしバッタみたいな姿でバイクも形状がゴツゴツとしたような物に変わっていた。

「おめえも怪人か！」

怪人……ゴ・バダー・バはバギブソンを方向転換し後方に前部を向かせると走りだす。

「来るのかよ……………！」

箒に跨り上昇し回避行動を取り見事バダーの襲撃は回避したのだが、森を越えて夜空を飛ぶ魔理沙、ミニ八卦炉を出してマスタース

パークで倒す、そう考えていたのだが。

「っ！ 何かまだ……………！」

見られているような気配を感じ振り向くと暗くてよく見えなかったが羽根を広げ飛ぶ影が一瞬だけ目に写り上を見上げると月を背にしたためよく見えていた。

「やべえ！」

その影は吹き矢の棒を口に付けており完全に狙われているのを察すると緊急回避と右に体を傾けると吹き矢は放たれた。

「しま……………うわっ!？」

左腕に何か貫通した感触がした、その刹那、血が吹き出していた、本当に貫通しておりその痛みでバランスを崩し筈から落ち森の中に消えていった。

「……………」

吹き矢を武器にするフクロウのグロンギ怪人、ゴ・ブウロ・グは木の枝に降り立つ。

「死んだか？」

「落ちたんだ、死んだだろう」

バダーもグロンギ怪人であり今回はこの二体は手を組み独自のゲルを行っていた。

「ジャラジとジャーザは？」

「リントの中に紛れている、ベミウは外の世界でクウガに殺された、ガメゴ、ジイノ、バベル、ガドルはドルドとダグバを迎え入れる為、まだ対談中だ」

ブウロは腕を組みバダーに現在、この幻想郷にいるグロンギが何をしているかを教え。

「ズやメ、又は？」

「この世界のアンノウンや仮面ライダーが殺していったため残りはガリマとゴオマだけだ」

「ゴオマの奴、よく生き残ってるな」

バダーは呆れたかのように喋るが。

「デスシヨツカーが別の世界のダグバのアマダムを回収し注入したからな」

この世界のグロンギはデスシヨツカーに加入しているようだった。

「さて、次のゲゲルは？」

「ノルマは達成している……………だが手応えがないなどの妖怪も」

だがこの二体は先ほど妖怪を襲い殺害しても欲が満たされておらず、ゲゲルが詰まらな過ぎて逆に欲求が溜まっていた。

「次のゲゲルまでには時間がある、その間にこの幻想郷で名高い妖怪と人間と遊ぶというのはどうだ？」

「いい考えだ、ならブウロはどいつを狙う？」

「博麗霊夢だな、人間の中でかなりのやり手らしいからな」

次にバダーの標的が誰になるのか問うと。

「俺は……………」

フツ、と笑うとアクセルを回し音を立てる。

「風見幽香だ」

二体は一旦体を休ませようとそれぞれの隠れ家へと戻った。

「あだだだ……………左腕が動かねえ……………」

魔理沙は木の枝がクッションになり大事には至らなかつたが撃ち抜かれた左腕からは大量に流血、体がだるくなっていく感じがしていた。

「アイツら……………霊夢と幽香をどうのって……………それに里に怪人が紛れてるだって、ざけんじゃねーよ……………この幻想郷で好き勝手させてたまるか」

左腕をぶら下げながら右手で木を支えにしゅっくりと歩き出す、重力に引かれて傷口から血が流れ下に零れ落ちていく。

「香霖の所に行くか……………寝てるだろうけど起きるだろ」

魔理沙は目的の場所へ向かい歩き暗い闇の中に消えていった。

そして夜が明け朝がやってきた。

「清く正しい射命丸です！」

「清く正しい城戸です！」

「朝からうっさいバカ二人！」

霊夢が境内を掃除していると文とシンジがやってきたのだ。

大声で挨拶するが覚醒してまだ間もなくそれはただの雑音にしか聞こえず怒鳴っていた。

「新聞の勧誘はお断りよ」

「なぜバレたのですか!？」

「そりゃ新聞社がやる事は記事を書くか取材するか個人経営なら勧誘ぐらいしかないからね」

勧誘がダメとなるとこれからどうするか考え込む、それでも新聞は置いたが。

「じゃあ何かネタになるようなことは？」
「ない」

取材に移るがそれも呆気なく即答される。

「じ、じゃあ咲一さんとはどこまで？」

「……………それを聞かれると答えたくなくなる……………」

「惚気話を永遠に聞かされそうなので遠慮します」

チツ、と舌打ちが響いたが気にせず。

「咲一さん以外のネタもちゃんとありますよねえ？」
「ない」

ないの一点張りだったが文は不適な笑みを浮かべておりカバンから何枚かの写真を出した。

「こ、これは！」

咲一の農作業中やら変身ポーズやら仕事中の写真だった、中には風呂上がりで腰にバスタオル巻いたのも。

「霊夢さんが新聞取ってくればこれを差し上げようと思ったのですが」

「文！ それ盗撮じゃ！」

「いーえ、咲一さんからは許可取りましたよ？ それに咲一さんは文々。新聞取ってくれてるのにその恋人であるあなたが取ってくれないなんて」

写真をヒラヒラして見せびらかしてる。

次は何が起きたのかと思いながら茂みに入ると。

「賽銭箱が真つ二つに……………」

その賽銭箱は真つ二つに割れておりほとんどない中身が本当に無くなっていた。

「海東！」

「だから違つて！」

「霊夢さん！ 賽銭箱の中身だと思われる物が縁側の下に！」

文が縁側の下で現金が入った袋を見付けて持ち出す。

「一体誰がこんな事を！」

シンジも何か違和感を感じていた、何か足りない。

「……………ユウスケは？」

ユウスケがいないのだ、誰も疑いはしなかった、彼の事を知っていれば。

「宴会の準備もあるのに朝からいないと思つたら……………まさかユウスケが!？」

お兄ちゃんと呼ばないのはそれほど怒っているからだ。

縁側に集まっていると境内に何か大きな物が置かれる音が聞こえてすぐにそっちに行く。

「あ、みんなどうかした？」

ユウスケが帰ってきていた、賽銭箱と同じ形の箱を隣に置いて。

「どうかした？　じゃないわよ！」

賽銭箱の事を問い質すと困ったように頭を掻いていた。

「だってあの賽銭箱、穴が空いてたからさ、霊夢やキバーラが寝た後にこっそりと抜け出して前にあった賽銭箱からお賽銭抜き出して袋に入れて縁側に隠してから夜中から今に掛けて新しい賽銭箱を作ってた」

隣に置いた真新しい賽銭箱に手を置いてニコニコしてると。

「紛らわしい真似するなあ！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

それでも夢想封印は食らうのだった。

「うーん、新しい賽銭箱いいわね」

その後、ユウスケが作った賽銭箱に元からあったお賽銭を入れ、定位置に置いてその光景を眺めていた。

「ユウスケ大丈夫？」

「なんとか……………」

縁側で伸びていた、今日は宴会の準備いいかなと考え始めていたが何か違和感がある、今度はユウスケが感じ始めていた。

「魔理沙ちゃん来てないね」

「そつえば」

寶錢箱を眺めるのに飽きた霊夢が縁側に来て言葉を返した。

「いるとしたら香霖堂かうりんどうですかね？」

聞き慣れない名前だと思いシンジも首を傾げていた。

「魔法の森と里の間にあるお店ですよ」

「よくその商品盗むのよあの子、知り合いのお店だからって」

窃盗罪で捕まるとか考えたがこの幻想郷では問題ない。

「外の世界の物も売ってるのよ、私もよく行くし」

それを聞くと脳裏にペガサスボウガンが浮かんでいた、棒や剣に変わる物はあるが銃はないなと考え。

「行ってみよーかな」

その一言でユウスケは香霖堂へ行く事に決めた、シンジは他で取材するとかで別行動、文は新聞配達しんぶんぱいとうの契約等々を、海東は即になかった。

そしてユウスケはトライチェイサーを駆るのだ、愛車の異変に気

付きつつ。

「やっぱり音が変だな……………」

そうぼやきつつ霊夢と文から聞いた場所に行き里から出てから森の前に立つ一件の建物を見つけた、看板に香霖堂と書かれているため。

「ここかあ」

変な音が鳴るトライチエイサーを停車させ降りるとヘルメットを取りハンドルに掛け店内に足を踏み入れた。

「いらっしやい」

店の奥にはメガネを掛けた銀髪っぽい髪の毛の男が座っていた。

「何をお探しかな？」

「えっと……………オモチャでもいいので拳銃はないでしょうか？」

指で拳銃の形を作り分かりやすく説明すると男はあーあ、と後ろに置いてあつた箱の中に手を入れて取り出した物は。

「これでいいかな？」

ブルーで透き通り中には細長いポンプのような物が見えていた、水鉄砲のようだ。

「それください」

ユウスケは一応金はある、霊夢からもらっているため、財布を出しチャックを開け値段を聞く、安いと思いつながらその値段に合った金額を出し買い物を終了させる。

「で、この水を打ち出すオモチヤで何を？」

大の大人が水鉄砲を買う、彼の目にはとても子供と遊ぶからという風には見えていなかった。

「それで最近騒がしている怪人と戦うのかい？」

当たりである、ユウスケはどうしたものか考えていたが。

「まあいいよ、変なこと聞いて悪かった」

「いえいえ、大の大人が水鉄砲ですから」

「僕は森近霖之助もりちか りんのすけ、この香霖堂の店主だよ」

ユウスケも自分の名前を紹介すると奥の部屋から見慣れた少女が出てきた。

「魔理沙ちゃん！」

その頃、博麗神社。

「これで契約成立です！」

「なんか余計な出費が………」

今になり余計な事をしたと感じ始めていたが彼氏の写真には変えられない、そう思い込み無理やり納得させていた。

「これからもぶんぶんま………霊夢さん！」

「えっ!?!」

いきなり文が突っ込んできて抱き付いた形で押し出され倒れ込むと地面に火花が散る。

「な、何!?!」

空を見上げると黒い影が見えていた、それはブウロだった。

「ギリギリでした………次来ます!」

ブウロは筒に口を付け狙い射とうとしていたが霊夢と文は同時に飛び上がり狙いを反らす。

「へん………意味ないか」

ナイトは基本接近戦、ブウ口の射撃には苦戦を強いられると考え
デッキを仕舞いスペルカードで戦う事にした。

「気付いたか、それにあの天狗、速いな、あの白黒より……………」

そこにもう一人標的ができたのに喜びを感じつつお札による弾幕
を掻い潜り狙いを定め狙撃しようと構える。

「嫌な風ね」

太陽の焔、幽香は吹いた風を肌で感じ呟いていた。

「……………ユウスケ……………」

静かにその名前を口に出す。

「危なっかしいのよね……………だから放っておけない……………」

歩いていると突然立ち止まる、背後からバイクのエンジン音が響
いてきた。

「どうしてこうも変な予感だけは当たるのかしら……………空気を
読めないものなのかしら」

振り向くとそこにはバギブソンに乗ったバダーが、その後ろは向

日葵の畑をバイクで蹂躪した跡が。

「……………覚悟できてるわよね？」

顔を下に向け髪の毛で表情が隠れた、表情は見えない、だが口は笑っていた、楽しいからではなく怒りにより。

「すぐに殺してあげるわよ、死んで、詫びなさい、この花達に」

顔を上げた、その顔は笑っていた、だがその笑顔は誰もが恐怖を覚える黒い笑顔だった、バダーは動揺する事なくアクセルを回しまた向日葵を踏み潰しながら走りだした。

「なんで彼にその事を教えたんだ？」

香霖堂、店内にはユウスケは居なかった、代わりに左腕を布で固定した魔理沙が、昨夜目指したのはこの店だったのだ。

「アイツに言っておけばいいのさ」

「水鉄砲で怪人と戦おうとしているのか？」

「ああ、その水鉄砲が化けるんだぜ、風の力で射抜く銃に」

魔理沙はニツと笑いながらそう言う。

「彼は何者なんだ？ ただの外来人じゃないだろ？」

「ああ、アイツは……………」

「仮面ライダークウガだぜ」

「変身！」

トライチェイサーを駆るユウスケはクウガ・マイティフォームに変身、アクセルを回し更に加速させる。

「霊符、む……………」

スペルカードを使用しようとしたら見事それは射ち抜かれ夢想封印は不発。

「ちよつ……………スペルカード射ち抜くなんて……………」

「彼等にはスペルカードルールなんてないに等しいんですよ」

霊夢は大きく舌打ちをしブウ口はまた狙撃しようとして筒を口に付け矢を吹き出そうとしたのだが大きな音が響き注意はそれに向き、境内に上がってきたのは。

「超変身！」

トライチエイサーに跨ったクウガだった、クウガは相手が飛ぶのを確認するとペガサス、そして身体中に電気が走り金色のライン流れるライジングペガサスとなり先ほど購入した水鉄砲を持ち金色のブレードが二枚付いたライジングペガサスボウガンに変化しレバーを引く。

「ユウスケさん！」

「お兄ちゃん！」

「二人共降りて！」

その言葉に降下するとブウロはここでクウガを倒すチャンスと考え狙いを変えたのだが遅かった。

ライジングペガサスボウガンの銃口はブウロを向いておりクウガは躊躇いもなく引き金を引いた！

銃口から空気の弾が三発連発されブウロを射ち抜いた！

「グゴオツ！？」

ブウロの体に封印のマークが現れ、落下する前に爆発した、その爆発はやはり大きな物で屋根の瓦が爆風で吹き飛ぶ程で霊夢と文も危うく吹き飛ばされ掛けた。

「くっ」

トライチエイサーを止めようとしたが間に合わず賽銭箱に激突し作ったばっかの賽銭箱がバラバラになってしまった。

「賽銭箱が！？」

だが賽銭箱は眼中に入っていないかった、今は誰より大事な人しか頭に入っていないかった。

トライチェイサーを回転させ後ろを向かせると走りだし階段を降りていった。

「ユウスケさん……………？」

「賽銭箱が……………だけど一体……………」

そこで浮かんだのがもう一体怪人がいる。

「私、足は遅い方なのよね……………」

毒づくバダーはバギブソンで体当たりを仕掛けそれを避ける、先ほどから防戦一方なのだ、幽香は足が遅くバイクに乗り素早いバダーとは相性は悪い。

「くそ……………」

いつもの日傘は持つておりマスタースパークを放とうと身構えるがすぐに突撃してくるため避けなければならない。

そしてバダーは考えているのかそれを向日葵畑の中で、そっちなも気が取られてしまい集中力は更に激減。

「ふざけんじゃ……………」

そろそろ細く、根っこよりも細い糸が伸びきり切れかけていた、

やられるよりやる方が好きな幽香にとっては屈辱以外の何物でもなかったからだ。

いったん立ち止まり日傘を迫りくるバダーに向け太い光線が放たれた、放たれた直後にはバダーはすぐ目の前に迫っていたが二人を光は包み、強い衝撃により花びらが舞い上がった。

光が収まると日傘はボロボロで穴が空いており位置が入れ代わり背中合わせの状態だった。

「これはいったわね……………」

いくらプライドが高い彼女でも膝を地面に付いた、その右足はあらぬ方向に向いていた、タイヤ痕があるためバギブソンにやられたのだろう。

「最悪ね……………」

バダーは方向転換をし走りだしそのまま弾き飛ばそうとしていたのだがそこに風が吹いた、気持ちがいい風だった、先ほど感じた風より、バダーはその風を避けるためにバギブソンを停車させた。

「ユウスケ……………！」

向かってきたのはクウガだった、一度マイティフォームに戻りそれからもう一度ライジングペガサスフォームになりライジングペガサスボウガンの引き金を引き弾丸を放ったがバダーの直感により不

発に、そしてマイティフォームに戻った。

「幽香さん！」

クウガはやはり敵が眼中に入っておらず彼女の名前を叫んだが。

「今は敵に集中しなさい！」

その言葉にはっとさせられるとバダーが迫っていた、それを避け、後ろへ方向を変えそれを追い掛け走りだそうとしたのだができなかった。

「ちっ」

クウガは道を走ってバダーを追い掛けた、間違っても畑に入らないように。

「ユウスケ……………」

日傘を閉じてそれを杖代わりにし立ち上がり痛む右足を引き摺りながら歩きます。

クウガは走っていてもバダーに追い付けず、更にはトライチエイサーから発する音が酷くなる一方でバダーはそれを狙っているようにも見えていた。

「保ってくれよ……………」

マフラーの部分から煙が上がっていた、限界が近いのかもしれない、装甲も捲れ痛々しさを表現しているようだった。

（あねさん……………！）

トライチエイサーを預け、以前想っていた女性の名前を心中で呟く、願いを込めて。

太陽の畑を出ると目の前にバダーが、バギブソンは減速し後輪を上げ後輪キックを繰り出してくるがそれを反応が鈍くなってきたハンドルを切りすれすれで避ける、後ろに取り付かれてしまった、どうにか距離を取ろうと加速させようとアクセルを回した、だが。

「アクセルが……………！」

アクセルを回しても加速する事はなくなり逆に減速してきた、とうとう限界を越え機能が停止してしまった。

後ろのバダーは加速し体当たりしようとするがそれは避け、そして停車、アクセルを回すが動く事は無かった。

「動け……………動け……………動けよ！」

何回も回すが反応はなかった。

トライチエイサーから降りると目の前にバギブソンが迫っており横っ飛びで躲す。

「ぐうっ！」

バダーはバギブソンで襲い掛かる、前輪で踏み潰そうと、クウガ

はそれを走って逃げるが相手はバイクのためすぐに追い付かれる。

「超変身！」

ドラゴンフォームとなり少しはましな動きになり距離は少しだけだが離れていき落ちていた木の枝を拾い上げドラゴンロッドに変え振り回しながら走りだしバダーに攻撃を直撃させようと試みる。

「ハアアアアッ！！！！！」

バギブソンにぶつかるとすれすれで飛び上がりスプラッシュドラゴンを炸裂しドラゴンロッドはすれ違う際にバダーの胸に直撃する。

「ぐおおっ！？」

急停車させると当たった箇所に封印のマークが浮かび上がりバダーは苦痛の声を上げるのだが。

「ぐううう……………ハアッ！」

クウガは激しく動揺した、封印のマークが消えたのだ、確かに必殺技は決まったはず、だが考えている暇はなかった、相手は方向転換し走りだしてきた。

チャンスを見計らって必殺技を叩き込もうと考える、だが気付いてはいなかった、愛車が最後の力を振り絞ろうとしているのに。

「なんでトライチェイサーに乗ってないのよ……………」

やっと幽香は戦いが見える位置に移動し今の状況を把握しようとする。

唇を噛み締め全身に力を入れると電気が走り金色のラインが入り
アークルはライジング化しドラゴンロッドに金の刃が付きライジン
グドラゴンロッドに、クウガはライジングドラゴンフォームに変身
を遂げた。

「うおおおおおおおつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

バダーが立ち上がった瞬間飛び上がり体を丸め一回転し目の前に
立ち横に回転しライジングドラゴンロッドの刃を脇腹に突き付けた。

「グワアアアツ!!!!!!!!!!?」

通常の必殺技よりライジング化の必殺技は効いており大きな声を
上げ突き付けられた刃を掴み引き離そうとするのだが思った以上に
力は強く。

「うおおおおおおりやあああああああああつ!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

また横に、ハンマー投げの要領で回転しバダーを遠くへ、爆発が
起きても被害が少ない方向へ投げ飛ばした。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!?」

投げ飛ばされたバダーが丘の向こう側に消えると爆発、茸雲が舞
い上がりその爆発の凄まじさを物語っていた。

「……………」

クウガは無意識の内に変身を解いていた、ユウスケは振り向いてゆっくりと歩き、少しすると止まってしゃがみトライチェイサーの残骸を触る。

「よく……………守った……………な……………」

顔を下に向けていたため表情が見えなかった、だがわかるのは泣いていることだ、残骸に水滴がぼたぼたと零れ落ちていく。

「ユウスケ……………」

名前を呼ぶ事しかできなかった、どう声を掛けていいのかわからないからだ。

「……………ちゃんとコイツの悲鳴、気付けていれば……………」

座り込み空を見上げた、その目には涙が溜まっていた。

「ユウスケ、ごめんなさい」

「謝らなくて……………いいよ、謝らないといけないのは俺だから……………」

それから、二人は残骸をただじっと見ていた。

第27話『大破』（後書き）

バダーをライジングドラゴンで倒させました、バダーをドラゴンで倒して欲しかった、そう思ってたなあ。

次回予告

映姫

「今幻想郷を騒がしている怪人について話が」

幽香

「ユウスケから言わせるわよ、じゃないと負けた気がするじゃない」

にとり

「この設計図に書いてある名前って……」

早苗

「八代さん」

バベル

「その強さならいいゲゲルができそつだ」

第28話 『喪失』 (前書き)

おそらく今年最後、来年もよろしくお願いします。

第28話 『喪失』

「……………」

前回、かろうじてバダーを倒したユウスケ、だがトライチエイサーが犠牲となり落ち込み、博麗神社の縁側で空をただじっと見ていた。

「お兄ちゃん」

霊夢に話し掛けられても反応はなく空を見上げたままだった。

どう接したらいいか困っていると境内から足音が聞こえてきた、参拝客ではないと思いつつ客を迎えるためにその場を後にし境内へ行くと。

「死神に閻魔様じゃない」

その二人の客を見るとめんどくさそうな態度になる、本当にめんどくさい客だからだ。

「おはようございます、博麗の巫女」

「おっはよー」

片方は小町、そしてもう一人、緑の髪で閻魔大王が身に付けてそうな衣服を着た女性、四季映姫しきえいぎが訪れてきた。

映姫は本物の閻魔で地獄で三途の川を渡ってきた幽霊を裁いている、休暇の日は幻想郷に出歩いて誰かを説教をしている。

何かよう？、やはり態度は変わらずめんどくさそうな態度で対応する。

「今幻想郷を騒がしている怪人について話が」

地獄の方でも怪人の事は知れ渡っており様々な被害が出ており死人も増え、裁判に掛ける幽霊が増えているためこれは異常だと思いい神社に来たようだった。

「それなら紫に聞けばいいじゃない」

仮面ライダーが来ているのは紫が関係している、一魔もそうであるためユウスケも紫の手により連れてこられた可能性もあるため自分より彼女に聞いた方がいいと勧めたが。

「あいにく、出向いたのですが留守だったので最初の怪人の被害にあつたここに来たのです」

納得した、それならここが一番だからだ。

「なのでここにいる仮面ライダーに話をしたいのですが」

「あー……………そう、だけど今はちゃんと話せないわよ」

疑問符が無かったのは話しても今は無駄、そういう意味が込められていた。

「どういう意味でしょ……………あれ？ 小町？」

気付いたら小町は居らず縁側に行くと勝手にお茶を淹れて飲んでくつろいでる小町が座っておりユウスケは気付く素振りも見せず上の空。

「あの上の空になってるのが小野寺ユウスケ、仮面ライダークウガよ」

「確かにアレでは話が通じませんね……………」

何があつたか問うとバイクじゃわからないと考え三日前に相棒を失った、それを言うと映姫も納得した。

「あの花は？」

ユウスケの隣に置いてある二つの植木鉢から咲いた花が目に入った。

「あれはね……………そろそろ来るかもしれないわね」

そしてまた、境内を歩く足音が聞こえだんだん縁側の方へ近づいていく。

「風見幽香……………」

「あら、閻魔様じゃない」

幽香だった、手には花が咲いてる植木鉢を持っていた。

「今日もご苦労様ね」

「暇なだけよ」

植木鉢をユウスケの隣に置くのだが気付かれず。

「三日連続ね、目の前通つても気付かないなんて」

「あたいが隣に座つても気付かないからね」

この会話も耳に入っていないのではと疑惑も出るがまさしくその通り、もし正気に戻ったら映姫と小町に誰！？、と反応するだろう。

「はぁ……………」

突然溜め息を吐いた幽香。

「どうかしたの？」

「何でもないわ、ただどうやってユウスケを虐めようか考えただけよ」

そうではないのが分かるのは霊夢だけ、後の二人はその発言に微妙な表情をした。

「こんな落ち込んでる奴まで……………どんだけDSなの？」

幽香は少し笑いながらせんべいを取ったその時。

「なわけないわよ、ただ嫉妬してるだけよ」

霊夢の言葉に動揺したのかせんべいを砕いてしまった。

「え、な、ちょ、そなわけ」

かなり焦っておりいつものプライドが高い彼女はどこにもいなかった、一人の女性だった。

「ユウスケがトライチェイサーべったりでやきもち妬いてるだけよ」「へえ、あの四季のフラワーマスターがやきもち妬く事があるん

だ、植物以外で」

小町にもからかわれ顔は真っ赤になり掛けていた。

「あ、え……………あー！」

急に声を上げユウスケの腕を掴んだ、それにはさすがに気付き。

「幽香さん？　って誰！？」

映姫と小町には予想通りの反応を示すと腕を引っ張られ立ち上がる。

「買い物行くわよ！　荷物持ちしてくれるわよね！？」

なぜそんなに声が大きいのかわからないが質問に頷いて返すと腕を引っ張られその場から立ち去った。

「あらら、怒らせたみたいですねえ」

「風見幽香もあんなところがあるんですね」

入れ替わるようにして箱一杯に詰めた野菜を持ってきた咲一がやってきた。

「ユウスケとゆうかりん、どうしたの？　ってえーきちちゃん！」

「咲一！」

「そう言えば帰って来てたんだよねえ」

やはり閻魔も知り合いの咲一、というよりは幻想郷で彼を知らない者はいない。

「からかってやっただけよ」

「ゆうかりん見栄っ張りだから気持ちに素直じゃ……………あ、これ今日採れた野菜」

「ありがとう」

縁側に置くと上がって居間に入り急須と湯飲みを持ってきた。

「勝手に上がって人ん家の急須と湯飲み使っな」

小町にも言っている、咲一はまあまあと楽観的でお茶を淹れた、三つと小町の飲み終えた湯飲みにも。

「いいじゃん溜り場なんだから」

「よかぁない！」

映姫は代わりに咲一から話を聞く事にしたのだった。

「痛い痛い！ 幽香さん力強い！」

手をなんとか振り払った、普通の人間なら押し折られているのだがユウスケも人間の体ではなくなってきたためあざが付く程度。
「悪かったわね」

素直に謝る気はないようだった、三日連続無視され続けたからだろっ。

「ふう……………まあいいですよ」

怒っていたはず、だがもう許しており微笑みながら言う。

「……………」

「どうかしました？」

いつもならそれでいいのよ、と言ってくるはず、疑問に思い聞いてみる。

「やっとその笑顔を見れたと思ってね」

「あ、そうですね？」

「ええ……………」

プライドが高くガキ大将みたいでお前のものは俺のものリズムの彼女に取っては悔しいようだった。

「とりあえず買い物付き合ってもらっわよ、いいわよね？」

「もちろん」

またニツと笑うとその笑顔に少しだけ見惚れていたがすぐに前を向いて照れを隠した。

「なんで後ろを向いてくれないんですか？」

うるさい、その一言で片付けられ幽香が前、ユウスケが後ろで並んで歩く、先頭に立った彼女の顔は赤かった。

(こんな恥ずかしい表情見せられないわよ……………バカ)

なぜ怒っている、無意識のユウスケが悪いが直接的怒らせたわけでもないためわからず疑問符を頭の上に三つ扇状に広げながら首を傾げていた。

10分程度する里に到着、それまでには表情は元に戻っていた。

「それでどこに？」

「最近ここにできた花屋が見たいからまずそこよ」

ユウスケはただ後ろを着いてくるだけだったが。

「もういいわよ隣に来ても」

振り向いて腕を掴み引つ張って隣に来させる。

「さっきなんで怒っていたんですか？」

「あなたの心に聞きなさい」

気付いたら手を握られており傍から見ればデートしているようにも見えた。

「んー？」

また首を傾げた、一つ一つの動作が幽香には可愛く見えていた。

「あー、もう、可愛いわね」

「可愛いって」

男から考えれば可愛いではなくカッコいいと言ってもらいようだ。

「着いたわよ」

目的の花屋に到着、店主の女性はまさか四季のフラワーマスターと呼ばれる幽香が来るとは思わず緊張する。

「ふーん」

花を眺めている彼女は花が好きで普通の女性に見えていた、今度はユウスケが見惚れており先ほどのような上の空状態となっていた。

「これをもらおうかしら」

指を差したのは淡紅色、青紫、白の大きな頭花を付けた花だった。

「あ、はい！」

店主も緊張していたため慌てて対応する、すると。

「植木鉢から出してないのね」

花屋ならたいしては切って水に付けるがここは土から出さずそのままだった。

「お客様もいろいろな方がいますのでその方に合わせて花束にしたりと」

訳を聞くと微笑み。

「これから花を大事にきなさいよ、また来るから」

誉め言葉が返ってきた、つまりこの花を気に入ったということ。

「あ、ありがとうございますー！」

もちろん幽香が土から出すような事をするわけがないため植木鉢のまま買い花屋を後にした。

「これはアスターっていう花なのよ」

「なんでそれを？」

名前を教えるのも不思議に思っていた。

「花言葉はあなたの愛が心配、そして……………」

間を空け、幽香はユウスケの顔を見て。

「私の愛はあなたのためより深い、という意味よ」

そのアスターが咲いた植木鉢をユウスケに渡す。

「これから言う事よく覚えておきなさいよ、私はあなたの気持ちに気付いてる、私もあなたと同じ気持ちよ、だけど私から言わないわよ、そんなのプライドが許さないもの、わかった？」

半分自分から言っているようにも聞こえるが、ウインクを混じらせ言い返事を待った。

「……………わかりました、だけど……………もう少し待ってくださいか？」

「待つのは嫌いよ、だけど待ってあげるわよ、あなたのそんな引きずったままの気持ちで言われてもぶん殴って振るわよ」

頭を掻きながら苦笑しつつ善処します、と返した。

「だから、待たせないでよ、死ぬのものダメよ？」

不安に満ちていた、仮面ライダーなら戦って死ぬかもしれないからだ。

「死にませんよ、俺は」

「なら敬語とさん付け禁止よ、いい？」

それには戸惑う、明らかに彼女の方が年上、だが傍から見ればあまり年が変わらないカップルにも見える。

「……………わかった、幽香ちゃん」

「今度はちゃん……………まあいいわよ、ちゃんと吹っ切った後にしましよう」

今回はこのぐらいでいいだろうと思いつつ気がない満面の笑顔を浮かべた。

「もう少し待っててね」

何かが折れた音が響いた、バベルの腕を掴んでいた腕は落ち、店主の命は絶えた。

事切れた店主だった体を投げ捨て棚に激突し無残な姿と成り果てた。

「っ！」

ユウスケが駆け付けた、だが時はすでに遅く後の祭りでその場には立ったバベルと倒れた店主が、これを見ただけでどうなったかわかった。

「そんな……………」

バベルは身に付けていた飾りを取り三股の槍に変化させ顔を下に向け表情が見えなくなったユウスケを狙う。

「許さない……………」

その言葉を聞くと立ち止まり首を傾げてからバカにしたように鼻で笑うがそれにより何かが切れた。

「絶対に……………」

腰に手を添えるとアークルが現れた、光ってはいた、だが一瞬だけ黒く光った、ユウスケの憎しみを表すかのように。

「クウガ……………」

顔を上げるとその表情は鬼を表したかのような顔だった、一瞬で右腕を左斜めに伸ばしゆっくり右に動かす。

り、しゃがみこんだクウガにハンマーを振り上げ直撃させバベルから見て前へ吹き飛ばす。

「くっ……くっ……」

倒れ込んだクウガに何度もハンマーを叩き付けていく。

「どうした？ 先までの勢いは？」

言葉を挟ませながら攻撃を続けクウガの口からは血が吹き出し流れており視界が虚ろになっていた。

（絶対に……負けるか……あの人が気に入ったものを壊した……お前なんか……）

拳を握り締めると身体中に電気が走り銀色の鎧は紫、そして金のラインが流れアマダムは金に輝きライジンググアークルとなったライジングタイタンフォームに変身しタイタンアーマーは元に戻りバベルのハンマーの威力を無効化させた。

「何!？」

ハンマーを掴みゆっくりと立ち上がり紫の眼でバベルを睨む。

「っ……」

それに怯むと殴り飛ばされハンマーが奪われると金の刃が付いたライジングタイタンソードに変化しゆっくりと歩きだしバベルとの距離を詰めていくがバベルはクウガの怒気に怯え後ろへ下がっていく。

「ユウスケ……………あつ」

幽香が駆け付け先にその名を呟くが花屋の店主に気付きすぐに駆け寄るが息がないのを確認し散乱しバベルに踏み潰された花を見た。

「くっ……………」

憎しみを露にしていたがそれよりも気になったのだがクウガから放たれる怒気だった。

バベルは走って逃げていたが足が遅いはずでゆっくり歩いているクウガに距離を詰められていた。

「……………」

無言だった、だがそれにより恐怖感が増していた。だんだんと里から離れていき深い森の中。

「ぐわっ!?!」

バベルは木に激突し振り向くとクウガが目の前に立って睨み付けていた、ガタガタと震え恐怖を表し、言葉を放とうとしたが声が出ず。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

のは。

「ユウ……………スケ……………」

金の血管のような模様が入った黒い鎧、四本の角のクウガだった、クウガはそれに気付き振り向くとその眼は憎しみを表す黒い眼だったが糸が切れた人形のように崩れ落ち倒れると変身が解け全身が傷だらけの血を流したユウスケがいた。

「ユウスケ！」

急いで駆け寄り抱き起こす、頭からも血を流しており目から血に紛れ涙が流れていた。

「早苗〜！」

守矢神社、にとりが一台の黒いトライチェイサーに似たバイクを押して訪れてきた。

「どうしたんですそのバイク!？」

「香霖堂で買った設計図とトライチェイサーの残骸を元にして作ったバイク、その名もビートチェイサー2000！ 私の自信作だよ！」

ビートチェイサーをまじまじと見る早苗、するとその設計図を出すにとり。

「それでさ、このビートチェイサーを設計した人の名前が書いてあるんだけど、早苗知らない？」

「どれどれ」

受け取りその設計図に書かれた名前を見ると驚き見開いた。

「八代さん……………！」

そこには「責任者 八代藍」とはっきりと書かれていたのだった。

第28話『喪失』（後書き）

かなりキレました今回は、ゴウラムは砂にはなりません、違う世界だと性質も違うと思うので。

次回予告

幽香

「どつすればいいかわからないもの」

タクミ

「おい！ あのグロンギは！？」

妹紅

「意味がわからない死に方するなら自分から死んだ方がマシだった」

慧音

「アイツは私の教え子だった……………」

ジャラジ

「君たちが怯えれば怯えるほど楽しいんだ、ゲゲルは」

タクミ

「てめえはアイツの夢を台無しにした、絶対に許さねえ」

次回『防人』

第28・5話『初夢』（前書き）

クウガと言えばこれだと思い、初夢を投稿させていただき
ます。因みに時系列は大晦日なので、もしくはパラレルで。

第28・5話『初夢』

「今日はいつもよりいっぱい来てるね、妖怪が」

「お兄ちゃん、うるさい」

博麗神社、大晦日で新年を迎えるまで後30分と迫っており境内には初詣に参拝客、主に妖怪が列を作り待っていた。

「だけどさ、時系列まだ夏だけどいいの？」

「メタな発言やめない？」

ユウスケは袴を着ていかにも神主にも見える格好をしていた、霊夢の手伝いである。

「まあいいわ、そろそろよ」

腕時計を見ると後15分で今年が終わる。

「“幽香”、来るかな？」

「来るわよ、お兄ちゃんいるんだから、だからってここでやらないですよ？」

「何を？」

わからないように説明するのがめんどくさいためもういいで片付けた。

「総真は鐘を鳴らす準備はできてるかしら？」

「アイツの事だから大丈夫だろ」

何気ない話をしているとまた腕時計を見ると残り3分になった。

「そろそろだよ」

「ええ」

そして残り30秒、15秒とカウントダウンしていく。

『10！ 9！ 8！ 7！ 6！ 5！ 4！ 3！ 2！ 1』

声に出しカウントしついに。

『ゴーン』

除夜の鐘が響いた、新年を迎えたのだ。

「あけましておめでとう、今年もよろしくね霊夢ちゃん」

「私こそよろしくねお兄ちゃん」

迎えたと同時に参拝が始まりどんどん賽銭箱に金が投げ込まれていく。

「大晦日はいいね！ 賽銭箱が貯まるわよ！」

金の亡者にも見える発言をするがあながち間違えではない。

「おみくじはこちらですよー」

葬がおみくじを販売を担当していた。

「まだかな、幽香」

そして夜が更け初日の出が昇り朝となる。

「ふわあ、よく寝た」

夜の初詣が終わり元日、後の三ヶ日も参拝はある、だから寝れる時に寝ないと、最終日は新年会として宴会が開かれる、体力を十分に蓄えておかなければ。

「昨日来なかったな、幽香」

そう、幽香が来なかったのだ、来ると約束したらしいのだが。

「具合が悪いのかな？」

神主の格好をし境内を掃除していると人や妖怪がいない時に参拝客が来る、おみくじが欲しいと言えばそれに対応する。

「ふわあ、あけおめユウスケ」

キバーラがフラフラしながら飛んで頭の上に座った。

「あけおめキバーラ」

すると参拝客がやってきた。

「よ、ユウスケ」

「タクミに慧音、あけましておめでとう」

「今年もよろしくな小野寺」

始めにタクミと慧音が訪れてきた。

「二人はいつも仲がいいね」

「うるせー」

「タクミ……………」

冷めてどうでもいい態度を見せたためタクミの肩を掴み頭を振り上げ頭突きを食らわした。

「あだあーっ!?!」

今年最初の頭突き、悶え痛みが引くと。

「慧音えーっ!」

「私は……………本気なんだぞ?」

それを言われてしまい黙り込みお参りすんぞ、と言い賽銭箱に投げ入れ手を合わせ願い事をする。

「二人は何をお願いしたの?」

「私は皆がもつと歴史に興味を持つようにだ」

慧音らしい願いだなと思いつきにタクミに聞く。

「……………」

やはり黙りを決め込むのかと思いつにか言わせよつと策を練る、
慧音も気になるらしい。

「俺は……………」

ようやく口が開き何を願ったのかをやっと聞ける。

「慧音が幸せでいられますように……………」

その願い事に顔を真っ赤にするタクミ、その本人も真っ赤だった。

「い、行くぞタクミ」

「あ、ああ」

境内を後にしようとして鳥居を潜り気付けば腕を組んで歩いてきた。

「熱々ね〜」

「だね」

次の参拝客は誰かと思いつながら待っているとすぐにやってきた。

「ようユウスケ」

「妹紅におっさん」

「おっさん言うな!」

銃志郎とゴウリュウガン、妹紅だった。

【新年あけましておめでとうだ小野寺】

「ゴウリュウガンもおめでとう」

二人も初詣を済まし何を願ったかを聞いてみた。

「あたしは……今年こそは去年より多く輝夜を殺せるようにだな」
「死なないんだから何回ぴちゅるつもりよ」

「死なないため殺されても外傷だけで済む妹紅は同じ不死の蓬萊山ほうらいさん輝夜かぐやと殺し合いをしている、何でも父親を誑かした恨みとかで。」

「おっさんは？」

「だからな……俺は今年こそおっさんと呼ばれないようにする事だ」

その願い事に呆れるユウスケとキバーラだが。

「おっさん……なんだよ、それだけかよ」

「妹紅？」

【不動が鈍感の確率、120%】

訳がわからないまま銃志郎は妹紅と帰っていった。

「おっさん鈍感だな」

またすぐに客がやってきた、今度は奏歌とパチュリー、キバット、タツロツトだった。

「ここまで連れてきてほしいって私が頼んだの」

頼んでここに一緒に、実質デートに近い。

「奏歌、おめーの願い事はなんだー？」

「みんなの音楽を守るようにだね」

「私はいつも通り本に囲まれて生活するよ」

特に話もせず去っていった、付き合いが悪いのではなく早く二人きりになりたかったからなのは余談である。

「清く正しい射命丸です！ あけましておめでとございませう！
今年も文々。新聞をよろしく願います！」

文とシンジがやってきた、勧誘とかではなくちゃんと初詣に。

「あけましておめでと、文ちゃん、シンジ」

「あけおめ」

お参りを済ませ恒例の何を願ったか聞く事に。

「私は新聞がもっと売れますようにです」

「俺も同じかな？ 文ちゃんの新聞おもしろいし」

二人は正月のネタを探しに去っていった。

「新年ハッピーバースデー！」

「エイジさん！？」

次はエイジと白蓮だった、エイジに至っては訳がわからない挨拶の仕方だった。

「白蓮さん、命蓮寺は？」

命蓮寺でもお参りできるがなぜここに来たのか聞くと。

「結界を管理してる幻想郷の中心とも言える博麗神社でお参りしたらご利益があると思いましたが、それにまだ命蓮寺は修理中です」

納得しユウスケはそれ以上聞かなかった。

二人はお参りを済ませると。

「私は皆がもっと平等の立ち位置になりますように」

「俺はこの幻想郷にもっと早く平和が来ますように」

やたらとしつかりしてるエイジの願い事、二人を見送ると。

「一魔に妖夢ちゃん、幽々子さん、あけましておめでと〜」

「おめでと〜ユウスケ」

「おめでと〜ございますユウスケさん」

「おめでと〜」

一通り挨拶を済ませるとお参りを済ませ。

「俺はもっと強くなって誰かを守ること」

「私も同じような事です」

「私はもっと美味しいものが食べられますようによ」

三人は去ると参拝客が来なくなった、よくよく見ると昼だった。

「お雑煮カレー食べようか？」

「ええ」

とあるクウガに変身する男から教わったお雑煮カレーというものを昼食で食べる事に、居間には霊夢と魔理沙、二本の角の鬼の少女の伊吹萃香いぶきすいかが夜に備えて寝ているため縁側で食べていた。

「お雑煮カレー美味しいね」

「ええ、土達は来るかしら？」

「本編に出てないから出ないと思うよ？」

「確かにね、だけどこれ美味しいわ」

二人はお椀に入った醤油をベースにしたカレースープの中に入った餅を食べていた。

「ごちそうさま」

食べ終わると急に眠気が襲い掛かり。

「なんか眠くなってきた……………少し寝ようかな？」

「私もするするわ」

横になり瞼を閉じしばらく昼寝をする事にした。

二人が見る夢とは何なのだろうか？

「あ、幽香」

「あけましておめでとう、ユウスケ」

境内に赤と白の着物姿の幽香がお参りにやってきた。

「昨日はなんで夜来なかったの？」

「昨日は眠くて寝ちゃったの、ごめんね」

「いいよいいよ、そんな綺麗な着物姿見れたし」

ニツと笑い許しサムズアップをする。

「ありがとう、じゃあお参りさせてもらっわ」

賽銭箱の前に行き金を投げ入れ鈴を鳴らし手を合わせ願い事をす
る、ユウスケは花が綺麗に咲くようにだと思っていた。

「幽香の願い事は何かな？」

「聞きたい？」

うん聞きたい、と返しわくわくしながら待つが。

「教えない」

意地悪な笑顔を浮かべて言い切り残念と思っていたら。

「御守り買っわ」

御守りを買っつと言いつ何がいいか聞いてみると。

「安産祈願の御守り……………」

顔を赤くしてそう言う、ユウスケの思考は一瞬停止した、安産？
それって出産……………妊娠？

「本当は昨日永遠亭に調子が悪くて行っつてみたの、そしたら」

恥ずかしそうだが嬉しそうだった、そのおめでたに。

「ユウスケ、もう逃がさないわよ、絶対に」

「逃げないよ、絶対その子も幽香も幸せにする」

「もう幸せよ、ユウスケ……………」

「幽香……………」

そうして二人の影は重なるのだった。

「ん…………んん…………夢かあ……………って何か温かい」
「起きた？ ユウスケ」

その声に聞き覚えが、恐る恐る視線を上げるとそこには夢に出てきた着物姿の幽香だった。

「幽香！」

「あけましておめでとうユウスケ、ごめんね、夜来られなくて、眠くて寝ちゃったの」

「いいよいいよ、そんな綺麗な着物姿見れたし」

「ありがとう、ユウスケ」

ニコツと微笑むとユウスケは理解した、今彼女に膝枕をしてもらっている。

「気持ちい？」

「気持ちい……………温かいし」

その返答をすると頭を撫でられ更に居心地がよくなる。

「そろそろ戻らないと」

起き上がり靴を履くと境内に戻る、幽香はお茶を飲みながら待っていた。

「お兄ちゃんおはよう、よく寝た？」

「霊夢ちゃん起きてて大丈夫？」

まだ寝てた方がいい、と言おうとしたが。

「もういいの、十分寝たしそろそろ」

話していると参拝客がやってきた、その参拝客とは……

「あけましておめでとう、霊夢」

レミリア、フラン、咲夜、咲一と言った紅魔館メンバーだった。パチュリーは先に奏歌と来たからここにはいない。

「霊夢ちゃんあけましておめでとう」

「あけましておめでとう、咲一」

咲一が来るのを見透して起きてきたのだった。

「今年もお嬢様も咲一もよろしく、霊夢」

「ええ」

「早くお参りしよーお姉様」

「そうね」

お参りを済ましたまたまた恒例の何を願ったか聞く事に。

「私はもっとカリスマ性を研くわ（キリッ）」

「私はもっといっぱいみんなと遊ぶ!」

スカーレット姉妹のお願い事は彼女らしいとは言えづらい。

「お嬢様達が好き嫌いしないようにする事や無駄遣いしない事です」

「さ、咲夜……」

何か罪悪感的なものを覚え始めていた。

「俺は野菜が美味しく成長しますようにだね、後は霊夢ちゃんが健康でいられますように」

「咲……………ありがとう」

「いやいや」

紅魔館メンバーは帰るのだが代わりに騒がしい連中が来たのだ。た。

「俺が先にお参りするんだ！」

「僕だよ先輩！」

「俺やもものじ！ かめのじ！」

「僕が先〜！」

「我に譲るのだ！」

「みんな落ち着いて！」

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、ジーク、デネブが駆け上がってきた。

後から健太郎と早苗が。

「そっか、守矢はまだ神社が……………」

はい、と早苗は答えた、守矢神社はまだ建て直されておらずだから博麗神社にお参りに来たのだ。

「さっさとお参りを済ませなさい、騒がしいわ」

仰る通りだわ〜！、とまあ感じて健太郎達はお参りを済ました。

「俺はもつとかつこよく戦う事だな！」

聞いてもいないのに願い事を教え始めた。

「僕はもつと嘘が上手くなるように」

「俺はもつと強くなることや！」

「僕はね！ もつとダンスが上手くなるように！」

「我は特にない」

「俺はみんなが好き嫌いしないように」

デネブがかなり苦労しているように見えて同情しつきた。

「私は神社の再建ですね」

「僕は今年こそは運がよくなるように」

健太郎は運が悪く結構困っているのだ、電王になったのも運が悪くてモモタロスに憑依されたから。

帰っていくと何かが転がり落ちる音がしたため健太郎が足を滑らしたのかと思いい気にしないでいた。

「ライダーはこれで全員ね、総真と葬は昨日やったし」

健太郎と早苗達を境に参拝客は来なくなりまた夜と思っていると幽香がやってきた。

「私もお参り、させてもらおうわ」

それを言い賽銭箱に金を投げ入れ鈴を鳴らし手を合わせ願い事をする。

「幽香は何をお願いしたの？」

「聞きたい？」

うん聞きたい、先ほど見たような夢の展開となっていた、ユウスケもそれに気づき。

「教えない」

同じ答えが返ってきた。

「御守り買っわ」

ここもだった、何の御守りを買つか聞くと。

「安産祈願よ」

ユウスケの夢は正夢となったのだった。

「え……………」

「幽香が、嘘じゃないわよね？」

「もちろん、調子悪くて永遠亭行って検査済みよ」

ウインクして言いユウスケは呆然としていた、正夢になるとは思わず。

「ユウスケ、もう逃がさないわよ」

「逃げないよ、その子も幽香も幸せにするよ」

「もう幸せよ、ユウスケ」

最後は霊夢がいるため影は重ならなかったが幸せいっぱいの二人だった。

キバーラは。

「おじ様カッコいい」

こんなことを寝言で呟いていた。

第28・5話『初夢』（後書き）

最後に……新年ハッピーバースデー！

第29話『防人』（前書き）

やはりこのジャラジもろくな最後ではなかった。

第29話 『防人』

「かなり消耗してるわね、力を使い果たしたような」

永遠亭、意識を失ったユウスケはすぐに運ばれ治療を受け、その結果を幽香が聞いていた。

「当分は安静、戦うのもダメ、というよりは彼、病み上がりで戦い続けていたのも原因ね」

外の世界で大怪我を負い手術した後なのにも関わらず戦い続けた、完全に治っていないのにも関わらず。

「……………わかったわ」

「それで、小野寺とはどうなの？」

質問の内容は分かっていた、しょうがないと思いつつながら。

「待つ事にしたわよ、引きずったまま言われても振るわよ」
「なるほどな」

永琳は部屋から出た、安静のため動かせないため当分は永遠亭でユウスケは寝泊り、つまり入院する事になったが目を覚ます気配はない。

「……………」

死んだようにも見えるその寝顔を見ながら立ち上がり名残惜しそうな素振りを見せながら部屋から出ていった。

(どうすればいいか……………わからないもの……………)

心中で呟き、永遠亭を後のした。

「お兄ちゃんが」
「はい」

文が博麗神社にやってきてユウスケが永遠亭にいと霊夢に伝えた。

「お兄ちゃんは当分リタイヤか」
「霊夢さんユウスケさんを慕ってますね本当」
「別にいいじゃない、本当にすごいんだからって何ニヤニヤしてるのよ」

ニヤニヤしているためネタにするのかもしれないと警戒していた。

「いちゃいちゃ」
「怪しい」

その頃、永遠亭。

「どこも異常はないのだが……………」

ユウスケ以外に患者がいるのは当たり前、それは里からも、里の人間が永琳から見ても異常がないと健康の状態なのだが違っていた。

「違うんだ……………違うんだ！」

何かに怯えているようだった、頭を抱えて。

そして永琳が付きつきりで夜中の0時を迎えた時だった。

「鼻血が流れて……………」

だが遅かった、鼻血が流れた瞬間、異常がなかったと思っていた人間は事切れた。

「おい……………どうした？　おい！」

その後、目を開く事なく死亡が確認された、頭から針のような物体を取り出されたのだった。

「……………」

次の日の早朝、里の人間がどういふ理屈か分からない死亡したと文々。新聞に載せられておりそれを慧音は読み浮かない顔となっていた。

「どうしたんだよ慧音？」

タクミが何となく話し掛けてきたのだが。

「あ、何でもないぞタクミ」

「本当かよ」

余り信用できないが何でもないと一点張りのためこれ以上は聞かなかった、一緒に住んでいるからか、彼女の性格を分かっていたからだ。

「なあ慧音」

話し掛けるのだが、自分も何でもないと返していた、勇気がなかったからだ、それを聞いて自分に何ができるか。

「心配するな、私なら大丈夫だ」

作り笑顔だが心配掛けまいと頭に手を置いて言う、実際彼女の方が年上なのだ、タクミよりも遙かに。

「子供じゃねーんだから」

「子供さ、まだまだな」

不機嫌そうに手を払い朝食を食べるために居間へ向かった。

「……………すまないな……………」

タクミが居なくなつた後、一人だけポツリと涙を垂らした、少しだけだが悲しみが伝わるような。

「てな事があつたんだよ」

永遠亭がある迷いの竹林の中にある一件の小屋、そこは妹紅の家でタクミは朝食の後、そこを訪れ朝の話をしていた。

「慧音って責任感強くて抱え込む癖があるからな……………もしかしたらコイツが原因かもな」

文々。新聞を出しある記事を見せる妹紅。

「里の人間が原因不明の死に方？」

「ああ、針みたいな物が頭から出てきたがどうやって入れたかがわからないんだよ」

「それとどう関係があんだ？」

妹紅は仕方ないかと思ひ話す事にした。

「今回死んだ奴、慧音の教え子だつたんだよ」

その内容にピクツと反応を見せ耳を傾けた。

「アイツ、半妖だから人間より長生きするだろ？ だから生徒達も結構な数なんだよ」

「そうか……………アイツ、それでか……………」

やっとなぜ慧音が落ち込んでいるのかが分かるが喜べない、そういう理由なら尚更だ。

「で、おっさん、今回の事件、どう思う？」

隣の部屋に銃志郎がゴウリュウガンの手入れをしており話を振られた、最近タクミと慧音が仲が良かったため邪魔だと思い妹紅に小屋に誘われここで暮らしている。

「おっさん言うな、まあ怪人だろうな……………けどなんで里の中で誰にも気付かれる事なく……………」

もつともな意見だった、怪人は誰にも気付かれる事なく犯行を行ったからだ。

「オルフェノクやファンガイアみたいに人間の姿に……………」

「あり得るかもな」

この事でやる事はただ一つ、その犯行を行った怪人を探し出す事だ。

「行くか」

「ああ」

「異論はない」

【私もだ】

三人は立ち上がり小屋を後にし里へ向かっていった。

「霊夢」

博麗神社、キバーラが霊夢に話し掛けていた。

「どうかしたの？」

「文々。新聞読んだ？」

もちろん、と返し。

「里に行くわよ、犯人は必ず倒すわ」

現場に行き犯人を探し倒すつもりでいたのだ。

「やっぱりね、私も着いていくわよ」

「ありがとう、キバーラ」

二人も里を目指し飛び立った、まだ正体も分からない敵を倒すために。

「取り敢えず魔理沙とアリスに手伝ってもらおう」

アリスとは魔法の森に住む魔法使い、アリス・マーガトロイドの

事であり人形を操る事に優れている、彼女の能力を使い里中に人形をばらまき犯人を探すという事を考えていた。

「人形使いね……確かにそれなら探せそうね」

「ええ、取り敢えずお兄ちゃんがいらない今、私達が頑張らないと」

「その意気ね、私もできる限りの協力するね」

「頼りにするわね」

だが、霊夢とキバーラはまた別の話、今回はタクミ達の話だからである。

「取り敢えず怪しい所は片っ端から探すぞ」

里に着いたタクミ達は宛てもない、だが放っておいたら大変な事になる。

「絶対に探し出すぞ………アイツの夢を守るためにも」

怒りの炎が燃えていた、絶対に犯人を倒すという決意を込めて。

「タクミ、落ち着け、そう熱くなっただってどうこうなるわけじゃない」

「わーってるよ」

そんなタクミがどこか自分の仲間に似ておりその仲間は今何をしているか気に掛けていた。

(今は犯人探しか)

思い出に浸っている暇はない、そう自分に言い聞かせ散策を始めた。

(剣士……………白波……………そっちはどうなっているんだ?)

空を見上げ、一瞬自分の世界で戦っていた時の事を思い出し走りだした、昔はあけぼの町、そして今は幻想郷の防人として。

「ゴウリュウガン、魔的反応はないと思うが索敵、頼む」

【できる限りはやってみる】

銃志郎は走りだした、人々と妖怪を守るために。

「……………」

タクミは立ち止まっていた、怪人の気配ならば感じ取れるはず、自分も同じような怪人ならばと思い人氣がなく目が付きにくい竹林の中に戻る。

「なりたくなかったけど……………やるしかないか」

黒い線が顔に走る、そしてタクミはウルフォルフェノクに変身した。

「……………」

顔を下に向け目を瞑り集中力を高める。

考えるのではなく感じ取る、自然と一体化する、ウルフ………狼は大自然の中獲物を探し出し仕留める、それと同じ本能で感じ取るうと。

だが相手もそんな簡単に気配を感じ取らせてくれるわけない、相手が殺気を剥き出しにした瞬間がチャンスだった。

なりたくはないこの姿、だが誰かの夢を守るためなら野獣の姿にもなる、それが彼の決意だ、それは今も、これからも変わる事がない決意、自分の夢の為に………

「っ！　そこか！」

ウルフルフェノクはその気配、殺気を感じ取ると姿は戻らず走りだす、

この姿の方がアクセルファイズの次に速いためこの姿から人間に戻って変身するよりもこっちの方が速い、

今の彼は早期決着をつけたかった、この人里には慧音の教え子が沢山いる、もうこれ以上彼女の涙を見たくないから、これ以上彼女を悲しませたくないから、

自分を受け入れてくれまた夢を取り戻させてくれた彼女の夢と笑顔が見たいから。

「絶対……………止めてやる……………」

速度は狼のように速く、そして気付かれる事なく屋根から屋根へ飛び移り敵が居る場所へ急行する。

すると人影が見えてきた、二つだ、一人は異形の姿をしていた、ヤマアラシのような姿で白い鋭い毛を生やした怪人……………ゴ・ジャラジ・ダだった。

「グロンギ！」

その二人の前に降り立つのだがジャラジは自分の毛を抜き里の住人である男にそれを刺した。

「やめ……………！」

声を出すが遅くジャラジは手を放した。

「オルフェノクか……………」

ジャラジはその名前を呟いた、住人はガタガタ震え異形から離れ

るが前にも灰色の異形がいたのだが。

「アンタ……………慧音先生の所に住んでる男だろ？ 声聞いた事あるから分かるよ」

住人の話を聞くのだがその目は何か決意していた、まるで死ぬかの。

「なあ……………俺これから訳が分からない死に方するんだよ……………新聞にも載っていたような」

「まさか……………」

ウルフォルフェノクは彼が何をするか分かってしまった、理解ができない死に方をするならば。

「訳が分からない死に方するなら自分から死んだ方がマシだあつ！」

「おい！ やめ……………！」

二回目だった、最初はジャラジの行動、そして次は目の前の男を、だが。

「っ！」

男は自ら喉を爪で深く引つ掻き赤い液体が吹き出し灰色の体を赤く染めていった。

「あーあ、このまま怯えて死んで行くところが面白いのに、死んじやった」

ジャラジは自分の玩具が壊れたような気持ちでその言葉を発して

いた。

「……………」

何言っているんだと言いたそうな目付きをしていたためジャラジはその言葉ではない問いに答えた。

「人間や妖怪が怯えれば怯えるほど楽しいんだ、ゲゲルは」

その問いに伸び切っていた糸が切れウルフルフェノクは瞬時に走りだしジャラジの目の前に立ち拳に付いたメリケンによる鉄拳を頬に叩き込み殴り飛ばした。

ジャラジは突然の事により動揺を隠せなかった、動いたと思ったら目の前に立ち拳を食らわされたことに。

「お前はアイツの夢を台無しにした……………」

何を言いだすんだ？、という考えを持つ、口の中が切れたのか血が流れ顎に溜り地面にポツポツと零れ落ちていた。

「だから絶対許さね……………絶対にな」

その灰色の狼の目は怒りの炎を灯していた、ブラスターファイズよりも赤く。

「お前何……………ぐっ!？」

立ち上がるとまた瞬時に目の前に立ち顔面に鉄拳を叩きつけられていき口から血が吹き出し赤く染まった灰色の体がまた赤く染まっ
ていく。

傍から見れば怪人同士の争い、だが灰色の異形の心は人間のもの、だがヤマアラシの異形に向けていたのは獣の敵意だった。

「うおおおおおつ！！！！！！！！」

的確に顔面を狙い拳を叩き込んでいき更に血を吹き出させていく。

「ぐっ……………えぐっ！？ うっ！？」

足払いを掛け倒すとマウントを取り更に殴っていく、いつもと変わらない犬神タクミのバトルスタイルだが違うのは雰囲気だ。

次第にジャラジは恐怖を覚えた、怒らせてはいけない獣の怒りを燃え上がらせてしまったと、

だがもう遅い、灰色の狼はこのヤマアラシを殺すまで殴るのは止めないだろう、誰かが止めに入るまでは決して止めたりはしない。

「オラアアッ！ アイツらを殺したように俺も殺してみる！ どうなんだよ？ ああっ！？」

だが有無を言わず鉄拳を叩き込んでいく、怒りを乗せ。

するとジャラジは両手で拳を受け止め押し返しウルフォルフェノクを払い除け立ち上がると口に溜まった血を吐き出し逃げ出した、しかも人が多く通る道に。

「待ちやがれ！」

追い掛けようとしたのだが目の前に銃志郎と妹紅が立ちふさがる。

「邪魔だ、退けよ！」

ウルフォルフェノクは声を荒ら上げ言い放つが二人は退こうとはしなかった。

「タクミ、お前、自分の姿見てみるよ」

ここで初めて気付いた、自分の体が灰色ではなく赤く染まっているのに。

「その姿で表出てみるよ、一瞬で悪者扱いだぞ」

銃志郎の手にはゴウリュウガンが、いつでも変身できるようにと。

「タクミ、お前の前じゃ言わないけど慧音が言ってたよ、根は優しくて誰よりも人間らしいってさ、だけどその面影がねーんだよ今のお前には」

ウルフォルフェノクは人間の姿に戻ろうとはしなかった、人間の姿に戻ったら酷い顔をしていると思ったからだ。

「人の夢を守るんだろ？ ファイズはな、お前は興味ないし人付き合い悪いから知らないと思うが子供達の夢なんだよ」

銃志郎の言う通り人付き合い悪いため噂とか気にしないため初耳だった。

「夜な夜な怪人と戦ってるの、見てる大人もいるんだよ、その大人が子供にファイズのように強く優しくなれって言ってるんだよ……
…その子供の夢を奪うのかよお前は！」

胸を何かで貫かれたような感覚がした、そのため力が抜け、変身

が解け犬神タクミの姿に、表情は浮かなく、衣服には血が染み付いていた。

「慧音も嬉しそうに話してたよ、タクミは自分の夢を守ってくれる、だから自分もタクミの夢が叶うように夢を諦めないって」

するとタクミは歩き出し二人の間を割って通り抜けた。

「わりい妹紅、おっさん、なんか熱くなってたよ」

ポケットからファイズフォンを取り出し開きオートバジンを呼び出すコードを入力する。

「もう……怪物にはならねー……これからはこの人里の防人……
……やってやるよ……」

オートバジン・バトルモードが降り立ちファイズドライバーを手渡され腰に巻く。

「おっさん、妹紅、だからさ、俺が蹴を付ける」

そのまま歩いていった、日が沈み赤くなった空の下を。

「けーねせんせーさよーならー!」

「気を付けて帰るんだぞ」

寺子屋、生徒達と接している内に次第に明るさを取り戻した慧音は生徒達の帰りを見送っていた。

「タクミ遅いな、このくらいになれば帰ってくるはずなのだがな……」

なかなか帰って来ないタクミの帰りを待つが夏であろう夜は冷える事がある、風が吹き寒さを感じると中で待つ事にし後ろを向き歩き出した。

「ハア……………ハア……………」

その後ろにジャラジが現れた、慧音は気付く気配がまったくなかった、それほどジャラジの気配が弱々しいものだったのだろう。

そのまま襲い掛かるうとするのだが横からタクミが現れ立ちはだかる。

「おい知ってるか、夢ってのはな、時々スツゲー熱くなって、時々スツゲー切なくなるんだぜ?」

まるで自分にも、気付いていない慧音にも言うように語り掛けた。

「俺には夢がある、誰かの夢を守ること、世界中の人が幸せになること……………そして、アイツの……………上白沢慧音の……………惚れた

女の夢と笑顔を今度こそ守ること」

ファイズフォンを開き変身コードを入力していく。

【Standingby】

そしてファイズフォンを閉じ。

「だからな……………俺はこれからもその夢のために戦っていく……………」

その持った右腕を突き上げ。

「変身！」

決意に満ちた掛け声を言い放った後、ファイズドライバーにファイズフォンを連結させ【Complete】と流れ赤い線が身体中に走り姿を変えた、里で皆が目標にしている人里の防人、否、人里の赤き救世主仮面ライダーファイズへと。

手首をスナップさせると走りだす、ジャラジは毛を抜き針に変化し投げ飛ばすが手で弾かれ先ほどのような敵意剥き出しの戦い方ではなくいつものように余裕を持ち喧嘩のような戦い方で殴り飛ばす。

「ふう……………」

立ち上がった瞬間、アッパーを顎に食らわせ先ほどと同じような戦い方にしか見えないがやはり殺意ではなく何かを守りたい、その気持ちが出ているため優しさも見えていた、彼女に気付かれないために林の方に追い込む。

「はあ……………」

溜め息を吐いたり鼻で笑ったりと相手を挑発しつつ相手の神経を逆立て隙を作らせそこを突き攻撃していく。

右足を引いて思い切り突き出しジャラジを蹴り飛ばすともう一度手首をスナツプさせる、先ほどオルフェノクでの姿で戦っていたためダメージが深く弱っていた、回復したらまた殺しを始める、生かしたい気持ちはある、だがグロンギはそんな事は考えない、ならやる事は一つ。

ファイズアクセルからミッションメモリを抜きファイズフォンに挿入し【Complete】と電子音と共にアクセルフォームにチェンジしファイズアクセルのスイッチを押した。

【Start Up】

そしてファイズは一瞬で移動、ジャラジの前に立ちアッパーで宙へ殴り飛ばすとジャラジは何かにぶつかるように弾き飛ばされていき空高く舞い上がっていき赤く染まった空の上。

【3…………2…………1…………Time Up】【Reformati
on】

その電子音が流れるとアクセルフォームの制限時間は終わり通常フォームに戻ると思いきや。

【Awakening】

ファイズブラスターにファイズフォンをセットしブラスターフォームに変身。

【Faiz Blaster Take Off】
「うおおおおおりやああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

そして背中のブラスターを起動させフォトンブラッドの火を吹きながら下から赤い閃光となったファイズが急上昇しジャラジを弾き上げそれよりも高く飛び。

【Faiz Pointer Exceed Charge】

ファイズブラスターにコードを入力し右足を突き出し急降下しブラスタークリムゾンスマッシュを炸裂した。

「ウアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

輝く美しき赤いドリルのような閃光はジャラジを貫き暗くなっていく空に大きな赤く輝く の字が浮かび上がり爆散した、それは綺麗とは言えない炎、誰かの夢と笑顔を奪うのを楽しむための快楽に溺れたものの最後だった。

「……………」

その爆発を暗闇に包まれた空のした、自らも赤き光を発する仮面の戦士は見つめていた。

人間をゲームのために殺す Grongi とは分かり合えない、だからその Grongi を殺す、だがそれは気持ちがいいものではない、何かを守るための代償、命を葬るといふ罪なのだから。

「戦う事が罪なら……………俺が背負ってやる、どこまでもな」

「今の爆発は!？」

さすがに爆発には気付き慌てて外に出る慧音、林の奥から人影が見えてきた、それはこちらへ歩いており暗くてよく見えないと思いきやそうでもなく自ら赤い光を発しており誰なのか気付いた。

「タクミ……………」

ファイズだった、林から出る時には変身を解きファイズブラスタ―やファイズドライバーは駆け付けたオートバジンに預けた。

「血が付いてるぞ」

血は先のままだった、ジャラジの血、そして彼女の元教え子の血が、隠し通せるものではない、なので全て話した、また教え子が死んだと。

「訳が分からない死に方するなら自分から死んだ方がマシだったよ」

素っ気なく言っているつもりだが顔に出ていた、後悔の表情が。

「そうか……………またか……………何度も見てきたが今回の来るな」
寿命ではなく人為的に命を絶たされてしまった、その事は悔やんでも悔やみ切れるものではない。

「ごめん」

悪いとか済まない、ではなく“ごめん”と謝ってきた、それほど今回の件はかなり来ていたのが分かる。

「お前が謝る事はない……………」

「いや、そいつらもお前の夢の一つなんだ、だから有言実行はできなかった、もしかしたらこれからも」

だが後ろへ下がるような事は絶対にしない、もう、過去の過ちを繰り返さないために。

「先に風呂入らせてもらおうよ……………鉄臭くて仕方ねー」

タクミは先に歩き寺子屋に入ろうとした。

「タクミ!」

大声で呼び掛けた、それには立ち止まる、何か言おうとしていたが思い出したかのように先に言葉を発した。

「慧音、何かあったら妹紅だけじゃなく俺にも話せよ……………力になるから」

慧音の話は聞かず入ってしまった、彼女が何を言おうとしたかは彼女自身にしか分からない、だがいつかはこう言いたい。

「ありがとう」と……

第29話『防人』（後書き）

オルフェノクでぼこしまくってから通常フォーム、アクセルで追い討ち、ブラスタでトドメとたつくん祭りを展開しました（笑）
おっさんは戦わなくても活躍できるすごい人ツス、さすがおっさん。
今回は霊夢 & amp ; 魔理沙のターン！

次回予告

アंक

「お前、欲望塗れだな」

霊夢

「それが何よ」

魔理沙

「こっそりと借りたんだぜ」

アリス

「また人のもの」

鵜ヤミー

「ガアアアアッ！！！！！！」

エイジ
「鳩？」

ぬえ
「え？」

次回『Riverse/Ri::birth}White Ring』

第30話 『Riverse/Ri::birth』 White Ring 『前』

連続投稿しますので次回予告は無しです。

第30話 『Riverse/Ri:birth』 White Ring 』

ゴ・ジャラジ・ダの事件をタクミ達が追っていた頃、別のサイドである戦いが同時進行するような形で起きていた。

霊夢とキバーラはジャラジではない怪人と戦う事になるがそこで
霊夢は……………

「魔理沙〜!」

魔法の森、まずは霧雨邸を訪れていた。

「霊夢がここに来るなんて珍しいなあ」

幸いにも魔理沙は在宅しており怪人を探して倒すと話すと。

「わたしもそれ気になってたんだ、文からユウスケが倒れたって聞くからな、いいぜ」

快く了承してくれた。

「じゃあ次はアリスの所行くわよ」

「なんでだよ？」

「アリスの人形で怪人を探すのよ、もしかしたら今回騒ぎを起こしてる奴以外にも居るはずよ」

霊夢の推測は正しかった、ジャラジ以外にももう一体いる、魔理沙は以前バダーとブウロに撃墜された時その会話はちゃんと耳にしていた。

「そうだな、じゃあわたしがアリスの所行ってくるぜ」
「頼んだわよ」

魔理沙はすぐに箒を跨り飛んでいった。

「さて、紅魔館に行つて咲一に協力してもらうか………だけど」
時間が掛かる、ならば近場だ、タクミ達は騒がしてる怪人を探していると分かる。

「癩だけど………命蓮寺、行くわよキバーラ」
「商売敵だもんね、まあそんな事言つてられないか」

霊夢とキバーラも飛び立ち命蓮寺へ。

「ねえキバーラ、キバーラもキバットみたいに仮面ライダーになる能力があるの？」
「もちろん！ キバット族だもん！ だけど変身者は決まってるから………」

だから変身させられない、少し残念だったがいるなら仕方ない、一体どんな人物だろうと想像し目的地を目指した。

命蓮寺、健太郎やイマジン達は山へ守矢神社の建て直しへ。

エイジとアंकはまだ準備していた、二人は変身し、アंकは鳥のグリードなため空を飛べる、オーズもタジャドル、プトティラになれば飛べるため器材を禁から運ぶ時に変身する。

「これと……これと……これかな？」

「そうだな、持っていけるのはこれしかねーよな」

大きい物はゼロライナーだが小物は手で運ぶ、ただ入り切らなかつたのを運ぶだけの簡単な作業だ。

「あれ？ 霊夢ちゃんとキバーラじゃん！」

「確かエイジとアंकだっただけ？」

ほんの数回程度しか会っていないため微かにうる覚えだが当たりである。

「どうかしたの？」

「今朝の文々。新聞読んでれば分かるんだけど……」

それだけで何なのか理解した、原因不明の死亡事件、脳内に針が混入していたがどう入れたか分からないため直接の死因にもまだされていない。

「なるほどね、その事件の事か、どうする？」

「手伝いたいんだろ？ なら俺が運んどいてやるから」

サンキユ、と礼を言い手伝う事に決めた。

心なしか、アंकが霊夢を見つめていた。

「私の顔に何か付いてる？」

「いや、お前、欲望塗れだな」

何を言い出すかと思いきや。

「金への執着心、タダ者じゃねーな」

「それが何よ」

それには不機嫌になるが本当の事のため否定できない。

「ごめん、フォローできないわ」

「いいわよ、本当の事だから」

するとアंकが何かを投げってきたためそれを取る、それはバックルにカプセルが埋め込まれネジが付いた銀と緑の線が入ったベルトだった。

「まさかそれプロトタイプバースのベルトじゃ……………」

「ああ、鴻上に渡されたんだけどそいつはプロトタイプじゃねー、実戦投入型大二号で外見はプロトバースだが中身は普通のバースだ」

察しは付いた、これは仮面ライダーに変身するためのベルトだと。

「そいつを使いたい時はセルメダルを入れてネジを回せ」

使い方だけを説明するとアंकは怪人態に変身し赤い羽根を広げ飛んでいった。

「これも仮面ライダーなのね」

バースのベルト、バースドライバーをまじまじと見る。

(……………アंक、お前、霊夢ちゃんが伊達さんみたいな欲望持つてるから渡したな)

内心ピツタリだと思いつつキバーラに何考えているか聞かれたが秘密にした。

「さて行くわよ」

「うん」

エイジはオーズドライバーを腰に付けタカ、クジャク、コンドルのメダルを挿入しオーズキャナーに読み込みました。

「変身！」

【タカ！ クジャク！ コンドル！ タア〜ジャア〜ドォ〜ルウ〜！】と歌が流れオーズ・タジャドルコンボに変身。

「思っただけどその歌何？」

「俺にも分かんないんだよね〜」

仮面の下苦笑し飛び立とうとしたのだが。

「エイジさんお出掛けですか？」

「あ、聖さん」

白蓮が命蓮寺から出てきた。

「今朝の新聞に載ってた事件を調べに、アंकが一人でやってくれるみたいなので」

「あらそうですか……………ならこっちから誰か一人付き添いを……………」

オーズは断ろうとしたのだが近所の世話好きなお姉さんのような白蓮はちよつど命蓮寺から出てきた黒つばい紫の短い髪に背中に何か一目で変と思えるような羽根のような飾りが付いた少女、封獣ぬえほうじゅうぬえに付き添いを頼んだ。

「うん、分かった、よろしくエイジ」

「よろしくぬえちゃん」

そしてようやく三人と一匹は飛び立った。

「気を付けてくださいね」

ハンカチを持ちヒラヒラ振りながら見送っていった。

「ホントお節介よね」

「そこが聖のいい所だから」

一先ず魔理沙とアリスと合流するために森へ戻るため進路を森へ向けた。

「という訳なんだよアリス」

「なるほど……………そういう事なら喜んで協力するわ」

霧雨邸とは別に建てられたマーガトロイド邸、そこに短い金髪、白と青の洋服を着た少女、アリス・マーガトロイドと魔理沙は話していた、

アリスの隣に浮かんでいるのはアリスが作ったことなく製作者に似てる上海人形、因みに一体だけではない。

「霊夢も来るはずだから後初見の奴も居ると思うぜ」

最後にそう言い椅子に座ろうとすると何か黒い携帯のような物が落ちた。

「魔理沙、それ何？」

「あ、これはこっそり借りたんだぜ」

タクミからだろう、襲い掛かったデスショットのデルタギアを彼は保管していた、それを誰かから聞いて犯行に及んだのだ。

「それ盗んだんじゃ……………」

借りたと言い始めたら何を言っても無駄なため諦めた。

「だけどそれ何に使うの？」

「ああ、仮面ライダーに変身するためにな」

やはり今、幻想郷で仮面ライダーを知らない者はほとんどいない、アリスも知っていた。

「使い方は香霖から聞いたから分かるんだ」

霖之助は未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力でその黒い携帯のような物、デルタフォンの使い方を知っていた。

「このベルトを巻いて」

デルタドライバーをどこからか出し腰に装着し。

「コイツに変身って言うてここに連結すれば完了みたいだぜ」

セーフティが掛かっているため音声入力はされない。

「ふーん、それだと誰でもなれるみたいね」

「だけどコイツと適合しないと暴走しちまうみたいらしいぜ？」

それにはさすがに大きく反応し変身する気満々の魔理沙、止めようとデルタドライバーに手を掛けるのだが。

「キャッ！」

白い電流が流れ手を放す。

「なんか気に入られたみたい」

とある世界でデルタギア自身、真の装着者を求めさ迷い続けた、最終的にはある人間に落ち着いたのだ、このデルタギアは真の装着者として魔理沙を見ているようだった。

「とまあコイツは当分借りるぜ」

デルタギアを外し色んな物を盗んだと思われる袋の中に入れると

邸の上を何かが通るような音がしその後、ノックが響きアリスが出迎える、もちろん霊夢達だった、外に出て里の近くへ、エイジとキバーラが自己紹介を済ましこれからする事をよく聞く。

「アリスの人形達で里中を見て欲しいのよ」

「分かったわ、さっそくやってみる」

自分の役割を聞くとすぐに上海などを里中に散らばらせた。

「俺とぬえちゃんは上から探す」

「二人の方が里で顔が広いからね」

「空はお願いね」

エイジはまたオーズ・ジャドルコンボに変身しぬえと一緒に飛び立った。

「アレが仮面ライダーオーズ、文々。新聞の写真に乗っていた通りね」

「じゃあ上海達が何か見付けたらその時はよろしく」

霊夢、キバーラと魔理沙は里の中に入っていった。

「さて……………何が出るのかしら」

その頃、白玉楼。

「あ、妖夢、俺ちよつと出掛けてくる」

一魔は外出するために妖夢に話し掛けた。

「どちらへですか？」

「紅魔館に奏歌の様子を見にな」

あれ以来奏歌はまだ紅魔館で寝泊りしておりキャツスルドランに帰っていない、妹が攫われた事実を知り深く落ち込んでいたのだ。

「分かりました、じゃあついでというのもアレですが咲一さんの野菜、もらつてきてくれませんか？」

「ん？ なら妖夢も行く？」

「私はここで幽々子様をお守りしないとならないので、最近治安が悪いので一人にさせておくのが」

今朝の文々。新聞を読みこれからは一緒に外出は危険と思に残る
こと。

「そう……じゃあ幽々子の護衛しつかりとな」

「はい！」

一魔は靴を履いて白玉楼から出てそこを後にした。

「さあ〜て、一魔さんがいない分、怪人が来たら私が倒すぞ！」

意気込んでいた、それを見ているものがあるとは知らずに。

時間帯はタクミがキレてジャラジをボコボコに殴りまくる数十分前の人里。

「あ、おっさん」

「誰がおっさんだ！」

魔理沙は銃志郎と鉢合わせていた。

「おっさんも犯人探し？」

「まあな、そういうお前もか？」

ああ、そうだぜ、と返すと銃志郎は何か思い出したかのようである話題を。

「タクミがデルタギア無くした言ってたけど知らないか？」

魔理沙に聞く所から何か物が紛失したら彼女が盗んだか本当に無くしたかのどちらかと定着していた。

「なんだ気付いてたのかよ……………」

「やっぱり、俺が渡すから」

「悪いけどそいつは無理な話だぜ」

デルタギアに懐かれたと言い試しに銃志郎は触るがやはり弾かれた。

「マジかよ……………」

「だからこれは本当にもうわたしのもんだぜ」

デルタフォンを出し上へ投げてキャッチをすると繰り返していた。

「あわわわ！ 不動のおっさん！」

「誰がおっさんだ！」

里の住人が慌てて走ってきた。

「アツチで怪人同士が戦ってる！」

「分かった、お前はそこに近付けないように呼び掛けておいてくれ」

住人はまた走りだし銃志郎の言葉を里の住人に伝えに行った。

「怪人同士か……………タクミがオルフェノク姿になったかもしれないな……………」

「そうかも……………ん？」

魔理沙は何か物陰に入っていく人型を見付けた。

「なんかアツチにも変なのがいるみたいだぜ」

「分かった、なら俺はタクミの方に行く」

「オツケー、じゃあなおっさん」

「だからおっさん呼ぶな」

二人はその場で別れ走りだした。

「何かしら、アイツ……………」
「分からないわ」

霊夢とキバーラも何かを見付け尾行していた、それは紫の体色で恐竜のような姿で頭部はプテラ、肩や腕、胴体はトリケラトプスを思わせ下半身はティラノザウルスを思わせるような姿だった。

その紫の怪人は確実に人気がない場所を通っているため何かあると見て後を着けていた。

「プトティラに似てるけどエイジの気配じゃない」
「私、エイジにこの事言ってくるわ」

キバーラはそう言うと一旦別れエイジが居るはずの空へ、仮面ライダーで表すならオーズ・プトティラコンボ、霊夢は知らないがスーパージョウで表すなら爆竜戦隊アバレンジャー。

紫の怪人は気付いているのかいないのか分からない雰囲気を出しながら歩く、まるでどこかに霊夢を誘うかのよう。

(誘われてるの?)

追っているつもりだが逆に追わされている気分になってきた、そして気付けば魔法の森の中に入っていた。

(森の中……………何があるの……………)

霊夢はどんどん森の奥へ入っていくのだが。

「消えた!?!」

紫の怪人は姿を消し代わりにプテラノドンに似たプテラノドンヤミーが雄と雌、二体ずつとオレンジの民族衣装のような物を纏い鉄のバケツのような仮面を被り剣を持ったナイト兵が何体も現れた。

「気付かれてたか……………!!」

ナイト兵達がプテラノドンヤミーの前に立ちジリジリと近付いていた。

「やるしかないわね……………」

御札を袖から出し戦闘の意を見せていた。

「ちよつと待ったああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

ナイト兵の前を何者かが横切るがぶつかり弾き飛ばされたナイト兵も。

「魔理沙!」

それは魔理沙が駆け付け減速をするのを忘れていたため加速付いたまま突撃したのだ。

「おつとつと〜」

霊夢と魔理沙は鶴ヤミーの容姿が何をモデルなのか分からなかった。

「そしたら鶴じゃないの？」

「なるほど、さすがアリスだぜ」

ナイト兵は剣を構え向かってきた。

「魔理沙！ もう一発！」

「おう！」

マスタースパークでもう一度一掃と考えたのだがプテラノドンヤミーは飛び立ち光弾を放ち弾幕を張ってきた。

「マジかよ!？」

三人は反射的に飛んで弾幕を掻い潜っていく。

「まさか弾幕張ってくるなんて思わなかったわ……………」

プテラノドンヤミーは大空を飛び回り光弾をばら撒いていくためナイト兵も撒き添いを食らう。

「出す意味ないんじゃない……………」

アリスはナイト兵を哀れみの目で見ていた。

「言っつてやるなアリス、雑魚キャラや戦闘員の定めさ」「戦闘員？」

「鵜？」

やはり鵜ヤミーが何なのか分かった。

「そうみたい」

「あの雑魚キャラも出てこなくなったみたいだし」

「なら私が行くわ」

霊夢が前に出るとアंकに渡されたバーストライバーを出し腰に巻き付ける。

「さっそく使ってみようかしらね」

「ならわたしも行くぜ」

魔理沙も盗んだデルタドライバーを腰に巻き付けるデルタフォンを出す。

「それタクミのじゃ……………」

「借りたんだぜ、死ぬまで」

やっぱりという表情をする。

「どうするエイジ？」

「ここは二人に任せよっか？」

オーズも鵜ヤミーは二人に任せる事にし見守る事に。

「セルメダルを入れて」

バースドライダーのバックルの挿入口にセルメダルを挿入しネジを摘む。

「確か………変身」

【Standing by】

変身の準備は整った。

「変身！」

「霊夢の構えは逆だがどことなく咲一のような構えでネジを回しバックルのカプセルが開き銀と緑、胸部にバックルのカプセルと同じ物が付き赤いラインが流れるバース・プロトタイプに似ているがそれは実戦投入されたバースと識別するための姿であるためこれも立派な仮面ライダーバースだった。」

【Complete】

「デルタフォンとベルトにぶら下がったビデオカメラ型のデバイス、デルタムーバと連結させると魔理沙は仮面ライダーデルタに変身した。」

「白黒、悪くないぜ」

「紅白じゃないけどなんかこれ、いいわね」

「オーズは金への執着心の強さではないかと考えた。」

「鶴ヤミーは飛び掛かってきたが使い方を事前に霖之助に調べてもらったためフォンブラスターを抜き銃口を向け。」

「ファイヤー！」

【Burst Mode】

フォンブラスターから白いレーザーが発射され鶴ヤミーに直撃、火花を散らしながら落下していく。

「すぐに撃てて威力も高い、気に入ったぜ」

バースはバースバスターという専用銃を出しマガジンにナイト兵だったセルメダルを挿入しバースバスターの後部と連結し弾を装填しマガジンを下部に取り付けマシンガンのような形となりセルメダルのエネルギーの弾丸を連射していく。

使い方が解るのはバースシステムが使い方的大脑に直接伝えているからだ、因みにバースはかなり肉体を鍛えないとなれないが霊夢の場合は弾幕ごっこで鍛えられているため問題はない。

「なんかそつちの方が威力高い！」

「アンタは色が合ってるからいいじゃない」

「くだらな！」

ぬえに突っ込まれるが鶴ヤミーが立ち上がり飛び掛かってきた！

「邪魔よ！」

「邪魔だぜ！」

同時に銃撃を受け火花を飛び散らしながら吹き飛ばす。

「トドメ、行く？」

「ああ」

バースバスターの銃口にマガジンを取り付け【セルバースト】と

魔理沙は白黒で霊夢は金銭的な執着心のためこのライダーに。
ユウスケの出番はまだまだですね、咲一も。

第31話『約束の剣』（前書き）

これは短いです。

第31話『約束の剣』

「みよん!？」

白玉楼、妖夢の間抜けな声が響き渡っていた。

「残念、居眠りしてるからって注意してないと思ってた?」

胡坐かいて座り横にキンググラウザーを置いた一魔の前に手に木刀を持ち頭を抱えてしゃがみ込む妖夢がいた。

「隙があつたら掛かってこいって言ったの剣崎さんですよ?」

「だからってすごく分かりやすいよ?」

何でも隙があつたら一太刀入れてみると言つたらしくこれも特訓の一種とか。

「剣崎さんはやった事あるんですか?」

しゃがむのを止め座り質問をした。

「まあ………じいちゃんが剣道の師範やってたから同じ事やってたけど妖夢ちゃんみたいな事になつちゃうんだけどね」

懐かしそうに話していた、一魔がBOARDに入社しジョーカーアンデッドになる系列までしか話していなかったため貴重な話だった。

「道場は閉めたけど俺にだけ特別で稽古してくれたんだ、俺の名前

を着けたのもじいちゃん、

「一は新たな始まりを意味して魔は悪しき魔を剣で切り裂け！ って意味、剣は名字から持ってきた」

名前を由来を聞いてなぜか判らないが感心していた。

「両親を小さい時に亡くしてさ、じいちゃんが引き取って育ててくれたんだよ、教えてくれてた時に、その剣術を人の為に役立てろって言い聞かされてきたんだよ」

それで今の剣崎一魔、仮面ライダーブレイドがいるという意味でもあったが。

「それでBOARDに入っただけどまさか利用されるなんて思わなかったよ……………」

「それでそのおじいさんは？」

「……………デスショットが侵攻してきた時にな、最後まで人を守って死んでいったって聞いたよ……………何も恩返しできないまま逝かせちゃったよ……………」

淋しさ、そして悔しさが顔に出ていた、BOARDの裏を見抜けなかった自分に対して腹立てていた。

「だからこのキングライターは俺の誓いなんだ……………もう二度と悔やまないための」

常時キングライターを近くに置いたりぶら下げている一魔、そういう意味もありずっと傍に置いていたのだ、何かあってもすぐに戦え人を守るように。

「この剣は、誓いであり約束だから」

「約束の剣ですか………なんかいいですね」

「ああ、死なないし、もう俺は人を守って生きていくことにしたから、

助けを求めればどの世界にでも行くよ俺は」

手が届く範囲は基本、だが一魔は助けを求め人を守るためならば時空をも越える覚悟だった。

「さて、じゃあ稽古する？」

「はい！ よろしくお願いします！」

一魔の過去、決意を聞きやる気が出た妖夢は元気よく返事をした、それを最初から話を聞いていた幽々子は暖かい目で見つめていた。

「おじいちゃんが師匠か………妖夢と同じだったのね、あの子も」

幽々子から見れば一魔は年下であるからあの子である。

「一魔くん、妖夢をどんな風に育ててくれるかしら？」

ニコニコしながら歩きだした、夕飯やらの食材を摘み食いするために台所を目指して。

稽古というと守矢神社跡地。

「早苗え！ 持ってきた腰を捻って振れえ！」
「はい！」

モモタロスが休みの間に自分の剣術を早苗に伝授していた、剣を使うのが自分か健太郎しか居ないからだ。

「やってるな早苗」

「神奈子さん」

健太郎が見守っていると神奈子がやってきた。

「アレでもモモタロスは剣の使い方が上手いですから」
「めちやくちやだがいい動きだもんな」

余った木材の棒を使い砂を入れた袋を巻き付けた木に叩き込んでいた。

「最初はそのモモタロスにずっと頼りっぱなしでしたから」
「そうなのか？」

「はい、僕が戦う切っ掛けを与えたのもモモタロスですから」

ほとんどは巻き込まれたのだが戦うと決意したのは自分自身。

「よし、じゃあ連続で叩き込んでみる」
「はい！」

言われた通り叩き込む早苗、だが棒が耐えられなくなり折れ、折れた先が健太郎の額に直撃し気絶してしまった。

「健太郎くん!？」

「おいおい……………」

不幸だなと思いつながらモモタロスとデネブが健太郎を運んでいくのを見ていた。

「でえりやあああつ!!!!!!」

白玉楼の中庭、威勢のいい掛け声が響いていた。

「おっと、そう易々と当たってはやれないかな？」

その掛け声を上げ振るわれた木刀をただ避け、目の前に木刀を振り下げた妖夢が。

「まだまだ!」

向きを変えて横に一閃、一魔はバックステップをし避けてから駆け出し木刀を振り上げる。

(やっぱりこうなっちゃうのかなあ?)

そしてその木刀は振り下ろされたのだが。

「うっえっ!?!」

目付きが鋭くなり正面を横に向けそれを避け木刀を両手で握り駆け出す。

「ウエエエエエーイツ！！！！！！！！！！」

一魔のが移ったのか、同じ掛け声で一閃し木刀は見事一魔のわき腹に叩き込まれた。

「どうですか！ いつも同じようにやられてるだけじゃないですよ！」

「みたい」

一太刀でも入れたら勝ち、それを満たしたため木刀を下ろした。

「妖夢く、おやつ」

「分かりましたー！」

縁側を見ると幽々子が居り返答するとすぐに上がり廊下を急ぎ足で歩いていった。

「結構痛いな……………」

一魔は縁側に腰を下ろしわき腹を抑えていた。

「お疲れ様、いつも妖夢の相手してくれてありがとうね」

「いって、楽しいし、今ならじいちゃんの気持ちも分かるし」

ニコニコしながら言うとキンググラウザーを出し床に置く。

「そっいえば妖夢の剣、誰から教わったの？ 独学でって訳じゃないな」

いだろ?」

「そうね……………一魔くんと同じで祖父に教わってたのよね」

一魔も初めて妖夢の過去を聞いた、まさか自分みたいに祖父に稽古してもらっていたとは。

「まあその人はどこに行つたか分からないけどね……………多分、一魔くんと面影重ねてると思うのよ」

「なんか責任重大、じいちゃんを尊敬する気持ち分かるから、代わりが勤まるのか……………」

自信がなさげな雰囲気となるのだが。

「代わりじゃなくてあなたはあなたなりに教えればいいんじゃないのかしら?」

ニコニコしながら言いその笑顔に元気づけられた一魔も礼を言う
と。

「幽々子様あ!」

大声を上げ戻ってきた妖夢、怒っているようだった。

「また食料を摘み食いして!」

「またかよ!?!」

惚けたように笑っている口をセンスで隠し目を反らす。

「はあ……………」

「俺行こうか? いつも世話になってるし」

「いいですか？」

一魔が買い物に行く事になりブルースパイダーで出掛けていった。

「そついえばさつき何を話してたんですか？」

「何でもないわよ」

「里に行つて……………」

冥界を抜け魔法の森に入った一魔、ブルースパイダーのエンジン音が響いていた。

「お、奏歌」

「剣崎さん……………」

キヤッスルドランへ帰る途中の奏歌と出会った。

「もう大丈夫なのか？」

「ええ……………ご心配おかけしました」

応答ははつきりしているがどこか不安定だった。

「奏歌？ 本当に大丈夫か？」

「大丈夫です……………」

奏歌は振り切るように一魔と別れた。

「どうにかしないと……………」

再びブルースペイダーを走らせ里へ向かった。

「まったく幽々子様は……………」

ぶつぶつ言いながら庭の手入れをする妖夢、隙あらば摘み食いつるので困っている。

「剣崎さんもいるから一人前分増えるのに……………幽々子様には一人前分を我慢して欲しいですね」

ため息を一度吐き手入れを続けていたその時だった。

「殺気……………！」

門の方から殺気を感じ作業を止めて走りだした。

（まさか幽々子様を狙う……………）

白玉楼の前、そこに緑色の体色のカマキリに似ており手に鎌のような剣を二つ持ったグロンギ怪人、メ・ガリマ・バが立っていた。

「か、怪人!？」

ガリマの目的は白玉楼の主人を殺害する事、死んでいるがその存在を消滅させ完全に抹殺するという目的を持っていた。

身構えたため妖夢も二本の刀を構えた。

「来る……………」

「ハッ!」

ガリマが先に駆け出し緩やかなカーブをした剣を一瞬で振り下げてきたが一魔との特訓の成果が出ているのかそれを避け横に刀を大きく振る。

「っ!」

ガリマは下がるが長い刀だったため腹部に切れ目が入り微かに血が流れる。

「この程度、どうって事ないですよ」

両者は身構え出方を伺う。

(あの剣、鋭い、一太刀だけでも死ぬ……………)

斬撃を一回でも受けたらアウト、緊張が走る。

ガリマもだ、妖夢の剣技のレベルの高さに注意し動こうとはして

いなかった。

「これとこれで……………」

買い物を済ました一魔は里の外に停めたブルースペイダーの下へ向かっていた。

「空が広いな……………どこまでも飛べそうだよ」

鷲の絵が描かれたカテゴリーJのラウズカードを出す一魔。

「バイクは今度取りにくるか」

外に出ると腰にプレイバックルを装着しカテゴリーAのカードを装填しターンアップハンドルを引いて変身、今回は初登場の銀色の鎧の通常フォーム。

【ABSORB QUEEN】

カテゴリーQのカードを左腕のラウズアブゾーバに挿入し、カテゴリーJのカードをカードリーダーにラウズ。

【FUSION JACK】

銀の鎧は金へと変わり背中に羽根が付き鎧のスペードのマークはカテゴリーJの物へと変わったジャックフォームに変身した。

「ハッ！」

羽根を広げブレイドは上空へ飛ばたき冥界を目指した。

「でえりやあああつ！！！！！！！！」

ものすごく大きな掛け声を上げガリマに切り掛かる妖夢、だがガリマも剣で受け止めもつ片方の剣を振るうが短刀で受け止めつばぜり合いとなる。

「ぐぐぐ………」

白玉楼階段を下りその下で対峙する妖夢とガリマ、離れているため幽々子は気付いているか気付いていないか分からない。

（私の背じゃ足払いはキツイ……… 剣崎さんなら………）

一魔なら何か無茶な事をしてピンチを切り抜けるはず、少しでも力を抜いたら終わるこの状況下なのだが。

（そうでした……… 私は半人でした）

いつも傍に浮いてる半霊、切り抜けるには単純だがその能力が必要だった。

「っ！」

ガリマの背中に衝撃が走った、気付けば半霊は居らず、代わりに妖夢が二人に増えていた、ガリマの背後にいるのが半霊である。

半霊の攻撃で怯んだ隙を突いて。

「ハアアアアアアッ！！！！！！！！！！！」

刀を振り上げ縦に一閃、グロンギのマークが彫られたバツクルは真つ二つに割れた。

半霊は元の白い状態に戻り苦しむガリマから離れると。

「う……………ぐ……………う わあああああつ！！！！！！！！！！？」

ガリマはバツクル……………アマダムが割れた事に爆発し絶命した。

「妖夢ちゃん！」

そこにブレイドが降り立つ。

「剣崎さん」

「何かあったの？」

「まあ……………何とか一人で怪人倒せました」

「すごいじゃんそれ！」

誉められ、照れる仕草を見せる妖夢、それを幽々子を見守っていた、どうやら気付いていたようだった。

第31話『約束の剣』（後書き）

今回はライダーに活躍させませんでした、いつもライダーばかりもアレだと思ったので。

一条さんとユウスケを会わせて共同させたら面白いかなと思い始めていたり、そういうの書いてみたいとか。

次回予告

キバ

「ハアアアアアアツ!!!!!!!!!!」

早苗

「奏歌くん……………なんか怖いですね」

パチユリ

「なんか私の出番、今回はこれだけな気がしてきた」

健太郎

「過去は変えられないけど……………その未来は変えられるから」

次回『二重奏・スーパードンこ盛りタイム』

第32話『二重奏・スーパーてんこ盛りタイム』

今日も守矢神社跡地では健太郎やエイジ達が神社を建てるため土木作業を行っていた。

「手羽先！ お前も働けよ！」

「世は皆に癒しを届けるためにここにおるのだからもう働いておる」「お前ふざけんな！」

モモタロスとジークに関してはジークが働かないためいつも喧嘩となっていた。

「喧嘩だ喧嘩だー！」

リュウタロスはそれを喜んで見物する始末。

「あーあ、二人共落ち着いて」

「そやで、そんな事してたらいつまで経っても神社ができへんで」「二人共お！ 喧嘩は止めるんだ！」

そのモモタロス達を止めに入るのはウラタロスとキンタロス、デネブ。

『……………』

そんなイメージズを見て神様二人は不安だった、コイツらに任せ
て神社は建て直されるのか。

「皆さんホント仲が良いんですね」

「そうですね……ネタはもう揃いましたし明日の新聞の記事のネタ集めに行かないと」

そしてこの二人が喧嘩を止める事になるのだいつも。

「まーた、やつちやったか」

「うん、まーたやつちやったよ私達」

「お前ら、カルシウム足りてるか？」

至って冷静のアンク、あの中でも作業を止めていなかったが柱が倒れた事により一時中断。

「返す言葉がないよ」

「同じく」

本当はカルシウムは直接は関係ないがお決まりの台詞のため使わないわけにもいかない表現となりつつあるイライラの原因、この文はかなりメタい。

「そしてまた気絶させてしまった」

アンク以外は全員気絶しており目を覚ます気配はなし、アンクはそれでもなお一人黙々作業を続ける。

「コイツらが起きるまで俺達でやるぞ」

「あ、ああ」

コイツは外見に似合わず冷静だなと思いつつ作業に参加した。するとそこに。

「奏月？」

「こんにちは」

奏歌が訪れてきた。

「今日もニスの材料の取りに来ました」

目的は土木作業で出たゴミから材料を取るためだった。

「いつもの場所にあるから持ってけ」

「ありがとうございます」

奏歌がここまで来れるのは守矢神社へ続く道があるからだ、そこは天狗の監視下に置かれていないため誰でも通れるが直通のため他を調べたい場合は迷うを覚悟に森に飛び込まないとならない。

「……………」

そんな奏歌を心配そうに見る神奈子。

「どうかした？」

「あ、いや、奏月の事が少しな」

「妹が攫われたんだよね確か」

その事はもう耳に入っておりそれもありませんが様子がおかしく見られていた、本人は普通のつもりだが周りからはそうでもなかった。

「ああいうのが何かやると大変な事しかすんだよな」

アंकはまるで経験者のように語った。

「そっちもなんかあったの？」

興味本位で諏訪子が聞いてみると。

「エイジがグリード化した」

「は？」

「ん？」

紅魔館の図書館、パチュリーは何かを悟ったのか声を上げた。

「どうかしましたか？」

小悪魔はそんなパチュリーに話し掛けた。

「私の出番ってこれだけなのかしら、今回は奏歌の話よね？」

「かなりメタいですが……………」

今回のパチュリーの出番はここまでだった。

視点を守矢神社跡地に……………

「やっと骨組みが完成したか……………」

「長かった……………」

骨組みが完成し後は板等を張り中の備品と賽銭箱をセットすれば完全に完成である。

「ほとんどはお前達がキレて壊して足を引っ張ってたからじゃねーのか？」

アंकの言葉が胸に突き刺さり固まる。

「そっいえば奏歌は？」

奏歌が今だにニスの材料を探したまま帰ってこない、気になり健太郎が見に行く事に。

「奏歌？」

「健太郎くん……………」

しゃがみこみどう見ても材料を集めているような雰囲気ではなかった。

「どうかした？」

「ちょっと……………」

スワローテイルファンガイア、ビショップが言った言葉が気に掛かっていた、本当に妹を攫ったかは判らないが真実味がありビショップは有言実行の性格、それを知っているため本当かもしれない。

「奏歌、今は妹のために何もできないかもしれない、けどここで今できる事をすればいい」

それだけ言っとその場を放たれた。

「ここで今できる事……………」

「健太郎、イマジンの匂いだ」

戻るとモモタロスはイマジンの気配を察知する事ができる、その能力でイマジンに反応したのだ。

「ホント？ モモタロス」

「ああ、かなり手強い奴の匂いだ」

ジーク以外の健太郎達電王チームはそのイマジンが居る場所へ向

かった、早苗も行くと言っていたが残した、もしもの場合を踏まえ
て。

「ここだ！」

健太郎達はそのイメージを直視した。

「モモタロス？」

モモタロスに似ていたイメージだが体は黒く角が長いイメージだ
った。

「俺はここに居るぜ？」

黒いイメージはなんとデンオウベルトを出し腰に巻いた。

「デンオウベルト!?!」

「変身」

ライダーパスでセタッチし【N e g a F o r m】と響きイマジ
ンはソード電王が紫となった仮面ライダーネガ電王へと変身を遂げ
た。

「俺と被ってる！」

「僕もだ！」

姿と色合いが被っている事に文句を言うモモタロスとリュウタロス。

「ここは先輩かりュウタに任せよっか？」

「せやな」

「ならここは俺だよな」

指をポキポキ鳴らしながら前に出るが健太郎はデンオウベルトを腰に巻き。

「リュウタロス来て」

健太郎はリュウタロスを指名、指名された本人は喜びされなかったイマジンは転けた。

リュウタロスは健太郎に憑依、健太郎の容姿は紫のメッシュが入り帽子を被り瞳が紫となった姿となる。

「変身」

セタッチをすると【Gun Form】と電子音が鳴り響きデencaメンはスーパークライマックスの胸に着いていた龍の顔のような物となり鎧もソード電王の鎧が開き紫の鎧を露にしたガンフォームに変身した。

「お前、倒すけどいいよね？ 答えは聞かないけど」

デングアッシャーを銃に組み立てガンモードにするとネガ電王もデングアッシャーをガンモードに組み立てた。

「そこまで同じだー！ もう許さないからー！」

片手で武器を持ちステップを踏むように回転しネガ電王に向け引き金を引き弾丸を発射した、ネガ電王も弾丸を発射しその弾丸を相殺した。

「……………」

ネガ電王の実力が分かりガン電王に緊張感が走っていた。

(コイツ、強いよ)

(うん、無理だと思ったら誰かと変わるかてんこ盛りね)
(分かった)

健太郎と軽く会話すると再び引き金を引き弾丸を連射するがネガ電王も連射し正確に弾丸を打ち落としていく。

「リュウタが押されてるだど!?!」

「あのイマジン、結構できるみたい」

モモタロス達もネガ電王の実力に騒然としており交代が近いかもしれないと思いき身構えていた。

「もう!　なんで当たらないの!?!」

ガン電王はすぐに冷静さを欠き弾丸を乱射する、弾丸が止まっているように見えているのかネガ電王は軽々それを躲しガン電王の鎧に弾丸を浴びせる。

「うわあああああつ!?!?!?!?!」

鎧から火花が散り後ろへ吹き飛ばされる。

「リュウタ！ 健太郎！」

ガン電王は地面を転がり木に激突、立ち上がるうとするが追い討ちを受け立ち上がれなかった。

「お前ら、生身でも行くぞ！」

モモタロスは赤い剣モモソード、ウラタロスは青い杖ウラロッド、キンタロスは金の斧キンアックスを出しネガ電王に挑んだ。

(みんな……………！)

「うおおおおおおつ！！！！！！！！！！」

モモタロスが切り掛かるがネガ電王はすぐにデンガツシャーをソードモードに組み立てたモモソードを受け止めると蹴り飛ばす。

「おわあっ！？」

「次は僕だよ！」

ウラタロスがウラロッドを素早く振るうが簡単に避けられ斬撃を食らい後ろへ吹き飛び転がり込む。

「俺が相手だ！ ドリヤアアアアアツ！！！！！！！！！！」

キンアックスを振り上げずがと走り重い一撃を叩き込もうとしたが。

「動きが鈍いな」

ここで初めて変身以外の言葉を発しキンタロスの攻撃を避けまたガンモードに組み立て至近距離から弾丸を放ちそれによりキンタロスの重い体も吹き飛ばされてしまった。

「どわあああああつ！！！！！！！？」

「クマちゃん！」

ガン電王は立ち上がるうとしたがやはりネガ電王の銃撃により阻止されてしまった。

セタツチしフルチャージ、このままでは必殺技の餌食となってしまう。

エネルギーが溜まる銃口、引き金に指を掛ける。

「これで終わりだ」

引き金を引こうとしたその時だった！

「おらおらおら〜！」

キバットが飛んで来てデンガツシャーにぶつかり銃口を違う方へ向け必殺技である巨大な光弾を放つネガワールドショットはあらゆる方向へ飛んでしまった。

「コウモリ擬き！」

ガン電王達の後ろから歩いてくるものが、キバットもその方向へ戻る、そこに歩いてくる奏歌がいた。

（奏歌！）

キバットは奏歌の左手に掴まれた。

「健太郎くん、僕も、この世界で今できる事をやるよ」

ギャブツ！、キバットは右手に噛み付くと更にガルルセイバー、バツシャーマグナム、ドツガハンマーの名前を叫ぶ。

「変身」

腰のキバットベルトに止まり奏歌は仮面はキバフォーム、鎧はドツガ、右腕はバツシャー、左腕はガルルの四位一体の姿、キバ・ドガバキフォームへと変身した。

「たっちゃんには休んでもらいたいからな」
「うん」

ガルルセイバーを左手に持つとその容姿に似合わず素早く走り……いや、滑り出した、バツシャーの力でアクアフィールドという地面を水に変えたのだ、一瞬でネガ電王の前に立ち獣が爪で獲物を引っ掻くように斬撃を食らわしネガ電王の鎧に火花が走る。

「グウウウツ!?!」

苦痛の声を上げた途端、バツシャーマグナムの銃口を突き付けられ水の弾丸を連続で食らっていき衝撃により転がり込む。

「ハアアアアツ!?!?!」

ドツガハンマーを出し倒れたネガ電王に叩き付けていく。

「俺達も負けていられないぜ………リュウタ！」
「いいよ！」

デンオウベルトにケータロスを着着しボタンを押していきモモ、ウラ、キン、リュウと鳴り真ん中のボタンを押すと【Climax Form】と鳴り響き全員のイマジンが健太郎に憑依、ジークがないクライマックスフォームへと変身を遂げるとデンガツシャーをソードモードに組み立てる。

「俺達、参上！」

CX電王は走りだし立ち上がったネガ電王に逆襲だ！ と言わんばかりに斬撃を食らわしていく。

「くっ！」

ネガ電王は距離を取り銃撃をしようとしたのだが。

「何！？」

デンガツシャーが何かに弾かれ吹き飛び見上げると木の枝にZゼロノスがデネビツクバスターを構えていた。

「早苗！」

「心配だから来ちゃいました」

Zゼロノスの援護もありCX電王とキバはネガ電王に更に斬撃を食らわし追い詰めていく。

(強い……だが、NEWデンオウベルトがあれば必ず勝てる……
…今回は奴の必殺技をぶつけ退散するとするか)

ネガ電王は前を向いたまま後ろへ下がり逃げる素振りを見せていた。

「逃がすかよ！」

真ん中のボタンを押し【Charge and Up】と鳴るケータロス。

「ウェイクアアップ！」

ウェイクアアップフェッスルをキバットに吹かすと右足の鎧が羽根のように開きヘルズゲートを解放する。

「行くぜ行くぜ行くぜ！」

CX電王の右足にフリーエネルギーが溜まると同時に二大ライダーは同時にジャンプし右足を突き出す。

「俺達の必殺技！ Wてんこ盛りバージョン！」

CX電王のボイススターズキック、キバのダークネスムーンプレイクが炸裂し斜めに落下しネガ電王にダブルライダーキックが迫っていたその時だった。

「ウェイクアアップ2」

キバットによく似た低い声が響くと黒い何かが両足を突き出しダ

ブルライダーキックにぶつけ二大ライダーを吹き飛ばしネガ電王の前に立った。

「コイツは!？」

ＣＸ電王はかつこよく決まりそうだったのに邪魔が入ったのに怒る。

妨害したのはエンペラーキバに似ているが黒く、眼が水色のライダーだった。

「ダークキバ！」

それは奏歌のキバの鎧が安全性重視で作られたのに対しその黒いキバの鎧は破壊を重視で作られた危険な仮面ライダー、ダークキバだった。

「ネガタロス様、お遊びが過ぎます」

「お前が来ると思って遊んでただけだ」

「その声は……」

「おいおい、マジかよ」

ダークキバの声は女性の物で、キバとキバットは驚きを隠せなかった。

ネガ電王とダークキバの前に次元の壁が現れそれに入りこの世界から消えた。

「くっそ！ 逃げられたか………てかどうした？」

ＣＸ電王は憑依も変身を解くとＺゼロノスも下に降り変身を、キバも解くと。

「あのダークキバ………僕の妹だ」

「なんだって!？」

ビショップが言っていた事は本当だった、ファンガイアが数で太刀打ちしても勝てる見込みはないが他の怪人やダークライダーの手を借りればさほど問題は無い、それによりダークキバは敗北、拉致され洗脳されてしまったのだ。

「これからどうするんですか？」

「決まってる、助けるんだ、やり方はこれから考えればいいんだ、今しかできない事をやる」

「そうだよ、奏歌」

ダークキバを助けると決意をし一日を終えるのだった。

永遠亭。

「ん……………ん、こじは……………」

眠り続けていたユウスケが目を覚めたのだ。

「気が付きました!？」

最初に目に入ったのはワイシャツを着てネクタイをしたウサミミを生やした少女だった。

「君は？」

「私は永琳師匠の弟子の鈴干・優曇華院・イナバです、うどんげつて呼んでください」

自己紹介を済ませるとユウスケは起き上がり頭を抱える。

「俺、どんくらい寝てた？」

「あれこれ二週間ぐらいはずっと、このまま起きないのでは思っていたんですが良かったです」

寝過ぎたと思っていたが疲れが抜けているようだった、ずっと休まず安静にと言われたにも関わらず戦い続けていたからだろう。

「うどんげちゃん、退院はいつくらい？」

「うーん……………師匠も詳しくは……………」

分からないようなので後で本人に聞いてみようと思いつきながら回りを見渡していると、寝付くと縁起が悪いにも関わらず植木鉢に植えられた花があった。

「これは……………」

「幽香ちゃんが持ってきたんだ」

「植木鉢はダメなんですけどあの人はそんな事しませんから」

花を見ていると心が安らぐ。

「タネツケバナって言う雑草とか言っていましたよ」

「雑草……………」

なぜそれなのかと疑問に思っていたが。

「花言葉が不屈の力とかだと」

不屈の力で早く起きろという意味なのだろうか、優しくしてくれないのが彼女らしい。

「お、目が覚めたか」

永琳が病室に入ってきた。

「永琳先生……ありがとうございます」

「言っただろ、何かあったら来いと、後退院していいぞ、これだけを守るなら」

ん？ と言うと永琳の口が開いた。

「無茶はするなよ、お前が傷付いて悲しむのは風見幽香だけではないんだからな」

色んな人に心配を掛けていた、申し訳なそうにすると。

「退院許可を出したんだ、さっさとベッドから降りる」

ユウスケはベッドから降り二人に礼を言ってから永遠亭を後にした。

「……………不屈の力が……………」

呟くと脳裏に一瞬だけ黒目のアルティメットになった場面が流れた。

「黒目になっちゃったな……………」

その事に悔やんでいると迷いの竹林を抜け人里に入った、歩いていると何件かのボロボロの建物が見えた、寝ている間にも戦いがあったのだと思っていた、そして、最後に戦った場所を通ろうとしていた。

「ユウスケ？」

「幽香ちゃん」

被害者の一人となってしまうた女店主の花屋から幽香が出てきた。

「退院したのね」

「うん、危うく寝付きそうになったけど」

「土や水から植物を出すなんて論外よ」

悪かれてはなかった、それが彼女だから仕方ない。

「何してたの？」

「ちよつとね、残ってた花を太陽の畑にある私の家に運んでたなの、引き取り手がなかったからそれでよ」

自分が守れなかった花屋、彼女が気に入った場所が守れなかった事に悔やんでいると。

「ん？」

腕を引っ張られ花屋の奥へ。

「……幽香ちゃん？」

「あなたは悪くないわよ……あなたは自分ができる範囲の事をやっただけなんだから」

誰にも見られないように抱き締めていた、自分を責めないでと言っように。

「これから、守ればいいのよ……これから」

「うん……」

「改造に改造を施したショッカーライダーが完成した、ショッカーライダー専用の究極のマシン、ショッカーサイクロンを！」

どこかの世界、デスショッカーの幹部である深見が声を上げ喜んでた、これから起こる惨劇を想像しながら。

「シヨツカーライダーなんて味気ないわ、デスシヨツカーライダーと名付けましよう」

これから戦いが更に激しくなりそうだった。

第32話『二重奏・スーパーてんこ盛りタイム』（後書き）

クライマックスとドガバキが並ぶところ見てみたいっすね。

キングスバーストエンドならダブルライダーキックを止められるはず！

ダブルライダーキックなのはライダーダブルキックと差別化させるためです。

今回はやっと……

次回予告

ユウスケ

「バイクがない仮面ライダーなんて……」

にとり

「使って欲しいのがあるんだけど……」

早苗

「これには、八代さんの想いが詰められているんですよ」

幽香

「ホント、嫉妬するわね彼女には」

ユウスケ

「あねさんも好きだ………だけど………今は………一番好きなのは………」

デスシヨッカーライダー

「このデスシヨッカーライダーのバイクテクニックに勝てるか！」

クウガ

「これはあねさんの魂なんだ………その魂と、俺との烈風の証なんだ………俺は………烈風となる！」

次回『烈風の証 Wind and Blaze』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9946x/>

仮面ライダーディケイド・IF 仮面ライダークウガ～小野寺ユウスケの幻想録～

2012年1月6日19時51分発行